



資料取扱

情報宣傳研究資料

第三輯

昭和十三年四月  
内閣情報部

# 武器に依らざる世界大戦

公用

秋	310
回吉	
系	
内閣官房	137

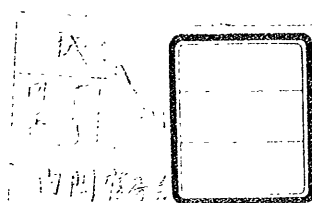


# 武器に依らざる世界大戦

情報宣傳研究資料

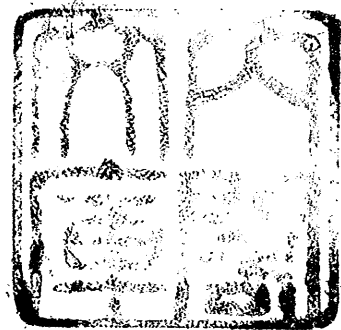
第三輯

昭和十三年四月  
内閣情報部



本冊は情報宣傳に關する資料として事務上参考の爲めハン  
ス・チンメ著「武器に依らざる世界大戰」を翻譯せるもの  
なり。

内閣文庫  
八九四九六号  
和書  
冊



310

137

目次

目次

一、組

織

A、フランス

大戦初期における宣傳無力の一般的原因——民間宣傳機關——「新聞の家」——  
「空中宣傳部」——ハンシー——クレマンソーの影響——イギリスに倣つた新組織——  
評價

B、イギリス

イギリスの宣傳の特性——民間宣傳組織——「ウェリントンの家」——「情報部」——  
「ビーリアブル」と「リースクリフ」——「クルー・ハウス」——H.G. ウェルズ——  
「ハミルトン・フリーフェ」——陸軍省の戦線宣傳——ロンドン聯合國宣傳會議

C、合衆國

「ワイルソンとハウス」——アメリカの宣傳の特徵——「公報委員會」——ジョージ・  
クリール——アメリカの戦線宣傳——「ドイツ・デモクラシーの友」

二、戦線における宣傳

宣傳ピラ投下の發端——宣傳ピラ投下の國際法上の可否論争——氣球によるピラの撒布



三、瑞

—砲撃、地雷等によるピラの撒布— 聯合國とドイツによつて撒布されたピラの統計  
西.....六

スイスに於ける輿論—スイスにおけるフランスの宣傳組織—密輸入—ドイツに  
ある仲間—間諜と宣傳—スイスにおけるアメリカの宣傳  
A、ドイツ政府に對する亡命者の闘争.....七

四、オラ

ランダ  
リチャード・グレルング—ヘルマン・レーゼマイエル—フェルマン・フェル  
ナウ—サロモン・グルンバツハ—自由新聞—リチャード・ウイッテンダ  
—ハンス・シュリーベン—エドワード・シュテイルゲバウエル—ヒュゴ  
バール—カール・ルドウイヒ・クラウゼ—自由新聞と一八四八年の革命—  
自由新聞と社會主義—自由新聞のフランス宣傳及び政策への協力.....三

五、宣

傳の内容  
オランダの輿論—ドイツ逃亡兵—對敵宣傳組織—密輸入—カール・ミンスタ  
と「闘争」—「闘争」の聯合國的立場からボルシェヴィキ的立場への移行—その流布  
と効果—ドイツ革命運動に對するフランスの努力.....二

六、効

力  
專門家の判斷—宣傳の效果判斷の資料—大戦中のドイツ國民輿論の發展—敵國に  
對するドイツ兵士への効果の増加—對敵宣傳の效果は過激社會主義的宣傳となる—總  
括的判斷.....一七

七、防

御  
ピラに對する課刑威嚇—届出に對する報酬—祖國的教育—祖國的教育の批判—  
祖國的教育の不成功—政治指導部と軍事指導部の不和.....二四

八、イ

デオロギ  
戰爭の初めにおけるドイツの思想的孤立化—この原因—懷疑的なドイツの世界觀の  
發展—ドイツの思想的武装の弱點—闘争の指導者としてのイギリスの自由主義—  
ウイリソン—平和主義—ドイツの宣傳はその標語をもつてゐない—思想の效力の  
呢はれたる過少評價—汎ドイツ人—外國宣傳中央部の缺如—パウル・ロールバツ  
ハ—ウイヘルム・フォン・シュライニツ—ドイツの大規模な政策と宣傳の障害  
—大戦の出発と豫想.....三九

附 録

- 一、陸軍大將フォン・シュタインにあてたヒンデンブルグ元帥の文書.....二六
- 二、第三部第二課長ニコライ少佐の祖國啓蒙の内容に關する講評.....二六三



三、ミュンヘンに於ける陸軍省の第一バイエルン軍團司令官代理の報告	二五五
四、フオン・シュワイニッツ少佐ノ外務省軍事部に宛た書面	二六八
五、マイエルの祖國教育状態に關する覺書	二九二
六、第六軍團の郵便監督所の報告抜萃	二九七
七、ライプチツヒ軍事局より戰時新聞局に宛た書面	三〇四
八、アルブレヒト侯軍團に宛た大本營陸軍部の文書	三〇八
九、ガルウイツ及びアルブレヒト軍團の隊内士氣に關する報告	三〇〇
十、一九一八年春輕氣球に依つて投下の英國ピラ	三〇六
十一、一九一八年秋の佛蘭西の投下ピラ	三〇九

序

宣傳の價値は大戦中獨逸に於てよりも聯合國側に於てよりはつきりと認識された。獨逸側においてはむしろ屢々その効果は過少に評價されたのであつた。獨逸の敗北が始めて一般の人に對してその眼を開いてやつたのであつた。不幸なる戦争の終末の印象の下にルーデンドルフ將軍は宣傳が戦争に對して決定的な作用をなすものと主張したが、彼の意見は、全部ではないにしても聯合國の専門家の賛同を受けた。記録の公平な觀察も亦一定の前提のもとにそれを確認してゐる。そしてその効果の前提とは一九一八年の夏以後に獨逸國民は、破局的な精神の沈滞に陥つてゐたといふ事だ。この絶望的な氣分こそは、之を利用して破壞的な宣傳の成功がうちたてられた基礎をなし、又そこから來るべき革命の閃光が迸り出た暗い背景を作つたところのものであつた。従來は軍隊並びに國民に對する敵國の宣傳の影響に就つてつきすくんだ研究は爲されてゐなかつた。獨逸の軍隊指導に關する記録を徹底的に利用すれば、そこから色々な參考すべき意見を得る事は期待されてゐたが、それはそれらの記録が整理されて後ほじめて可能であつた。そして、この仕事の成果がこゝにほじめて公けにされるのである。

この破壞的な宣傳の成功に關する研究にあつては、獨逸側の防禦と反撃の努力も等閑に附することはできない。この努力は失敗した。事實、あのやうな、政治的事情のもとにあつては失敗せざるを

得なかつた。國民に戦争の意義と必要についての信念を維持させることは遂に成功しなかつたからだ。世界大戦は同時に大規模の思想戦、即ち數世紀以來既に相互の理解を喪失したところの二大思想界の闘争であつた。この戦はさしあたり獨逸側の破滅をもつて終つた。獨逸國民は自分自身に絶望し、我自らを放棄してしまつたかの如く見えた。しかしながら獨逸の世界觀の基礎、理想主義的二元論はなほ打ち伏せられてはゐなかつた。恰かも獨逸が敗北したその瞬間は逆に、今や正に世界支配の途についてゐた聯合國の實證的一元論の破滅せんとする第一歩であつたのだ。聯合國が彼等の言説を信じてゐた人類に與へた幸福の約束は虚偽となつた。信者の列内に疑惑がまきおこつた。そして世界は只、苦い失望を一つ増したゞけであつた。

世界觀の對立は獨逸と聯合國の間にだけあつたのではなかつた。それは獨逸國內においてすらあつた。即ちその爲めに、大戦中敵國は獨逸から重要な思想的な勢力の支持をえたのだ。獨逸の國內は、歐洲の思想戦の戦場でもあると言はれた、言葉は、新しくその眞理なることを證明した。

一九三二年五月一日ボツツダムにて ハンス・テイム

## 一、組 織

大戦中の敵國における宣傳の組織に関する知識は近年新しい著書によつて、殊に宣傳について指導的地位にあつた人々の傳記的記述によつて著るしく豊富にされた。そこで、あらかじめ各國におけるその發達に關して、短かい概観をなす必要がある。

### A、フ ラ ンス

大戦中フランスの新聞には、フランス政府が對外宣傳に立遅れ、而もそれを充分な努力をもつて遂行しなかつたといふ非難が屢々あらはれた。そしてリユーション・グローム戦争の風聞と報告に關するその滑澁な著作<sup>(1)</sup>において回顧的に語つてゐる。「フランスの宣傳は幾年もに亘つて多くの攻撃と嘲罵を忍ばねばならなかつた……そこには秩序も方法もなかつた……そして又それは一九一八年にはその不名譽な過去を完全にとりもどしてゐたと主張するものがあるならば、それも亦あまりに誇張した言ひ方である。もし戦争がもつと長引いたならば恐らくそれは模範的の制度となつてゐたであらうが、しかしながら十一月十一日の休戦はこの多幸なる發展を完成させるにはあまりに早くやつてきたのであつた。」

大戦中のフランスの宣傳は比較的おくれ組織され、その指導は一ヶ所に強固に結合されてをらず、政治的指導部と軍事的指導部とが屢々離れ／＼に仕事をして居たといふことは間違ひではない。しかしながら獨逸の組織も、そして大戦の大部分の期間中イギリスの組織も亦同様な缺陷に悩んだのであつた。原因は一般的な事情の中に求められなければならない。フランスは成程以前から文化宣傳においては比類なく巧者であつた。しかしながら大戦中非常に大きな役割を演せねばならなかつた攻撃的宣傳の方法は全く新しい種類のものであり、それは新しく發展させられるべきものであつた。

平時においてはそれの入り込む餘地はなかつた。敵國民の心理への攻撃はその前提としてつきすゝんだ内部の崩壊を必要とする。大戦の初期にあつては、交戦各國の國民の氣分には未だ信頼すべきものがあつた。攻撃的宣傳のための強固な組織は、その必要が痛感された大戦の終り頃に至つてはじめて發達することができたのであつた。どの場合でも最初はまづ手探りや試みが先行するものである。

これに加えてさらにもう一つ的前提がある。力強い宣傳は、強固なる集權的な國家權力と統一的、目的意識的政策なくしては不可能である。フランスにおいても、イギリスにおけると同様、大

戦中弱體な内閣は次第に強力な内閣によつてとつて代られた。そして同じ事情の下に宣傳の壓力も次第にその力を増してきたのであつた。それ故に我々は兩國において宣傳の二つの時期を明らかに區別することができる。前期は主として中立國の同情を獲やうとする努力に費やされてゐるが、後期には敵國に對する直接的攻撃が行はれてゐる。フランスにおいては宣傳攻撃は多く軍事部門から發達したが、イギリスにおいては政治評論界から發達したことが特徴的でありこれは、フランスにおいて大戦はイギリスにおけるよりもより強く自己の生存のための闘争と感せられたことに關係してゐる。國民の注意は、思想戦にはほとんど興味をつなぐ餘地がなかつた程、完全に武力戦に吸収されてしまつてゐた。

獨逸の新聞及び宣傳の仕事は、大戦中外國におけるよりもいち早く強固な體系に組織されてをつたといふことはあつてゐる。一九一五年十月十四日に設立された戦時新聞局は、その任務を外國新聞の檢閲と外國新聞特派員の調査に限つて、自ら國外宣傳を行ふことはしなかつた。中立國への宣傳材料の供給は、一九一四年十月外務省情報部から分れた「外國事務中央局」、Zentralstelle für Auslandsdienst」がこれに當つてゐた。一九一四年十一月にはシャルルツイルにある司令部からフランス語の新聞（アルデンス新聞）「Gazette des Ardennes」が發行された。それは第一に占領地の住民を目的としたものであつたが、一九一五年七月以後はフランスの戦線及び國內への呼かけもその

目的として来た。その配布は飛行機からの投下や、フランス側の塹壕前への撒布などによつて行はれた。

獨逸は戦争の初期にあつてはその迅速な組織化によつて優越的地位を維持し得たのであつたが、それは戦争の間に間もなく敵國によつて追いつかれ、追ひこされてしまつた。宣傳の範圍、その徹底的な働掛け、その集中化等においてイギリス、フランス、合衆國は遂に獨逸を凌駕してしまつた。大戦の初めにあたつてフランスは全く運のよい立場におかれてゐた。ヨーロッパの文化の前衛闘士であり擁護者であるといふその傳統的主張を強調するために、フランスはすでに以前からフランス語と文化の友を獲得すべき協會とか團體とかの網を大陸中にはりめぐらしてゐた。その運動の本部、略して(フランスマ同盟) "Alliance Française" といはれてゐる。(植民地及び外國への佛語普及のための同盟) "Alliance pour la propagation de la langue française dans les colonies et à l'étranger" はバリーにあつた。外國にあつては(外國人に對するフランスマの友) "Amitiés françaises à l'étranger" が活動してをりその名譽會員には例へばクレマンソーとか、ボアンカレーとか、ブリアンなどの一流の名士が屬してゐた。"Alliance Française" は一八八三年文部大臣ビエール・フォンサンによつて設立されたものである。一九〇八年には此の會は大部分は非フランス人からなる五萬人の會員を有してゐた。<sup>(1)</sup> "Alliance" はその廣汎な外國との關係の基礎の上に戦争の勃發後直ちに強力な宣傳

活動を開始した。それは一九一四年十一月一日以來(フランス同盟機關紙) "Bulletin de l'Alliance Française" としふ月二回發行の宣傳雜誌を發行し、これは間もなく獨逸語版をも見るに到つたが、發刊後五ヶ月目にはこの雜誌は既に九ヶ國語にて發行され、その讀者は七萬を超えるに到つた。一九一六年三月以後は更にギリシヤ語が加はり、讀者の數は二十萬にのぼつた。<sup>(2)</sup> 瑞西だけへでも四萬部が送られたのであつた。

(1) Paul M. Rahmann. 文化宣傳 シャールロットンブルグ 一九一九年 二七頁以下

(2) Alfred Baedrichart, The Campaigne française. パリー 一九一八年 二九頁

各國語で、もちろん獨逸語でも書かれたが、外國に廣くひろまつた他の月二回發行の通信雜誌は、「戦争に關する記録」としふ題の下にバリーの商業會議所から發行された。それは、宣傳的に非常に巧みに撰擇された材料、政治家の演説及び新聞の論説からの抜萃、報告や觀察から成つてゐた。第一號は一九一四年十二月十五日にあらはれた。この兩誌の發行は内閣新聞局との密接なる協力のもとに行はれた。

戦争の間中外國における宣傳のため更に同系列の協會が設立され、それらは輿論を醸成するための印刷物の配布を熱心に行つた。一九一五年二月バリーのカトリック學校の校長アルフレット・バンドリヤール僧正の指導のもとにできた(外國宣傳フランスカトリック委員會) "Comité catholique

de propagande française à l'étranger”は特に重要な役割を演じた。<sup>(1)</sup> ス페인においてだけでも、六十の地方團體が彼によつて作られた。<sup>(2)</sup> “Comité protestant”と“Comité israélite”も同じやうな方法で活動した。宣傳團體の助成にあつては、下院議員にして後にクレマンソー内閣における海軍大臣ジョージ・レーニユと下院外交委員會議長アンリ・フランクリン・ブーイヨンが特に熱心に活動した。すべてのこれらの組織は國內に於て輿論の統一のために働きつゝあつた團體と一緒になつて、一九一七年の年初以來（對敵國宣傳フランス聯合會）“Union des grandes associations françaises contre la propagande ennemie”とよぶ大きな聯盟を結成し、それは戦争が終つたのちもなほ存続したのであつた。それはポール・デシャネルとエルネスト・ラヴィッスを首班に戴き、千百萬人の會員を有してゐた。

(1) Baedthlar 前掲書 五六頁

(2) Rahmann 前掲書 二八頁

(3) G. Demartial, Comment on mobilise les consciences, パリ一九三二年一八六頁—Jean Vie, La Littérature de guerre 一九一六—一九一八年, パリ一九三三年 第一卷三四四頁

たしかにこの民間團體の業績は小さいものではなかつた。しかしながら戦争の進行するにつれて、この種々雑多な團體を統制し、且つ、専門家の分業による集中的努力によつて、その活動を充分に發揮しうるやうな、新聞及び宣傳活動の國家的機關が次第に必要とされてきた。これは外務省

の仕事であつた。そこにはすでに（新聞及情報局）“Bureau de la presse et des informations”があつたが、その外獨立の組織である（宣傳局）“Services de propagande”があつて、その指導は政治評論家エティエンヌ・フルヌールに委ねられてゐた。

一九一五年十月ブリアンが内閣總理大臣兼外務大臣に任せられた時、彼は當時すでに議會の委員會に於て外交事務のために要求せられてをつた中央局の設置を提案した。<sup>(1)</sup> そこで雑多な新聞及び宣傳の各部門は、一九一六年二月ブリアン内閣の書記官長フィリップ・ペルトロフの發案により、その指導の下に（新聞の家）“Maison de la Presse”に統一された。<sup>(2)</sup> この新設された組織は全體としては外務省に屬し、フランソア一世街にある同省の建物内に置かれた。しかしそのことによつて個々の軍事部門の軍中央部に對する從屬性がなくなつたわけではなかつた。

(1) Baedthlar 前掲書三五頁

(2) 一九一八年二月二十八日附「北ドイツ新聞」におけるパウル・ヘルツバッツヘルの論説

これは、最初、外交部、軍事部、外國新聞の翻譯及び檢閲部、宣傳部の四部門から成つてゐた。外國新聞部は參謀本部の第二課、軍事情報部の指導下にあり、その通信班に屬してをつた。宣傳部は、各中立國に對する宣傳材料、本、ピラ、寫真、フィルム等の播布に従事してをつた。それには又種々の民間團體“Alliance Française”、パリ商業會議所、等からの刊行物が加はつた。一方、

宣傳部は多數の傑れた學者の協力をも得ることができた。そして中立國にある宣傳事務所はこゝからその指導をうけてをつた。"Maison de la Presse"の代表者たちは外國にある團體の中に居つた。たとへばアグナン教授はスイスにあつて活動してをつた。<sup>(1)</sup>一九一七年の議會の豫算委員會の報告は、外交事務の豫算に關して、相異なる省、たとへば外務省と陸軍省とに屬してゐる各部門に連絡の協力がなかつて、不滿の意を表はし、これらの二重勞務を避けるための改善案を提案してゐる。<sup>(2)</sup>さらに同報告によれば、獨逸は宣傳の目的に數億を投じてゐるといふ理由で、宣傳費の増加が提議されてゐる。これについてフランスが、どれだけ支出をしたかに關しての充分な報告は手に入らない。しかしながらすでに一九一六年には二千五百萬フランの金が機密費として外務大臣に委ねられてあつた。この金は中立國における宣傳費にあてられたことは争ふ餘地もない。一九一六年十月にフランス議會における一質問者は、その金の一部分はスイスの親佛的な諸新聞に與へられたのではないかと言つてゐるが、<sup>(3)</sup>考案されたやうな宣傳事務の統一は" Maison de la Presse"の設立だけではまだ達せられなかつた。外務、文部、商工各省、とりわけ陸軍省は未だそれに對して獨立の活動を許してはゐなかつた。<sup>(4)</sup>その上" Maison de la Presse"は、人員のみが分不相應に増加した。一九一七年十月クレマンソーが首相となり、徴兵忌避者狩りをはじめた時" Maison de la Presse"は最初の槍玉にあげられ、著しく人員を減少せしめられ、<sup>(5)</sup>軍事部は陸軍省に編入された。

(1) Harold D. Lasswell, Propaganda Technique in the World War. ロンドン及ニューヨーク一九二七年 二四頁

(2) Paul Eizbacher, 外交政策の武器としての新聞イェナ一九一八年—一九一七年一月二日の豫算委員會報告

外務豫算 議事録

(3) 一九一六年一月一日附 Basler Anzeiger.

(4) 軍主顧部の報告 外國部

(5) Général Mordacq, Le Ministère Clemenceau. パリ一九三〇年 第一卷 七八頁

次いで陸軍省内にも宣傳部が出来、それは獨逸に對する精神的攻撃の主役をつとめることとなつた。空中宣傳部 "Service de la propagande aérienne" は一九一五年八月司令部と陸軍省の諒解の下につくられたが、その任務とするところは、獨逸側戦線に撒布するための宣傳ビラの作成と配布であつた。こゝから、獨逸戦線にむけられた煽情的な宣傳が絶えず出たのだ。最初、通譯華士官、文官としては獨逸文學教授たるエー・トシヌラがこの仕事に携つてゐたが、<sup>(1)</sup>十一月にはアルサスの畫家でヨハン・ヤコブ・ワルツとも稱してゐたハンシーが協力するために陸軍省に入つてきた。ハンシーは大戦前コルマールに暮してをつて、ウエツテルレ師と並んで最も熱烈なフランス支持者の一人であつた。彼自身はアルサスに流れこんだバーデン人の子ではあつたが、彼は自分のすぐれた畫家及び諷刺家としての才能を利用して、多數の刊行物においてライン右岸の國民性のくだらなさを畫



いた。大戦のわづか前に彼はその中でアルサス人のフランスに對する憧憬をのべた畫集「我が村」<sup>(1)</sup> „Mon Village” のため帝國大審院において叛逆罪として禁錮刑を言ひ渡され、フランスに逃げるこ  
とによつてやうやくその執行を免れたのであつた。<sup>(2)</sup> その経歴及び才能からみても彼はドイツに對す  
る宣傳には最適の人物であつた。彼は自らその鉛筆とペンとをもつて獨逸に對して行つた闘争の歴  
史を詳細に、そして多少の自惚も交へて書いてゐる。<sup>(3)</sup> 一九一六年には事務局には更に第三の通譯士  
官、アルサス人レーモンド・シユールが加はつた。彼は主として宣傳文書を瑞西及び和蘭を通して  
獨逸に密輸入する仕事に従事してゐた。

(1) Haras et Tonnelat, A travers les lignes ennemies. パリ 一九二三年 一三頁—Henry Wickham Steed,

Through Thirty Years. ロンドン 一九二四年 第三卷 一九二頁

(2) 一九一八年二月一〇日附ベルリン日々新聞六三〇號

(3) Haras et Tonnelat, 前掲書

„Service de la propagande aérienne” はつねに小部門として止まつてゐた。そこに働らゐる人  
々の數は助手を交へて十人にはならなかつた。そしてそれは最初參謀本部の第五課、後に第二課即  
ち軍事情報部の下におかれた。<sup>(1)</sup> 事務局から出される宣傳ビラは協議委員會の統制下におかれ、そこ  
にはハンシー及びトヌヌラの外、„Maison de la Presse” の軍事部長ドゥツピユイ大佐、前獨逸國

會議員ツエツタルレ師、エティエンヌ・フルヌールが屬して居た。最初のうち軍當局は宣傳ビラ  
の撒布によつて敵の軍律が動搖されるかどうかを、非常に疑つてゐたので、この仕事は餘り積  
極的な支持をうけてはゐなかつた。併し乍ら一九一八年一月にハンシーはクレマンソー首相を  
して個人的に彼の考へに關心を抱かせることに成功した。司令官ベタン將軍がそのことを引  
受けたので從來ハンシーが嘆いてをつたあらゆる官僚的障礙、及び技術的、財政的困難も克服され  
た。<sup>(2)</sup>

(1) Maurice Bourgeois, La Propagande britannique et américaine dans les pays ennemis pendant la guerre. Les ar-  
chives de la grande guerre. 二六號一九二一年九月二九頁—Henry Wickham Steed 前掲書 第三卷一九

九頁

(2) Haras et Tonnelat, 前掲書 一一頁以下及び一五三頁以下

一九一七年九月バンルツェ内閣の組閣にあつて、下院外交委員會議長にして „Comité d'action  
parlementaire à l'étranger” の設立者たる代議士ヘンリー・フランクリン・ブーイオンは „Pour les mi-  
sions à l'étranger” 大臣として内閣の一員となつた。そしてその身分において彼は對外宣傳に従事  
することになつた。その後十一月はバンルツェ内閣がクレマンソー内閣によつて代られた後も、フ  
ランクリン・ブーイオンは一九一八年の三月及び四月に宣傳會議のフランス代表としてロンドン及  
びローマに派遣せられた。<sup>(1)</sup> クレマンソーの下にフランス政府がとつた決意と遮二無二勝たうとする



精神は、宣傳のうへにも影響せずにはおかなかつた。クレマンソーの意見によれば従來のフランス側の宣傳活動は著るしく不充分であつた。彼は個人的にも宣傳に大きな關心を示し、自ら必要な手段の指示を與へた。陸軍大臣モルダック將軍の言つて居ることく、彼はいさゝかも出し惜しみをせず、迅速な効果をあげるに必要なあらゆる財力を提供した。<sup>(2)</sup>

その間にイギリスは、宣傳組織の強力な集中化によつて聯合國內に指導的地位を獲得した。一九一八年二月にはビーバーブルック卿の下に宣傳省が設置され、同時にノースクリフ卿は對敵宣傳部長に任命された。これらの事情はフランスに影響せずにはおかなかつた。クレマンソーは一九一八年五月中央部として一種の國立宣傳局「Commissariat général de l'information et de la propagande」を作つた。<sup>(3)</sup>その指導には前ベルギー駐劄フランス公使クロボコフスキーが當り且外務省に所屬してゐた。「Service de la propagande aérienne」も今は參謀本部から分離し、新しく作られた「Centre d'action de propagande contre l'ennemi」に編入せられた。<sup>(4)</sup>しかしこれだけではまだ統一は完全に行はれたとは言へなかつた。各省の宣傳部はなほ廢止されてはゐなかつた。それ故に該委員會と並んで或る場合には、主務省を代表する各省聯合の委員會が開かれねばならなかつた。<sup>(5)</sup>その上フランス國內における強力な統一戦線のための考慮、殊に平和主義者の絶滅等の爲に、この新設された役所の大部分の勢力が費された。

(1) Henry Wickham Steed, 前掲書二一九及び二〇九頁

(2) General Morhucq, 前掲書八〇頁以下

(3) A. Klobukowski, Souvenirs de la Belgique 一九一一年—一九一八年ブリュッセル一九二八年一〇頁

(4) Hani et Tomelat, 前掲書一七〇頁

(5) Felix Stessinger, 「フランス新聞」一九一八年八月七日

「Service de la propagande aérienne」は新設の指導機關の下にあつても同じやうな方法で活動しつゝけた。休戦提議の直前、就中九月はその活躍の頂點をなした。そしてこの機關は休戦成立後もしばらくの間存續して居た。<sup>(1)</sup>「Maison de la presse」の活動も亦戦争後も引續いて行はれ、一九一九年八月にはじめて廢止された。<sup>(2)</sup>

フランスの宣傳は確かに大きな成功を獲た。フランスは文化宣傳として永くつゞけてゐた傳統に従ひながらたゞその組織と方法を擴張すればよかつた。獨逸に對するその闘争にあつてフランスは、熟練にして熱心なる手先き、特に獨逸の不平分子の支持を廣汎に利用することに成功した。併しながらそれにも關はらずその宣傳機關は、大戦末期英國にみられた如き力強い活氣と律動をもつことはできなかつた。

(1) Maurice Bourgeois, 前掲書二九九頁

(2) Lucien Graux, 前掲書第六卷六四頁

## B、イギリス

イギリス人は形式主義者でもなければ官僚主義者でもない。彼等は戦争の要求するところに、必要に押されて徐々に適合して行つた。それゆゑ宣傳組織も、臨機應變に、正しい聯關もなく、統一的な指導もなく出来たのであつた。しかしながらイギリスには大戦中もなほ時代の要求や歴史の變化に對する信頼すべき政治的敏感性が失せてはゐなかつた。イギリスの宣傳は、それがさし迫つた思想、時代の精神をとりあげて、それを利用したが故に效果的であつた。物好きな、中途半端な方法で多くの時間が空費されたのも、最後の決定的瞬間に最も活動的な人物が廣汎な全權を委せられて好適な場所に据えられた。政治的本能は再び華々しく登場した。宣傳の遂行にあつて、優秀な著述家、ジャーナリスト、實際政治家が多く起用され、役人が少なかつたといふことが又重大なる長所であつた。斯様にしてイギリスにおいては宣傳は重要政策を曳出し、それを指導するやうにまでも發展したのであつた。英帝國の版圖の大と、新聞及び情報制度、經濟的結合が世界的に廣汎な事とは流布せしめられた思想が異常に傳播し、大きい効果をもたらす事を約束してゐた。

一九一四年八月末にはすでにアスキス首相を名譽議長として愛國團體中央委員會「Central Committee for National Patriotic Organisations」が作られた。そしてそれには代議士やその他の官職を帶

びた人が屬してゐた。最初の重要な問題としてまづ特に勞働者階級の中に戦争に對する斷乎たる、信服されるやうな輿論を作りあげる活動がはじめられた。自治領や植民地の爲には特に英帝國小委員會「British Empire Sub Committee」が作られた。中立諸外國に對しては中立國小委員會「Neutral Countries Sub Committee」が仕事を<sup>(1)</sup>してゐた。イギリスの廣汎な諸關係が宣傳文書の傳播にあつて非常に利用せられた。中央委員會は自國の各大學と密接に結合することによつて特にこのことに成功した。牛津大學は、優秀な學者の協力による「牛津バンフレット」を發行した。特に同委員會は、一九一五年にあらはれたリチャード・グリーンズ博士の有名な公訴狀「私は告訴する」<sup>(2)</sup>「Jaourne」の配布にあつて大きな成功をかちえた。

(1) Report of the Central Committee for National Patriotic Organisations, London 一九一六年

イギリスにおける國內宣傳は一九一七年六月には戦時計劃委員會「War Aims Committee」がひきうけた。それは感情の衝突を避けるために各黨派から委員を集め、政府側からの財政支出によつて賄はれてをつた。議長は現及び前首相であるロイド・ジョージとアスキスが引受けた。同委員會は特に平和主義者の活動の防止をその目的とした。この組織は一九一七年中に陸軍省によつて承継され、そしてそれによつて官廳的性格を帯びるに至つた。リヒンブスキー公爵の「ロンドン派遣の回想録」に依れば、委員會は一九一八年五月初めにはすでに四百萬部以上の廉價本を賣りつくして

(1)

これらの宣傳活動は最初個人の發意にかゝるものではあつたが、政府の活動はすでに早くからそれに介入してをつた。外務省では、中立國への文書や宣傳ビラの配布の目的で一九一四年に戦時宣傳局「War Propaganda Bureau」を作つた。<sup>(2)</sup>その長官には、成功せる社會改良家、自由黨代議士、「デイリー・ニュース」の共同發行人にして、一九〇九—二二年の間「Home Office」の副國務書記官であつたチャールズ・マスタートマンがエドワード・グレー卿によつて任命された。同局は「ウエリントンの家」に置かれ、このウエリントンの家といふ名前で知られてゐる。作戦を成功せしめるため、最初同局の存在は英國民の前には秘密にせられてゐた。「ウエリントンの家」は多數の材料を配布したが、多くは個人の出版物の形式で、又は著者の名を示さずに刊行せられた。<sup>(3)</sup>そこからは就中獨逸軍によつてなされた暴行に關する有名なブライニス報告が發行せられた。

(1) 一九一八年五月九日附タイムズ—N. B. Dearle, Dictionary of Official War-Time Organisations, London, 1928年二二頁

(2) The Times History of the War, 二二卷、ロンドン、一九二〇年三二八頁

(3) Sir Douglas Brownrigg, Indiscretions of the Naval Censor, London, 1920年三八頁—Harold D. Laswell, 前掲書一九頁

イギリスの宣傳は特に著しく和蘭に集中せられた。何故なら和蘭の仲介を経て獨逸への働きかけ

が可能であつたからで偶然の機會で一九一七年十月「ウエリントンの家」の部員から和蘭駐劄總領事マックスにあてた手紙がドイツ側の手に落ちた。それは和蘭に於ける宣傳文書の配布に關してをり、それに用ひられた手段は特色あるものであつた。そこには次のごとく書かれてある「我々は和蘭にあるすべての新敎牧師の名簿を作成したので、その見本をたゞちに此處から送つてあげよう。我々は一萬五千部印刷したが、約四千部をこの牧師名簿のために用ひ、残り一萬一千部を貴下に送附しやうと思ふ。貴下がこれをそれに興味をもつ人々に配付して下さいれば、喜ばしい次第である。<sup>(1)</sup>かゝる贈り物がつねに感謝して受けられたわけではなかつた。フライブルグ大學教授クレゲルス博士は一九一七年十一月、最近再び和蘭の友人からイギリスの反獨逸宣傳文書一杯つめた小包みを受取つたことを報告した。或時は一日だけでその和蘭人に十七種の文書が渡されたと言つてゐる。<sup>(2)</sup>勿論宣傳材料の送附にあつて、獨逸を警戒してゐた事は事實であつた。大量の持ち込みは間もなく國境に設けられた獨逸の郵便物檢閲所によつて防止されたものではあつたが、和蘭から獨逸に居る個人宛に宣傳文書を送る試みは依然繼續され、各個人から當局に届出された多數の冊子が示すごとく、それは屢々成功したのであつた。時が經つと共に、ドイツ當局をごまかすために益々狡猾な方法が用ひられるやうになつた。

(1) 司令部記録、外國篇

(2) 同 所

獨逸及オーストリア、ハンガリーへの宣傳文書の持ち込みには、大戦の頭初より「ウェリントンの家」に設けられてゐた國民健康保險委員会の役人エス・エー・ゲーストがあつてゐた。政府からの支持がなかつたにもかかわらず、彼は個人的發意によつて和蘭、スカンデナヴィヤ、瑞西に手先きを置き、それを通じて持ち込みを成功してゐた。<sup>(1)</sup>

一九一七年一月、ロイド・ジョージが首相になつて間もなく種々の部門を一つに統一する企てがなされた。元辯護士にして、大戦の初めには「タイムズ」通信員であり、一九一六年には従軍記者として外務省からフランスにあるイギリス主力部隊に派遣せられたジョン・ブカンが外務省の情報部「Department of Information」部長に任せられた。後彼には、陸軍大佐の地位が與へられた。通信機關の他の部門と共に「ウェリントンの家」も彼の下におかれたが、その活動は從來の如く續けられた。併し、ブカンの活動の範圍は本來外務省關係にかざられてつたものだから、實際の統一は未だ遂げられたわけではなかつた。<sup>(2)</sup> ノースクリフが入つてゐた協議委員會が彼の側におかれた。同年六月ノースクリフがイギリス軍事使節團長として合衆國に渡つた時、ビーヴァブルック卿がそれに代つた。

(1) Times History of the War, 前掲書三二八及び三三〇頁  
(2) 一九一七年八月七日附タイムズ

(20)

八月に、アルスタア統一黨の首領サー・エドワード・カーソンが内閣から各宣傳部門の監督を委任されたので、統一は新しい一步を踏みだした。彼は二重義務が避けられるやうに夫々の活動を整理しやうと試みたが、諸機關の根本的改善をもたらすことには成功しなかつた。宣傳の内容に關する責任については、彼は下院において極力これを拒否した。<sup>(1)</sup> かゝる間にあつてイギリスにおける抗戰意識と戦備とは益々強力に形成されたが、これについて最も強力な推進力の一はノースクリフ卿であつた。世界的新聞網の創立者として彼は宣傳問題に對する鋭い認識をもつてゐた。「デイリー・メール」、「タイムズ」、及び其の他の諸新聞が彼の影響を流布せしむべき最適の武器であつた。すでに一九一五年の秋には「タイムズ」は閣内に席を有する一大臣の下に「宣傳機關」のための一省を設け、それはすべての新聞、通信機關を正しい線に改革する任にあたるべきであると論じた。<sup>(2)</sup> 一九一七年八月にはタイムズは再び當時の支離滅裂な状態を批判した。内閣は戦争の成行に及ぼす宣傳の重要性を全く認識してはゐない。一つの宣傳機關は個々の大臣の消極的な辯才よりは遙かに大なるものがある、とタイムズは論じたのであつた。<sup>(3)</sup>

(1) 一九一七年二月一日附タイムズ  
(2) 一九一五年一月二十六日及二月四日附タイムズ  
(3) 一九一七年八月七日附タイムズ

政府は、特にフランスにおける危機的狀態にかんがみ、やゝ徹底的な手段をとることを決意し

(21)

た。一九一八年二月中旬、すでに以前から要求せられてゐた「Ministry of Information」がビーヴァブルック卿の指導の下に實現せられた。ビーヴァブルック卿はスコットランド人であつて、カナダで巨富を築いたのも英國に定住し、保守黨代議士として政治界に關係してつたのである。その後彼はカナダの大戦参加に功をたて、カナダ政府代表としてフランス戦線に止まつてゐた。彼は稀代の宣傳力を具へた又宣傳に巧な人物と言へやう。今や彼は聯合國並びに中立國、及び土耳其における宣傳を委任せられた。「ウェリントンの家」と「情報部」Department of Information」とは新設省に移された。

ビーヴァブルック卿の任命と、大部分保守黨の財界人を各國部門の指導者としたその省の構成は種々の反對に遭つたし、すでにガルソンにさへも不滿を抱いてゐた自由黨の人々の激しい不信を買つた。彼等は、新省がその權力を保守黨の政治的目的、保護關稅と戦後の經濟戦に都合のよいやうに利用し、來るべき選挙戦に保守黨の利益になるやうにはからひはしないかと恐れた。一九一八年八月五、六日には、下院における宣傳省の事務に關する特別委員會の報告に於て、この疑懼が突つこんで述べられてゐる。<sup>(1)</sup>同報告はそれと並んで宣傳に關する費用の件も取扱つてゐた。イギリスにおいてはその費用は對外費と機密費のうちから支出せられてをつた。<sup>(2)</sup>「ウェリントン」の家の仕事についてはその濫費と財政的統制の缺如が非難された。支出は一九一七年には七十五萬磅であつた。我

々は、宣傳省の役人の數は四百八十五人にのぼつたといふこと、會計課長はその年の支出として百八十萬乃至百九十萬磅を計上したが、ビーヴァブルック卿は百二十萬磅ですますやうに希望したといふことを聞いてゐる。この額の中には敵國に對する宣傳費は含まれてゐなかつた。

(1) 一九一八年八月五、六日附タイムズ

(2) H. D. Lasswell, 前掲書四二頁

二月十三日にノースクリフ卿は在敵國宣傳部長に任命せられた。それは決定的な轉回點であつた。ノースクリフ卿は不撓の意思力と、猪突性と、異常な創造慾とをもつた人物であつた。キツチナの罷免、一般國防義務の制定、ロイド・ジョージの首相任命は大部分彼の發意によるものである。彼は一九一七年の夏秋は英國軍事使節團長として合衆國で過した。アメリカの戦争熱は彼に深い印象を與へた。彼にはイギリスはその點において立遅れてゐるやうに思はれた。アメリカ滯在中彼はウィルソンの顧問であるハUSS大佐からある考へを示唆されたのであつたが、ハUSSは自分の考へに従つてすでにそれ以前に、大規模な募兵行爲によつて獨逸國民とその政府の間に楔を打込むことをウィルソンに暗示することに成功して居た。<sup>(1)</sup>ハUSSはそれを勝利への最も容易にして最も確實な道であると考へてゐた。かくてハUSSの考へは、彼のイギリスの友人とウィルソンを通じて聯合國の宣傳戦に重大な意義をもつに至つた。

(1) George Sylvester Viereck, Spreading Germs of Hate, New York 1930年1版2頁——The Intimate Papers

アメリカに於て彼は到るところで英國の第一流の人物として歓迎されたのであつたが、歸國後彼は自分はイギリスの政治に指導的役割を演ずるやうに運命づけられてゐるのだといふ確信に生きるやうになり、ロイド・ジョージが彼に提供した航空大臣の地位を彼は拒絶した。彼が獨逸に對する宣傳の指導を引受けたといふことは、彼がいかにこの問題の重要性を認めてをつたかといふことを最もよく示してゐるものであつた。土耳其が宣傳省の宣傳すべき管轄に屬してつたので、彼には獨逸の外にオーストリア、ハンガリー及びブルガリアも活動分野となつてゐた。その活動に際しては、彼はたゞ總理大臣と陸軍省に從屬し、宣傳省に對しては單に經濟的に責任を負はされてゐるにすぎなかつた。この新しい役所は「クルー・ハウス」(Crew House)内に置かれ、又その名前を借りてゐた。その活動を隠匿するために公式の名稱としては「British War Mission」といふ名前がつけられた。<sup>(1)</sup>獨逸では「クルー・ハウス」の大きな成功をたゞノースクリフ卿の個人的な活動にのみ歸してしまふ傾向があつた。それは或程度正しいのだが、實は、ノースクリフの活動力はこの時期にはもはや昔日のそれではなかつた。彼は一九一八年には喉頭の腫腫に悩んでゐて、その翌年には遂に大手術をせねばならなかつたほどであつた。<sup>(2)</sup>彼は「クルー・ハウス」における宣傳の仕事には

積極的に參加したのではなくて、彼の協力者の提案や希望を政府内における彼の名聲と影響力の重みで支持するといふことに止まつた。勿論獨立の仕事になしうる技能を充分もつてゐる人員を選んだといふ最重要の仕事は彼の功績である。彼はそれを大部分彼の從來の協力者の列内から選んだ。活動のテンポも最後には彼の精力的な意思によつて決せられた。ノースクリフは、合衆國への特使として滞在してゐた間彼の右腕ともなり、組織活動において大いに彼を助けた陸軍中佐キャンベル・ステュアートを彼の代理人、副部長、協議委員會議長として任命した。彼は後「クルー・ハウス」における宣傳の功勞により貴族に列せられ、「デイリー・メール」及び「タイムス」に指導的地位を有するに至つた。<sup>(3)</sup>

(1) H. W. Stead, 前掲書 第二卷一八六頁

(2) Hamilton Fyfe, Northcliffe. An Intimate Biography. London 一九三〇年三三三頁——H. W. Stead 前掲書 第二卷二四九頁

(3) Hamilton Fyfe, 前掲書二六六頁

その成立後のはじめの数ヶ月は「クルー・ハウス」はその攻撃を専らオーストリア、ハンガリーに集中した。其處では最も容易に成功がえられそうであつた。民族間の不和はすでに國家機構を危険に脅かすまでに蝕んでゐた。これに反して、獨逸國民が春の攻撃によつて戰爭に勝利を占めうるとして、望みをもつてゐるかぎり、獨逸に對する宣傳攻撃は望みなきものやうであつた。五月には

宣傳の効果はオーストリアの戦線にすでに明瞭にあらはれてきた。それはオーストリアの軍隊内に逃亡が増加したといふ事によくあらはれてゐた。そこで、獨逸に對する同様な大規模の攻撃を行ふことが決せられた。<sup>(1)</sup>

著名な作家、社會批評家であるH. G. ウェルズが獨逸に對する宣傳の指導を引受けた。彼はその場合、以前獨逸に學び、又すでに外務省の宣傳部にあつて經驗を積んでゐた歴史學教授ゼー・ダブルユー・ヘットラム・モリーの助けを藉りた。ウェルズは五月には獨逸への宣傳的働きがけの觀點からヨーロッパの新組織のための一つの遠大なる政治的プログラムを完成して居た。そこにおいて國際聯盟が重要な役割を演ずる永續的平和状態の建設、新しい黄金時代こそ彼が獨逸國民の目の前に提供しやうとした誘惑的な未來像であつた。彼は獨逸國民が、戦争をその最後まで繼續するよりは、その帝國主義的政府を殲し、武器を捨て、平和的世界組織に参加することがその本來の利益に合致するのだといふことを確信することを切望して居た。彼のプログラムはノースクリフ卿と陸軍省によつて宣傳の基礎として認容された。政府はしかしイギリスの政策を公然とそこに確定することを避けた。ウェルズはその平和主義的見解を眞剣に考へてゐたのであつたが、ノースクリフ卿にとつては世界平和のプログラムは單に獨逸人に武器を捨てさせるための一手段にすぎなかつたとしふことを彼は見落してゐたのではなかつた。ノースクリフ卿の新聞は激情をたきつけ、獨逸の粉

砕を要求することを決して止めはしなかつた。ウェルズはその不誠意に抗議した。そして二人の間にはげしい衝突が行はれ、遂にその爲七月二十三日ウェルズはその任を退くに至つた。<sup>(2)</sup>その空席はジャンナリズム界に於けるノースクリフの協力者、作家ハミルトン・ラーフェによつて補充され彼の指導下に獨逸に對する宣傳ははじめて全き發展をみた。

(1) Sir Campbell Stuart, *Secrets of Creve House. The Story of a Famous Campaign.* London 一九二〇年獨譯一九二二年四〇頁以下

(2) Hamilton Fyfe, 前掲書二四三頁以下

ラーフェは「デイリー・メール」の従軍記者として處々方々の戦地において大仕掛な戦争を直接自分の目で見てをつた。そしてその後ノースクリフに依つてその合衆國への軍事使節團に加はつたのであつた。戦争の経過につれて彼は次第に平和主義的思想の奉持者になつて行つた。ヴェルサイユ平和條約の幻滅が彼をこの方向に強めたのであつた。後來彼は種々この著書において英國戦時内閣、殊にロイド・ジョージに對して非難を發し、戦争宣傳によつて獨逸國民を欺き、誤らせたことについて彼を責めたのであつた。<sup>(1)</sup>戦後間もなく、ラーフェは労働黨に入り、社會主義的新聞「デイリー・ヘラルド」の編輯をうけもつた。

(1) Hamilton Fyfe, 前掲書二四八頁以下——同著 *The Making of an Opinionist.* London 一九二二年二五〇頁以下

一九一八年夏までは戦線の宣傳は陸軍省の手にあつた。一九一六年のはじめ陸軍少將サー・ジョー

マクドノフはその國內軍事通信局長に任官後陸軍省内に特別宣傳部を設けた。そして一九一七年にはすでにそれは大きな規模になつてゐた。この部門の或るグループでは間もなく——はじめはごく少數、そして一九一八年のはじめ以来は相當多量に——獨逸の塹壕上に投下すべき宣傳ビラを製作しはじめた。ベルリンとライプツヒヒに學んだことのある博學な動物學者、スコットランド人チャーマズ・ミッチェルがこの仕事を指導した。七月にはノースクリフ卿は、内容の統一を確保するためにあらゆるビラの製作を「クルー・ハウス」に集中することを提案した。チャーマズ・ミッチェル大尉が「クルー・ハウス」に移つてきた點だけを言へば、この希望は達せられたと言つてよい。その時からエス・エー・ゲイストもその仕事、宣傳文書の持込みの指揮を「クルー・ハウス」で行ふことにした。

或種の執行委員會があらゆる手段を協議するために毎日開かれた。オーストリア・ハンガリーに對する宣傳の二人の指導者、即ち「タイムス」の外國部長であるヘンリー・ウィックハム・スーテッドと、歴史家にしてオーストリア・ハンガリー問題の専門家たるセトン・ワトソン博士も亦そこに屬してゐた。二人とも嘗て獨逸大學の學生だつた事、又スーテッドは「タイムス」の前ベルリン通信員だつた事等の經驗から獨逸の見地で獨逸の事情を判斷することをまかされてゐた。七月以後は獨逸戦線への宣傳ビラの撒布は異常な多數にのぼつた。

(17) H. W. Stead, 前掲書 第二卷二二二頁

(18) 同書二二四頁

ノースクリフはいかに大規模にその仕事を取扱つてゐたかといふことは、彼は直ちに各聯合國の宣傳活動の統一といふ事に手をつけたといふことにも窺はれる。彼を首班とした新官廳が出来て間もなく、彼は聯合國の宣傳會議をイギリスに召集した。それは一九一八年の二月末から三月初めにかけてロンドンで開かれフランス、イタリア、亞米利加合衆國が參加し一般的問題と並んで、オーストリア・ハンガリーに對する攻撃がこゝで協議された。

(19) H. W. Stead, 前掲書 一九一頁以下及び二四一頁

一九一八年春及び夏における宣傳の大きな成功はすべての政府の注意をこの精神的武器に向けさせた。最善の方法の獲得、經驗の交換は以前よりも一層必要と思はれた。ノースクリフは新しい召集狀を聯合國に發した。今回は八月十四日から十六日まで立派な會議が「クルー・ハウス」で開かれ約四十人の代議員が集合した。フランスは一國だけで八人の代表者を送つたが、その中には宣傳局長クロブコフスキイとアグナン教授が居り、イタリアの主席代表はボルゲーゼ教授であつた。アメリカ側からはその直前フランスにあるアメリカ主力部隊に派遣せられてあつた宣傳士官も亦出席しあらゆる重要な問題について協力がなされた。ノースクリフの提案に従つて「クルー・ハウス」



に事務所を有する常設的の聯合國宣傳委員會の設置が決議され、各國政府はその代表者を任命した。しかしながらその爲に多大の時間が空費されたので、委員會は遂に實際に仕事をすることにならなかつたのでノースクリフはその代りとして、「クルー・ハウス」の常設代表者をバリーに派遣した。

その間に聯合國の勝利が近づいてきた。「クルー・ハウス」の最後の仕事は媾和條件のためのプログラムの作成であつた。政治に對してもそれを操縦指導する役割を果たすために、宣傳はもう一度イニシアティブをとつた。重要な各省の代表者の出席の下に媾和のための政治的方針の協議委員會が「クルー・ハウス」内に作られた。同委員會は一の草案を發表したが、その根本的内容は「クルー・ハウス」の従來の政策に一致するものである。このプログラムの作成にあつた人々の非常に意外と思つたことは、ロイド・ジョージが見せられた時、我々が勝利を獲た今日自分は計畫や主義によつて自身を拘束することは不可能であると聲明したことであつた。原案が、獨逸の植民地はいかなる場合と雖も獨逸に返還せらるべきではないといふやうに改められてからはじめて戦時内閣は同草案の公表を許可した。ノースクリフの提議によりそれは十一月四日、聯合國及び中立國の主要新聞に一齊に掲載せられた。<sup>(1)</sup>

休戦締結のちノースクリフは宣傳局長としての職務を退いた。「クルー・ハウス」の活動はそれ

をもつて終つたのであつた。そこでなされた九箇月間の仕事の費用は七萬磅を多く出でなかつた。<sup>(2)</sup>

(1) H. W. Stead, 前掲書 二四二頁以下

(2) 同書 二二七頁

## C、合衆國

一九一七年春合衆國は大戦に参加した。合衆國はその準備をするためには充分なる時間をもつてゐた。戦争の責任と戦争の目的の問題はすでに長い間、情熱的に論せられ、二つの黨派は各々その精神的立場を守り、アメリカ國民を自分の側に引つけやうと努めてゐた。アメリカにおける指導的階級の輿論はしかし最初から聯合國に好意をもつてゐた。ウイルソン大統領が次第に、この戦争においては獨裁政治と軍國主義の舊制度に對する闘争が問題なのだといふ解釋をもつに至つたといふことは重大な意義をもつてゐた。彼は自分の友人にして顧問たるハウス大佐によつてこの見解を非常に強化された。ハウスは英米の指導による世界の秩序維持といふ觀念に完全に支配せられてゐた。大戦の最初から彼は感情的にイギリス側に立つてゐた。彼こそは獨逸國民をその政府に反對させるために動員しやうといふ考への父であつた。すでに一九一五年六月のルシタニア號事件の當時彼はウイルソンに、もし戦争になつた場合には議會の公式の挨拶においてカイゼルとその軍國政府

に對して開戦した責任を責め、アメリカは獨逸國民の解放のために戦ふであらうと聲明するやうに忠告してをつた。<sup>(1)</sup>

(1) The Intimate Papers of Colonel House, 前掲書 第二卷 四六九頁

ウイルソン自身は自らをアメリカ的、民主主義的傳統の擔ひ手にして豫言者であると感じてゐた。その原則と理想は彼にあつては神聖犯すべからざるものであつた。狂信的な信念とそれを明確にして適切に表現する才能とは、彼の聲明に大衆への最高の暗示力を附與した。アメリカがあつたやうな一致と感激をもつて大戦に参加したといふのは多く彼の功に歸すべきである。標語は彼自身によつて與へられた。アメリカの宣傳は本質的にはすべてそれを繰返し、流布せしめることにあつた。

他の如何なる國でも足下にも及びつかなかつたところの宣傳組織の單一性と集中性とはかゝる事情に一致してゐる。戦争の目的は明確に規定せられてゐた。宣傳は大統領の強い權威と張切つた意思によつて國民大衆にもちこまれた。宣傳と政治の間には分裂はなかつた。かくて、アメリカの宣傳はそれが戦争の第三年目の後半にはじめられたものではあつたが、その強度と効果とにおいて、間もなく第一等のものとなつてしまつた。そして戦争に對しては單に間接的利益だけしかもつてゐなかつたやうに見えた最強の中立國即アメリカが、聯合國の仕事も遠慮なく自分のものとしてしま

つたといふ事實は、強力な推進力として作用するに至つた。

一九一七年四月六日獨逸に對して宣戦が布告せられた。四月十四日にはすでにウイルソンの指令によつて(公報委員會) "Committee on Public Information" が作られた。それは國內においては銃後の熱狂をつくりあげ、國外においてはアメリカの犠牲的精神と戦争に對する決意を傳へるといふ二つの任務をもつてゐた。この委員會の議長には、若い、比較的人に知られてゐないジャーナリストで、「ロッキーマウンテン・ニュース」の發行人、民主黨員、ウイルソンの熱心なる信奉者であるジョージ・クリールが任命された。クリールは激烈な活動力と迅速なる決斷力とを備へた闘士であつた。彼は、あらゆる攻撃を押しきり、その事務所を廣汎にして強力な啓蒙活動の中心とすることに成功した。アメリカ人は最もよく廣告のことを心得てゐる。それ故に彼等は又最良の宣傳家でもある。募兵運動は一個の大きな商賣のやうに行はれた。クリールは大きな成功をもつてアメリカと全世界に戦争を商品のごとく「賣りつけた」。映畫や展覽會や文書等々の催し物から得た通信委員會の収入は二百八十二萬五千弗にのぼつた。クリールは言はゞ宣傳大臣の地位についたやうなものであつた。同委員會には彼の外に、外務、陸海軍各次官、ロバート・ランシング、ニュートン・バーカー、ヨゼフ・ダニール等が屬してゐた。仕事の主要な部分と責任とはしかしクリールの双肩にかかつてゐた。

最初雑費は、戦争の初めに國土防衛の目的で大統領に許可された五千萬弗の特別準備金から支出せられた。大戦中クリール<sup>(1)</sup>の活動は議會の諸團體の側から烈しい批判と多くの攻撃にあつた。共和黨に屬する人々は多數の新聞、宣傳組織が民主黨の利益になるやうに悪用されるのを恐れた。その上クリールは彼の政治的経歴からも多くの敵を有してゐた。彼の敵は、大統領がその宣傳長を罷免した時にのみ防衛の目的のための特別準備金を許可するといふ決議をなした。クリールはこの脅迫によつて、一九一八年六月經費の承認を申請するために議會に自ら出席する必要にせまられてきた。委員會の任務と活動は豫算委員會によつて詳細に審査されたが、その結果共和黨の代表者たちも彼にもつとも有利な證言をしたことになり、百二十五萬弗の豫算が全會一致で可決せられた。外國における宣傳の費用はその後も大統領のこの準備金から支出せられた。全體としてこの準備金から五百六十萬弗が流用せられることになつてゐたのであるから、承認せられた額は兩方を合して六百八十五萬弗にのぼつたわけである。戦争が終へた時、二百九十萬弗が大藏省に返された。<sup>(1)</sup>この委員會はワシントンに置かれた。

(1) George Creel, How we Advertised America, New York and London 一九二〇年 六三頁以下

外國に對する宣傳は最初クリール自身によつて組織され、その監督下にあつた。しかし擴大する仕事の規模はやがて特別な指導を必要とし、「外國部」が設けられた。一九一八年の春以來、「コス

モポリタン・マガジン」の前發行人エドガー・ジー・シンソンがこの部の總指揮者となつた。彼の下一人の事務長がおかれた。聯合國及び中立國の各首府駐在のアメリカ公使に對してさへも廣汎な獨立性をもつた同委員會の全權使節が送られた。彼等は本國政府の權威によつて完全に支持せられてゐた。彼等の活動は各國政府の下に公式に傳達され、その宣傳活動を公然と行ふといふことが、使節の義務とせられた。<sup>(1)</sup>パリにある同委員會の事務所は、フランス側の宣傳部及びアメリカ遠征軍の情報部との共同工作によつて特に重要なものとなつた。

獨逸に對する戦線宣傳は軍事情報部によつて指導せられた。獨逸前線における聯合國側の宣傳の効果がはつきり窺はれるやうになつた時、パリーの事務所においてイギリス、フランス、ベルギー、アメリカ各宣傳部の會議が開かれた。そこで、戦線宣傳に最も好都合な場所は現在ではアメリカ部隊が戦つてゐる塹壕であるといふ結論に達した。人々は、アメリカ人が居るといふことだけで獨逸の兵士の上に戦意を沮喪させる作用を果すであらうことを希望した。アメリカ人はその會議において遠征軍の軍事情報局長デニス・イー・ノーラン將軍と新聞班のバリー駐在班長であるエー・エル・ジェームズ少佐によつて代表されてゐたが、彼等は直ちに自らその戦線における宣傳を引受け<sup>(2)</sup>た。アメリカの軍事情報局は戦争の間に大きな擴張をとげてゐた。就中宣傳課が出来てゐたが、宣傳といふ言葉が屢々濫用された結果あまりに歪曲されてつたので、一九一八年春その名稱

を(心理部) "Psychologic Subsection" と改めた。たゞ上級官廳の支持だけが不足してをったのであつたが、宣傳を行つても差支へないといふ形式的な許可を軍が受取つたのは、既に休戦が締結せられた後であつた。仕事だけはそれにも係はらず着手されたのであつたが、遂に活氣を帯びるに至らなかつた。

(1) G. Creal, 前掲書 二四二頁以下

(2) 同書 二八五頁以下

(3) Major E. Alexander Powell, The Army behind the Army, New York 一九一九年三三三頁以下

七月十四日に、戦線の宣傳を組織するために、ジャーナリストであつたハーバー・ブランケンホルン大尉の引率下に六人の情報部士官がアメリカを出發した。ロンドンにあつてしばらく滞在し、その宣傳會議にも出席したのち、八月末ブランケンホルンはアメリカの主力部隊に到着し、そこで直ちにその活動を開始した。八月二十九日に彼等によつて作られた最初の宣傳ビラが撒かれた。しかし乍ら材料上の困難はそう容易には克服することはできなかつた。事件は十月には益々急がしいものとなつて、戦線における彼等の第一の仕事はウィルソンの演説や覺書を弘めることとなつた。すでに以前から大規模に組織せられたフランス人やイギリス人のビラ宣傳に追いつくことは、アメリカ人には最早出来ないことであつた。しかしながらそれでも彼等は、主として飛行機によつて三

百萬部のビラを獨逸の戦線に撒布することに成功した。

(1) Captain Heber Blankenhorn, Adventures in Propaganda, Boston and New York, 一九一九年三四八頁以下

(2) E. A. Powell, 前掲書 三四九頁

アメリカ人の實際的才能はその場合色々の合目的な準備の中に示された。宣傳ビラの内容が常に眞實と一致するやうに配慮するやうにとの厳格な命令が發せられた。情報部士官によつて書かれた傳單の原文は參謀本部の許可をうる前に、たとへそのために發行がおくれるやうなことがあらうとも、もう一度嚴にその眞實性を審査された。「心理部」長は一九一八年九月一日以來、獨逸軍の軍紀の低下を體溫表の形式に一種のグラフにあらはしたカードを作成せしめた。獨逸國內及び戦線からのあらゆる情報のために念入りに利用された。このカードはアメリカの陸軍大臣によつて注意深く研究された。最新の戦争記事をもせた塹壕新聞を獨英兩國語で同時に發行するといふ計劃も宣傳のアメリカ的解釋として特色がある。その新聞は、それが同時にアメリカの兵士にも讀まれるといふことによつてドイツの兵士の特別な信頼を得べきものとなつてゐた。この計劃はしかし實行に到らなかつた。多くの事柄においてアメリカ人はフランス側の宣傳の援けを藉りねばならなかつた。フランスの組織は優れてゐたから、アメリカ側で技術的な準備と配布を自らの手で行ふことができなかった間に、すでにその宣傳ビラを獨逸の戦線に投下してやるといふやうなことも可能ならしめた

のだ。

一九一七年五月には合衆國に「ドイツ・デモクラシーの友」會が作られた。それは、ニューヨーク、フィラデルフィヤ、シカゴ共の他の各都市に同時に出来た。<sup>(2)</sup>この會は十二月八日には、すべての獨逸系アメリカ人に對して獨逸の民主化といふ目的が達せられるまでは全力をあげて戦争に参加することをすゝめた檄を發行して公衆に訴へた。この會は戦争についての獨逸政府の責任に關して獨逸國民を啓蒙するといふことを特別の任務とした。すでに一九一八年四月には會は數百萬のドイツ系アメリカ人をその會員に數ふることができた。<sup>(3)</sup>それは宣傳委員會からの力強い保護をうけ、一般宣傳組織に編入せられた。その事務所はニューヨークにおかれた。

(1) E. A. Powell, 前掲書 三五七頁

(2) Die Freie Zeitung, Unabhängiges Organ für demokratische Politik, Bern, Jahrg. 11, 1918年五月二二日附四一號

(3) 同紙 一九一八年四月二〇日附三二號

その事務所は一人の生來の獨逸人で、前進「Vorwärts」と「ウィーン労働者新聞」Wiener Arbeiterzeitungの前ロンドン通信員であつたジュリウス・ケートゲンに指導されてゐた。クリールの言葉を藉れば彼は「運動の心臓にして生命」であつた。<sup>(1)</sup>彼自身「一八四八年及び一八四九年の獨逸

國民の民主主義的叛亂」と題する宣傳文を獨逸語で書き、又六十六萬部以上も流布されたリンノヴスキイ覺書の獨逸版への序文を書いた。この協會の會長は一八四八年のバーデン叛亂に参加し、後アメリカの内亂における功勞によつて有名になつた同名のアメリカの將軍の息子であるフランツ・ジゲルであつた。副會長は生來の獨逸人で有名な統計家であるフレデリック・ルドウイヒ・ホフマン博士であつた。書記としては、獨逸の四十八年代の亡命者の息子である、著述家フランク・ボン博士が働いてゐた。彼は一九一八年の春、協會の代表者として、自由新聞「フライエントアイトンク」に據つてゐたスイスのドイツ共和主義者達との協力を達成するため數ヶ月間スイスに旅行した。「フライエントアイトンク」の支持が「ドイツデモクラシーの友」の宣傳活動に與つて力があつた。編輯は協會の列内から、たとへばフランク・ボンやエフ・エル・ホフマンからの著述的協力によつても協力せられた。著名な財界人オットー・エッチ・カーンやニューヨークにあるレオプ商會のヤコブ・エッチ・シッフの論文も同様に「フライエントアイトンク」に掲載せられた。

(1) G. Creel, 前掲書 一八七頁以下—Der Kampf. Revolutionäres soziales Wochenblatt, Amsterdam, 1917年七月二十八日附一四號

フランク・ボーンはそのヨーロッパへの旅行にあつてフランスの宣傳部とも連絡をつけた。この媒介の結果「Service de la propagande aeriene」は「ドイツデモクラシーの友」に對して、それ

についてフランスでは技術的援助をすることは叶はなかつたが、そのビラを獨逸語で印刷し、獨逸戦線への撒布を果すことを引受けた。<sup>(1)</sup> オットー・エツチ・カーンによつて書かれた「プロイセンの東縛下のドイツ」といふ表題のアデビラはこれらの多數の宣傳ビラの一つであつた。協會の會員たちは勿論、獨逸にある彼等の近親者への手紙によつて輿論に働きかける努力も試みた。「ドイツデモクラシーの友」はしかし大戦中アメリカにおいて決して安易な生存をつげえたものではなかつた。ドイツ系アメリカ人の大多數は彼等と事を共にしやうとは欲しなかつたし、クリール宣傳長が彼等を保護してゐたにもかゝらず、アメリカの超愛國者達の信頼をうることも出来なかつた。<sup>(2)</sup>

休戦締結されるや否や國內宣傳に従事してゐたあらゆる委員會の活動は停止された。クリールとシンソンはヨーロッパ各國にある事務所を撤廢するためにバリーに行つた。その代りに今度は、今迄戦線によつて隔離されてゐる新しく出来た中部ヨーロッパの諸國、チエッコスロバキヤ、オーストリア、ポーランドへ宣傳を持たむといふ新しい任務が提供せられた。この仕事のためにブラーグが中心地に選ばれ、こゝからチエッコ及びポーランド政府の援助の下に委員會の重要な宣傳文書がチエッコ語、ポーランド語、ドイツ語で發行せられた。<sup>(3)</sup> 一九一九年四月一日にはクリールがその職を退いた。そして六月三十日には委員會は全く解散された。

(1) Haasi et Tomelat. 前掲書 一六七頁

(2) G. S. Viereck, 前掲書 一八〇頁—G. Creel, 前掲書 一八七頁

(3) G. Creel, 前掲書 四一七頁以下

## 二 戦線における宣傳

既に戦争のはじめに當つて交戦各國内に飛行機を宣傳用に使用するといふ計畫があらはれた。新聞と技術進歩の時代にあつては人々の考へは一樣に空にむけられてゐた。そしてその考へは國民の色んな方面から軍當局に提起されたのであつた。この試みは間もなく實行された。宣傳ビラの投下は特に聯合國によつて益々多量に行はれた。そして戦争の最後の數ヶ月においては戦線を越えてもちこまれたビラは恐るべき紙の洪水となり、それは獨逸軍とフランスに隣接した獨逸の國境地方とを文字どほり溺れさせたのであつた。

はじめにあつては交戦國のどちらの側でも戦争の永續についての準備はしておかなかつた。各々が間もなく勝ち戦で終ることを望んでゐた。しかるに獨逸はその國境の突然の閉鎖によつて特別な状態におかれた。ドイツが最初の戦勝の情報を飛行機からの投下によつて國境の彼方に弘めやうと考へたことは全く當然のことであつた。八月八日に國民自由黨の書記長は獨逸情報局長官に手紙を書いて、飛行機からの投下によつて敵國の輿論に影響を與へることを提案した。レッチヒ略取の情報からまづ始むべきであると彼は論じた。他の者は或ひは、獨逸が戦争をはじめねばならなかつた理由が述べてあるカイゼルの獨逸國民への檄文をも飛行船によつて敵國の大都市に投下すべきであると提案し、或ひは宣傳ビラのテキストを自ら書いてもつて來たりした。<sup>(1)</sup> 參謀本部では併し事件の錯綜のためにこの種の提案にかゝらず餘裕がなかつた。そこかしこに宣傳ビラが投下された事實があつても、それは參謀本部の協力なしでなされたことなのだ。かくして八月三十日には一獨逸飛行機が、降伏せよといふ心から眞面目になされたのではなさそうな勸告を書いた黒、白、赤の手紙をパリーの上空から投下した。<sup>(2)</sup> フランス兵士にあてた獨逸の勸告が、おそろしくそれが最初であつたらうが、九月に第四軍團の情報部士官によつて起草され、戦線に送られた。<sup>(3)</sup>

移動戦が陣地戦に移つた時はじめて司令部は、宣傳ビラの投下といふ考へを吟味する餘裕をえた。一九一五年一月八日參謀總長フォン・ファルケンハイム將軍は個人飛行士や軍隊による檄の勝手な撤布を禁じた。眞實の戦争の情報の弘布はなんら非難すべきではない。併し乍ら嫌ふべき形式で敵國政府を攻撃することは許すべからざるところであると彼は聲明した。司令部は隨時ビラの投下について決定する権利を留保した。軍主腦部の意見を順次に叩いて見た時、司令官の大多數は斯る戦争手段を望み多きものとは見てゐないといふことが分つた。そして情報局長官ニコライ少佐も一月二十八日その意見に賛成した。<sup>(4)</sup> しかし一方では之に反して一九一五年春にはフランス戦線とその奥地にアルデンス新聞 "Gazette des Ardennes" を定期的に投下することがはじめられてゐた。

(1) 司令部記録、政治部

- (2) 司令部記録、検閲局記録
- (3) 一九一四年に第四軍團情報部士官ナリシ「J. ヴィツテ中尉の私的報告
- (4) 參謀本部代表部記録、第三篇

フランス人はビラ宣傳をドイツ人よりもつと早く始めたやうに見える。すでに一九一四年八月九日にはフランスの飛行士は、獨逸の羈絆からの解放を約束したところのアルサス・ローレンの人民にあてた布告をローレンに投下してゐる。<sup>(1)</sup>最初の戦況では、勝利の報導を弘めるべき機會はあまりなかつた。それにも關はらずメルリンの新聞「E. N. am Mittag」は和蘭の新聞「De Tijd」に於てはフランスの飛行士がレッツヒに宣傳ビラを投下したといふ事實がある。その宣傳の傳へるところによると、ハンブルグ、キール、レーベック、ステットリンは英佛艦隊によつて占領されてしまつたといふことになつてゐた。マルヌ會議後の獨逸軍の退却は勝報の流布にもつてこの機會を與へた。九月十七日にはシュツアルツバルトのノエシュタットにおいてビラをつけた風船が羊飼ひの子供に拾はれた。このビラは「ドイツ軍に與ふ」といふ表題を附して、ドイツ軍の完全な殲滅は近きにありといふ豫想が書いてあつた。<sup>(2)</sup>初期のフランスのビラは、獨逸兵の捕虜になることの恐怖をなくさせることに努力してゐる。この種の布告は十月七日にアミーで飛行士によつて撒かれ、それは黒、白、赤の三色で色どられてゐた。すでに非常に汎濫して居た同様なビラは十一月十一日ローエに、又ローレンにも投下された。<sup>(3)</sup>各司令部では獨逸におけると同様自分の責任でもつて宣傳、

ビラ戦をはじめたが何れも同じ秋の風で、此所でも大本營がそのことに干渉した。一九一五年八月にはフランス陸軍省内に空中宣傳部が作られ、その許可なしでは今後の如何なるビラの投下も許されないやうになつた。そしてこれによつて、ビラの作成と撒布における完全な統一が實現せられた。

- (1) 第二バイエル軍團司令部記録
- (2) マキシミリアン・レーネルト、世界大戦に於ける詩と寫眞、シャルロットテンブルヒ、發行年不明、一〇四—二七頁
- (3) 戦時新聞局記録、宣傳ビラ蒐集物

大戦の初期においては撒布はなほ小範圍にとゞまつてゐた。飛行士も、宣傳用に飛行機を充分に驅使するにはあまりに軍事的任務が多忙だつた。一九一七年の事件は成程聯合國の宣傳の帆に新鮮な風を孕ませた。しかし一九一七年に撒布された宣傳ビラの數は一九一八年の大量生産に比較すればまだ一わづかなものであつた。第三軍團においては四月から十二月までの間に獨逸兵士からとゞけられた敵國宣傳ビラの平均數は毎月一三八五部を數へた。<sup>(1)</sup>

- (1) 秘密憲兵隊記録

一九一八年には戦線宣傳はすでに飛行機の時代を超えて、より効果ある技術的手段にうつてゐた。しかし飛行機も亦他の方法では代へることの出来ないやうな場合に於ては依然使用されてゐた。飛行士は大量のビラを携帯し、何處であらうとお構ひなく塹壕や都會の上にそれを的確に投



下することができた。距離といふことはその場合大して問題とならなかつた。聯合國の飛行士たちはそのビラをもつてベルリンやウィーンなどの敵國首都をさへ襲つた。イギリス人は一九一八年の初めまではビラの撒布に主として飛行機を使用してゐた。

獨逸司令部では、刺戟的内容をもつ宣傳ビラは敵軍内に撒布してはいけないといふ自己の見解に固執してゐた。そして事實この原則が遵守せられた。たとへば一九一五年八月に大本營第三部第二課では、ベルリンの中央部の依囑により作られた、フランスで戦つてゐる印度部隊にイギリスの支配に對する叛亂を呼びかけたビラの草案を改作の委任附でベルリンに送つてやつたが刺戟的な箇所は實際に削除されたさうである。<sup>(1)</sup>もし時たまそのやうな機が投下されたとしたら、それは司令部の意思に反してなされたことであつた。フランス部隊へのビラの撒布については一九一七年に至つても成功は望みえなかつた。一九一七年七月七日のルーデンドルフの指令の中には次のごとく言はれてゐた「戦線宣傳はフランス人に對しては無効である故それを放棄せよ。」

フランス人の益々多くなる撒布活動に直面して一九一六年の夏、司令部では敵國飛行士を煽動的文書の配布の庶で軍法會議に告訴しうるか否かを吟味しはじめた。先例はロシア司令部によつて作られてあつた。一九一五年に二人のドイツ飛行將校、フォン・クノーベルスドルフ中尉とフォン・ヴィレ少尉とがロシアの捕虜となつた。彼等はオーストリアの軍司令部の命令でカルバーテン地方

でロシアの軍隊にまじつて戦つてゐるポーランド人に向けたビラを投下したのであつた。軍法會議は彼等に絞首刑を宣告したが、翌日恩赦によつてシベリヤにおける終身強制労働に變更された。ペテルズブルグ駐劄スエーデン代理公使ボンデ伯は一九一七年六月イルクツク地方へ行つた際フォン・クノーベルスドルフ中尉が全く悲惨な状態でまだ牢獄に繋がれてゐたのに出會つた。外務省はこの事件に關聯してかゝる布告の投下は國際法に違反する、それ故獨逸飛行士は當然責任究明のため本國に引渡さるべきであるとの見解をとつた。<sup>(2)</sup>

(1) 司令部記録、第三部第二課

(2) ベルリン陸軍省記録、國際法違反監視中央局

陸軍省は一九一六年九月この問題に關して詳細な法律的吟味をなさしめた。その結果、ヘーグ陸戰條令二十二條「交戰國は敵國を害するための手段の選擇にあつて無制限の權利をもつものに非ず」との根據の上に、煽動的ビラの撒布は處罰すべきものであるとの結論に達した。その吟味は「如何なる國家も敵國の住民及び軍隊に獨裁權に對する反抗を誘發することによつてその國の自決權を害する權利を有せず」と論じた。陸軍省はそれに従つて軍團長に對して、敵國飛行士に對する處置については所斷の場合には何ら妨げることなしと指令した。<sup>(1)</sup>

參謀本部がかゝる行動に出た最後の動機は、四月はじめに行はれた、獨逸皇帝の人身を狂暴な攻

撃の目標としたジークフリート・バルダーの宣傳文の撒布であつた。一九一七年四月二十二日參謀  
總長は「嵐のひゞき」及び「現獨逸皇帝ウイヘルム二世よ、汝を我々は告發する」のパンフレッ  
トの投下に關聯して、かゝる煽動文書を所持してゐるか、又はかゝる文書の投下に責任ある敵國飛  
行士は軍法會議に附すべき旨西部戦線の部隊に指令するやう陸軍大臣に傳達した。外務省はこれ  
に關してフランス、イギリス、ベルギー各政府に傳達することを依頼された。陸軍省は自國領土に  
對するこの處置に賛成した。ドイツ政府の覺書はスペイン大使館を通じて一九一七年五月二十三日  
フランス政府に傳達され、七月三日にはフランス政府の回答が到達した。それはその處分の苛酷を  
抗議し、飛行士はピラの投下にあつてはたゞ命令により、兵士としての義務に従つたまでである  
ことを述べ、フランスでも全く同様な報復手段をとることをもつて威嚇してきた。司令部ではしか  
しその態度を改めなかつた。司令部ではフランスからあらゆる報復手段をとる機會を奪ふために、  
それまで獨逸飛行士によつて撒布されてゐた「Gazette des Ardennes」の投下も禁止した。<sup>(3)</sup>

(1) 司令部記録、第三部第二課  
(2) ヘルリン陸軍省記録、軍隊部  
(3) 司令部記録、第三部第二課

一九一八年一月二人のイギリス航空士官、シヨルツとウキキなる者が獨逸軍の捕虜となつた。彼  
等の飛行機内には叛亂と裏切りを煽動した多數の宣傳ピラが發見せられ、軍法會議はその飛行士に

十年の禁錮を判決した。英國政府はこれに抗議し、宣傳ピラの投下は國際法に抵觸するものでない  
との見解を主張した。報復手段の脅迫によつて刑の輕減は達することを得たが、<sup>(1)</sup>しかしイギリスの  
司令部では飛行機からの宣傳文書の投下を斷念する必要にせまられてゐることを感じた。そこで他  
の補助手段の使用、第一に氣球を放つことに移つて行つた。<sup>(2)</sup>イギリスのピラにはこの時から「By  
balloon」と印刷されることになつた。

(1) 空軍司令官發給、空軍情報誌一九一八年二月十四日附五一號陸軍省記録、國際法違反監視中央局「フリードリッヒ、  
フェルガー」によつて發給された論文集「世界大戦について我々の知らなかつたもの」所載フェルガーの論文「敵  
及び味方に對する戦線宣傳」中の彼の報告、同書五〇〇頁。二人の英國宣傳飛行士がドイツの軍法會議の判決  
によつて射殺されたといふ噂はあつてゐない。  
(2) Sir Campbell Stuart, 前掲書 一八七頁

この決心をしたことについては、ドイツ軍におけると同様英國軍においても、敵部隊に裏切りを煽  
動することは騎士道的な戦争の方法ではないとの見解が弘まつてゐたといふ事情が大いに與つて力  
あつたのである。一九一四年十一月の最初のイギリスの宣傳ピラは印度兵に對する宣傳ピラの撒布  
に對して抗議してゐた。かゝる宣傳文を撒布した將校は耻知らずとして攻撃され、「我々すべては  
イギリス人も印度人も、軍人の名譽ある職務を穢すときかゝる手段を用ひる者共を輕蔑する。<sup>(1)</sup>  
と。イタリーにある英國軍の司令官グラマ將軍も暫くの間戦線宣傳の手段に出でることを避けてゐ



だ。彼はいつも次のごとく言つてゐた「いや、それは立派なことではない。我々はかゝる輩とこそ闘はねばならぬのだ」。

イギリスの宣傳はその司令部の決心によつていちぢるしく不利にされたやうに思はれた。飛行士による撒布は彼等の最重要な攻撃手段の一であつた。が、氣球によるビラの撒布は同じやうな精確さでは行はれなかつた。ノースクリフは撒布禁止を非難すべき軟弱なる態度とし、陸軍大臣に飛行機からの撒布を再び許可するやうに迫つた。しかし彼は戦時内閣へそれを訴へることによつて一九一八年十月末やつと彼の意思を貫くことができたのであつた。彼が直ちに獨逸國內に撒布すべく準備させた三百萬部のビラはわづかの小部分が消費されたにすぎなかつた。一九一八年の間中イギリスの宣傳ビラに附せられてゐた「By balloon」の署名はすでに八月以來とりさられてゐた。

イギリスの態度とは反對にフランス司令部では獨逸の脅迫を問題にせぬことに決した。一九一七年五月には、獨逸第三軍の駐屯地に不時着した、そしてなほ煽動文書をもつてゐたフランスの一軍曹は軍法會議で有罪の判決をうけた。一九一八年七月にはホームで射落された飛行士ポター軍曹、彼も亦撒布の目的でバルダーの宣傳文書を所持してゐたのであつたが、その處罰が問題になつてゐた。處罰はしかし實行されなかつたやうである。一九一八年八月ロンドンの聯合國宣傳會議に出席したフランス代表は、未だ一人のフランスの捕虜飛行士も刑をうけてゐないことを明言することが

できた。しかしどつちもフランスの司令部では飛行機による投下を固執し、のみならずその數を益々増加した。この益々増加する聯合國による革命的宣傳に直面して獨逸司令部も遂に從來の見地を放棄せざるを得なくなつた。八月二十八日には飛行機による投下の禁が解かれ、同時に聯合國飛行士に對する軍法會議の干渉も廢止された。

- (1) 戦時新聞局記録、宣傳ビラ蒐集品
- (2) H. W. Stead, 前掲書第二卷二〇八頁
- (3) タイムス世界大戦史、第二卷三四七頁以下
- (4) 秘密憲兵隊記録
- (5) 參謀本部代表部記録、第三部第二課
- (6) 司令部記録、第三部第二課

大戦の初期における使用機の數の少ないこと、煽動ビラの投下にあつたの飛行士の危険とはずでに間もなく他の宣傳の手段を希望せしめた。まづ、ビラをガス氣球につけて風のまに／＼敵陣に送ることを試みた。獨逸側においても、一九一五年五月、風船を大量に用ひる提案が參謀本部代表部からなされた。フランス側ではこの方法はすでに一九一四年九月には部分的に用ひられてゐた。一九一五年三月に第二軍團では大量のバリーの新聞が氣球によつて送られてきたことを報告してゐる。一九一五年十一月以來宣傳氣球がアルサス・ローレン及び西部獨逸に届いたといふ報告が増えてきた。獨逸側でも一九一五年夏「Gazette des Ardennes」を氣球で送つたが、それには時

計仕掛で一定の間隔をおいて新聞がひとりで落下するやうに設備されてあつた。この仕掛はしかしあまりに金のかゝるものであつた。<sup>(2)</sup>後から後からと改良することによつて氣球の效用は次第に高まつた。最良の投下設備として兩軍とも、そこに小さな束にしたビラを糸で結びつけた導火索を用した。導火索が燃えることによつて一つ／＼の束は次々に落下した。

氣球を放つにあつては、その飛行の方向の決定は風に左右された。ガス放出の速度、ビラの重量の計算及び導火索に結びつけたビラ束の一定の間隔等によつて、次第に文書の撒布の際の偶然性を排除する努力が試みられた。各高度における風速の計算を可能ならしめた氣象學の進歩は特に重要なものとなつた。<sup>(3)</sup>しかしながら、氣球は結局三十六時間だけしか空中に止つてゐることができなかつたので、氣まぐれな風速やその方向の變化は容易に精密な計算をも一擧に崩してしまつた。氣球の荷物の主要部分は普通戦線から一五—八〇斤の地内、即ち作戦及び兵站地域内に落下した。<sup>(4)</sup>ベルギー、西南ドイツ地方は容易に到達距離内にあつた。そして中部ドイツも亦同じ災難を蒙つたのであつた。一九一六年一月には或る宣傳氣球はステッティンの近くにまで届いた。一九一七年四月には、その導火索がまだ燃え切つてゐない一個のゴム氣球が「自由な獨逸の言葉」といふフランスの宣傳紙を澤山積んだまゝブラーグの古小屋の中に発見された。シレジアまでは時折氣球が達した。<sup>(5)</sup>驚くべき迷路をたどつた例も少なくない。中立國であるスイスや和蘭は屢々獨逸向けの荷物を積ん

だ氣球の訪問をうけた。アルサス・ローレンへの宣傳ビラを積んだ或る氣球は英國のケント伯爵領に到着した。他の氣球はゼノア迄吹流された。<sup>(6)</sup>

- (1) 參謀本部代表部記録、第三部第二課
- (2) 司令部記録、第三部第二課
- (3) H. D. Tawell, 前掲書一八一頁以下
- (4) Sir Campbell Stuart, 前掲書三五頁以下——タイムス世界大戦史二一巻三四頁以下
- (5) ヘルン 陸軍省記録、軍降部
- (6) G. Creal, 前掲書二八六頁

フランス側の宣傳はすでに以前から氣球を大いに使用してゐた。一九一七年にはビラの大部分はこの方法で戦線を越えて撒布されたのであつた。イギリスの司令部では之に反して一九一八年の初めに到つてはじめて氣球使用に轉向した。イギリスにおける氣球の製造數は一週間に約二千個の高さに達した。氣球は平均四ポンドの積荷を積載し、大戦の末期には少なくとも二百四十斤の飛翔距離をもつてゐた。

アメリカ人は主として飛行機を戦線宣傳に使用してゐたが氣球を使用するにしても、彼等はイギリス製品を利用した。彼等はしかしこの分野でも獨立でやつて行きたい意圖をもつてゐた。十萬部の宣傳ビラを積み、一千斤以上翔破しうるやうな氣球の準備がなされてゐた。<sup>(1)</sup>そして一九一八—一九年の冬に獨逸國內への大規模の氣球攻撃が計畫せられてゐたがその實行は、休戦によつて妨げられ

てしまつた。

一九一八年九月には多數の敵國の、主としてイギリスの氣球が西部及び中部ドイツをおどづれ市民の間への敵國宣傳ビラの撒布は司令部代表部を極度に刺戟し、憂慮せしめた。<sup>(2)</sup> 聯合國の氣球活動は一九一八年の夏秋には主に西風が吹いてゐたといふ事情によつて特に強められたのであつた。獨逸飛行船部隊は之に反して、不利な天候に災されて一つの氣球も放つことが出来なかつたこととを屢々報告せざるをえなかつた。<sup>(3)</sup> 大氣の條件はイギリスの氣球に最大の利益を與へた。それらは屢々フランス戦線に戦つてゐる獨逸軍の兵站地帯にまで達したので、それによつてイギリスのビラ宣傳は自國の戦線をほるかに越えて重要性をもつに到つた。ベルギーも亦イギリスの活動には特に好都合な位置にあつた。そこでイギリス陸軍省によつてドイツ人によつて占領されたフランス及びベルギー領への特別の宣傳新聞「Le Courrier de l'air」が撒布された。

(1) G. Oreal, 前掲書二八七頁

(2) 第七軍團司令部代表部記録(ミュンスター)

(3) 空軍司令官記録

一九一八年のはじめにフランス人は、短距離地點へのビラ的大量撒布が可能なる一つの發明をした。彼等は錫引ブリキ製の宣傳ビラ入れ弾丸をつくつた。それは榴彈のごとく歩兵砲から發射されるもので、所謂V.B.榴彈とも「Portetract」とも呼ばれた。その着弾距離は約二百米に達し、空中で

炸裂するやうになつてゐたので、都合のよい風さへ吹けばビラは更に百米ほど遠くへ届き得た。<sup>(1)</sup> 各ケースは約百五十枚のビラ、或ひは五―一〇枚の新聞を入れる廣さをもつてゐた。この新武器を用ひた最初の大量發射は一九一八年五月十二日から十三日にかけて夜シャンバン地方で行はれた。フランスの射手は、もし間隔があまりに大きかつた場合はその塹壕からなるだけ近くドイツの陣地に近づいてゆくやうに言ひつかつた。ハンシーの語るところによれば十五分間に百萬から二百萬部宣傳ビラがドイツ兵に發射された。この紙彈丸の大部はしかし嚴密には、ドイツ塹壕に達しなかつた。<sup>(2)</sup> それにも係らず第一軍團にだけでも約一萬四千の宣傳ビラが届け出られた。同じ夜アルサス戦線でも同様な試みがなされた。ドイツ兵の間には勿論この新方法は大評判をとつた。

(1) Hans et Tonnelet, 前掲書一五五頁以下

(2) 司令部記録、第三部第二課

この成功はフランスの司令部には非常に有望にみえたので、次の數ヶ月には宣傳射撃が特に屢々用ひられた。或るドイツ部隊は發見されたフランス宣傳ビラの數の増加は二十五倍に達したと報告してゐる。宣傳榴彈の大きな缺點はその狭い着弾距離にあつた。そこでフランス人は輕野砲、かの有名な七十五ミリ加農砲から發射される宣傳彈丸を作ることに着手した。この試みは一九一八年の五月に成功し<sup>(1)</sup>ビラ榴彈は四―五籽の着弾距離をもつに至り、宣傳の新しい飛躍が遂げられた。發

射の痕は今日でも、彈丸が爆裂した際焦げついた多くのピラに見ることが出来る。榴彈の充填は至急の情報を送るにはあまりに長い時間を要したので、多くの場合加農砲は一般的內容をもつた宣傳文書やピラで装填された。一九一八年のドイツ軍の進撃に際して他の軍需品と共にフランスの宣傳彈丸が多量に鹵獲された。フランスの軍需材料廠シイリー・サルソーニュにだけでも五十萬部のピラをつめた彈丸を發見したし、フィヌメスでは同様な品物をつめた二百の箱を發見した。<sup>(2)</sup>

(1) General Morhary, 前掲書一四五頁

(2) 司令部記録、第三部第二課

ドイツ司令部では敵から學ぶべく努力した。六月二十日には西部戦線にある第三軍團第二分團は、適當な新聞彈丸の製造が行はれつゝあること、しかし未だ明白なる成果には到達してゐないことを報告した。七月三十一日には主力部隊の工兵隊司令官の指導下に榴彈砲と輕地雷發射器による試験的攻撃が行はれ彈丸は見事にその任務を果たした。榴彈砲は三―四百米の距離に達したのに對し、輕地雷發射器の彈丸は二百米まで達した。第四軍團とアルブレヒト侯部隊に各々千個の地雷が送られた。戦線宣傳はその時は大體、單にベルギーとアメリカ部隊に對してのみ行はれた。宣傳射撃を一般的に用ひることはドイツ側では遂に行はれなかつたが、フランス側では撒布活動をそれによつてさらに十倍から二十倍まで高めたのであつた。

技術の發達は大戰の最後の數ヶ月に於ては宣傳に異常な效力を與へたのであつた。各國の文獻にあらはれた精密な報告にもとづいて、大戰中聯合諸國によつて撒布された宣傳ピラの大略の計算をなすことができる。一九一八年九月十一日アメリカの情報部士官ブランケンホーンがそれまでに聯合國によつて撒布された宣傳ピラに關する資料の陳列をした時は、二千七百萬部がフランスの分になつてゐた。<sup>(1)</sup> ハンシーの報告によれば九月には一千四百萬部が戦線にもつてゆかれ、九月十一日から同月末までの期間は約三分の二に當るから、即ちその數は九百五十萬部といふこととなる。九月よりも撒布數の少なかつた十月と、十一月のはじめとで九月の數の半分として計算するとフランスの宣傳ピラの全數量は四千三百三十萬部となるのである。

(1) Lt. Blankenhorn, 前掲書五二頁及び六六頁

サー・キャンベル、スチユアートの報告によれば英國宣傳部は一九一八年六月から十月十日迄に一千八百二十九萬五千部の宣傳ピラをドイツに對して撒布した。<sup>(1)</sup> それ以前の月及び更に一九一七年中はイギリス戦線におけるピラ撒布はごく少數の範圍に止つてゐた。それでも一九一八年六月以前の全時期については少なくとも百萬部の撒布はあつたと計算せねばなるまい。そこでそれによつてイギリスの全部の數量は一千九百二十九萬五千部といふことになる。

アメリカ軍によつてドイツ戦線に撒布されたピラの數はイー・アレキサンダー・ポウエルは三百萬

と報告してゐる。<sup>(2)</sup> 聯合國の業績を綜合すると各敵國の宣傳中央部から發行された宣傳ビラの數は六千五百五十九萬五千部となり、其の大部分は投下されたが、この試みの主要目標たる西部戦線にゐるドイツ軍の兵數はその最強の時期にも、三百七十萬だつたといふことを考慮に入れても尙巨大なる量である。<sup>(3)</sup> この宣傳ビラの半ば以上はフランスから出たものであつて、勿論、これらのビラの大部分はドイツ兵の目には届かなかつたことを考慮に入れなければならないし、多くのビラはドイツの塹壕に届かないで落下し、風によつて野や森を越えて散らかされ、雨や濕氣で腐らされてしまつたのである。そして渡されたビラも亦屢々最も悲慘な状態におかれたのであつた。

(1) Sir Campbell Stuart, 前掲書九三頁

(2) E. A. Powell, 前掲書三四九頁

(3) Erich Otto Volkman, 一九一四年の大戦、第五版、ベルリン一九二四年三〇〇頁

宣傳ビラの運命の大體は司令部の情報部將校によつて作られた届出で數の統計が示してゐる。第三部第二課の計算によれば西部戦線においては一九一八年五月には八萬四千部、六月には十二萬部、七月には二十九萬四千部が届出られた。九月には十軍團で八十萬三千七百六十枚以上のビラが届出られた。この數から西部戦線の十四軍團について九月には約百十萬部のビラが届出られたと推算することができる。九月には聯合國の宣傳はその頂點に達し、敵國の報告に従へば、イギリスとフランスからだけでも千七百七十萬の宣傳ビラが撒布された。だから、この月にはその約十六十一

七分の一がドイツ兵によつて届出られたといふことになる。

どれくらいかのビラがドイツ兵によつて發見され、隠匿されたかといふことは勿論計算するを得ないが、しかしそれは數の上では届出られた數の一小部分にしかあたらないといふのが本當らしい。一部につき三十ペニヒといふ高い報酬で届出でが獎勵せしめられた。その上非常に屢々同種のビラが多數、二十五部も、或ひは屢々一束も一度に發見された。<sup>(1)</sup> しかし兵士達は一般に好んでビラを一部以上も自分のために保存しておくやうな事はしなかつた。第六軍團は一九一八年九月に二十萬三千部を突破して届出でのレコードを作つた。

(1) 參謀本部記録、情報部

比較のために掲げれば、ドイツの有名な宣傳新聞「Gazette des Armes」は一九一八年を通じて二百二十五萬三千部がドイツ戦線から、主として氣球によつて撒布された。そしてそのうち百五十五萬四千部が普通版で、六十六萬九千部が繪入り版であつた。宣傳ビラの投下は司令部によつて一九一八年八月二十八日にはじめて眞劍に行はれ出した。英佛戦線に於ても仕事がはじめられた。しかしその撒布數は聯合國の宣傳からはるかに後れてををつた。空軍司令官の報告によれば十月十日迄に西部戦線のドイツの十三軍團によつて八十七萬六千六百六十九部の宣傳ビラが撒布された。十月五日にはすでに休戦申込みの結果再び撒布禁止命令が出され、その爲めビラの配布は同月下旬まで

又新しく阻害された。<sup>(1)</sup>

ビラの作成と配布は聯合國側では益々完成化された。イギリス人は至急のビラと不急のビラを區別し、新事件の價值のある報道はすべて第一類に屬せしめた。印刷、輸送、配布は全く緊密な聯絡の下にあつたので、それが書かれてから四十八時間後にはそのビラはすでに、ドイツ兵の手中に送りこまれる事になつたのだ。<sup>(2)</sup>ドイツの組織はかゝる成績をあげることはできなかつた。一九一八年十月二十一日に第五軍團附情報部士官は、ドイツの休戦覺書とアメリカ政府の回答をのせた敵の宣傳ビラを送付したが、それは覺書の發表後僅か數日でドイツ戦線に達したものであつた。面白いことには、敵國兵士に説明する爲に英佛語で書かれた同覺書の撒布がドイツ側でも準備せられてつた。しかしながらこのビラをベルリンから發送するのは十月二十三日以前に出来る目當てはなかつた。情報部士官はこの出來事を機會に、もつと單純化され、敏速化された遣り方を考究することを提案した。<sup>(3)</sup>

(1) 司令部記録、第三部第二課及び空軍司令部記録

(2) St. Campbell Sarrt. 前掲書九二頁以下

(3) 司令部記録、第三部第二課

### 三、瑞 西

フランデンからスイスのユラに及ぶ塹壕線はドイツ國內への直接的働きかけにとつて越え難い障礙をつくつてゐた。ドイツに國境を接する中立國を越えてゆくことがドイツへの最も容易な連絡路であつた。これらの國々のうちでスイスは、それがドイツ、オーストリア、フランス、イタリアの四交戰國のどれも長い國境を接してゐたことにより、宣傳の最良の進軍地であつた。スイスが大戰中あらゆる陰謀の中心地、頭腦の眞の戰場となつたのはいさゝかも不思議ではなかつた。聯合國側の宣傳部はスイスを最前線の塹壕と見てゐた。

スイスの政治的ならびに經濟的狀態は異常に困難であつた。兩敵對國群は各々相手に聊かの恩恵も與へられないやうにと執念深く、威嚇的に監視してをつた。スイス人の傳統の獨立精神とその政治的自由を穢されずに守らうとする強き意思とはスイスをして唯一の正しき政策、嚴格なる中立性の維持を守らしめた。スイスの經濟狀態は勿論中立的態度の維持を極度にまで困難ならしめた。歴史的に工業國であるこの國がアメリカの穀物もドイツの石炭もなくしてやつてゆくことはできなかつた。それにも拘らずスイス政府が正しい中立を守るべく努力してゐることの承認を交戰國双方から得ることができたのは驚嘆すべき業績であつたと言はねばならない。しかもスイス國民の中にあ



つては交戦國への同情が分立してをつたのを考へれば、このことはそれだけ高く評價されてよいのである。フランス語を話す西スイスは大なる情熱をもつて反獨親聯合國的態度をとつた。併しフランス語を話す住民が二十二パーセントとなるに對して全住民の六十九パーセントにのぼるドイツ語を話す住民は簡単に全部がドイツ派であるとは言ひ得ない。インテリゲンチヤ及び商人の可成の少数派はこゝでも亦聯合國に好意的であつた。歴史と教育によつて共和的、民主的に物を考へてゐるスイス人は以前からドイツ、殊に東ドイツの政治關係には強い批判的態度をもつて臨んでゐた。大戦中も自重主義民主黨は國會の絶對多數を占めてゐた。中立國ベルギーへの進軍は人々を激昂せしめた。アメリカの大戦参加、ウィルソンによつて告げられた理想主義的戰爭目的への信頼、最後に又次第に加はつてくる聯合國の優勢は、ドイツの天秤皿を益々沈下せしめた。それにもかゝらず東スイスにおける言語と種族を通じての結合の感情は獨逸にとつて重要なプラスであつたし、その後もありつづけた。<sup>(1)</sup>

(1) ヤコブ、ルヒチ、一九一四—一九一九年の世界大戦中のスイス史、ベルン、一九二八年第一卷九九頁以下—エ

ドアドフテル、一八九八年以後のスイス

チューリヒ一九二八年二六八頁以下—ワルター、フォン、ルンメル「我がスイス軍中日記」より、第二版ミユ

ンヘン一九二二年二七頁以下

新聞の態度はこの状態に一致して居た。フランス派新聞は一致して聯合國に組してゐるのに——「ローザンヌ新聞」はその明白な反獨態度によつて特に目立つてゐた——ドイツ語新聞は兩方に對して客觀的であらうとする努力を示したがそれ故にそれは反佛的だとは決して言ひえなかつた。フランスの宣傳は以前から西スイスの支持を確保することができた。しかしながらフランスにとつては西スイスの同情よりも東スイスの感化といふことがずつと重大なことであつた。東スイスとドイツの間の緊密な精神的關係や頻繁な情報交換にあつては東スイスにおける成功によつてドイツへの働きかけも亦確保することができたのであつた。ドイツ語を話すスイス地方はそれ故にフランスの攻撃の主要な活動舞臺をなした。

フランスの宣傳組織の精神的中心地は勿論パリであつた。そこにはすべての絲が集まり、ドイツ向けのピラもそこで印刷された。宣傳文書を中立國に搬入し、又はスイスを通じてドイツに持ちこむためには、すでに間諜の祕密報告傳達のため作られてあつた連絡路を使用した。スイス國境のフランス情報部は第一はゲンフ湖畔のエツイアン・レ・ベエンに、それからゲンフのアンヌマースとボンタルリエにありそこに駐在してゐた情報部士官は國內に在る公使館付武官及び領事館と手をつて活動して居た。新聞の家「Maison de la presse」はその代表者として、大戦前十三年もベルリン大學にあつて活動してゐた大のドイツ通であるエミール・アグナン教授をスイスに派遣し彼はベ

ルヌにあるフランス公使館の新聞宣傳も指導した。一九一八年八月には彼はフランスの政府代表の一人としてロンドンの聯合國會議に出席した。ベルヌ駐劄フランス公使館付武官バジュオ大佐の事務所にも同様宣傳のための一課があつた。

ドイツ國境を越えて宣傳ビラを持たむ仕事にはバリー宣傳中央局に屬してゐたアルサス人レーモンド・シュールがあつてゐた。彼はアルサスからスイスに逃亡してゐた親佛的アルサス人の有力な支持をうけてゐた。アルサス亡命者の大部は主にバーゼルに生活してゐた。バーゼルからは眞直ぐにアルサスへ道が通じてゐた。ハンシーはどのやうにして宣傳ビラが農業労働者によつて國境を越えて運ばれたか、いかにそれが防水包装を施してミルク罐の中に入れられ製粉場に運ばれ、荷車で密輸入されたかを我々に語つてゐる。フランスの宣傳部は全く獨創的才能に富んでゐて、次々と新しい策略が考へ出された。そして間もなく獨逸はバーゼルからロールシャハまでの長い國境線も水も洩さぬやうに閉鎖することは全く不可能だといふことが明らかになつた。成程ラインは長い距離にわたつて天然の交通阻害をつとめたけれども、その代り、シャースハウゼン及びバーゼル地方の國境はその森林の多いことによつて益々監視を困難ならしめた。レールラツハ警察も一九一八年八月、こゝではひそかに針金垣を踏み越えることは容易なことだと自ら白状せざるを得なかつた。<sup>(1)</sup>食糧品の密輸入はドイツの國境警備所によつて寛容に取扱はれたので、そのことのためだけでも宣

傳ビラの密輸入は跡を絶たなかつたわけである。悪意ない遊山者のごとく仕度した手先き達は宣傳ビラを色んな口實の下に日曜日(2)の遠足の時そのリュックサックにつめこんで國境を越えたのであつた。

(1) アルブレヒト侯部隊記録 第110部  
(2) ベルリン陸軍省記録 軍隊部

ボーデン湖上のボートの交通は特に監視することが困難であつた。それ故そこは密輸入者たちによつて屢々その目的に利用されたのであつた。危険のないので、好んで用ひられた手段は、ビラを革囊やブリキ罐に密閉してライン河に投じ、ライン河によつてドイツに流しこむことであつた。ミューンヘンの大戦文庫は大戦末期のかゝるブリキ罐をその煽動的内容物と一緒に保存してゐる。

一九一七年一月クライン・バーゼルに於て或る牛乳屋の家から「バイエルンと平和」と題する文書の大束がスイス官憲によつて没收されたが、それは防水包装にしてライン河に投せられるはづのものであつた。このやうな包みをライン橋から水中に投じた牛乳屋が捕へられたが、彼はその仕事の遂行後エツイアンに行くはづになつてゐたと自白した。宣傳ビラをフランスからドイツに届けるために用ひられた手段としては、警察の断定によつて一九一七年七月三十一日附の贖せ「フランクフルト新聞」が通つてきたとされる道筋が典型的な例を示してゐる。バリーで作成され、印刷されて

その新聞はアンヌマースから外務省の急使によつてゲンフにあるフランス領事館に届けられた。ゲンフからはそれを或るアルサスの徴兵忌避者、即ち兵役義務を忌避して逃亡したドイツ國人が至急箱の中に入れてバーゼルの大西洋航路會社の代表者に届けた。そしてこの代表者がドイツへの撒布のための配慮をなすことになつてゐた。<sup>(1)</sup>一九一八年秋にはバーゼルの煙草、新聞販賣業者がスイスにあるアメリカ宣傳部の指導者に、アメリカの宣傳文書をドイツに持ちこむ申出をなした。彼は自分がドイツと緊密な連絡を保つてゐることからつねに聯合國の一定量の宣傳文書を持ちこむことの出来る立場にあることを申出た。<sup>(2)</sup>

(1) 司令部記録 外國部

(2) 參謀本部代表部記録 第11部

國境にあるドイツの郵便監視所は煽動文を阻止すべく努力したが、その監視をどまかすためにはありとあらゆる手段が用ひられた。屢々用ひられた手は表題を變へることであつた。グレンジやジークフリード・バルダーの本はこのんで賈せ旗をたて、横行した。又賈造は表題の上だけでなくられてゐなくて、たとへばドイツの新聞はその全紙が模造され、有毒な宣傳材料はなにくはぬ顔でその間に組入れられてゐた。<sup>(1)</sup> "Service de la propagande aérienne" は七月三十一日附「フランクフルト新聞」の外に、特にアルサスのために作られた二種の「ストラスブルグ・ポスト」の賈造版を出し

た。占領されたフランス領の住民たちの間には、ドイツ參謀本部から出版された "Gazette des Ardennes" の、毎日版、週版、輸入版の模造が繰り返し配布された。

屢々用ひられた策略はドイツ向けの宣傳ビラを、検閲所からたゞちに國境通過を許されるやうな中立國新聞や親獨的スイス新聞に挿入することであつた。第七次戦時公債に對するハンシーの漫畫をドイツに送るためには、一九一七年三月二十九日の「ベルン新聞」が手の届くかぎり全部買ひ集められ、國境を越えて送付された。一九一八年八月にはアルサス・ローレンの知事の賈造文が「ベルン・ターゲツワハト」の附録として知事個人宛に送られ、無事目的地に到達した。<sup>(2)</sup>

(1) Harni et Tonnelat, 前掲書一四四頁

(2) アルブレヒト侯爵記録 第三部第二課

ドイツ官廳の公式の封印とスタンプを用ひた二つの場合において密輸入者の行爲は特に大膽であつた。一九一七年二月二十七、二十八日にベルンに於て、ハインリヒ・ジエグルの宣傳文「バイエルンと平和」を入れた一束の封印された手紙が差出された。名宛人はバイエルの主だつた人達、地方議會議員、市長等々であつた。封筒はその裏にバイエル公使館の青色封印を捺してあつた。王立バイエル造幣局の鑑定によれば、その封印は賈造であつて、しかも同時にそれは一寸見たゞけではごまかされるくらの精巧なものであると認定された。その爲に公使館に對しては、當分青色の封印

を使用しないやうに命令された。<sup>(1)</sup>ハンシーはしかし彼の本の中で、その印は本物であつて公使館の  
雇員によつて盗用されたのであるとほめかしてゐる。この試みは一九一八年に再び繰返され、新  
じいもつと危険な本が同じやうな封印の助けを借りてドイツに送られた。同じやうな企てが一九一  
八年の秋にも成功した。九月十四日にバーゼルから K. u. K. Ost. Ung. Konsulat Basel」と印刷さ  
れた密封封筒で、澤山の郵便物が送られた。それはドイツの各異なる第十軍司令部の地域にわたつ  
た。そしてその大部分は労働組合、鐵道従業員組合、産業組合にむけられたものであつた。その内  
容は特に悪質の宣傳ビラの集成であつた。かくして郵便監視制度は全く完全なる安全を與へること  
はできなかった。

(1) マルリン陸軍省記録 軍務部

すべての郵便物と商用印刷物を監視することは實行不可能なことであつた。一九一六年三月の郵  
便監視局規則によれば中立國から來る郵便物はたゞ順序不同の検査を屢々行ふだけと定められて  
たが、これだけでは、一九一七年九月一日プロイセン陸軍省が特に強調したやうに、煽動文書の持ち  
込みを完全に阻止する可能性はなかつた。スイスからの敵國宣傳の範圍は大戦の終り頃にはむしろ  
増加した。一九一八年十一月初めには陸軍省は關係各官廳への廻狀の中でもう一度防止手段の不備  
を指摘せねばならなかつた。革命の勃發のため遂に發信せられなかつたこの書類の中で、スイスか

らの革命的文書の持ちこみについて次のごとく言つてゐる。「たゞちにあらゆる防止機關では徹底  
的な手段を講ずる必要がある。從來の手段はもはや不十分なものとなつてしまつた。……宣傳  
ビラの密輸入の完全なる防止は、スイスから送られるあらゆる送品(貨物、小包、手紙送品其他)  
に對して國境閉鎖が斷行されることによつてのみ可能なるごとく思はれる。現下の切迫せる政治狀  
勢を考慮に入れれば、かかる一時的な國境閉鎖も止むを得ないであらう」と。事實かゝる過激な手段  
はたゞ一時的に企てられるべきもので、それを永続的な徹底的手段とすることはできなかった。一  
方において革命的文書の沒收に關する郵便監視局の幾多の報告は、その防止活動が目ざましい效果  
をあげてゐること、そしてそれは絶対に缺くべからざるものであつたことを證明してゐた。

貨物送品の嚴重な監視は戦争の間にはじめて行はれた。一九一七年六月十五日に大本營の第三  
部第二課は陸軍省にあつて、「現在の制度では破壊的宣傳ビラの大量の持ちこみさへも防止するの  
に充分ではない」と書いてゐる。これにもとづいて陸軍省では貨物送品の嚴重な検査を提議した  
が、この場合も防止は完全な成功には至らなかつた。一九一八年十月十三日には參謀本部代表部  
のⅡ部では、敵國宣傳部が本の貨物の中に入れて煽動文書を持ちこむことを訴へて、最近リンダ  
ウでゲンフのイエフエバー商會の本箱が沒收されたがその中には罪のないわづかの品物と共に八千  
部の煽動文書がかくされてあつたことを指摘した。その名宛人はライプツヒのライプツヒ見本市場

の會頭であつた。(1) ハンシーが我々に語つてゐるやうに、實際の發送人はゲンプの出版元ではなくて、レーモント・シュールであつた。たゞこの送品が實際ライプチヒまで届いたとハンシーが報告してゐるのは間違つてゐる。(2)

(1) ヘルリン陸軍省記録 前掲部分—ミューンヘン陸軍省 新聞部

(2) Hraai at Tomslaf, 前掲書一四五頁—ハンシーの引用も亦間違つてゐる。一九一八年九月一六日の「ドイツ書

籍業者新聞」はハンシーによつて引用されたとき警告をのせてゐない。

一九一七年にはドイツの防止係は敵國の密輸入組織についてより詳しく内情に通することができた。六月初めドイツの國境警備隊はボードン湖をこえて大量のピラが密輸入されるといふ計畫を聞きこんだ。しかしリンダウの國境警備隊では、密輸入者共をドイツ領土内で捕えることを保證することができなかつた。その結果七月二日から三日にかけての夜スイス警官によつてライン河口に近いスイス領内で逮捕が行はれ、「バイエルンよ！同郷人よ！」といふ六萬枚の宣傳ピラをつめた二つの木の行李が沒收された。手先きとしてチューリッヒのアメリカ人家庭教師ジョン・フアロット・ケルンとリヨンの師範學校附屬小學校のフランス人教師エミール・グイクトールが捕へられた。兩人ともチューリッヒに住んでゐた。ケルンはその仕事の報酬として一千フラン、彼に儲はれたスイス人フイツシャーは六百フランを貰ふことになつてゐた。ケルンは法廷でドイツ國民の啓蒙のために働

いたことを誇り、又その宣傳ピラは聯合國の宣傳組織から出たものなることを自白した。又彼の言ふところに依れば、國境を越えての持ち込みは一九一六年末と一九一七年初めには各聯合國が協力してパリから送り出してゐた。印刷物の著者は多くドイツ人であつた。そしてその組織はドイツ國內に、即ち社會主義者の間に彼等と手をつないで仕事をやる澤山の仲間をもつてゐた。(1) グイクトールはフランスの宣傳中央部の仕事に従事してゐることを自白した。彼は審理の結果革命的宣傳に従事した廉をもつてスイスから追放された。

(1) 一九一七年七月二十六日のヘルリン駐劄ドイツ公使館付武官の報告「司令部記録 政治部」

革命文書の密輸入の偵察の目的でヘルリンからスイスに派遣された監視人は、チューリッヒに居る密輸入の本當の組織者は社會主義的著述家レオ・ウルフゾン別名マンデルバウムであることを確めた。彼はスイス市民で、十五年以來スイスに生活し、チューリッヒ駐劄イギリス領事館に務めてゐた。その任務の遂行のために彼は多數の手先きを使つてゐた。

同じ年の秋にはスイス警察はもつと大きな獲物をつかんだ。チューリッヒ駐劄フランス領事館と連絡をとつてゐたフランス宣傳局の手先き、アンダーソンといふアメリカ商人のもとで九月四日に「汝あはれなドイツ國民よ」といふ九萬部の宣傳ピラが押收された。彼はそれを五つの箱詰めにしてゲルンから受けとつたので、正にそれをドイツ國境を越えて持ち込まうとしてゐた所だつたのだ。

一九一七年十月八日に參謀本部代表部防止課は、ウルフゾーンの主要協力者がドイツの防止局の手先きの女に宣傳ビラをドイツに持ち込む仕事をたのんだといふことを檢事總長に報告した。郵便物はリングダッで投函されることになつてゐた。ドイツの手先きは依頼されたごとく事に當つた。この押收さのやうにして、宣傳文書の送附先の人々の廣汎な住所録がドイツ防止課の手に入つた。この押收された郵便物の二三は海軍大尉アー・オー・パーシエにむけられてゐた。彼が逮捕された時彼は、スイスから受けとつた「國民よ、汝自身のために平和を選べ」といふ革命的檄文を十三部だけ「日中」といふ表題の中にかくして知人に送つたことを自白した。通常の裁判が行はれてゐたならばパーシエは重く處罰されてをたたらうが、幸ひにも、彼は精神異状者なりとして赦された。パーシエは熱狂のあまり正常な價值判斷をすることができなくなつてしまつた、あはれむべき理想主義狂言者であつた。ハンシーは、フランス宣傳局によつて印刷された過激社會主義的ビラ「飢」をドイツに配布したドイツ人の仲間の事もかいてゐる。おそらくは彼等も亦社會主義の利益のために行動してゐると信じてをたつたのであらうが、全くフランスの黒幕の人間にとつては、ドイツ國內に支持をもとめるためには、社會主義の假面をつけることなどは易々たるものであつた。外國の手先きも亦ドイツに入ることはそう難しくはなかつた。ドイツと中立國との相當頻繁な交通は阻止されて居なかつた。一九一七年十一月にベルヌのドイツ公使館付武官は一人の信頼すべき

ものとして試験すみの仲間から聯合國側から行はれる直接國で行ふ革命的宣傳の組織について詳細な報告をうけとつた。種々雑多の階級に屬する人々が正規の、或ひは偽造の旅券をもつてドイツに派遣せられ、そこで彼等の職業に従事するといふ口實の下にその委任者の意思どほり働いた。敵國宣傳ビラの秘密配布の跡は記録の中に澤山見られる。檄文は封筒に入れられて郵便函に投せられたり、わざと汽車やレストランの中に棄てられ、手先きたちは特別な手帖によつてその巧妙な遣り方の詳しい指示をうけた。特に巧妙なトリックとして食糧品を宣傳ビラで包むことが勧められた。そうすれば発見した人はビラの内容に非常に驚いて、それを居合せた人、或ひは旅行の道づれになつた人等へ、渡し廻つたものだつた。手先はその際責任を負はされる危険は殆んどなかつた。

(1) ヘルリン陸軍省記録 軍隊部

(2) O. Wandrer, Paschschuch, Werther (Tentochurger Wald) 一九二二年四二頁

(3) Harst et Tonnelat, 前掲書七六頁

(4) 一九一七年一月三十日のベルン公使館附武官の報告 部分的には議會調査委員會の著書「一九一八年における

ドイツ崩壊の諸原因」所載、ヘルリン一九二八年 第十卷 一、二六七頁以下

(5) かゝる「宣傳ビラ配布の手引き」の一つが一九一八年一月にドイツ防止課の手に入つた。司令部記録 第三部第

間諜と宣傳は普通同じ機關によつて行はれた。チユーリヒにおけるアメリカ人ケルンの裁判にあつて、大部分の間諜は同時に宣傳の仕事をしてゐたことが明らかにされた。一九一七年夏、ベルンにあつて一九一六年から一九一七年にかけてドイツ及びスイスに對する間諜團を指導してゐたフランスの龍騎兵士官にして銀行家ムーシオ伯爵に對する裁判がベルンにて行はれた。彼は一九一八年五月缺席裁判で十年の懲役と終身國外追放を言ひ渡された。同じ裁判で彼の協力者である前ベルン議會の社會民主黨議員にして辯護士アルフレッド・ブレストライン博士はフランスの爲にする情報漏洩の廉により三ヶ月の禁錮を言ひ渡された。ブレストラインはフランスの宣傳の仲介人であり、又ベルンの「自由新聞」の法律顧問にして、その同人でもあつた。豫審の際、間諜事務所のあつたベルンの別荘で獨逸語の革命的文書を入れた大きな箱が押收された。その中にすでに述べた「汝あはれなドイツ人」といふビラも混つてゐた。他の一つは「國民裁判」と言ひ、ドイツ皇帝と皇太子の處刑に賛成してゐた。この裁判に連坐して、後にスイスの裁判所によつて間諜の廉をもつて七年の懲役を言ひ渡されたフランス銀行家クレリーシは、この機文はドイツに配布せられることになつてゐた旨を自白した。彼の言ふところによれば、それはフランスで印刷されたものであるが、その著者はおほむねドイツ人であり、ドイツ國內への配布も大部分ドイツ人によつて行はれてゐる。

スイスに於てはフランスの宣傳が完全に主役を演じてゐた。イギリスの立場はたゞその聯合國を支持することに限られ、獨立には殆んど仕事をしなかつた。アメリカ人は一九一八年にはじめて前面にあらはれた。

一九一七年九月にはベルンのドイツ公使館、更に司令部も亦スイスを通してアメリカがドイツに對する大規模の宣傳攻撃を行ふといふ報道によつて不安に墜れられた。調査によれば、九月はじめベルンにあるアメリカ公使館には前マゴデブルグ駐劄アメリカ領事アルフレッド・W・ドンガンの指導の下に特別の情報事務所が設けられ、アメリカ公使館は反獨新聞「自由新聞」、「ベルン日々」、「ロザンヌ新聞」と特に親密な關係を結んだといふことであつた。スイスにあるドイツ官廳はしばらくの間は、強力なアメリカの宣傳組織がすでに出来上つてゐるのだといふ印象をうけてゐた。この見解はしかし遂に確證を得ないで終つた。

( 1 ) 一九一七年七月二十六日のベルン公使館附武官報告

( 2 ) 司令部記録 外國部

ワシントンにあるアメリカの宣傳委員會はスイスにおけるその攻撃を、ニューヨーク婦權聯盟の指導者ノーマン・ド・R・ホワイトハウス夫人の派遣と共に始めて開始した。ホワイトハウス夫人は一九一五、一七七年に婦人選舉權獲得のための闘争によつてニューヨーク州にその存在を知られて

た。彼女は組織的才能と精力とに特にめぐまれてをつた。一九一八年一月彼女はスイスに到着し、ベルンに到着した。宣傳を公然と合法的手段で行はうとする彼女の意圖は、彼女の介入をあまり望まなかつたアメリカ公使館との衝突をもたらした。この葛藤は一九一八年の夏まで続いたが、ウィルソンの個人的裁断によつてはじめてホワイトハウス夫人に有利に解決されたのであつた。そのやうな譯で、彼女は七月になつてはじめて完全な規模でその活動を行ふことができた。彼女の主要なる仕事は戦争の目的とアメリカの戦争能力の偉大さに關する報道を廣めることであつた。彼女は大成功をかちえた。八月二十六日にドイツ公使が特に重要な報章を廣めることであつた。報告の中に次の如く言はれてゐる。「スイスの輿論を決定してゐる根本的な要因は現在ではアメリカの宣傳である。それは非常に多様であつて、又それが如何なる形で行はれやうとも真に恐るべきものである。」と。アメリカの著しい優勢に對する信頼と、それに伴ふ聯合國が最後の勝利についての信念はスイスからドイツへも移つてゐた。

(17) Vira B. Whitehouse, A Year as a Government Agent, New York 一九二〇年六三頁及一〇四頁以下

従來アメリカ公使館はスイスに在るドイツの共和主義的亡命者を秘かに支持してゐたのであつたが今やその轉換が行はれた。ホワイトハウス夫人はアメリカの勢力をはゞかるところなく、利用して公然と彼等を庇護した。亡命者たちはもはや彼等が中立に反する行為の故をもつてスイス政府か

ら辯明をもとめられることを少しも恐れる必要はなくなつた。

#### A、ドイツ政府に對する亡命者の鬭争

ドイツ國の國民が大戦中スイスからドイツに對して行つた鬭争はドイツの不和と分裂の悲しい實例であつて嘆はしい事であつた。以前からドイツ人は屢々敵國の側に立つて自分の故國に對して戦つた。思考において獨立と徹底をこのむドイツ人の性癖は屢々、つまらぬ理論上の、又は個人的の相違をも原理や良心の問題といふ大げさな光に照してみないと承知できないやうになつてゐる。「ドイツ人のやうに小理窟を捏ねることに慣れてゐる者は、屢々その良心を詭辯によつて眠りこませてゐるものだ。」とクラウゼヴィツは言つた。<sup>(1)</sup>血のつながりと生活の共有といふ紐帯は充分強くは感せられてゐない。すでにヘーゲルは、ドイツ人は自ら作つた觀念を彼を取巻く現實よりも高いところに置くといふ觀察をしてゐる。獨逸人は一度或る見解をうちたてると、それを頑強に他と區別して、殆んど「氣狂ひ沙汰」さへも演ずるのである。

(1) カール・フォン・クラウゼヴィツ「政治的文書と手紙」ハンス・ロートフォルス出版 ミュンヘン一九二二年 四八頁

(2) G. W. F. ヘーゲル、「ドイツの状態」フィリップ・レクナム版、ライプチヒ、出版年不明一五頁一五九頁以下



亡命者達が故國に背く原因には、自己の確信の固執もさる事ながら、一方外國の意見が何故か正しい様に考へるといふ事も大分働いてゐる。彼等の各種の人々について見るに、外國に長く在留してゐた人程、故國ドイツに對する敵對感情が増加してゐる事は、明らかに指示することができる。ドイツの要求に對する冷淡と無理解の増加は世界の輿論にまで煽立てられた。敵國の宣傳に惑はされるにつれて、彼等はドイツの要求に對する冷淡と無理解を増加して來た。

外國人はドイツの亡命者について非常に鋭い批判を下した。新聞社特派員として西部戦線に止つてゐたイギリスの著作家E・ワトソンは「自由新聞」の協力者に關して次のごとく書いてゐる。「その公然たる目的が敵國と中立國の目の前で自分の祖國をこきおろすことにあることと新聞に、しかも金をもらつて寄稿するやうなイギリス人が一人でも居たら私はそれをこの上ない恥と思ふだらう。……かゝる活動に携つてゐるドイツ人はわが國の法律に照せば大逆犯人であると言ふに私は躊躇しない<sup>(1)</sup>。」と同様な意味でH・G・ウェルズは言つた「私は私の祖國を從來屢々非常に苛酷に批判した。しかしそれが過去に於て正しかつたにしろ、間違つてゐたにしろ、私はわが祖國が勝ち誇つた他國民の蹂躪にまかせられる光景を忍ぶことはできない。こゝで問題となるいかなるドイツ人もこれより外に考へることは出來ない<sup>(2)</sup>。」

ホワイトハウス夫人はその回想において、アメリカの外交官たちは亡命者たちについて非常に惡

口を言つてゐたことを語つてゐる。人々は彼等の行爲を徹兵忌避と當てが外れた名譽慾に歸してゐた。彼等について聞くことができた最も好意的な判断でさへも、彼等は普通ではない、均衡を失つてゐるのだといふ風であつた。ホワイトハウス夫人自身はその被保護者に對しては個人的により親しく知つてゐることのために好意的な判断を下してゐた。彼女は彼等の中には理想主義的な動機と物質的動機が混合してゐることを主張した。彼等が自分たちの確信に一切を捧げたといふ點に彼女は英雄的なものを見たが、彼女は又、虛榮心と政治的名譽慾が重要な役割を果してゐたといふことも見逃してはゐなかつた<sup>(3)</sup>。彼女の判断に従へばこれ以上種々雑多の人々の寄り集つた團體を考へることはできなかつた。ジャーナリストと並んで詩人が、作家と並んで商人や前外交官が居つた。彼等の個人的動機を一々考へて見てやるならばさう一律に貶する事も出來ないが、たゞ彼等は一般にフランスをデモクラシーと眞の自由の樂土として狂信してゐた事はいへると思ふ。たゞ彼等の間には政治的指導者がゐなかつたといふことはホワイトハウス夫人も氣付いてをかつた。

(1) 南ドイツ雜誌 コスマン出版 ミュンヘン 第二卷九號一九二四年六月一九七頁

(2) H.G. Wells, In the Fourth Year, London 一九一八年六〇頁

(3) Via B. Whitehouse, 前掲書 二〇一頁以下

ドイツ政府に對する亡命者の叛亂は重大な意味をもつた。彼等はフランス宣傳部に最も効果ある

論證や最良の宣傳ビラを供給した。ドイツ國民の大部分はカイゼルと帝國政府の壓制の下にあつて、民主々義的勢力による解放を望んでゐるのだといふ聯合國の主張のためには彼等の態度はこのましい證明となつたが、彼等の活動はドイツの利益のためには現實的な危険を意味してをつた。この危険は權威あるドイツ官廳によつても、殊にベルン駐劄ドイツ公使館によつて認められ、眞劍に問題とされた。亡命者は敵國宣傳部との緊密な連絡の下に全力をつくして彼等の祖國の敗戦のため働いた。法律の用語に従へば彼等はそれによつて叛逆罪を犯したのであつた。彼等のうちの一連の入々に對して大戦中叛逆罪の審理が檢察總長によつて準備せられた。「自由新聞」の中心運動者たちは大戦終了後も彼等の住所を引續き外國におくことによつてその故國からの背離を首尾一貫させたのであつた。

ドイツ政府に對するあらゆる攻撃のうちでリチャード・グレルング博士の著書が最も注意をうけ、最も廣汎に配布された。辯護士、ドイツ著述家同盟の法律顧問といふ職務によつてグレルングはすでに八十年代にベルリンの公的社會にみとめられてゐた。進歩黨は屢々彼を帝國議會候補者として推したが、彼は遂に當選しなかつた。一八九三年彼はアルフレット・H・フリードと共にドイツ平和協會を創立し、數年間その副會長をつとめてゐた。或る離婚訴訟のため彼はベルリンを去り、旅行に暮したが、一九〇七年以來フローレンスに小さな土地をもとめてそこで生活して居た。イタリ

との戦争が勃發すると彼はフローレンスからスイスにうつり、最初ベルリンに、後にはチューリヒに滞在した。

( 丁 ) 人類、フリッツ・レイトシエル出版、一九二八年六月十五日附第十五卷二四號——「梁中政治辭典」ライプツヒェ一九二三年

一九一四年から十五年にかけて彼はその主著「Jacques」を書いた。それは一九一五年四月四日ローザンヌの反獨的書肆バヨートの出版で匿名で世に出た。この本の内容はドイツ政府及びドイツ支配階級に對する痛烈な彈劾であつた。かくてドイツとオーストリアは全くの征服慾から平和で、無邪氣な世界をまで長年準備してゐた武器で襲つた責任を完全におはされた。獨裁制度に對する革命が説かれ、共和國こそ同じやうな罪の反覆に對する必要な保障であることが述べられた。この確信に満ちた平和主義者にして道德説教者の狂信的態度で書かれた著作の影響は甚大なものであつた。この本は、戦争を起しめた事の成行について何ら正確な知識をもつてゐないドイツ人にも深い印象を與へるごときのものであり、中立國に於けるその成功は無類のものであつた。敵國の宣傳にとつてはそれは眞に光明であつた。フランス人はそれ以來戦争の責任問題を彼等の宣傳活動の基礎にすることに決した。「Jacques」は十ヶ國語に翻譯されたが、その中には支那語、スペイン語もあつた。和蘭においてはその最初の四版は四週間で賣切れた。又この本はノールウェーのどの農家に

行つても見られるとも言はれた。一九一七年春には敵國の宣傳部では次のごとく言つて誇ることができた。「もし今日——ドイツを除いて——ほとんど全世界が戦争の犯人を知つてをり、中立國のもつともつまらぬ市民でさへも誰がこの戦争に責任あるかを知つてゐるとしたら、この結果は第一に「Jaoune」に負ふものである。<sup>(1)</sup>

ドイツにはこの本は「一九一四年のドイツとスイスの貿易關係」といふおだやかな表題の下にもちこまれた。ドイツ平和協會の書記フリッツ・レートシエルは、彼にスイスから「ビスマルク回想録」として送られたこの本を更に平和主義的、社會主義的指導者たちに分け與へた。<sup>(2)</sup>「新祖國同盟」の中でもこの本は手から手に渡された。リーブクネヒトもそれをこゝから受け取つたのであつた。<sup>(3)</sup>のみならず、之は「Temps」が主張してゐるとの事だが、「Jaoune」は貴族階級に於ても熱心に讀まれたのであつた。<sup>(4)</sup>しかしながら密輸入によつてドイツに持ちこむことができた冊数は少いので、決してフランスの宣傳部を満足させるものではなかつた。宣傳部ではバリーの國立印刷所で飛行機からの投下のためのポケット聖書にならつた薄紙の袖珍版を作成せしめた。かくして秋には、特に一九一五年の十一月には二萬部以上の本が「眞理」といふ表題の下に黒白赤の包み紙に包まれて飛行士によつてドイツ戦線に投下された。<sup>(5)</sup>

(1) 自由なドイツの言葉、七號

(2) 人類、一九二九年一月二十七日附第十六卷四號

(3) オットー・レーマン・ルースブルト、一九一四年—一九二七年に至る世界平和のための「人間の権利のためのドイツ同盟」以前の「新祖國同盟」の闘争、ベルリン一九二七年四六頁

(4) 一九一六年一月二十五日附 Le Temps — O. レーマンブルス、前掲書

(5) Henri et Tomelaty, 前掲書三三頁以下

グレンツは彼の成功をもつて決して満足してはゐなかつた。彼は自分が非常に才能のある著述家であり、論争好きの論客であることを示そうとした。當然ドイツの陣營から發せられた反駁に對して、彼は新たな廣汎な著述によつて答へたのであつた。彼は自分が「Jaoune」の著者であることを否定しやうと努めたのにも拘はず自分にむけられる激しい攻撃によつて益々不愉快にさせられた。そしてやがて一方的な中歐諸國にのみ責任があるといふ自己テーゼの辯護をもつてその生涯の課題としたのであつた。自ら課したこの問題はロシヤの動員の際のいきさつとその戦前の政策が知られると共に彼の課題たる辯護も、益々困難にして、酬い少なきものとなつてしまつた。そして彼の論證もその程度に應じて益々小理窟におちいり、黨派的となり、暴力的となつてきた。彼はその事に凝り固つてしまひ、彼の己愆はもはや正道にもどすことはできなくなつてしまつた。この運命の中にひそんでゐる悲劇をG. デュマルテアルは次の如く道破してゐる。「すべての人は自分が眞理と思ふことはよしそれが祖國に反對することであつてもそれを話す自由をもつてゐるはずである。

一個の人間におこる最大の不幸は、彼の祖國に對して誤つた非難を浴せることである。この見地からすれば世界中で最も不幸な人はグレリング氏である。<sup>(1)</sup>

彼の第二の主著「犯罪」もグレリングは大戦中に完結した。再たびローザンヌのバヨート書店から、その第一巻は一九一七年に、つゞく二巻は一九一八年の初めに出版された。この本の内容とするところは相互に聯關せる叙述ではなくて、ドイツの戦争に對する責任云々をのべた一列の斷章であつた。フランスとイギリスは自由と正義の代表者として賞めそやされた。この三巻は全部合して一八七頁を下らなかつたが、その冗長さと反覆は讀む人をたゞ疲勞せしむるだけであつた。第三巻の最後では彼は、主謀者としてカイゼルの處刑を要求するといふところまで思ひ上つてゐた。ホーヘンツォーレルン家は「その身體と生命で、財産と血で、子供とその子孫で」おのれの罪を贖はねばならぬと。<sup>(2)</sup> 第三巻はそれ故にスイスの檢閲によつて禁止せられた。「犯罪」にも三巻から成る飛行機から撒布用の袖珍版があらはれた。著者の了解の下にフランス宣傳部ではバヨート書店にそれを作成せしめた。一九一七年九月二十二日附「自由新聞」の特別附録として出たグレリングの論文「ゴムリノフ裁判の曝露」も同様袖珍版として一九一七年秋に撒布された。

(1) G. Demartial, Comment on mobilis les consciences. Paris 一九二二年三一九頁以下。

(2) Faure の著者の「犯罪」第三卷、ローザンヌ一九一八年二九二頁以下。

一九一八年五月にはグレリングに對して叛逆罪致唆の罪名の下に檢事總長によつて審理が開始された。七月には大部分ベルリンの家にあつた彼の重要な財産は沒收せられた。この處置はグレリングには手痛たかつた。九月には彼は、もしドイツ政府が彼の財産の一部分を彼に返却するならばその攻撃を中止する用意あることを聲明した。<sup>(1)</sup> 革命の勃發後グレリングは「Jaques」の著者なることを認め、叛逆罪の訴訟の中止を要求し、民主政府に對して平和と再建についての自分の協力を申し出た。しかし勿論その提案はなら用ひるところとはならなかつた。かくして彼は引續きドイツに背をむけるに至り、ドイツの戦争責任に關する彼の續稿はバリーでフランス語であらはれた。なせならドイツのどの書肆もその出版を引きうけようとしなかつたから。

(1) 參謀本部代表部記録、第三部第二課

ヘルマン・レーゼマイエル博士の場合もつと悲惨なものであつた。ブツケブルグの出身でジャーナリストであつたレーゼマイエルははじめ社會主義的新聞に働いてゐた。八年間彼は議會漫畫の編輯人としてバーク事務所で働いた。それからウルシユタイン書店に勤め「ベルリナー・モルゲンポスト」の政治部長として働いた。彼の仲間が彼を誠實な理想主義者ではあるが同時に極度に昂奮し易い神經衰弱患者だと言ふてゐる。<sup>(1)</sup> 戦争の勃發後レーゼマイエルの心の中には、ドイツは攻撃戰、征服戰を遂行してゐるのだといふ確信が生じた。彼は彼によつて熱情的に崇められたフランスの文化

が破壊されることを恐れた。それ故彼はすでに一九一四年八月十四日彼の態度決定によつてその職務の遂行が不可能となつたその椅子を去る決心をしてを<sup>(2)</sup>つた。

一九一六年の初めこの四十五歳を超えた男はその妻子をつれてスイスにおもむいた。彼はそこで彼の生計を支へてゆく事が容易であるだらうと望んでゐた。一九一六年五月六日の「*Humanité*」にアルサスの社会主義者グルンバツハはレーゼマイエルがドイツを去つた理由についての彼の聲明も載せた。それは次の如き言葉で結ばれてゐた「私は人道主義をドイツ國の上におく。そして一人の世界市民であらんために私はドイツ人たることを諦めたのだつた」。彼に特有の熱情をもつて聽て彼はドイツ政府に對する闘争に突入した。すでに一九一六年春には、彼は「ドイツ國民よ、目覚めよ」といふ表題の「ドイツの市民、労働者にあてた公開狀」と「大戦前史」の二つの本を書いてゐた。兩書ともドイツ政府に對して計畫的攻撃の罪を責め、支配階級、田舎貴族と大工業を打倒することを國民に呼びかけたものであつた。

レーゼマイエルの才能とその感激的雄辯を高く評價したフランスの宣傳指導部ではその本を高い原稿料で買取つた。それはバリーで小型本の形で各々十萬部宛印刷され、一九一六年の夏氣球と飛行士によつてドイツ戦線の後方に撒布された。<sup>(1)</sup>「ドイツ國民よ、目覚めよ」は多くの國語に翻譯された。レーゼマイエルは間もなくフランス宣傳部と密接な關係を結ぶやうになつた。彼のドイツの

旅券が期限がきれてしまつたのちは、彼はベルンのフランス領事館から旅券として所謂「アルサス旅券」をうけとつた。彼は又自らスイスからドイツへの宣傳文書の密輸入にも携つた。屢々彼はフランスの新聞に寄稿したが、何よりもまづ彼は「自由新聞」の最も熱心な共働者となつた。

一九一八年六月のドイツの攻撃を見るや、レーゼマイエルはすっかり狂熱に取つかれ、そして「フランス國民に訴ふる追放されたドイツ人の公開狀」を書いた。彼はそれを出来るだけ廣汎に配付することをたのんで一人のジャーナリストに託した。この手紙は「*Union des grandes associations françaises contre la propagande ennemie*」によつて「或るドイツ魂の叫び」なる表題の下に出版された。八月二十四日に「*Revue hebdomadaire*」はそれを轉載し、加ふるにドイツ語の原文の複寫をも附録にしたが、讀者たる多數のフランス人に氣を悪くさせるやうなその粗暴さを、該紙はあらかじめ辯明しておいたものであつたがそれも理由なからずである。何故ならば原文には次のやうな言葉をそのまゝ用ひてゐる「フランスの國民よ！ 君はまだ憎み足りない。君の憎しみは未だ真剣ではないし、充分に燃え上つてはゐない。……君はドイツ國民について未だに幻想を抱いてゐるのではないのか！ 幻想をふるひ落せ、裸の眞實を直視せよ。君は惡魔に身を賣り、罪惡に魂を賣渡した國民を相手にしてゐるのだぞ。世界がかつて見たうちで最も狂信的な、最も不名譽な、最も殘忍な、最も醜き惡黨のお伴をして歩き廻つてゐる國民を。……今日のドイツ國民を人間と見るこ

とを止めよ……この人間の姿をした動物、このドイツの悪魔の軛の下に身を屈するよりは、死んだ方がまだしもましではないか。<sup>(1)</sup> 就中カイゼルと皇太子とヒンデンブルグに對しては、狂暴な惡罵を言ひちらした。そして著者の病的心理状態を充分表はしてゐるこの手紙を理由として、スイス聯邦會議は十一月八日全員一致でレーゼマイエルを中立侵害罪として追放することに決した。この追放はホワイトハウス夫人が政治部へ執拗に抗議し、又、アメリカからの食糧供給を差押へるなどと脅迫したので、阻止された。<sup>(2)</sup> この手紙は屢々それを轉載したフランスの新聞で評判になつたばかりでなく、中立國の新聞においても大評判をとつた。この止まるころなき攻撃は彼の政友の一部分にも不安の念を抱かせたが、レーゼマイエルはそれに耳も藉さなかつた。彼は、自分はずで自分分を全くフランス人と思つてゐるのだから、ドイツの民主主義などは自分にとつてはどうでもよいことだと聲明した。<sup>(3)</sup> 一九一六年十月に檢事總長は、當時すでにありそうもないと思はれてゐたが萬一彼が歸國したやうな場合のために、レーゼマイエルに對する叛逆罪審理のための材料を集めた。

(1) La Revue hebdomadaire, 一九一八年八月二十四日の第二七卷三四號、パリ一九一八年

(2) Nina B. Whitehouse, 前掲書一九九頁—Georg Huber, 一九二四—一九一八年の世界大戦におけるドイツに對するフランスの宣傳、ミュンヘン一九二八年六七頁以下

(3) 參議本部記録、第三部第二課

すでにレーゼマイエル以前にも他のドイツ人がスイスに在つてドイツ政府に對する鬭争を行つて

ゐた。即ち著述家にしてジャーナリストであるヘルマン・フェルナウである。フェルナウの本名はラットといひ、彼はグレルングと同じくユダヤ人であつてブレスラウで生れた。二十一歳までドイツで暮したが、大戰勃發前の九年間はパリで暮した。フランスの文明に對する、そして特にフランスの政治的狀態に對する彼の驚嘆振り、大戰前一九一四年ミュンヘンで出版せられたフランスの民主主義に關する本の中によくあらはれてゐる。彼は只一人のドイツ人として戦争の數ヶ月の間はパリにあつて何の妨げも受けず、その活動をつげけることを許されてつた。<sup>(1)</sup> 當時彼はパリで發行されてゐる「ドイツ俘虜新聞」に寄稿した詩によつて人々に不快な印象を與へた。即ち一九一五年三月二十日附同紙第八號には彼の筆になるドイツ國歌の攻撃とその替歌が載つてゐた。それは次のごときものであつた。

「ドイツユラント・ドイツユラントすべての上に、

これがわしらの國歌であつた。

酒杯のひびきあるところ、

歌は誇らかにこだました。

呪へ、この歌、それはたゞ

作つた詩人の耻である。

この歌こそはドイツの國を  
すべての人の怨みとしたのだ。<sup>(2)</sup>

結局フェルナウはフランスから追放され、一九一五年五月スイスのバーゼルに行つた。一九一六年一月に彼はグレイシグの "Tageblatt" に對する攻撃を防禦する目的で「正に私がドイツ人であるがゆえに」と題する一文を公にした。フランス宣传部にとつてはそれは最も好都合なものであつた。宣传部ではこの本が各國語に翻譯され、ドイツ語袖珍版がドイツ戦線に撒布されるやうにとりかからつた。ロシアへの飛行の途中ベルリンの上空で宣傳文書を投下したフランス飛行士マーシャルのもとで、この本はレーゼマイエルの「公開状」と一緒に発見された。一九一七年の初めフェルナウは世界大戰に關する彼の見解を「いざ……デモクラシーへ」といふ本の中で詳細に論述した。彼の見解といふのはごく單純なものであつた。文明國民は本來例外なく平和を愛するものであり、たゞ君主だけが生れながらの攪亂者である。「王家のまじらない戦争といふものはありえない。王家か人類か。これがこの世界大戰のもつ意味である。」<sup>(3)</sup> 確信的な平和主義者としてフェルナウはこの兩者の内一つを選ぶにあつてその態度を決することは困難なことではなかつた。彼の信ずるところによればその最重要の戦争目的はドイツの民主主義化であつたところの聯合國の勝利をねがはねばならなかつた。フェルナウは、トーマス・マンがその「非政治人の觀察」において「文明文士」と

してあますところなく適確に特徴づけたタイアの古典的代表者であると言ふことができる。<sup>(4)</sup> フェルナウのこの新著も亦多くの國語に翻譯された。ドイツの官廳に達した報告に従ふと、その第一版はフランスに買上げられて一つ一つドイツにもちこまれた。第二版はドイツ系アメリカ人によつて處分された。ドイツの色々な人々から、たとへば A. D. パーシエ大尉から、推薦状がとゞいた。<sup>(5)</sup>

(1) 検閲局記録

(2) ドイツ聯盟労働委員會機關紙「自由への道」一九二六年二二號

(3) ヘルマン・フェルナウ「いざ……デモクラシーへ」ベルン・ジャンプブリック一九一七年三四、二二七、二三六、二四一頁

(4) トーマス・マン、非政治人の觀察、ベルリン一九一八年

(5) 司令部記録、外國部

フェルナウの著書の調子はレーゼマイエルやグレイシグのそれよりはすつと穩かで控へ目である。彼は彼がドイツの敵國と協力してゐるといふ想定に對しては公然と辯護した。しかしドイツ側からは彼は、彼の名前を署名した論文がそこに載つてゐたことをもつて、賈せ「フランクフルト新聞」の提案者にして編輯人であると目されてゐた。しかし問もなく、この論文は「自由新聞」から彼の許諾をえずに轉載されたもので、彼は後からそれに對して抗議を提出したといふ事情が明らかになつた。<sup>(1)</sup> フェルナウは時々アルフレット・H・フリードの發行にかゝる「平和監視所」にも寄稿した。フリードと同じく彼は後にベルサイユ和平條約をも批判し、それを攻撃した。<sup>(2)</sup> 「自由新聞」の創刊後

フェルナツは最初熱心なる協力者であつた。しかし彼は一九一七年にはもうそこから身を引いてゐた。その理由としては、同紙の一面的な親聯合國的態度が彼の氣に入らなかつたのだと推測されてゐる。一九一八年に彼はその合理主義的歴史論、國王と貴族に對する攻撃を更に、「王權は戦争である」といふ著書の中にまとめた。

(1) 自由新聞、ベルリン、一九一七年八月十一日附第一卷三五號

(2) アーノルド・ブルンス、アメリカの世界大戦参加からドイツ革命までの(一九一七年から一九一八年迄)「自由新聞」について見た、聯合國の宣傳の原則と論議、一九二三年ミュンスタールの學位論文、非出版物、七頁

アルサス・ローレン問題はサロモン・グルンバツハの専門の活動領域であつた。グルンバツハ自身はアルサス人で、アルサス社会民主党員であつた。しばらくの間彼はフランクフルト・アム・マインで「フランクフルト公論」を編輯してをつた。大戦直前の年には彼は主にパリにゐて、ジョーレスのやつてゐた「Humanité」の協力者であつた。かくしてグルンバツハはドイツ及びフランスの社会主義的政黨と親密な關係に立つてゐた。國際主義者の精神をもつて彼はフランスとドイツの意思疎通のために働いてゐた。しかしドイツが戦争に責任あるのだといふ信念が彼の態度を變らせた。一九一四年七月末彼は戦争に對する抗議を呼びかける講演旅行のためドイツに行つてゐたが、戦争が勃發するや彼はその仕事をすて、スイスに遁れ、一時ベルリンに、のちチューリヒに住んで、「Hofmann」のスイス通信員として活動してゐた。彼は、アルサス・ローレンは戦争によつてその國家所

屬の問題が新たに提出されたならば自身で自分の運命を決定せねばならぬといふ見解を代表してゐた。彼はしかしその決定がフランスの側に落ちるだらうといふことを疑はなかつた。それ故に彼はフランスをおのれの將來の故郷と見、その雄辯な、ジャーナリスチックな才能と、その知識と關係をフランスのための仕事に捧げた。

彼は自分のアルサス・ローレン問題に關する見解を一九一五年「夏」アルサス・ローレンの運命」と題する小論文の中に披瀝した。(2) 一九一七年初め彼は「併合主義者ドイツ」の題名で全ドイツの聲の廣汎な集成をローザンヌのバヨート書店から出版した。フランス宣傳部はそれを廣く配布することに骨折り、殊に變名の表題でそれをドイツに密輸入することに努めた。一九一八年にはグルンバツハはそのドイツ政府にむけられた闘争を繼續しながら、「共和主義者文庫」の題で政治的論文の叢書をバヨート書店から出版することを計畫した。その第一冊は一月に「不信用」といふ表題であらされた。この中にまとめられた論文や記録は、ドイツ政府の信頼するに足らぬこと、彼と共に名譽ある平和に達することの不可能を説明したものであつた。執筆者の中にはグルンバツハ自身の外に、グレリング、一九一八年の夏飛行機でドイツからデンマークに逃亡した平和主義者ニコライ教授、H・シュリーベン博士(八十六頁参照)などが居つた。この本はフランス人によつて空中からも撤布された。



(1) 戦時新聞局外閣部編 一九一八年外國新聞摘要 一九一八年ベルリン七一頁

(2) Ziegler 一九一五年

一九一八年春には、グルンバツハは獨露媾和條約にむけた第二の論文集「プレスト・リトウスキ」を編纂した。秋には更にもう一つの論文集「責任問題」が現はれた。これはリシノヅスキー公の回想録とツイルヘルム・ムーロン博士(一二六頁参照)の三つの論文及び、勅員命令の下つた前日の「フォルツェルツ」紙の記事と、一九一四年八月二日の斥候マイヤーが書いたドイツ軍の國境侵害の記述等をまとめたものだつた。戦争が終つたのもアルサスローレンの住民にその所屬決定を投票させるといふ彼が大戦中主張し、又、そしてフランスの社會主義者中にも多數の賛成者があつた意見さへも、グルンバツハは後に放棄してしまつた。

年の經つと共に、ドイツの政策に不満であつた多數の人々がスイスに集つた。一九一六年にはすでにこのドイツ亡命者の一部は元ベルグラーフ駐刺帝國領事ハンス・シュリーベ博士の指導の下に「在スイス獨逸共和主義者協會」に結集した。やがてドイツ政府に對する闘争に役立ち、ドイツ國內に革命の氣運を作るべき自分たちの新聞の創刊が問題となつた。在スイスフランス宣傳部長はこの創刊に活潑に關與した。この企の準備は、スイスに居つたドイツの共和主義者J・ベルンズドルフ博士の著書「ドイツの鍛冶場としてのスイス」によつて明らかに知りうる。彼があけすけに語つてゐるところによれば、ベルンズドルフ博士自身はフランスからの補助金によつて共和主義的雜誌

を發行する計畫をもつてゐた。しかし、一九一六年の秋彼がフランス宣傳部から檢能を授けられた代理人としてベルンの辯護士プレストライン博士のもとに行つた時、プレストラインから、彼は共和主義的新聞の計畫については或ドイツ人がすでにフランス宣傳部長と連絡をつけて、準備をすゝめてゐることを聞かされた。彼自身は何らそのことにあづからなかつた。彼は深くそれを恨んで、「自由新聞、民主々義的政策の獨立機關」の名の下にベルンにあらはれた、この新聞の經歷を曝露したのであつた。

(1) ドイツの鍛冶場としてのスイス 宣傳新聞、J・ベルンズドルフ博士發行 出版年不明

この新しい新聞の創刊にフランスが關與したことは明白であつた。「自由新聞」の政治的態度を觀察した人は誰でもそれについて疑ひを差挟むこともできなかつた。そのつねに一定せるテーゼ、それはつねに色々の形態に變化してゐたが、即ち戦争についてドイツが責任ありと強調する事、共和主義的、聯邦主義的見地から、ドイツ憲法の修正要求した事はフランスの政策の線に完全に一致せるものであつた。かく敵國が關與してゐたのだから、その創刊にあつたのは、全く秘密に、こそくと仕事がすゝめられたわけでもあつた。

新聞は外見はスイス人の經營となつてゐた。編輯責任者として次々と色々のスイス人が並べられたが、實際はシュリッペン博士が最初からその指導にあたつてゐた。しかし一九一九年九月十七日

に至つてはじめて「自由新聞」は、シュリーマン博士が「彼の名で政治的指導に乗出す」決心をしたといふ注意書を載せたのであつた。

(1) ドイツの鍛冶場としてのスイス、同所 六頁

一九一七年四月十四日に発行された第一號にはヘルマン・フェルナウだけが公然と名前を出してゐたが、しかもフェルナウはその最も中心的な仲間にしてゐたものではなかつた。最初は匿名が用ひられたが、それはその後も引續き多数用ひられた。たとへばグラツクス、ヘルウエウス、ヴェルゾルフ、前領事、ルシアヌス、レディヰイブ、スペクタートル、ボニファチウス、ゲルマニクス其の他の名前であつた。この假面にかくれたやり方、告白する勇氣もなほ卑怯さは新聞に對する尊敬と、同時にその効果を疑ひもなく失墜させたものであつた。ドイツの防止局とスイス政府の前に身を隠したいといふ關係者の意圖は、しかしごく短期間だけしか目的を達し得なかつた。同じ様に聯合國の外交官たちは、中立國とドイツの目をさけるために「自由新聞」との關係を注意深く秘密にしてゐた。

このやうな慣例の最初の例外をつくつたのはアメリカ宣傳部の指導者ホワイトハウス夫人であつた。時と共に彼女とシュリーマン博士との間の密接な協力はすいんで行つた。あらゆる重大な問題について彼女は彼からの助言をうけた。そしてその御禮に、ホワイトハウス夫人はあらゆる攻撃に

對して「自由新聞」を保護する役を引受けたのであつた。同紙はその主義において、外國民とその政府の攻撃を禁止するスイス中立法に牴觸してゐた。ドイツ公使は機會ある度に自國に加へられた侮辱と攻撃に抗議することを怠らなかつたのであるから、もしフランスとアメリカの保護がなかつたならば同紙は存續することが出来なかつたであらう。

フランス宣傳部に對する關係は、それほど公然たるものではなかつたが矢張密接なものであつた。シュリーマンはすでに「自由新聞」の創刊以前にフランス宣傳部長アグナン教授の仲間と親密に交際してをた。そしてその上一九一八年十月にはベルン駐劄ドイツ公使館付武官はその信頼すべき仲間から、アグナン教授のもとに「自由新聞」の指導者たち、シュリーマン博士やヒューゴ・パール、その他が參加して常設的會議がもたれてゐるといふ報告をうけとつてゐた。同報告によれば、そこではドイツに革命を推しおこすための最も有效な宣傳方法、特に宣傳ビラの作成と配布について協議されたが、フランス公使はそのことに非常な關心をもつてゐて、つねにその會議の経過を報告せしめたさうである。

(1) 司令部記録 外國部

ベルン駐劄ドイツ公使はもちろん、「自由新聞」の資金は一部はアメリカとフランスの宣傳費から支出されてゐるといふことを信じて疑はなかつた。しかしその證據は一度もあがらなかつた。「自

「自由新聞」自身は力をこめてその経済的獨立性を協調した<sup>(1)</sup>。そしてホワイトハウス夫人も亦その回想録に於て證人役をつとめてゐる<sup>(2)</sup>。それ故に、少なくとも最初に必要であつた少なからざる資金は大體に於て友人や同志たちによつて醸出されたのであることは認容されうるであらう。「自由新聞」に關係してゐた在スイス獨逸平和主義者たちはしかし、かつてクルツプ會社重役の一人であつたムーロン博士を除いては大部分大した財産はもつてゐなかつた。あまつさへ「自由新聞」に載つたムーロン博士の論文はたゞ轉載されただけのものであつて、彼自身は著述的な協力は差し控えてゐた。

資金主としては同名のスイスチョコレート工場社長トプラーがあげられた。一九一七年秋以來平和主義的な繪で飾られたトプラー製品の廣告が廣告欄において重要な役割を演じた。スイスにあつてウィルソン主義の闘士として活動してゐた、ゲンフ在任のアメリカ平和主義者ジョージ・D・ヘロン教授についても、彼が「自由新聞」を財政上支持してゐたと信せられてゐた<sup>(3)</sup>。ヘロンの連續論文が「自由新聞」紙上に發表せられた<sup>(4)</sup>。「ドイツデモクラシーの友」の書記フランク・ポーン博士は一九一八年春のスイスへの旅行の折アメリカ宣傳部と緻密な協力をつくつたが、それ以來「自由新聞」は掲載すべき多數の論文をアメリカから受取つたし、同紙の數千部が毎週合衆國に送られた<sup>(5)</sup>。「自由新聞」は後には、その重要な記事が「ドイツデモクラシーの友」協會によつて數百萬部

配布されてゐることを誇つてゐた。

- (1) 自由新聞一九一七年九月一日附第一卷四二號
- (2) Mita B. Whitehouse, 前掲書二〇九頁
- (3) 代理參謀本部記録 第三部第二課「ドイツの銀冶場としてのスイス」四二〇頁
- (4) 自由新聞 第一卷 三六一三三、四〇一四二號
- (5) G. O'Neal, 前掲書 一九一頁

「自由新聞」はフランスとイギリスによつて牢にあるドイツ俘虜の間に配られた。フランス人によつてはまた特に適切な號は氣球や飛行士によつて撒布された。オランダへも多數送られた。中立的なドイツ語・スイス新聞の附録としてドイツへ密輸入する企ては大戦中を通じて繼續せられた。勿論聯合國とアメリカとによる莫大な販路の安定は、それだけでもすでに間接的ではあるが主要な財政的支持を意味してゐた。一九一八年の夏スイス政府は紙飢饉のため新聞の紙消費高を制限した時、「自由新聞」は印刷済みの新聞を送らずに、各版の鉛版を外國に送つてそこで必要なだけ印刷させることによつてそれに對應した<sup>(1)</sup>。スイスではその普及は限られたものであつた。編輯部の報告によれば、その發行高は三ヶ月後には九千部、一九一七年九月一日には一萬四千部、十二月十九日には二萬部以上に達してゐた<sup>(2)</sup>。

- (1) 司令部記録 外國篇
- (2) 自由新聞 第一卷 四二、七〇、七二號

最初の編集部ではスイスの國內政治状態を論じたスイス民主主義者の論文を掲げて興味を呼びおこし、ドイツ系スイス人を親佛的に誘導しやうと試みた。しかしこの努力はあまり成功しなかつた。そこで「自由新聞」はドイツ革命の準備と外國に在るドイツ人の獲得といふその本來の使命に益々力を集中した。亡命者たちは大戦中を通じてドイツに在る彼等の友人と聯絡を保つことに成功した。ドイツの友人たちは又屢々スイスを訪問して、そこで秘密會議が開かれた。一九一八年夏に至つてはじめて個人的な往來は國境が嚴重に閉鎖されたので、殆んど不可能となつたのであつたが、それまでは外國宣傳部ではこの方法でドイツ國內の情勢について貴重な情報を得てゐたのであつた。<sup>(1)</sup>或る消息通のスイス人の報告はドイツに在る富裕なる民主主義者による「自由新聞」の財政的支持の推測を暗示してゐる。<sup>(2)</sup>この報告があつてゐるかどうかにについては、ベルリンに、或る内情に通せる一人によつて「來るべき革命の市民的、社會主義的本營」と名づけられた一群が居つたことを思ひおこしてみればよい。<sup>(3)</sup>

この一群の中心人物は國立銀行總裁、前ボーゼン市長にしてマキシミアン・ハルデンの兄弟である樞密顧問官リチャード・ツィッテングであつた。このグループによつて獨立社會民主黨は多額の資金を供給され、<sup>(4)</sup>一九一八年一月の政治的ストライキも支持せられたのであつた。<sup>(5)</sup>非合法的な文書はこゝから組織的に配布せられた。北シユレスウイヒの帝國議會議員H・P・ハンセンもこゝか

ら、外國で印刷するためにリヒノヅスキー報告を國境外に持ち出すべく委託された。ツィッテング・グループの仕事は、一九一五年以來ツィッテングも屬してゐた「新祖國」同盟の仕事と或る部分までは等しいものであつた。<sup>(6)</sup>しかしシュリーベン博士も亦「新祖國」同盟の所屬員であつたし、「自由新聞」の發行者達の目的も同様に革命であつた。彼等が首都に在るこの大勢力ある同志達とどうして連絡しなかつたといふことがありやうか？かゝる連絡があつたといふ推測は、亡命者の精神的指導者の一人であるヒューゴ・バルが一九一九年の春、スイスからの政治的活動の繼續の可能性について相談するためにベルリンに行つたといふ事實によつても確められてゐる。彼はツィッテングや其の他の平和主義者によつて非常に親切な待遇をうけた。<sup>(7)</sup>

(1) Vira B. Whitehouse, 前掲書二八三頁以下

(2) Arnold Bruns, 前掲書 三頁

(3) アルトウル・ホルツチエルの時代の私生活 ポツダム 一九二八年 一三一頁以下

(4) 同書 一三三頁

(5) H. P. Hansen, Fra Krigsiden, Copenhagen 一九二五年第二卷 二〇二頁以下及び二二六頁以下

(6) O. Lehmann-Rostschdt, 前掲書 最初の所屬員表—A. Holscher, 前掲書 一三三頁

(7) エーナー・ヌール、時代からの逃避、ミュンヘン及びライプツェ 一九二七年 二四四—二四六頁

「自由新聞」の組織者はハンス・シュリーベン博士であつた。あのやうに多様の協力者を獲得し、それを一緒に纏めることは、彼の熟練と外交的手腕なくしては出來ないことであつた。彼はバルカ

ン半島におけるオーストリアハンガリーの政策に反対したため大戦前ベルグラードから轉任を命ぜられ、自らその官職を退いてゐたのであつた。<sup>(1)</sup>彼は戦争勃發後ベルリンに在つて平和主義者のグループと密接な交際を結んでゐたが、大戦中更にスイスに移住した。一九一七年には彼は「現在及び將來のドイツ外交」といふ論文を發表したが、その中で彼は議會による外交政策の廣汎な統制と、何よりもまづ道徳的原則の適用を要求した。スイスに在つて彼はフランスの政府代表と緊密な交際をむすんだが、それは彼の夫人が生來のフランス人であつたことによつて一層容易にされたのであつた。彼は屢々パリに旅行した。ドイツ政府に對する彼の憎惡は、ホワイトハウス夫人さへも彼の態度は極度に黨派的であると思はせたほど、非常に深刻なものであつた。<sup>(2)</sup>「自由新聞」があのやうに完全にフランスを利益させる方針におちこんだのは、偏へに彼の責任であつた。

(1) 自由新聞、一九一九年一月八日、第三卷三號

(2) Viri B. Whitehouse, 前掲書、二〇八頁

「自由新聞」が發行されてゐた全時期を通じて彼の最もすぐれた協力者はレーゼマイエル博士であつた。第一年目には彼は最初グラツクスとかヅエルツオルフの匿名で、間もなくそれと並んでその本名も使つて三十八號以下の新聞にその論文を發表した。

レーゼマイエルに次いで最も屢々寄稿したのはフランクフルト・アム・マイン出身の作家エドワード・シュテイルゲバウエル博士であつた。シュテイルゲバウエルは多數の長篇、短篇及び戯曲の著

者である。一九〇四—五年あらはれた彼の長篇「ゲッツ・クラフト」はドイツに於て一時的ではあつたが、非常な成功を納めた。大戦中彼はスイスに行つて、その非常に豊富な才能をドイツ政府に對する闘争に用ひた。その大長篇「インフェルノ」(一九一五年)は強烈な平和主義的見解を含んでゐた。彼はベルギーにおける戦事の出來事を書いたのであつたが、ドイツ將校團に對する誹謗の故をもつてドイツの検閲局によつて禁止せられた。しかしそれ丈益々外國には廣まり、七ヶ國語に翻譯せられた。一九一七年七月には第二の長篇として「死の船」があらはれた。そこにはシュテイルゲバウエルに獨特の煽情的な筆致でルンタニア號の死の航行と、遂には狂死することになつてゐるドイツの潜水艇艦長の狂氣じみた行動とが述べられてゐた。一九一七年九月一日にはすでにそれは第二版を重ねてゐた。一九一八年には「決定の時」及び「片腕の男の手紙」の題で時事詩がつゞいで出版せられた。

フランス宣傳部ではシュテイルゲバウエルの創作を見逃しはしなかつた。プレストライン博士は彼を激勵して益々その創作活動を盛ならしめた。そしてフランスの戦線撤布用新聞「ドイツの自由な言葉」には彼の創作が屢々掲載せられた。時が経つと共にシュテイルゲバウエルは益々惡意ある調子を帯びてきた。ドイツの敗北が現實のものとなつたのも、彼は自由新聞紙上で、東プロイセンのバルチック諸國への擯讓を眞面目に考慮すべきだと提起したが——それはたゞ「プロイセンを

縮少する目的から」であつた。<sup>(1)</sup>それからすこし経つてから、彼はこのんで自分の文體を飾るために用ひるバイブルの句を引用して、ドイツを破産者として牢獄に拘禁し、最後の一錢を支拂ふまではそこから解放しないやうにすることが全く正當な所以だと主張した。<sup>(2)</sup>

グレルシグは一九一七年九月に「自由新聞」の協力者となつた。彼の多數の論文の大部分はその得意のテーマであるドイツの戦争責任を取扱つてゐた。

一九一七年九月にはヒュゴ・パールも亦「自由新聞」へのその最初の寄稿を送つた。彼の特色ある人格によつて、その事業は獨特の調子と深い精神的基礎をもつことができた。多くの點に於て彼の人格は魅力があつたので、それは「時代からの逃避」の題で發表された彼の日記及び彼の夫人の著書が最良に示してゐる。<sup>(3)</sup>この兩書にあつてはしかし彼のドイツに對する闘争のエピソードはごく軽くしか觸れられてゐない。

(1) 自由新聞 一九一八年十一月九日附 第二卷 九〇號

(2) 同紙 一九一九年二月二十二日 第三卷 一六號

(3) ヒュゴ・パール、前掲書——エンミ、パール、ヘニングス、ヒュゴ、パール、手紙と時より見た彼の生活、ベルリン 一九二九年

パールはラインのカトリック教徒で、プファルツ州のビルマゼンスの出であつた。彼は異常な敏感性を有する藝術家で、又あらゆる壓制に對する不倶戴天の抗爭者でもあつた。大戦前はミュンヘ

ンにあつて劇場の建設に盡力してゐたが、一九一五年春チューリヒに移つた。そこで彼は藝術家や文士のルーズな集まりである「キャバレー・ツオルテール」を作つたが、彼等はまたダダリストとも稱し、その集會が官憲に禁止されるまでは大評判をとつてゐた。彼は兵役の召集には應じなかつた。スイスの刺戟的な環境の中にあつて彼は革命的な藝術的、哲學的氣分から益々革命的な政治的態度へと移つて行つた。そのドイツの批判に於てパールはニーチエの後繼者をもつて自任した。國家一般を憎惡する彼には、プロイセンにおける國家と新教々會の結びつきが特に平和の敵にして、憎むべきものに思はれた。彼はプロイセンの國家思想は、権力崇拜、唯物主義におちいつてゐるとして攻撃した。彼の理想はあらゆる國家的強制的撤廢、すべての自由人の結合、「宗教的知識階級の國際同盟」であつた。<sup>(1)</sup>彼はこの思想の實現は不可能であることを知つてゐた。そして誇りを以つて自らをユートピストと呼んでゐた。プロイセン國家の轉覆をその旗印とする集まりが、彼にとつて大きな魅力をもつてゐたことは當然なことであつた。

一九一七年九月には彼はベルリンに行き、そこで間もなく「自由新聞」のグループに加入した。彼はフランス革命の精神、自由、平等、友愛は非常にキリスト教的のものであると思つてゐたし、宗教的精神はフランスにあつてはドイツとは反對に現代にもなほ存してゐると信じてゐたので、フランスと提携してゆくことは彼には容易なことであつた。かくして彼にはドイツに對する戦争は文字

通り「聖戦」であると思はれた。そして彼は次のごとき結論に達した「我々は自國のうち以外にはいかなる敵ももつてはゐない。我々の希望は塹壕の彼方なるフランスにのみあるのだ。」<sup>(2)</sup>

その哲學的教養と精神的優越のおかげで、彼は次第に「自由新聞」のグループの中に指導的地位を占めるに至つた。彼は一九一八年九月設置されたベルンの「自由書房」の文藝部長となつた。會員の著書はこゝから出版せられることとなつてゐた。パール自身もこゝから、一九一八年迄の重要論文の集成である「自由新聞年鑑」をこゝから出版した。一九一九年夏には彼の著書「ドイツ知識階級の批判のために」<sup>(3)</sup>があらはれたが、その中で彼はドイツ思想界の傾向に對する彼の非難を包括的に述べたのであつた。

(1) Hugo Paul, 前掲書——同著、「ドイツ知識階級の批判のために」、ベルン一九一九年、序言

(2) 同著、ドイツ知識階級の批判のために、一三一頁

政治的にはパールは聯邦主義者であつたが、ドイツの敗北後は、ライオンランドに關して「隣接敵國と聯邦を組織する自由」を要求するところまですすんで行つた。<sup>(1)</sup>彼のごとき思考力を具へた人間が政治的狂信にとりつかれて、現實の國家間の戦争において片方の、ドイツの側がすべて不正であり、一方の側は公明だと思ひこんだまでに盲目になつたといふことは、注目すべき現象と言はねばならない。すでに一九一八年十一月にパールは「代辯者としてクレマンソーが語つてゐるフランスの道徳的勝利は、從來のヨーロッパの發展を解く鍵である」と「自由新聞」に書いた。<sup>(2)</sup>のちになつて

彼は自分の熱情的な政治活動について驚嘆してゐる。ベルン時代を回顧して彼は次のごとき書いてゐる「私は今は政治から完全に快癒してゐる……私はあまりに容易に感激に陥るたちで、一旦さうなるといかなる不徹底も躊躇も私には我慢がならないのである。」<sup>(3)</sup>はげしい昂奮は最後には彼の中に失望のうつろな感情を残したゞけであつた。彼はそれについて自分に責任あることを認め、彼は戦争に對する一般的、人間的抗議の高い夢想の望樓から現實の闘争の雑踏の中にまきこまれて、自分の祖國に對して狂熱的に反對したのであつた。彼の希望した世界の改造はしかし遂にやつてこなかつた。

(1) 自由新聞 一九一九年二月一日 第三卷第一〇號

(2) 同紙 一九一九年十一月一日 第三卷第八六號

(3) ヒューゴ・パール、前掲書 二四四、二六五頁

パールは多くの點に於て眞の空想家であつた。彼は長くはこの叛逆人の間に止まつてゐることはできなかつた。彼の尊敬してゐたクレメンス・ブレンタノと同じやうに最後には彼は教會に、その身の安靜をもとめた。一九二七年九月彼は自ら選んだ孤獨の中にイタリーに近いスイスで死んだ。

「自由新聞」の主要なる協力者を語る時には、カール・ルドウイヒ・クラウゼを忘れることはできない。クラウゼは一八九七年からミュンヘンに住んで、そこで手廣い美術品商店を営んでゐた。彼はチリデットの生れではあつたけれどプロイセン國とポーランドの反對者であ

つた。一九一六年に彼はスイスに移り、ゲンフに居を構へた。一九一七年初めに彼は「誰の爲にドイツ國民は死ぬか？」といふ本を著したが、その中で彼は戦争の責任をホーエンツォレルンとプロイセンの貴族になすりつけ、ドイツ國民に叛亂しろと、呼びかけた。バイエルンの人民に對しては彼は偽りなき愛情をもつてゐた。バイエルン政府に對しては彼は戦争勃發の共同責任を負はせなかつた。彼はバイエルン政府に對して、プロイセンから獨立し、單獨媾和をむすぶやうに勸告した。

一九一七年九月二十九日彼はこの意味でバイエルン首相フォン・ヘルトリング伯にあてゝ一通の手紙を書いたが、彼はその中で次のやうに言つてゐる。「世界の憎惡が唯一つの對象、この世界悲劇の元兇であるホーエンツォレルンにむけられてゐる今日、彼及びその一黨の絶滅とが敵方の殆んど唯一の戦争目的となつた今日（その目的にむかつて今や人類の大部の努力が集中せられてゐるのであるから、その達成を疑ふ者は馬鹿者だけである）バイエルン王朝にとつては、この札つき者といつまでも運命を共にするなどといふことは馬鹿げた事以上である。」それに添へて、バイエルンの人民はいつか彼等がその政府がいかに自分らの利益に反する行動をしたかといふことを聞き知つたならば、恐ろしい報復手段に出るだらうといふ警告がつけ加へられてあつた。<sup>(1)</sup>

必要な場合には王朝に對する人民革命によつても所期の政策を實行するといふ脅迫つきこのバイエルン王朝にあてた訴へを見れば、グラッゼは又かの有名な「バイエルンと平和」といふ本の著者であつたかもしれぬといふことは全くありそうなことだと思はれる。この本は一九一七年に世

に出たが、フランス宣傳部ではそれをバイエルンに配布するのに特別な努力を拂つたのであつた。<sup>(2)</sup> 著者は「ハインリヒ・ジゲル」といふ匿名を用ひてゐたが、この本はホーエンツォレルン家の退位と、人民の味方であり、藝術を愛好し、「フランスと古い傳統によつて結ばれてゐる」ヴァイツヘルスバッツヘル家の即位を要求してゐた。「地平線には」とそこに書いてある「ドイツ、フランスの了解がさし兼ねいてゐる、いや兩國の同盟さへも……」同書の第二版は一九一七年七月に一つの序言を添へて出版せられたが、そこには次の如く書かれてゐる「ヴァイツヘルスバッツヘル家が欲するならば、彼と共に、欲せぬならば、彼を排除して、逆ふならば、彼と敵對して、バイエルン人は自分の道を進まねばならぬ……プロイセン國の重荷を擔ひつゞけるよりは、バイエルンはその憲法の原則を修正して共和國となるだらう。」この第二版はその密輸入が再びベルン駐劄バイエルン公使館の封印を利用して（前掲六十九頁參照）行はれたのであつたが、ドイツ防止局が確めえた限りでは悉くバイエルン王家の一族にむけ送られてゐた。<sup>(3)</sup>

(1) この手紙は一九一八年十一月十三日付第二卷九一號の「自由新聞」に轉載せられた。

(2) *Heard of Front*, 前掲書一四一頁並びに五七頁以下參照

(3) マルリン陸軍省記録、軍除篇

ハインリヒ・ジゲルの意圖はこゝに明らかなごとく、カール・ルドウイヒ・クラッゼがその後間もなくフォン・ヘルトリング伯への手紙でのべてゐる思想に全く一致するものである。二つの場合と



もバイエルン王朝に利益があると非常に強調されてゐた。色々の細かい點の一致もハインリヒ・ジ  
ーガーとカール・ルドウィヒ・クラッゼの同一人物なることを殆んど確定的ならしめてゐる。政治的  
な論難書にあつては不思議に見えるウイッテルスバッツヘル家の藝術に對する理解の強調も美術品商  
人にはありそうなことに思はれる。それ故に、一九一七年九月のクラッゼの手紙はバイエルン政府  
に働きかけやうとした彼の第三回目の、そして最後の試みであつたと見てよいであらう。

その間に帝國大審院においてはその著「誰の爲にドイツ國民は死ぬのか？」を理由としてクラッ  
ゼに對する叛亂教唆、大逆罪の審理がすゝめられ、一九一七年十一月一日には彼の少なからざる財  
産が沒收せられてしまつた。<sup>(1)</sup>この處置をうけ、且つバイエルン政府は彼の忠告に従ふことなどは考  
へてゐなかつたといふことを知るに至つたので、彼は益々激烈に闘争に従事した。彼はドイツ革命  
の自然的な賛成者となつた。一九一八年夏には彼はドイツ獨立社會民主黨の黨員となつた。<sup>(2)</sup>

ハンシーは特に多數配付せられた宣傳ビラ「南ドイツ人に告ぐ」の著書について、その著者は内  
容からみてやはりクラッゼであるとされてゐるのであるが、次のごとく語つてゐる。それによると  
クラッゼはプロイセンに對する非常に激しい憎惡に充たされてゐたので、フランスの宣傳指導部で  
は彼を鼓舞するよりも、すこし鋒先をゆるめるやうに忠告せねばならなかつたくらゐだつたさうで  
ある。その力と雄辯の點ではハンシーはクラッゼの仕事を、後に話すジークフリード・バルダーのそ

れよりもずつと高く評價してゐた。<sup>(3)</sup>

(1) 自由新聞 一九一九年八月六日附第三卷六一號

(2) 同紙、一九一八年七月十三日附第二卷五六號

(3) Hand. u. Foundat. 前掲書一二頁以下

一九一八年一月クラッゼは「自由新聞」の協力者となり、一九一九年秋までに多數の論文をその  
ために書いた。たとへば一九一九年一月に「自由新聞」が發表した新ドイツ憲法草案は彼の筆にな  
るものである。その第一條は次のごとくである。「ドイツ國は國際聯盟の中において始めて存在しう  
るやうな微弱な聯邦をつくる。」その外に彼はドイツ軍國主義を攻撃するために更に多數の論文を書  
いた。それらはいつもの密輸入の方法でドイツに送られた。そして屢々そこで押收せられた。

「自由新聞」の中には統一的な世界觀があつたと主張することはできない。フェルナウとパール  
のごとき人は、人物においても、又思想家としても著しい對照をなしてゐた。すべての亡命者た  
ちを一致させる紐帯はたゞフランスに對する偏愛だけであつた。レーゼマイエル、カール・ルドウ  
イヒ、クラッゼ・グレンリグは「ドイツの塵をその足からふるひおとしてしまつた」<sup>(1)</sup>そして一八四  
八年の革命家の眞の後継者であるとの信念の中に安住してゐた。しかし炯眼な人々はすでに彼ら  
を一八四八年の志士から區別する深い滯に氣がついてゐた。一九一七年六月六日の「自由新聞」には  
ドイツの四十八年代の人々について、精力的に彼等を批判した一スイス人の論文が載せられた。そ

こでは一八四八年の自由の観念は統一的の、獨立の、強力なドイツ帝國の夢想と不可分に結びついてゐたことが正當にも指摘されてつた。著者はこの統一思想の中に早くも來るべき帝國主義の臭ひをかぎつけてゐた。兩者の内部的相反はヒューゴ・バールによつてもつとも鋭く摘出された。四十八年の運動は「似而非革命」として彼から排斥せられた。「一八四八年に人々の頭を支配したものは、統一思想即ち皇帝主義であつた。」<sup>(2)</sup>そして正にそれこそが「自由新聞」によつて烈しく攻撃されたものではなかつたのか。

(1) レーゼマイエル、ドイツの市民及び労働者への公開状——宣傳ビラ、南ドイツ人に告ぐ、——參謀本部代表部記

録、第三部第三課

(2) 同、バール、ドイツ知識階級の批判のために、一四三頁

亡命者群の左黨は急進的、反國民的合理主義者の極印を頂戴してゐた。バール自身もかつて「亡命者の間に一人の社會主義者も居ない」ことに驚いたが、彼は同時にその正しい原因として社會主義者は空想とは反對の立場に立つものであることを指摘した。<sup>(1)</sup>亡命者はたゞ獨立社會黨員とは親密な關係にあつた。グレルングとカール・ルドウィヒ・クラウゼは一時獨立社會民主黨に屬してゐた。アイスナーは、特に彼が一方的に中欧諸國にのみ戦争の責任を認めたときには此の派の人々から讚美せられた。しかし獨立社會黨員とも亡命者達は主義上の差異があつた。獨立社會黨の指導者たちは、ドイツの敗北のために働くといふ考へはもつてゐなかつたのだ。ヒューゴ・ハーゼ自身も一九一

七年十一月二十九日帝國議會に於て「社會主義的世界觀に充たされてゐる者は、他國民を利用するために自國民に不利益な行爲をすることはできない。ドイツ帝國の社會主義者はドイツを敵に引きわたすために働くことはできない」と演説して、「自由新聞」に對する批判を行つてゐた。

(1) 同、バール、時代からの逃避 二三三頁

「自由新聞」とバリーの "Service de la propagande extrémiste" からドイツ語で發行された配布用新聞「自由なドイツの言葉」を比較してみるならば、「自由新聞」とフランス宣傳指導部との驚くべく廣汎に協力してゐた事情が明らかになるだらう。このフランス宣傳部のもつとも恐るべき産物の内容を一瞥したゞけで、フランスでは大戦の後半期にはその活動を全然ドイツ反對派の書いたものを複製することに限ることができたとハンシーが言つてゐることが本當であることを領ける。「自由新聞」の第一號が出来るや直ちに「自由なドイツの言葉」はその記事を轉載したが、それ以後かかる轉載の行はれなかつた號はほとんどなかつた。多くの號は全然「自由新聞」から轉載された記事で出来上つてゐた。執筆者の顔觸れはこのやうにして兩新聞とも本質的には同じものであつた。フェルナウ、シュテイルゲバウエル、クラウゼ、ニッホルト、グレルングの名はフランスの配布新聞にも非常に屢々あらはれてゐる。かうしてみると我々は「自由なドイツの言葉」を「自由新聞」の一種の戦線版と名づけたくなつてくる。

レーゼマイエル博士は「自由新聞」の創刊以前にはF・ビューラーと匿名して「自由なドイツの言葉」に論文を書いてゐた。この論文が彼の筆になるものであることは、のちに「自由新聞」のために書かれたレーゼマイエルの論文とその獨特の用語範囲や文體が一致してゐることによつて證明せられる。「自由新聞」が生れてからは「自由なドイツの言葉」への「ビューラー博士」の論文は終りとなつた。實際レーゼマイエルは今度は「自由新聞」のために爲すべきことが澤山あつた。自由なドイツの言葉」の主要な執筆者はジークフリード・バルダーであつたが、實はこの匿名によつてフランスに在る或るドイツの俘虜が書いてゐたのであつた。彼はやはり「自由新聞」の協力者でもあつたが、そこでは彼の寄稿の出所は綿密な注意でもつて秘密にせられてゐた。

「自由新聞」の活動は、ドイツに對して向けられたフランスの武斷政策の利己的な目的を隠すに非常に適してゐた。一九一八年八月十七日の社説に於てエルンスト・ブロッホ博士は、世界の人は聯合國が武斷的思想に陥入つてゐるのだなどと恐れる必要はないと書いてゐる。「聯合國は戦争のシテムを攻撃するバリケードを基としてゐる。それは全く防禦的平和主義を原則とするものであり、言葉の完全な逆説において戦へるキリスト教徒 *Evangelical Christians* である。」<sup>(1)</sup> 九月中に同紙はW・B(ジークフリード・バルダー)の社説をかくげたが、その中には次のやうに言はれてゐる。「我々は我々の敵の勝利を心から希求し、それを我々の勝利、ドイツ國民の勝利と見ねばならないといふことは、

(2)

勿論時がたつと共に「自由新聞」は、ドイツ國民の希望は同紙の目的と同じものであると考へこんでゐたのはあまりにも早急な判断であつたと、覺らざるをえなかつた。ドイツ國民は同紙から何も知らうとは欲してゐないといふ苦い認識が仄かにわかつて來た。それはその政治的態度の尖鋭化、ドイツ國民への敵意ある批判、フランスの見地へのより一層の接近がひどすぎた結果であつた。従來は同紙はツイルソンの演説に従つて善良な、欺かれた、壓制下のドイツ國民とその惡黨の政府との間に區別をたてゝゐた。次第に同紙はこの區別を放棄した。ドイツの敗北後聯合國の苛酷な媾和條件が明るみにあらはれた時、責任は故意にドイツ國民の方におしつけられた。一九一九年二月十五日にパールは次のごとく書いた「戦事の勃發についての責任如何より以上のことが問題なのである。全國民の時勢遅れ、その隔世遺傳、その頑迷、その懷疑の缺亡、自由をもとめる本能の缺亡が……更にその同時代の人々を精神的、道德的に保護することの不能が問題なのである……哀れなドイツ國民は制度が犯した事については何等の責任もないとアイスマナーは言つた。誰が今これを信するだらうか？」<sup>(3)</sup>

(1) 自由新聞、一九一八年八月十七日附第二卷六六號

(2) 同紙、一九一八年九月十四日附第二卷七四號

(3) 同紙、第三卷一四號

かゝる精神の傾向からはベルサイユ平和條約の批判などは望むべくもなかつた。なせならずで一九一八年十二月七日に「自由新聞」は「道徳的革命の中心にして出發點である」パリに訴へをよせて「我々は、今となつては正義に従つた嚴重にして獨逸を充分屈服せしめるに足る媾和條件について疑ひの餘地なからしめんことを要求する」と言つてゐる。<sup>(1)</sup>媾和條件が發表された時次のごとく言つた眞の中立者は、暫定的媾和條約の諸條件は、ドイツによつて犯された罪の大きさに一致するものだといふ事を考へて出發すべきだつたのだ。<sup>(2)</sup>一九一九年五月十七日の匿名の社説には「罪と罰」の題下に次のやうに書かれてゐる「ドイツの重い罪に比較するならば、もつとも苛酷な媾和條件でさへも比較的目立たぬ償ひになつてしまふのである。」<sup>(3)</sup>

フランス政府にとつてこれ以上良い辯護人は望むことが出来なかつた。「自由新聞」はのみならずフランス政府に、より苛酷な處置に出ることを勸告した。一九一九年五月三十一日のパールの社説の中に次のとき一節を見出すことができる「ドイツを完全な經濟的、道徳的支配の下におくことを考へないといふことは、餘りに紳士ぶつた顧慮と禮儀の身振りにすぎない。すべての不幸を起したドイツ中央政府の嚴重な監督がうまく行はれないといふ名目で、ベルリンを占領するといふことも充分考へていふことである。」<sup>(4)</sup>「自由新聞」はそれ故にフランスの愛國主義者の計畫を援助するものであつた。同紙はまた「聯合國が獨逸を所謂飢餓封鎖にしたといふ事についての烈しい惡口」

に關して、しかるに目撃者の語るところによればドイツの資本家たちはほしほしにシャンペンと美味の中に浸つてゐるやうであると言ふやうな卑劣な中傷も敢てしたのであつた。<sup>(5)</sup>

(1) 自由新聞、第二卷九八號、ヒューゴ・パールの論文、國民議會

(2) 同紙、一九一九年五月十四日附第三卷二二八號

(3) 同紙、一九一九年五月十七日附第三卷三九號

(4) 同紙、第三卷四三號

(5) 同紙、一九一九年五月十七日附第三卷三九號

同紙のバリーとの結びつきは當時特に密接であつた。一九一九年五月七日にはそのスイス人の協力者の一人は次のやうに言つてゐる「自由新聞は疑ひもなく聯合國に知識を提供し、其の決心を定めさせた唯一の、否な最大の影響を與へたドイツ語の新聞である。同紙は聯合國にとつてはドイツの狀態に關する最も確かな據りどころであり、その記事は全世界の新聞に引用せられてゐる……その各號はバリー會議の重要な人々によつて一様に十部、十二部と注文せられてゐる。」<sup>(1)</sup>ライン共和國を建設しやうとするフランスの意圖は同様に「自由新聞」によつて支持せられた。<sup>(2)</sup>

「自由新聞」とフランスとの協力は廣汎な範圍に渡つてゐた。時に、同紙の本當の指導部はフランスの「新聞の家」にあるのだと主張する人もあつたが、しかし問題はさう簡單なものではなかつた。確かにアグナン教授は「自由新聞」の政治的態度について重要な影響力をもつてゐた。アグナンは

フランスの武力政策の目標があらかじめ確保されることを前提しなくては、決して獨佛間の和解に反対するものではなかつた。革命後彼はこの意味で活動し、クレマンソーの腹心の部下として長い間ベルリンに滞在してゐた。<sup>(3)</sup>

(1) 自由新聞、第三卷第三六號

(2) 同紙、第三卷第四八—五二號

(3) ルードヴィヒ・スタイン「聖天家ノ生活」ベルリン、一九三一年二六一頁

彼は「自由新聞」の發行人たちにフランスに對する彼等の同情と信頼を強化するには實に適した人物であつた。このやうな頑固な理窟屋に影響を及ぼすことは非常な慎重さを要した。大戦中言はれてゐたやうに、これらの亡命者たちに何か買収でも行はれたやうに考へることは間違つてゐる。時折「自由新聞」はフランス趣味に従つたのではない考へをのべたこともあつた。そして時には同紙はドイツ・オーストリアのドイツへの併合を辯護したこともあつた。<sup>(1)</sup>フランス人に彼等亡命者たちの努力を貴重なものたらしめたのは、その真似のできない、獨特な確信的な調子であつた。フランス人がそれをできうるかぎり利用することにとめたのは自明のことである。

フランス人たちはその友人をドイツ共和国の勢力ある地位に、殊に婦和代表の中におきたかつたのであらう。<sup>(2)</sup>自由新聞は、しぶくながらシュリーマンのグループが自由新聞にゐるその友人を絶えず注意し、色々な高官に推薦してゐたことを暗に認めてゐる。又それはドイツが「自由新聞」に據

つてゐるドイツ共和主義者のグループの中に見出しうるのは汚れない白い手のブルジョア階級の政治家だけだ。<sup>(3)</sup>とも言つてゐる。しかしながら自分を前面におしだそうとする度をすぎた努力は甚だしく不快な印象を與へるものである。亡命者たちは自分を「ドイツ革命の眞の指導者」であるとして考へてゐたのだつたが、やがて彼等も新しいドイツは彼等からは遙かに遠ざかつてゐることを認めざるを得なかつた。彼等はしかし自國民が彼等に與へることを拒んだものを、戦に勝つた敵國の権力によつて求めることも辭しはしなかつた。一九一九年三月一日の「自由新聞」でパールは聯合國の指導者たちに向つて訴へてゐる「我々にあなた方の同情を示してください。我々を道徳的指導者として認知して我々を助けてください……我々を助けることはあなた方のお力のうちにあることです。<sup>(4)</sup>ベルン駐劄バイエルン公使フリードリヒ・ツァイル・ホルム・フォルスターとの關係を通じて彼等はアイズナーに働きかけた。事實アイズナーは全權大使に書を送つてその中で、「聯合國と舊制度の汚點をおびてゐない、彼等の信頼に耐えるやうな人々を通じて商議することはさし迫つて必要ないとである。」<sup>(5)</sup>と言つてゐた。

(1) 自由新聞、一九一八年十二月十四日附第二卷一〇〇號

(2) 同紙、一九一九年五月七日附第三卷三六號

(3) 同紙、第三卷四、八、一三、一六、一八號其他

(4) 同紙、第三卷一八號

しかし結局亡命者たちのあらゆる活動はなんの成功もたらさなかつた。彼は不快な感情を抱いて傍觀者の地位にとゞまつてゐた。「自由新聞」はその意義を失ひ、一九二〇年のはじめに廢刊となつた。ドイツの政治の中でなほ一役演じやうとする亡命者たちの試みはたゞ彼等の世事に疎きことの證據にしかすぎなかつた。彼等は外國にあつてドイツ國民との接觸を全く失ひ、そしてドイツ國民は彼等の行動をたゞ裏切りとしか感ずることはできないのだといふことも理解することはできなかつた。

#### 四、オランダ

スイスと同じく、オランダも交戦國の間に挟まれたその地理的位置のためにやはり思想的闘争の戦場となる運命にあつた。明らかな理由から、此の國でドイツに對する闘争において第一線を承つたのはイギリスであつたけれど、フランスも亦積極的にそれに參加することを怠りはしなかつた。オランダ人は最初から名譽ある中立的態度を維持すべく決心してをつたので、彼等は戦争中を通じて全力をあげてその獨立性の擁護に努力したのであつた。國民の冷靜なる判斷力は、戦争を勝ち負けなく終へることが自國の利益に最もよく合致するだらうことを見透してゐた。

大衆の輿論は戦争にもすでにドイツに都合のよかつたわけではなかつたが、大戦起るや、その不信は獨逸がベルギーへ侵入したので著しく深められたのであつた。人々は戦争の勃發に對する大部分の責任を獨逸に歸してをつた。大概の中立國における如くこゝでも、一般に商人階級や自由主義的市民階級のごとく民主的思想をもつてゐる階級は聯合國の側に立ち、貴族、市民階級の保守的部分、上級士官、官吏などは屢々ドイツに同情を示してゐた。そしてまたオランダには、數世紀にわたるフランス文化の強い影響から生じたフランスに對する特別な深い愛着がひろまつてゐたのであつたが、この同情は大戦中フランス宣傳部によつて最も巧妙に強化され、利用されたのであつた。日々

の新聞には反獨的輿論が支配的ではあつたが、狂信的に反獨的態度をあらはしてゐたのは「*De Pers*」とそこから出してゐる廉價版「*De Courant*」だけであつた。テレグラフ紙はあまりにその行動が行きすぎた結果、同紙が代表してゐるのはオランダの利益よりもむしろ聯合國のそれであるかの觀を呈してゐた。「*テレグラフ*」の協力者は非常に才能のあるハールレムの畫家ルイ・レイメカーであつたが、その效果的な、しかし往々故意に挑發的な「ドイツの暴行」についての畫は全世界に廣められてゐた。オランダに於ても敵國の宣傳には他の中立國にあると同様色々な方法が用ひられた。オランダの國民や新聞の輿論に働きかけ、それからドイツ國民への反應を期待するやり方外に、オランダ在住のドイツ人への工作もすゝめられ、或ひは國境を越えてドイツへ宣傳ビラや本や手先を送ることによつて直接的效果を得ることも可能であつた。そしてまたすべてのこれらの方法は用ひられたのであつた。

(1) Dr. Japikse, 政治的、經濟的にみた世界大戦におけるオランダの立場, *Kaas der He. ubers, van H. Schwanke-man, Göttingen, 1921*, 六三頁以下九九、二二七頁以下

オランダはドイツから、あまり人の住んでゐない地帯を通つてゐる長い國境によつてへだてられてゐる。それはスイス國境よりもなほ一層封鎖困難な場所であつた。この閉鎖不充分の結果は密輸入の繁榮と中立國への逃亡兵の頻繁な逃げ込みであつた。密輸入の規模がどのやうであつたかは、一九一六年の最後の三ヶ月にオランダに於てこの罪のために一萬一千人の人間が處罰されたといふ

事實がこれを示してゐる。(1)

(1) タイムス世界大戦史 第二卷一八六頁

ドイツ兵士又は兵役義務者の逃亡は時が経つと共に非常に増加したので、大戦の後半期にはオランダ政府は逃亡者を拘禁所に留置する手段に出でなければならなかつたほどであつた。彼等のうちで仕事をみつめて、自分で生計をたて、ゆけるものゝみが自由行動を許された。革命的、社會主義的週刊紙「*闘争*」はドイツ逃亡兵の數は一九一七年六月にはすでに一萬人以上にのぼつたと報じてゐる。(1) 一九一七年五月にはプロイセン陸軍省は、歸國した逃亡兵に刑の執行猶豫と恩赦を約束した告示を出す必要にせまられた。拘禁所における取扱ひと食物はひどいものであつたので、この告示を利用した者は多數にのぼつたのであつたが、それにもかゝらずドイツ防止局の計算によれば一九一八年八月には一萬五千人の逃亡兵がオランダに止つてゐた。(2) この不滿を抱いた、革命的な一群は敵國の宣傳の、つけの目標であつた。この人々の中には積極的に聯合國のために働いてゐたものもあつたが、彼等は彼等の今までの關係や知識によつて特に價値ある仕事をすることができたのであつた。

すでに戰爭勃發後間もなくイギリス宣傳局ではオランダにおける宣傳ビラの配布を開始した。一九一五年と一六年にはその活動は異常に高まつたのであつた。本の洪水が國中をみたした。一九

一七年の九月だけでもドイツの監督局によつて七十七種の新しい宣傳文書が數へられたのであつた。<sup>(3)</sup>ドイツ國內への宣傳文書の配布ははじめは主に郵便で行はれ、商賣上の又は個人的な關係が住居の作成にあつて利用せられた。郵便監督が次第に嚴重になつてくるに従つて、その代りとして密輸入が益々屢々行はれるやうになつた。報酬をもらつて宣傳ビラを國境を越えて持ちこむために密輸入者や密獵者たちは待機してをつた。國境のうちライン、ヴェストフアレンの工業地帯に向ひあつてゐる東南部が最も屢々踏み越えられた。

(1) Der Kampf, Revolutions-sozialistisches Wochenblatt, Hrg. von C. Münster, Amsterdan. 一九一七年七月九日

附第一卷七號

(2) Der Dolchstoßprozess in München. Verhandlungsprotokolle und Stimmungsprotokolle von Edward Beckmann, München 1925. 二〇九頁

(3) 司令部記録 外國部

第一に敵國の手先共は「ドイツ出稼人」をその目的のために利用した。「ドイツ出稼人」とはドイツの工業地帯、殊に炭坑内で働いてゐる大勢のオランダの労働者をそう呼んだ名前であつた。「闘争」はその數を一九一七年十二月に五萬一六萬と計算したが、アーシエンとその近郊だけでも一九一八年十月には一萬五千人が働いてゐた。<sup>(1)</sup>これらのオランダの労働者たちは多くは一日を、時にはまた一週間ぐらゐもぶつとほしてドイツで働いて、その持ちものを大きな袋に入れて持ち歸つた。それに對する監督は監督人の不足から不可能であつたので、聯合國の手先共は何の雜作も

なく彼等の間に信頼するに足る助手を見出すことができた。宣傳ビラはこのやうな方法で工場に居るドイツ労働者に配布されたのであつた。そしてオランダの労働者も同様に意氣を沮喪せしむるとき風評を廣めることや、革命的な宣傳を喋ることによつてドイツ人に働きかけた。<sup>(2)</sup>工業地帯において益々公然たる場所にもみられるやうになつた聯合國の宣傳ビラはその大部分は彼等が運んできたものだと思つてよいのである。

ドイツの逃亡兵ラードマツヘルの言ふところによれば、密輸入者や脱走兵は彼等が宣傳文書を國境をこえて運んだ場合一疋につき三十グレンまでの報酬をもらつてゐた。だからこれによつて一寸した財産をつくることができると言はれてゐた。<sup>(3)</sup>屢々宣傳ビラの小包が鐵道によつてオランダからドイツに送られる積荷の中に隠されてゐた。ドイツの税關ではその數量と價格表記について形式的な検査がなされるだけであつたから、このやうにして禁制品を持ちこむこともつねに成功したのであつた。ドイツの罐詰工場に來てはじめてそのビラを發見したといふことも屢々あつた。<sup>(4)</sup>ドイツの逃亡兵は密輸入に關係してゐたが、彼等の多くは後に法廷でこの仕事の組織について陳述してゐる。宣傳文書の作成にも逃亡兵が使はれた。一九一八年六月から八月までに多量にドイツにもちこまれた「ドイツ婦人に告ぐ」「労働者に告ぐ」といふ檄は、逃亡水兵によつて書かれたものであることが後に本人の自白によつて分つた。<sup>(5)</sup>



- (1) 「闘争」一九一七年十二月十五日 第一卷三四號—司令部記録 外國部
- (2) H. Fyfe, Nordafrique 二四三頁—ベルリン陸軍省記録 軍隊部
- (3) 一九一八年のドイツの崩壊原因 議會調査委員會著作四冊第一〇卷二六二頁以下—Lieut. Pierre Desgranges et Lieut. de Rollevat, Pa mission chez Roumèni 1915—1918, Paris 1930, S. 288
- (4) 第七軍團司令部代表部記録—ベルリン陸軍省記録 軍隊部
- (5) 一九一八年のドイツの崩壊原因 第一〇卷 一、二三五頁

パリーの中央局が通譯士官シュールを通じて作ったフランスの組織はスイスにおけると同じ方法で仕事をしてゐた。<sup>(1)</sup> アルンハイムとマーストリヒトにあるその情報局は宣傳ビラ密輸入の出発點であると言はれてゐた。このやうにしてオランダの國境に於ては、南ドイツでスイスからもこまれたのと同じビラがドイツに密輸入されたが、こゝでは更にその外にオランダに於てドイツの逃亡兵によつて作られた概と、特に屢々ドイツの經濟的窮境をとりあつかつたイギリスのビラが加はつてゐた。密輸入はイギリスの側でもやはり中央局によつてS. A. ゲーストを通じて組織的に行はれてゐた。イギリスの間諜、情報局はロッテルダムにあり、それは前艦裝部長、豫備役大尉テンスレーの指導下におかれてゐた。同局は特別の新聞班をもち、イギリス陸軍省の指揮に従つてゐた。<sup>(2)</sup>

- (1) Harst et Tonnelat, 前掲書 一四七頁
- (2) W. Nicolai, 前掲書 六四頁以下

西部諸國の宣傳部はオランダに在るドイツ不平分子の集團を大いに利用した。それは彼等の不満を培ひ、オランダからドイツに對して行ふ彼等の破壞的活動に便宜を與へたのであつたが、スイス

に於て「自由新聞」の周圍に集つてゐた知識階級のグループに對して行つて成功したやうなその運動を全く自分たちの利己的な利益にのみ奉仕させることには成功しなかつた。オランダにゐた逃亡兵にとつては西部諸國の民主主義的プログラムよりも急進的、社會主義的思想の方が大きな魅力をもつてゐたので、彼等はボルシェヴィキのロシアにその同情を向けたのであつた。そしてロシアはまもなく西部諸國とはげしく對立するに立ち到つた。この發展はドイツの革命家と逃亡兵の機關紙である「闘争」のなかに最も忠實に反映してゐる。

「闘争」は初期に於てはドイツから逃亡した社會主義的ジャーナリスト、カール・ミンスターの全く個人的な創造物であつた。生來のファルッ人であるミンスターは九十年代の末アメリカに行き、長年フィラデルフィアのドイツ人労働組合聯合會の書記をつとめ、後には「ニューヨーク人民新聞」の編輯人やドイツの種々の社會民主主義的新聞の通信員をして居つた。アメリカに於ける十四年の滞在の後彼は一九一二年ドイツに歸り、「ベルグ労働者の聲」の編輯人、間もなくドイツブルグの「ニールランド労働者新聞」の主筆となつた。彼は一九一六年の初め社會民主黨の幹部によつてその地位を免せられたが、つゞいて同年七月一日やはりドイツで急進的な週刊紙、すでに屢々述べてきた「闘争」を創刊した。多數社會民主黨員も社會民主主義労働組合の指導者たちもそこで激しく攻撃せられた。一九一七年三月末兵役に召集せられることになつた時、彼はオランダへ

逃亡した。ミンスターは何よりもまづ「プロイセンの軍國主義に對する燃えるがごとき憎惡者」であつた。大戦中彼は「インターナショナル」のグループと親しくしてゐたし、ブレーメル左派とも關係をもつてゐた。獨立社會黨員ハーゼとカウツキーは彼の新聞で「ゴムル兎黨」として嘲笑せられた。しかし大戦後一九二〇年には彼はUSPDに入黨してをつた。<sup>(1)</sup>

<sup>(1)</sup> 一九一八年のドイツの崩壊原因 第一〇卷 一、二、三、六頁以下及び第五卷一九〇頁以下

オランダでは、新聞發行は大變自由なので、ミンスターはドイツ政府に對する闘争に於て自分の感情を思ふまゝさらけ出すことができた。彼は探した。そして間もなく革命的新聞「De Tribune」の主筆であるダヴィット・J・ワインコフを首領とするオランダ急進社會民主黨の支持を見出した。そしてその援助により彼はすでに四月二十八日アムステルダムに於て新しく作られた週刊紙「闘争」の第一號を發行することができた。同紙は引續き「Tijdschrift」の印刷所で印刷せられた。ミンスター編輯者としても亦辯論家、組織者としてもすぐれた才能を有してゐた。彼の週刊紙の論文を彼は主に自分一人で書いたが、それに並んで彼は活潑な集會活動を行ひ、「闘争」が思想的に指導し、且つ擁護してゐた(之は當時すでに出来てゐたのだが)ドイツ逃亡兵協會の中に次第に大きな勢力を占めるに至つた。事實「闘争」はやがて逃亡兵の間に非常に廣まるに至り、特にドイツの脱走兵が數百人も炭坑にあつて働いてゐたリンブルグでは非常に多くの人々に讀まれるに至つた。多くの町には

所謂「闘争グループ」ができたが、それは即ち政治的目的にすまうとする「闘争」讀者の會であつた。<sup>(1)</sup>「闘争」は拘禁所にも配布せられるに至つたが、それは一九一八年の春ドイツ公使がオランダ政府に拘禁所に於ける配布を禁止してもらひたいと懇願したので、中止せられてしまつた。<sup>(2)</sup>ミンスターの努力はオランダに在るドイツ逃亡兵と勞働者の間に革命的、社會主義的な統一戦線を形成することを目標としてをつた。そしてその最後の目的はドイツの革命であつた。

革命の火花をドイツに持ちこむためにミンスターは彼の新聞の密輸入を組織した。オランダに隣接したライン・ヴェストフアレンの工業地帯はかゝる宣傳攻撃のためには特に適した土地であつた。その場合ミンスターにはデイスブルグで彼が以前活動した爲に生じた色々な連絡が非常に好都合なものとなつた。一九一七年八月初め參謀本部代表部では帝國郵便本局に對して、「闘争」があらゆる手段をつくして密輸入されてゐること、特に最近アムステルダムからベントハイムへ送る新聞小包の中にそれが發見されたことに關して注意を促した。それと時を同じうして「闘争」が煙草の包みの中に入れて多數持ちこまれたことが報告された。<sup>(3)</sup>ミンスターの依頼によつてドイツの逃亡兵が密輸入に當つてゐた。ウォルクガント・ブライトハットといふポーランド在住のドイツ逃亡兵は、一九一七年末「自由新聞」に書いた論文の中でドイツ國內で更に同紙の複製が行はれてゐたと言つてゐる。<sup>(4)</sup>一九一七年十月には、「闘争」が依然として以前のデイスブルグの豫約者の手に届

いてゐるといふことが監督總監の許まで分つてゐたが、そのことは事實かゝる複製があつたことを示してゐるものゝやうに思はれる。<sup>(5)</sup>

(1) 闘争 一九一八年五月四日附第二卷一號

(2) 一九一八年のドイツの崩壊の原因第一〇卷一、二七三頁

(3) ベルリン陸軍省記録 軍隊部

(4) 自由新聞 一九一八年一月五日附第二卷二號

(5) ベルリン陸軍省記録 軍隊部

ミンスター自身は一九一七年九月十一日に郵便と「闘争」の小包みを密輸入せんとしてドイツの國境警備員ニールシュタインに捕へられた。彼のために郵便物をドイツから持つてきてゐた「女同志」が彼を裏切つたのであつた。ミンスターはドイツ政府に對する闘争の生命でもあり、他の追隨を許さなかつたのであるから、彼が居なくなつたことはそのまゝではすまされなかつた。しかしながら彼さへやつつけてしまへば大丈夫だと最初ドイツ當局が考へたのは誤りだつた。なるほど彼の後継者たちはその獨創性と才能において彼に比することはできなかつたかもしれないが、革命的な運動はその時すでに充分な自活力をもつに至つてゐたので、彼等はその最も活動力を具へた闘士を失つても充分持ち堪えて行くことができたのであつた。運動はしかしその面貌を變へてしまつた。そしてその場合最も損失をうけたものは實に聯合國であつたのである。

ミンスターは或る程度まで西部諸國に同情をもつてゐた。彼の長いアメリカ滞在がそれに與つて力があつた。彼は彼の意見によれば世界中で最も反動的な國家としてドイツを攻撃した。彼はドイツとオーストリアを世界戦争の責任を負ふべき元兇なりとした。彼は自ら、自分は「闘争」をドイツ國民にドイツの帝國主義と軍國主義のおそるべき罪惡を理解せしめるために創刊したのであると言つてゐる。<sup>(1)</sup>これに反してイギリスは彼から寛容な取扱ひをうけてをり、英國の戦争の目的を好意的に解釋した「ウイン労働者新聞」の記事は「闘争」にも大賛成をもつて轉載されてゐる。<sup>(2)</sup>そしてミンスターは國際的プロレタリアートの見地に立ち、斷乎たる連帶的革命行動を要求してゐたのであつたが、此の場合には、社會民主主義や議會主義とても決して對立しないと彼は考へてゐた。彼は、西部諸國の民主主義はどんな場合でも君主政體のドイツよりも數段高い段階に立つてゐると露骨にのべた。

(1) 闘争、一九一七年七月二十八日第一卷一四號

(2) 同紙、一九一七年八月十八日第一卷一七號

「闘争」がミンスターの指導下に主張してゐた思想は聯合國の考へとつねに多くの共通點をもつてゐた。兩方ともドイツの「軍國主義」に對する憎惡に於て、又戦争の責任をドイツに負はせることにおいて一致してゐたのであるから、兩者は一本の道を一緒に歩むことができたのであつた。實

際、聯合國も亦ドイツに革命がおこることを望んでゐたのであるから、聯合國にとつては「闘争」は、それが自分らの弱點をそつとしておいてくれるかぎり、貴重な盟友であらねばならなかつた。第八軍團司令部代表部は一九一七年八月六日、敵國情報部は「闘争」がドイツ國內に多數配布されることに大きな價値をおき、その密輸入をあらゆる方法で支持してゐる事實を報告してゐる。<sup>(1)</sup>或るドイツの逃亡兵もその訊問の際、「闘争」をアルンハイムに居るフランス間諜團長の依頼によつて配布した旨を自白してゐる。<sup>(2)</sup>一九一八年一月には、その時は實は「闘争」が西方諸國に敵對的態度をとつてゐたのであつたが、それでも適當な記事を選択して縮刷された同紙が多數フランス飛行士によつて投下せられた。ミンスターが發行人であつた間は「闘争」は屢々ベルンの「自由新聞」から取つた記事を轉載した。

(1) 司令部記録、第三部第二課

(2) マルリン陸軍省記録、軍陸部

ドイツ當局は「闘争」が戦争中イギリスから補助金をもらつてゐたと信じてゐたことは、少しも驚くにはあたらない。彼が自ら言つてゐるところによればミンスターはヘーグ駐劄のアメリカ公使とよくつきあつてゐたゞけではなく、テンスレーの事務所に移つてゐたイギリス人とも親密な交際を結んでゐた。よく内情に通じたドイツ防止局の手先は一九一七年五月末、ミンスターはドイツに

革命をおこすといふ計畫をアメリカ公使に打明けた旨を報告してゐる。それによれば、ミンスターはアメリカ公使からは拒絶されたが、公使は彼をイギリス公使に紹介した。イギリス公使はしかし自らそんな危険な仕事には係りたくなかつたので、それを總領事マックスに委せ、マックスはさらにそれをテンスレーに委せた。そしてテンスレーは仲介人を通じてミンスターに豫約金の形式で資金補助を約束した<sup>(1)</sup>。これに對する確證は未だ上つてゐない。この報告を信じてよいとするならば、ミンスターは所構はずその支持をもつたのであつた。彼がイギリスから金を貰つてゐた手先であるとの非難に對しては、一九二〇年にドイツ獨立社會民主黨の質問に答へてオランダ社會民主黨の指導者達が極力彼を辯護してゐる。<sup>(2)</sup>兎に角、ドイツ政府に對するその闘争のイニシヤティブは彼自身から出たものであつた。

一九一八年一月十九日、ミンスターが居なくなつてから間もなく、「闘争」はそれはテンスレーからもらう金でからうじて存続してゐるのだといふ「ベルリン日々」の非難を却けてゐる。同紙は、それが存在するのは全くその讀者の犠牲的精神とオランダ社會民主黨の黨印刷所から與へられた信用にもとづいてゐるものであると強調した。<sup>(3)</sup>二月二日には同紙は新たにその財政的窮境を訴へ、その發行を停止せねばならぬやうな危機に脅かされてゐると言つてゐる。しかしそのやうな事になるはずはなかつた。反對に同紙は七月以降その紙面を擴張さへすることができた。同紙は大きなボルシエウイキ運動に参加したのであつた。

- (1) ヘルリン陸軍省記録 軍隊部  
 (2) 一九一八年の獨逸崩潰原因第五卷一九〇頁  
 (3) 闘争 一九一八年一月十九日第一卷三九號

すでにミンスターの指導下にあつて「闘争」は、カール・ラデックに委されてゐたストックホルムのボルシェヴィキ中央委員会外國代表部と親密な關係にあつた。ミンスターはラデックと文通してゐた。「闘争」の發行所では、ラデックが出してゐる「ロシア革命の使者」から註文を受取つた<sup>(1)</sup>。しかしながらミンスターは決してレーニンの無條件な信奉者ではなかつた。彼はレーニンがドイツに對する戦争を中止しようとするや否やレーニンの攻撃をはじめ、單純媾和はインターナショナルに對するもつともたちの悪い裏切りであると聲明した<sup>(2)</sup>。ミンスターが居なくなつたのち、オランダ社會民主黨から一時的に黨幹部の一人T・C・セトンが編輯事務を繼續してゆくことを委任せられた。一九一七年十二月三十日のドイツ「闘争グループ」の會議でドイツの逃亡兵オーシエル、シエーンベック、G・トリールベルが編輯人に選ばれ——それに一九一八年十月十三日ウイヘルム・ピークが第四編輯人としてつけ加へられた——J・C・セトンとO・トリールベルが管理者に選ばれた。

「闘争」はその新編輯部の下にボルシェヴィキの指導者達に對する攻撃を直ちに中止した。すでに十二月二十二日には同紙はミンスターの態度とは反對に、ボルシェヴィキの戦術を明白に是認した記事をかり上げてゐた。そしてそれのみではなかつた。新聞の全體の態度の中には著るしくその重

點のおき所がちがつてきた。同紙は益々完全にボルシェヴィキの方針におちこんでしまつたのであつた。ドイツ政府に對する憎悪はもはや以前のごとき重要な役割をつとめず、世界革命の思想が前面におし出された。聯合國の政府も、彼等がソヴェート共和國に對立するに至つてからは一向に遠慮されなくなつてしまつた。世界大戦に對して或る一國のみが一方的に責任があるといふ問題はしりぞけられて、すべての關係諸國は責任ありと聲明せられた。そして戦争の眞の原因として「闘争」は資本主義的世界秩序をあげたのであつた<sup>(3)</sup>。一九一八年の經過中ボルシェヴィキの指導者たちの論文の轉載は益々多くなり、レーニン、トロツキイ、ジノヴィエフ、カール・メネフ、ベトロフ、ラデックなどが幾度も喋つたのであつた。

- (1) 闘争、一九一七年十一月二〇日附第一卷二九號  
 (2) 同紙、一九一七年十一月二十四日附第一卷三一號、十二月八日附三三號  
 (3) 同紙、一九一八年四月六日附第一卷五〇號

ミンスターの下にあつて「闘争」は民主主義を主張してゐた。一九一七年十一月末ミンスターは「労働服を着た民主主義」をその努むべき目標とし、「完全な民主主義、眞の議會主義は労働者の階級闘争を押しすすめることができる」と書いてゐた<sup>(1)</sup>。しかるに新編輯部はこれと全くちがつた調子をひやかした。一九一八年二月九日の同紙には「デマゴギッシュな民主主義」の表題の下に次のごとき言葉が載つてゐた「民主主義！美しい言葉だ！……しかし今日ではそれは單に金箔であり、くだらぬ茶番であるにすぎない……ロシアに於てすでにプロレタリアの獨裁がうちたてられ、世界の

民主主義國家は自由の墓場となつてゐる今日、戦争にどうやら生き残つたやつらはまだ口の中で「民主主義」を唱へてゐる。……民主主義にあらすして働蜂の支配である。雄蜂屠殺はすでに明日の問題となつてゐる。<sup>(2)</sup>今や「闘争」はボルシェヴィキの政策の擁護とロシアにおける新しい國家<sup>(2)</sup>、經濟組織の報告とをその最も重要な任務とするに至つた。すでに一九一七年十二月「Tribune」が新ロシア政府から西ヨーロッパにおけるその主力機關として活動することを頼まれた後は、「闘争」が同紙の仕事の大部分を引受けた。<sup>(3)</sup>

(1) 闘争、一九一七年十一月二十四日附第一卷三一號

(2) 同紙、一九一八年二月九日附四二號

(3) 戦時新聞局外部部稿、一九一八年外國新聞要綱秘密附録、ベルリン一九一八年三八頁

一九一八年六月以來「闘争」は征服的な英米佛帝國主義に對してロシア及びドイツプロレタリアートは同盟せよと主張した。このための前提は勿論ドイツの革命であつたが、「闘争」は確信をもつてそれを豫言できると思つてゐた。十月十九日に「闘争」はロシアの中央執行委員會の宣言書轉載してゐるが、その中には「聯合國の盜賊共こそ一層危険な、一層呪ふべき敵」であると語られてゐた。これと歩調を合せて同紙はドイツ労働者に、ロシアと一緒になつて西部諸國に對して新しい戦線を布くことを勧めてゐる。聯合國では、はじめ彼等が保護した「闘争」によつて自分たちが最も猛烈に攻撃されてゐることを知つた。その支持などといふことはもちろん問題にはならなかつた。

一九一八年二月二日に「闘争」が「ベルリン日々」の攻撃に答へて「我々の機關紙の態度が、我々は決して買収されてはゐないことを保證してゐる」と書いた言葉は今や全く適中したものとなつた。

他の問題は、「闘争」が一九一八年にロシア政府から支持をうけたかどうかといふ問題である。このことについては、彼等の態度がこの推測を非常に確からしく思はせると言ひうる。十月に參謀本部代表部はベルリンにあるロシアの通信代理部(ロスタ)にあてたセトンの電報内容を知ることができたが、その中でセトンはイギリスとフランスの新聞の購入のために各五千グルデン、三臺の新しい鑄造植字機械の分として三萬グルデンを要求してゐた。<sup>(1)</sup>セトンは「Tribune」のための活動の外に「闘争」の管理者の一人であつたのだから、「闘争」も亦ロシアから資金の供給をうけてゐたのだとも推測されるわけである。

(1) ベルリン陸軍省記録、軍隊部

その十九ヶ月の存続期間中に「闘争」は規模においても配付においても絶えず發展した。四頁から六頁への最初の擴張は一九一七年七月に行はれたが、一九一八年七月以來は大版であらわれ、最初再び四頁、その後十月十三日に六頁への内容の新たな擴張が決定せられた。その逮捕後ミンスターは「闘争」の豫約者の數を千八百人と語つてゐるが、<sup>(1)</sup>第七軍團司令部代表部防止課では一九一

七年十二月五日その発行高を五千と推定した。一九一八年十月十八日アムステルダムで開かれたオランダ在住ドイツ「闘争グループ」の會議で編輯者シェーンベックは、発行高は年初以來五倍に上つたと報告することができた。<sup>(1)</sup>一九一八年の夏以後は「闘争」はあらゆる新聞賣捌所で買られてゐた。

(1) ベルリン陸軍省記録、軍隊部

(2) 闘争、一九一八年十月十九日附第二卷二五號

「闘争」はオランダの輿論には殆んど見るべき影響を與へなかつた。オランダ國民は過激社會主義的傾向には未だ不慣れであつた。そしてその上同紙には依然逃亡兵の機關紙であるといふ汚點がこびりついてゐて離れなかつた。「闘争」の意義は、それがドイツの革命化のために働いたといふこと、更にそれは革命に働きかけつゝある外國の思想、最初は西部諸國の宣傳部の思想、後にはボルシエヰキ的な世界革命の思想をドイツにもたらしたことにあるのである。オランダからの革命的宣傳は、それがドイツ國民の生活神經を直接脅かすに至つた時一層おそろしいものとなつた。ライン・ヴェストフアレン工業地帯は戦争の武器庫であり、軍隊と故郷との結合における最も重要な一環であつた。こゝに革命が勃發したならば、ドイツの崩壊は不可避なものである。ライン地方に革命が廣まつてゐるとの報告が一九一八年十一月九日の司令部の決定を根本的に左右したと言はれてゐる。

る。そしてカイゼルのオランダ領への逃亡の決心もこの報告の印象のもとに決められたのであつた。革命の勃發後逃亡兵のドイツへの歸國のために、「闘争」の發行も終りとなつた。その最終號は一九一八年十一月十三日に發行せられた。

ドイツ國內の革命黨を金と與へて支持しやうとしたフランスの官廳の試みについては、我々はデグランジェ中尉の本によつてそれを知ることができ<sup>(1)</sup>る。デグランジェ——彼の正しい名前はヨセフ・クローチエといふが——はフランス參謀本部から秘密の使命を帯びてオランダに派遣せられ、最初は對獨封鎖の監視を委されてゐたが、一九一八年七月以來彼は公使館附武官ブーカベル將軍の下に立つやうになつた。デグランジェは確信的な革命家の假面のもとに聯合國に同情をもつてゐたオランダ社會民主黨の指導者たちの信頼を得ることができた。そして彼等を通じてオランダに在るドイツ革命家たちとも知合ひになつた。このやうな關係は、彼をしてドイツにある革命家たちの革命運動を積極的に支持する計畫をもつてゐたブーカベル將軍のもつとも適當な協力者たらしめたのであつた。ブレイメン、シュトゥットガルト、ベルリンにある過激社會主義者への多額の金の交附が豫定せられた。ブーカベルは、ドイツ人に金を渡すための方法を見つけ出すやうにデグランジェにたのんだ。そしてデグランジェは彼の努力は成功したと言つてゐる。<sup>(2)</sup>もしこの點に於て屢々あまりあてにならない證人である彼の言葉を信用しやうと思ふならば、その金の出所は秘密にせられて手渡

されたのだと思つてよいであらう。少なくとも獨立社會民主黨は敵國からの資金の提供を斷乎として斷つた。そしてそのことは大戦中にドイツ防止局にも知られてをつた。或る場合のときは、聯合國から出てゐるらしいといふ疑問があつたために數百萬の寄附申込みが斷られたのであつた。<sup>(3)</sup>

(1) Pierre Desjardis, 前掲書

(2) 同書二九四頁

(3) 參謀本部代表部記録

その上フランス政府は間もなくブーカベル將軍の努力を打切らせてしまつた。フランス政府はボルシェヴィキ的思想に彼等が感染することを憂慮しはじめた。そしてオランダにあるその代表者に、たゞ向ふの申出を待設ける政策に出る丈にして、決して積極的活動に出ないやうに指令したのであつた。

## 五、宣傳の内容

敵國宣傳の範圍は戦争の経過と共に始めは控目になされて居つたが次第に非常に大なる範圍に擴大發展して來た。宣傳の内容と論調も亦同様に上昇増大して來た。多數のドイツ兵は戦争の前半期に於ては宣傳に對して可なり免疫的であつたことを敵はよく知つて居た爲、精神的基礎の慎重なる準備に限る賢明さを充分所有して居た。戦争が次第に永引くと共にそれにつれて次第に困窮が増大した爲ドイツ國內に於ては次第に戦争に對する嫌惡が増大し批評的傾向が現れてきた。この批評的傾向は西洋諸國に一層喜んで歡迎され、精密に觀察された捕虜の陳述や分捕られた手紙、スパイの陳述、及びドイツ新聞の日々の記事の綿密なる閱覽はドイツ軍隊及ドイツ一般國民の中に於ける空氣の悪化の全く妥當なる姿を與へた。敵の宣傳はドイツ國內に於ける不滿の程度に従つてドイツ政府及軍部に對する彼等の攻撃を巧に調節することが出來たので、敵のビラの調子に依つてドイツ兵の士氣に結末をつける事さへ可能であつた。一九一六年の後半期以來佛蘭西の宣傳は次第に多くその堅固な砲列の陣を布いた。宣傳は捕虜や戦死者から奪つたドイツ婦人の悲歎苦痛の手紙を、「ドイツからの手紙」と云ふ題目を付けて、週期的に之を印刷し、ドイツ戦線に撒布し始めた。凡ゆる兆候特にドイツ内部に於ける過激社會主義的宣傳の尖鋭化から宣傳は反君主主義的運動を始める事が今



や可能なりといふ結論を導いた。<sup>(1)</sup>七月以來ドイツ前線には革命と大衆ストライキを要求する赤い小紙片が撒布された。曰く「ドイツ君主一族を逐ひ拂へ。彼等は自由を求めて戦ふ國民を戦争に依り弱める。彼等はお前達の子供をもつと服従させる爲にお前達を屠殺臺に導く。」又曰く「降参しろ。やらうと思へば出来る。お前達を屠殺臺に送る人々を追拂へ。彼等のみがお前達の敵なのだ。」或ひは曰く「三日間大衆ストライキをやれ。そうすれば勝利はお前達のものだ。この戦争はそれでも尙ほ勝利を以て終結し得るか。然り。然も窮極の大勝利を以て終るであらう。則ちその勝利は奸商、武器御用商人、大工業家及貴公子、王侯に對する労働者の勝利であり、プロレタリアの彼等搾取者に對する勝利である」と。

(1) Herberichsen 四五及七五頁以下

第二の兵站は一九一七年三月のロシア革命及同年四月のアメリカ合衆國の参戦に依りもたらされた。ロシア皇帝の滅亡の後始めて、聯合國側の戦争を、君主政的、軍國的專政政治に對する自由民主主義的國民の戦争として、表すことが可能となつた。中立國は次第に前述の此の解釋に傾く様になり、周囲を包圍されたドイツ國に對する集中された世界的輿論の壓迫は、日増しに強くなつて來た。國外に住めるドイツ國民の大部分、否、故國に住めるドイツ人の多數すらも、此の暗示に屈したのである。ドイツ皇帝及全ホーエンツォレルン王朝に對する公然たる攻撃の時代が到來した。早

くも一九一七年春フランス宣傳はウヰルヘルム二世に對して向けられ、ジークフリード、バルダーの血まみれたパンフレットに依つて、攻撃を開始した。彼のパンフレット「暴風の鳴聲」の中に於てバルダーは次の如き標語を載せて居る。曰く「我々は永遠の神の下に於てホーエンツォレルン王朝と戦ふことを誓ふ。彼等の頭が刑臺の上から下にころがり落ちざる限り、平和は訪づれぬであらう」と。無作法さと無風流なる點に於ては、此の拵へ物は殆んど何物にも劣らぬものであつた。併し敵の宣傳が最も危険且最も有害なる段階に到達したのは一九一八年夏始めて、則ちドイツの攻撃力の減退及ドイツ軍の退却中に於てであつた。兵士は士官に對して暴行を働く様に煽動された。<sup>(1)</sup>大砲の筒先の向を變へよ」と今や云はれた。曰く「それを妨げんとする人は皆射殺せよ」。曰く「お前達の暴君と同様にお前達もするくあり得るのだと云ふ事を示せ。秘かに煽動せよ。お前達の仲間を啓蒙せよ。しかし服従を拒絶せよ。お前達が自信がある時にのみお前達の士官をぶち殺せ。そうすればお前達は決して復讐され得ぬから」と。<sup>(2)</sup>英國人も佛國人に後れては居なかつた。曰く「お前達は彼等指導者の犯罪的愚行に對して如何程の賠償を聯合國は要求するかを聯合國側に尋ねて見るがよい。そしてお前達は彼等にそれを支拂ふべきだ」と。之は十月に於ける英國のビラの勸告である。「若し聯合國が我々の指導者は罰せらるべきであると要求するなら、我々は彼等の咽喉を断ち切り彼等をバリーへ送らうではないか。現在多かれ少なかれ、二、三の生命が何で重要なものか。」<sup>(3)</sup>これ以

上には及ぶ事が出来なかつたのである。

(1) 此のビラは「獨逸の戦友諸君」と題されたもので「佛軍に投降せる民主々義の同志より」と下書されてゐた。著者は恐らくジークフリッド・バルダー。之は五月の中旬から下旬にかけて全フランス戦線に撒布されたものである。獨逸國文庫

(2) ビラ「同志に告ぐ」と題され「佛國に投降せる民主々義者より」と下書あるもの、著者は恐らくジークフリッド・バルダー。獨逸國文庫

(3) ビラ「二三號カブト」獨逸國文庫

フランスの宣傳の本来の主要部分は、他國征服の爲に「故意且、冷酷」に、戦争を惹起したドイツ政府に對する非難であつた。ドイツ軍隊の精神は敵の破壊欲から故國を防禦するの要ありとする信念に基いてゐたので、此の確信はドイツ國自身が惡意を以て、平和的惡意なき世界を襲撃したのだと云ふ主張に依り覆へざるべきであつた。

(1) 「獨逸戦友に與へる獨逸捕虜の公開狀」佛國側の偽造物で一九一五年の秋撒布された。獨逸國文庫

佛蘭西人の其の様な確言をドイツ人は殆んど信用しないであらうと云ふ事は明らかに知られて居つたので、それだけ益々熱心に、自ら同様の非難をドイツ政府、君主及び支配階級に對してあげた所のドイツ國民の文書が擴げられ、利用し盡された。グレルングの著述はそれ故にドイツ戦線に撒布されたビラの中で特に重要であり且決して古くなることのない構成部分をなして居つた。同様な方法を以て、同様の問題を扱つたレーゼーマイエル及フェルナウのパンフレットも擴がつた。ジークフ

リード・バルダーは全責任を君主個人自身にのみ押し付ける事を好んだ。一九一六年一月佛蘭西宣傳事務所は中央列強の戦争責任のみを論じた特別の新聞をドイツに密輸入させた。その新聞の表題は「戦争の口火を切つたのは誰だ。眞實を求める人々の爲に二、三のドイツ人に依つて出版された新聞」といふものである。例へばその第四號は一九一四年七月二十五日から三十一日迄の戦争反對の「前進」の論説を内容とした。

(1) Harni et Tomelak 三八頁以下

戦争の始めに於て「J'accuse」が聯合國宣傳の見せ物であり、際物であつたとすれば、一九一八年にはリヒノウスキー公の回想録がこの役割を擔當したといふべきである。此のドイツ政府に對する新らしい公訴狀は、その著者がロンドン駐劄の大戦前の最後のドイツ大使であつた事に依つて特殊の意義を持つた。正に彼自身が英國の政治の平和愛好に對する證人として出現した事は、全世界に對して最も大きな印象を與へたに相異なかつた。リヒノウスキーは一九一六年夏彼の著書「一九一二年より一九一四年に至る余のロンドンに於ける使命」を著した。該著書はその數年間に於ける獨逸政治の鋭い批評を内容としてゐた。更にこの著者は聯合國側の宣傳に依り與へられた戦争標語に同意し、その語の正確さを與へられたものとして認めた。彼は次の如く書いて居る。曰く「ドイツに於ては生ある者が未だ死者に依り支配されて居る。最も崇高な敵の戦争の目的則ちドイツの民主々義化と云ふ事は實現するであらう」と。

リヒンウスキーは彼の記録を公衆に與へようと云ふ事はしなかつた。彼の英國との和解を目的とする政策を是認せしむる爲に、彼はその記録を二三の政治上の友達に、就中、國立銀行總裁兼樞密顧問官ツイッチングに内々に與へた。ツイッチングは一九一七年七月にその記録をベールフェルデ大尉に更に與へた。この宗教心深き、眞實狂信者は彼に同様に内々で與へられた著書を自己の責任を以て五十部出版せしめ、其等の書物を各方面の政治家に送る事を躊躇しなかつた。かくしてその範圍は非常な迅速さを以て、あたかも雪達磨の様に、秘かに廣がつて行つた。九月の始めには上級檢閲所の報告に従へば既に二千部流布して居たと。代議士シャイデマンは其の書物を種々の方面から送られて五回も手に入れた。

(1) 戦争新聞事務所の文書 上級檢閲所。

其の著書を國內に廣めた平和主義者達は又外國へ發送する事を引き受けた。一九一八年二月二日二千部が臨時參謀本部防衛に依りベルリン内の一の地下室にて押收された。其等の印刷物はスイスへ輸出される筈になつて居た。新祖國同盟の事務擔任者たるエルスベス・ブルツクが其の印刷物を發送する迄そこに預けておいたものであつた。出版所と印刷所(W・パウル・ゲルリッツ)は偽造されて居た。その表題には「戦争に對するドイツ政府の責任」と書いてあつた。國境を超へてデンマークへ著書を送る試みはよりよく成功した。その爲に北シユレスヴィヒの代議士H・P・ハンセンが味

方に引入られた。ベールフェルデは一九一八年の一月三十日彼に若干の印刷された部數の著作物を與へた。それはハンセンによつても正しく促進せしめられた。リヒンウスキー自身は三月五日の帝國宰相ヘルトリング伯爵に宛てた手紙の中に於て、彼のパンフレットを公表した事を前代未聞の信頼の裏切だと烙印づけた。しかしH・P・ハンセンは之に反して、彼の一人の友人から、侯爵は、その宣傳が廣がつた事を大變喜んで居るとの報告を受けた。

外國での公表があつた後リヒンウスキーに對する刑法上の手續があらゆる方面から激勵された。就中、ルーデンドルフ將軍は非常にこの事に努力した。

(1) ヘルリン陸軍省の文書 軍隊部

(2) H. P. Hansen 第二卷 二二二頁

(3) Norddeutsche Allgemeine Zeitung 一九一八年三月十九日附一四四號

(4) H. P. Hansen 第二卷 二二〇頁

ツイルヘルム皇帝も亦同様な意見を主張した。がしかし帝國裁判所は、侯爵はその公表には關與して居らなかつたと云ふ理由で審議の手續を開始する事を拒絶した。之に反してプロンヤ貴族院は侯爵を除名する決議をした。ベールフェルド大尉及エルスベス・ブルツクは別々に軍法會議に付せられ審議されたる結果無罪放免された。

(1) 一九一八年 停戦前史の公の文書 外務省、内務省出版 第二版、ベルリン 一九二四年 四頁

(2) ヘルリン陸軍省の文書 軍隊部

外國に於けるその著述の最初の印刷はストックホルムの瑞西左翼社會主義新聞「オルケッツ・ダ  
クブラド・ポリチケン」に依り三月六日に始められた。聯合國側の宣傳は全世界に渡つて廣大に廣め  
る配慮をした。この宣傳は特に英國政府と密接な利害關係があつた。此の時代の凡ての苦痛の中  
あつて、此の國全體に亘つて、この戦争の單一性と正義に關する壓倒的感情が生じて來た」と自由  
主義の「ウエストミンスター・ガゼット」は四月三日に書いた。(1)五月九日にビーバー・ルック卿は下院  
に於てリヒノウスキーの記録は既に四百萬部以上、殊に北部英國に於ける工業に従事せる人々の間  
に於て廣がつてゐると報告した。労働省はストライキの減少はこの著述の公表に基づくものである  
との見解を有すると。(2)當時勝利的ドイツの春の攻撃についての報告を耐へ忍ばねばならなかつた英  
國々民の精神的抵抗力は次第に強くなつて來た。

(1) マックス・フォン・バーテン親王者「回想と文書」ベルリン及ライプツィヒに於て一九二七年出版二七二頁

(2) 一九一八年五月九日のタイムズ紙

英國人がドイツに於ても亦そのパンフレットを廣める事を促進させようと試みた事は誠に當然な  
事であつた。彼等自身が大いに驚いたのであるが、彼等はその際に何等著しい抵抗を受けなかつたの  
である。(1)海軍軍令部の報告に従へば、五月の始めに既に一萬部が英國から輸出されたとの事である。  
則ち三月十八日には上級檢閲所はその覺書は最早既にドイツの廣い範圍に渡つて知られたと云ふ理  
由に基づいて、パンフレットの差押及複製、批判の禁止を撤廢した。(2)先づパンフレットがドイツ

國外に於て見出した反響及そのパンフレットをドイツへ輸入せんとする敵國の努力は、五月の始め  
に輸入禁止を惹起し、而して七月には再び帝國裁判所の差押手續を惹起させた。英國人には然し戦  
線に亘つて撒布する方法がまだ残つて居た。彼等はその小冊子の内容を二つのピラの中に集め、そ  
れを一版で十萬部づつとして、ドイツ戦線に撒布した。一枚のピラから續いて第二版が発行されね  
ばならなかつた。第四軍の教育士官の言に従へば、これらの宣傳ピラはドイツ軍に對して特に深い印  
象を與へたとの事である。(3)

(1) キヤムフェル・スチュアート一〇四頁

(2) 戦争新聞事務所の文書 上級檢閲所

(3) 第四軍司令部の文書

フランス人も熱心にリヒノウスキーの場合を利用せんと努力した。パンフレットの拔萃と同時に  
ミューロン博士の廻狀及レーゼマイヤーの批評とを載せた一九一八年三月二十七日の「自由新聞」  
はドイツ戦線に亘つて撒布された。「自由なドイツ語」は繼續せる三號に亘つてリヒノウスキーの  
曝露に従事した。其の外ローザンヌのペイヨットに於て同様に、當時ベルリンに於て印刷され差押  
さへられた。印刷物が瑞西に向ひ同じ表題たる「戦争に對するドイツ政府の責任」と云ふ言葉を持  
つた小さなピラの形に複製された。その複製にはレーゼマイヤーの序文と、そしてミューロンの四つ  
の文書が附加せられてあつた。その複製は一九一八年の秋飛行士及氣球に依つて澤山擴げられた。

合衆國に於てはクリール事務所がリヒノウスキのパンフレットのドイツ版を六十六萬部以上分配した。<sup>(1)</sup>

(1) G・クリール、一八九頁以下及四五七頁

リヒノウスキの記録の影響は、同じ時代にドイツの戦争の責任についてのミュロン博士の著述が公表されたと云ふ事に依り、著るしく増大した。ウィルヘルム・ミュロン博士は戦争が始まつた後間もなく良心的思慮からクルツ工場の一員としての彼の地位を退いて、スイスに赴いた。そこに於て彼は同じ平和主義を奉ずる仲間に参加した。彼の心中に、中歐諸國が戦争の勃發に關して重大なる責任を負うて居ると云ふ見解を覺醒せしめた。體驗について、彼は或る廻狀の中に報告した。その廻狀は彼が一九一七年の夏ドイツの公人及帝國議會の多數黨の首領に贈つたものであつた。<sup>(1)</sup> その小著作は平和主義者の間に知られ、そして流布し始めた。ドイツ國會議員ハンセンは一九一八年一月六日に一冊の印刷物を同僚から受けた。<sup>(2)</sup> 外國の爲に定められたリヒノウスキの覺書をベルリンに於いて二月二日差押へたる際、ミュロンの廻狀がパンフレットの中に挿入されて居るのが見出された。それは外國に於ては同様に大なる人氣を呼び益々廣められて行つた。

(1) アルフレッド・直・フリード、「余の戦争日記」四卷チューリッヒ一九二〇年、一九一八年三月二十二日の記入

(2) H. P. Hansen 二卷三〇三頁

フランスの宣傳が一九一八年の夏ベイヨットに於てリヒノウスキの覺書を發行した際、宣傳は

ミュロンの廻狀の外に尙更に戦争の責任問題についての同じ著者の三つの著作を附加する事が出来た。六月には更に彼が最初の戦争の數ヶ月の間書いた日記文が「歐洲の荒廢」と云ふ表題の下に發行された。その日記文の中に於てはミュロンは確信を持つ平和主義者としての態度を示した。中立國に於ける壓倒的多數と平和主義者の彼はドイツの政治及戦争は時代遅れであり、簡単に云へばドイツは戦争に於て悪い事柄を代表して居るといふ點で意見が一致してゐたと。フランス人はその著作をチラシビラとしてドイツ戦線に撒布した。

個々の聯合國の内部に於ては獨逸皇帝の人格が妨げられる事なしに誹謗され罵倒されたが、それだけ又獨逸兵士の存在が信じられる限り、單純なドイツ兵士の君主々義的感情を害さぬ様に非常に用心した。最初は獨逸皇帝について如何に慎重に意見が述べられたかは、或るドイツ捕虜の公開狀<sup>(1)</sup> 即ちハンシーが一九一四年九月に編纂し十月に五萬部を撒布された宣傳ビラが示してゐる。その中には次の如く書いてある。則ち「永い間主戦派に譲らなかつた我々の皇帝が彼の北方旅行を中止して歸つて來た時は餘りに遅かつた。最早歸る必要がなかつた。彼は血なまぐさき戦禍に巻き込まれたのだ」と。獨逸皇帝にはここに於ては平和愛好が明確に證明されてゐる。同じ事は第一號「誰が戦争の口火を切つたか」と云ふビラの中に於て更に一九一六年に起つた。一九一八年八月のロンドンに於ける國際宣傳會議に於てホーヘンツォレン王朝に對する總ての攻撃は實際或ひは少くとも表

而上ドイツの資料から採らるべきであるといふ決議が成された。<sup>(1)</sup>ドイツ側の攻撃も勿論一九一七年以來缺けてはゐなかつた。就中、無軌道ぶりによつてフランス宣傳に取つて新時代を導いたものはデーグフリード・バルダーの著述であつた。

(1) キムプフェル・スチュアート、一九三三頁

ジークフリード・バルダーと云ふ匿名の背後に如何なる人物がかくれて居るかは屢々問題となつた。ドイツの防禦事業さへ、戦争中の熱心な努力にも拘らず、その秘密をあばく事が出来なかつた。彼は瑞西のある事情通に依つて恐らく故意にでなく、邪道に誘ひ込まれた。その報告に迷はされて永い間ジークフリード・バルダーはオーストリー國民バウル・シイフの匿名であるとされてゐた。彼は「自由新聞」の紙友で、一九一八年醫師としてジュネーブの児童病院に働いて居つた。<sup>(1)</sup>

(1) 臨時参謀本部の文書

この推察は誤りであつた。ハンシーは彼の回想録の中に於て全章を、ジークフリード・バルダーの人格についての議論に捧げ、我々をして彼の個性及動機に付て完全に精通せしめてゐる。勿論彼はバルダーの實際の名前を曝露しない様に用心してゐる。我々はしかし彼がフランスの捕虜收容所の中に居た事及び彼の故郷はバイエルンであると云ふ事を聞き知つた。部分的に非常に詳細にかいてあるハンシーの報告とバルダーと同じ捕虜收容所の中に一緒に居つたスイスに追放されたドイツの

捕虜の証言との結合によつて、今日に於てはバルダーと云ふ匿名を利用した人物はミュンヘンの前辯護士ウイヘルム・エックシュタイン博士であつたといふ證明が可能である。

國民軍の上等兵として一九一六年十月十二日にセント・ミイヒールに於てフランスに投降したエックシュタインは先づエタムベスの捕虜收容所へ送られた。彼の仲間の捕虜は屢々故郷に宛て、彼の事を報告した。彼は捕虜收容所に於て特にホーエンツォレン王朝に向けられたる革命宣傳を營み、ドイツ國內へ共和政治を輸入する事を説いた。彼が同じ内容の宣傳ビラをフランス宣傳の爲に編纂した事も知られてゐた。その宣傳ビラはドイツ戦線及ドイツ國內に散布されるべく計畫されてゐた。彼が瑞西に於ける革命的分子と結びついて居る事も知られて居た。報告に依つて彼に一つの特別の部屋が、彼が文章を書く所としてフランス人に依り用立てられて居つたのだといふことが明らかになつた。彼は一九一七年三月迄エタムベスに留まつて居つた。それから彼は四人の他の革命的考へを抱けるドイツの投降者達と共に、巴里の近くにあるスーシー要塞に送られた。そしてそこから宣傳的活躍をした。その四人の投降者の中にはロートリンゲン生れの現役の中尉がゐたのであつた。巴里に於ては彼等の仕事を痛切に必要として居つた宣傳の中心部が存在して居つた。スーシーに於ては彼等は特別の優遇を受けた。殊にエックシュタインは屢々フランス人に依つて平服を着て自動車で巴里に出掛ける許可を與へられた。<sup>(1)</sup>

(1) 臨時參謀本部の文書

或るドイツ衛生下士官の報告はジークフリード・バルダーとツイルヘルム・エックシュタインとの一致について何等疑を許さないのである。蓋しハンシーの述ぶる所によれば、ジークフリード・バルダーがフランスの宣傳將校に依り屢々平服で巴里に導かれたからである。彼には目撃者として巴里の國民の氣分及食料状態に就いての好意ある報告書を編纂する機会を與へようと言われ、更に其の上彼の品行方正のための報酬を與へようと言われた。彼の論文は一九一七年の十一月及一九一八年の四月に「巴里に於ける印象」と云ふ題目の下にベルリンの「自由新聞」に現れた。「自由新聞」からその論文は「自由なるドイツ語」に引きつがれた。そして今度は「ドイツ瑞西の旅行者の印象」と題して掲載された。スーシー要塞の四人のドイツ共和政治の宣傳員が、いかにして彼等の中尉に就てフランスの宣傳士官に知らしたかをハンシーは或る諷刺畫に描いた。ジークフリード・バルダーが認められる、この繪の下書には「最初の共和政治的ドイツ軍」とある。

(1) Hansi et Tomcat 九三頁以下九八頁

(2) 自由なる獨逸語 二三號、二三號

ハンシーがジークフリード・バルダーについて與へて居る性格描寫は、一般に強く諷刺的に色取られてゐる。ハンシーはジークフリード・バルダーを世事に疎い空想家であり、彼はドイツのツモ

ニツエロスの役割を演じ獨逸皇帝を王位から落し、彼自らドイツ共和政治の第一回の大統領の椅子を占める使命があると云ふ、妄想にとりつかれて居る者として描いてゐる。フランスの宣傳は彼の共和政的感激性と彼の作家的な議論好きな才能を充分に利用し盡したが、しかし彼を他の點では重要視しなかつた。バルダーは又フランス人に對して一種の獨立性を維持した。確信的平和主義者として彼は併合と徴發なき平和を要求した。結局彼は自分がハンシーに依つて單に利用されて居つたにすぎぬと云ふ事が、彼にも解らざるをえなかつた。一九一八年夏彼は怨を呑んで身を退いた。その時はフランスの宣傳が最早彼を必要としなくなつた時であつた。彼のドイツ共和政治に對する口頭による宣傳は捕虜收容所の中に於ては殆んど成功しなかつた。フイールツオンに於ては彼はドイツ兵士の敵意に逢ひ、急いで再び逃亡せねばならなかつた。戦争の間、エックシュタイン博士の活動について得た報告に基き、彼に對する逃亡による目下の處分は遂に反逆の犯罪にまで擴大した。一九一六年十月にエックシュタインは投降した。十一月に既にフランスの宣傳新聞即ち「ドイツ國民の爲の戦争新聞」に彼が協力して居つた形跡がある。即ちジークフリードと云ふ署名の詩それである。ピラ「地上の幸福。一九一六年のクリスマスの前夜」は「エックハルト」と署名され、戦線に撤布され、エタムベスの捕虜收容所に於て分配されたのであるが、それは彼の筆で書かれたのであると云ふ事は、既に彼の仲間の捕虜に依り承認せられ、特有の誇張せるスタイル及美しい形容

詞の無味乾燥な耽溺に依り證明せられた。それには就中次の様な事がかいてある。則ち「ドイツの勞働者は彼等の死者の敵、壓迫者、大工業家、田舎貴族の爲に新らしい財産と新らしい搾取の對象物を征服する使命を負ふてゐるのであらうか。奴隸化した住民がオステルヴィエンの大地主ウエストファーレン、ザーラビエンの大實業家に任意の廉い奴隸を供給する爲に、諸君は諸君の血を流す使命を有するのであらうか。」<sup>(1)</sup>

(1) 戦争新聞事務所、ピラ叢書

一九一七年一月以來従來の「ドイツ國民の爲の戦争ピラ」は「自由なるドイツ語」と云ふ新らしい表題の下に現れた。その内容は既に表題が示して居る様にドイツ革命家の寄稿及ドイツ語でかかれた反對黨の新聞の複寫から成つて居つた。バルダーの寄稿はその内に於て特に最初の時代に大部分を占めて居つたので、彼はその新聞の編纂人だと云ふ、捕虜仲間の報告は多分正しいのである。第一號に於て彼は始めてユダヤ人にとつて特徴的な匿名「ジョークフリード・バルダー」の下に現れて來た。その匿名を選んだのは彼は宣傳ピラ「共和政治は平和と自由とを意味する」に於いて次の如く基礎づけてゐる。則ち、「夫故に我々は恰かもローエングリンがブラバントのエルザの爲に闘へる如く差し當り密閉せる照尺を持つて戦ふ。我々が害し難くなればなる程益々我々の切り込みは力強くなる。」と。

「フアンニルの世界戦争の龍を殺す爲に我々は前進する。」

そしてその龍からニーベルンゲン城を取つて來る。」<sup>(1)</sup>

(1) 戦争新聞事務所の文書、ピラ叢書

「風の叫び」と云ふ題目の付いた「戦争と自由の詩」と云ふ小冊子はバルダーの第一回にして且最も偉大な作品であつた。それは一九一七年春にドイツ戦線に擴げられたが、勿論彼が欲した如く何百萬部も撒布されたのではなかつた。その詩は無邪氣さと無軌道振とに依り特徴づけられる。その小冊子の裏には「ドイツ民主主義者聯盟」と云ふ印刷があつた。

今やフランスの飛行家に依り撒布された宣傳ピラは「諸君の共和主義を奉ずる仲間」「諸君のフランスに在る民主主義者達」或ひは「フランスの捕虜收容所にあるドイツ民主主義者聯盟」と云ふ如き署名がしてあつてかゝる署名は益々増加した。然しハンシーによれば「ドイツ民主主義者聯盟」は、僅か一、二名そこそこの人にすぎぬと云ふ事である。スーシー要塞に於ける五人の共和主義者達は多分その中堅であつたであらう。但し佛蘭西人はそのピラを印刷する爲にドイツの捕虜達を利用した。<sup>(1)</sup>「風の叫び」は廣い黒・赤・金色の封筒の中に入つて、その表紙に自由を得んと努力する象徴として、古いドイツ大學生組合の色を持つた第一のピラであつた。二つの第二のバルダーの小冊子及今迄何回も云つたピラ「共和政治は平和と自由とを意味する」も亦同じ風に飾られてあつた。その内容も亦



バルダーに遡ることが出来る。從來フランス人は唯ビラに黒・白・赤の色を使用した。ハンシーの「或るドイツ捕虜の公開状」はドイツ帝國の色で飾られて居つた。週期戦線新聞「野線郵便」とその後継者「ドイツ國民の爲の戦争新聞」は一九一五年の十月から一九一六年の十一月迄單に黒・白・赤の色を持つて居たのみならず、亦第一頁にはドイツ帝國の鷲を示して居た。

註、G・クリール、二八五頁

「風の叫び」が擴がると同時にバルダーの誹謗書たる「ウイアルヘルム第二世よ、則ちドイツ皇帝よ、汝に我々は訴へる」が投下され始めた。ビラの中に於けるかくの如き、いやらしき調子を合意知つた事になかつたドイツ陸軍官衛にこの二つのパンフレットは大なる注目を喚起した。その二つのパンフレットは、煽動文書を散布した飛行家に對して軍法會議を開くといふ決議を引きおこした。

一九一七年十月以來撒布されたバルダーの第二の著作はその時既に殆んど完全に「自由なドイツ語」の中に印刷されてあつた。パンフレットとしてそれは「皇帝と戦争か、共和政治と平和か」と云ふ表題をもつて居た。それはフランスに於ける共和主義的軍隊の建設への檄文を含んで居た。彼は次の如く云つた。則ち「奮ひ立て、ブリースタルヴァルトから海に至る迄の西部戦線に在る友よ。諸君は行動する最初の人であるぞ!!。いやしくも可能なる場合には、皆投降せよ!!。諸君が投降した曉にはドイツ民主政治の爲に身を捧ぐべきだ。共和政治は我々の合言葉だ。この合言葉の下に我

々の自由に任せて居る者は、ドイツ民主政治の共同闘争者であり、共同設立者である。」と。但し長官を射殺し、武器及軍需工場を粉砕する爲には雑誌と食料貯蔵が必要とされた。革命への権利を民法典からの引用文によつて法律家として認められた著者は、正當防衛の権利から導き出した。投降者には幸福の將來が豫定されて居る。「我々は眞の勝利者として、そして我々の祖國の眞の解放者として祖國に歸り、そして歡呼を以て迎へられるであらう。」と。そのパンフレットはフランス宣傳の主要なる當り狂言であつた。既に皇帝に對する非難の文章と同様に、そのパンフレットは戦争の終り迄繼續して分配され數版を必要とした。瑞西からそして和蘭からその數部がドイツに密輸入されて來た。一部は「フリードのドイツ引用文の字引」と云ふ廣告の無害な装ひをしてゐた。バルダーに依り望まれた崩壞は彼の期待して居た程速には到來しなかつた。エタムベス捕虜收容所に於て彼は既に一九一七年の春革命を豫言して居つたものではあつたのである。彼が一九一八年四月にフランス空中宣傳の爲に書いた最後の著書「二つの問題」の中に於て、人々は明らかに性急さと欺かれたる期待とを感ずる。「お前達は奴隷よりも悪い。お前達は狂氣の神にとつつかれて狂亂して居る」と云つて彼はドイツの兵士に怒鳴つてゐる。「お前達は骨の心までくさり切つて居るのか。」と。この著述も亦數版を重ねた。バルダーは確かに同様に明らかに彼の名前をのせて居らない、多くの他の書物の著者であつた。彼の誇張せるスタイルと彼の詩の野蠻性とは彼であることを表は

して居た。その署名からいつて「フランスに於けるドイツの民主々義者から」に由来する非常に多くの飛行家の投下物は大部分彼に歸してよいであらう。バルダーの皇帝に對する束縛されざる攻撃は新時期を劃した。フランスの宣傳は今や最早皇帝の平和愛好に言及する事を必要と考へなかつた。彼等は心から煽動と云ふ事に従事して居た。一九一七年秋の或るピラの中にハンシー自から、エリヒ・シュエーザームが斷頭臺を讚美するといふ革命誌「樂しき未亡人」の原文の爲に皇帝が不安の爲に汗を流して刑臺の階段を登る圖を書いた。

英國の宣傳の中には一九一八年以前には皇帝に對しては如何なる直接的攻撃もなかつた。ドイツの春の攻撃以來始めて今迄の遠慮は放棄された。諷刺畫が氣球から撒かれた。その中に於て皇帝の姿は判別し難き程迄ゆがめられて居た。人の不幸に對する喜び、自痴、悪心の恐怖は彼の主要なる性格の特徴である。

「航空郵便」第十八號は皇帝及彼の六人の息子が充分光に照されて、羽冠をつけ、禮裝用の靴をはき、胸に一杯勳章をつけ、正裝をして、彼等のけいれんのした手を皇帝と息子達に對して伸して居る眼の窪んだ死人達の二つの黒い軍隊の間の小路を行進して居るのを、示して居る。下書には「尙一人も失はぬ家族」と書いてある。同様な動機を「航空郵便」第四七號ももたらしてゐる。則ち「プロシヤの皇帝は彼の死人の方へ馬に乗つて行く」と。馬の前には、齒をむきだした骸骨が兩手には一

つの環のついた網をもつて、それを皇帝に向けて、立ち上つて居る。又「航空郵便」第四八號は皇帝の王冠が死がいの岡の上に立つて居る。將軍は手でそれをさし示し、而して微笑して居る皇帝に云ふ。「もう少し多くの死骸が必要です。陛下。それがあると基礎工事は確かに成るでせう」と。この野蠻な煽動畫が交付されたピラの多くの中に、多くは全く缺けて居ると云ふ事は奇怪である。それら煽動畫は多數印刷され、たとへば「航空郵便」第十八號は十萬部も印刷されたのである。

(1) 戦争新聞事務所の文書、ピラ發售。

皇太子はピラに於て勿論殆んど彼の文より以上に免れてはゐない。ハンシーは彼に「何時も頑固者」と云ふ表題の下に特別の頁を設け、その頁に彼自ら諷刺畫を畫いた。原文はツエルダンの或る捕虜に依り編纂された。(2) 自由なるドイツ語「ではリハルト・グレンツが或る巴里編輯者に與へた會見を印刷した。それには簡單に適確に「皇太子がこの戦争の主たる責任者である」と書いてあつた。(3) 航空郵便第六號は皇太子について一層惡意を示した。

(1) Haasi et Tomitor 一六九頁

(2) 自由なる獨逸語、第七號

「將軍は兵士を死へ送らねばならぬ。これが彼の義務である。これをなす事は彼にとつては愉快な事ではない。諸君の皇太子は然しそれを喜ぶ。彼はその事を全くの冗談だと考へて居る。彼は自らそれを云つた。」と。皇帝及皇太子の戦争に對する喜びの表現は、敵の宣傳の最も著しき意識的虚

僞に屬する。その反對の事が彼等には眞實として知られて居た。占領地域のフランス人の爲に作られた、一九一六年三月五日の「アーデン新聞」の模寫の中に於ては皇太子は全く異つた風に表現されて居た。それには中立國の外交官の報告が印刷してあつて、その中には「皇太子は非常に戦争に飽きて居る。彼の意見に従へば、戦争を出来るだけ早く止める事が最も良いであらう。」とあつた。ドイツ兵士の爲に作られたビラ「戦争の炬火」第一號の中に於ては同様に中立國外交官の報告が載つて居た。然しこゝに於ては皇太子の戦争に對する嫌惡についての文章が省略されて居ることは注意すべきである。<sup>(1)</sup>ドイツ軍が退却を開始した時に始めて一般にビラがヒンデンブルグ及ルーデンドルフに肉迫した。勿論既に夏英國の諷刺畫はヒンデンブルグが皇帝及一群の大砲、投擲と共にドイツ國民の頭や肩の重みとなつてゐるのを描いた。<sup>(2)</sup>然し夫は例外である。彼等は元帥が受ける一般的尊敬を顧慮したと云ふ事は敵の宣傳の良き國營の一つの證明である。西部戦線の最初の反撃後はルーデンドルフは狙はれた。ドイツ軍中に在る社會民主主義者に「向けられたる佛蘭西のビラはルーデンドルフばかりを扱つて「誰が人類の最大の敵か」とある。ルーデンドルフ、誰がドイツ國民に對する無法者か。それはルーデンドルフだ。誰が彼等が卑劣漢と誹謗するドイツ労働者の最も不名譽な敵か。それはルーデンドルフだ。これらと自分自身の指導者を敵に渡すべしとする要求とは多くの距離はなす。

(1) 戦争新聞事務所の文書、ビラ叢書  
(2) 航空郵便、第四九號

ドイツ内部の政治的分裂を促がさんとするフランス政治の古い傳統に對しては戦争宣傳も忠實であつた。ポーランドの兵士が一部はポーランドの言葉で編纂されて居た多數の宣傳ビラの中に彼等の敵たるドイツ人の爲に危険を侵さぬ様に警告されて居た事は自明の理であつた。同様に又アルサス・ローレンの住民が佛國に捧げた同情が極端に利用し盡された事も亦自明の理であつた。アルサスに於ける宣傳はアルサスの地理的狀態に依り恩恵をうけて居た。尙フランス宣傳の指導は大部分アルサス人の手中に在つた。彼は勿論彼等の故郷に特に多く募兵資料を供給する事を顧慮した。地方の知識がこの場合彼等に役立つ。多數のビラ及パンフレットと並んでアルサスにとつて毎週發行される繪入り新聞「戦争の報知」ジャーナル・アルサンエン・ヘブドマデアが發行され撤布によつて擴められた。アルサスの方言の寄稿がこの場合大部分を占めて居た。

宣傳の配慮はしかしアルサスに限られなかつた。配慮は他のドイツ民族にも與へられた。フランス人はバイエルン民族の爲に最も骨を折つた。蓋しバイエルンはドイツ民族の内部に於て特殊の地位を維持して居つたからである。そしてバイエル人の廣い層は困窮と缺乏の壓迫の下にあつてプロシヤ人に對して殆んど好感を持つて居なかつた事は、フランス人にはかくしておく事が出来なかつた。又一方バイエル人は特殊の戦争の技能を持つて居るとの評判であつた。そこで益々彼等の好戦心を

宣傳に依り弱めんとする考へが誘惑的であらねばならなかつた。バイエルンの兵士の住所に向けられたパンフレットの数は、少なくともなかつた。最も影響の大なるパンフレットは、こゝでも再びドイツ人に依り編纂された。バイエルンに在る反プロシヤ的宣傳の爲の専門家は、チルジツト生れのミュンヘンの美術品商人たるカール・ルードツイツヒ・クラウゼであつた。ミュンヘン辯護士たるジークフリード・バルダーは「パンフレット」「バイエルンと戦争」を著した。バイエルンの利益の爲の闘争者としてプロシヤ人に對して出現して來た者が外國人であつたと云ふ事は注目すべき事であつた。バイエルンの宣傳は主として佛蘭西人によつて配慮された。バイエルンの聯隊の中に志願兵として戦争に従事して居つたアドルフ・ヒットラーは既に一九一五年にバイエルンの兵士達に影響を與へてゐる。一九一六年以來結果は明白であつた。英國人は異つた餘り有難くない特別の任務を自分自身に引受けた。則ちハノーヴァの軍隊の間に於ける宣傳である。「麻繩の農夫」は若干の田舎臭い獨逸語で編纂されたピラの中に於て「高價な軍國主義は云々」と説いた。一八六六年の戦争及びプロシヤ貴公子の「首長」たるビスマルクに對する論及もかけて居なかつた。ヘッセンの軍隊も亦戦争の始めにピラに依り敬意を表せられた。そのピラの中に於て就中次の事がかいてある。則ち「我々はヘッセン人の感情、ヘッセン人とプロシヤ人との區別を知つて居る。諸君はプロシヤ人の味方をする<sup>(2)</sup>と凡てを失はねばならぬ。そして瑞西の如き獨立國として凡ての物を獲得しなければならぬ。」<sup>(3)</sup>。後に

なつて佛蘭西人はヘッセン同盟國に對する希望を放棄しなければならぬ様に思はれた。

(1) アドルフ・ヒットラー、「余の闘ひ」、ミュンヘン一九二六年、二九九頁以下

(2) 航空郵便第一九號及第二九號

(3) M. Tschert 三一五頁

戦争の終りの頃ベルリンから奇怪なピラが送られて來た。それは大なる注目をひきそのピラを擴める事に多分聯合國側の宣傳が従事して居つた。九月十九日に多くの新聞編輯局とそして亦バイエルンに在る二、三の私人も亦秘密のものとして記された檄文を郵便でベルリンから受取つた。その表題は「プロシヤ人の心よ！高く」とあつた。檄文は「皇帝忠誠者同盟」に對するクノーベルスドルフ大佐の署名と「プロシヤ同盟」に對するロツク博士の署名とを示して居た。そしてその内容はバイエルンに對する極端な悪意ある無責任な攻撃からなつてゐた。バイエルンの國民に依り導かれるドイツ政治はプロシヤ皇位。最高軍部を完全に弱める事を目的として居る。而してプロシヤ及びドイツを既に滅亡の淵の縁に導いた。バイエルンの軍隊は最も困難な戦に戰鬥力を失つた。現在は少くとも單にプロシヤを襲ひ來る破滅から救ふ事だけが問題なのだ。結論は次の如くであつた。皆甲板に上れ！内外の敵に對する嵐の旗は繰り廣げられた」と。そのピラはバイエルンに於て正當なる激昂を惹起した。バイエルンの陸軍大臣はプロシヤの友人に宛てた手紙の中に於てこのピラを「非常に危険なドイツ國民の統一の最大の脅威たる文書」である<sup>(1)</sup>と名付けた。彼はそれは模造だと

考へたが、しかし直ちに啓蒙することを望んだ。署名は誤りである事は確定された。皇帝忠誠者同盟」及「プロシヤ同盟」は公の聲明に依つて檄文作成に對する如何なる關與をも否定した。併しこの煽動の出所を確定する凡ての試みは失敗した。プロシヤ陸軍省はこの檄文は聯合國側宣傳の捏造物であると考へて居た。ピラの作成が聯合國の機關に基づくかどうかは疑はしい。しかし兎も角多數の聯合國宣傳員に依り行はれて居る事を承認しなければならぬ。バイエルンに於てピラが狂氣的にプロシヤ的な民衆に依り擴大されたとは考へられない。その事は檄文の目的に直接に反して居り完全に無意味な事であらう。該ピラをベルリンからバイエルンへ向けて發送する事に聯合國側以外には誰も興味を持つて居ない。聯合國は兎も角彼等が煽動文からひき出し得る利益を明らかに知つて居た。

(1) ミュンヘン陸軍省の文書、新聞部。

英國の宣傳は九月二十三日に完全に印刷された「ベルリン・ターゲブラット」の原文を取り、印刷せしめ、「プロシヤとバイエルン」と云ふ表題の下にドイツ戦線に亘り撒布した。<sup>(1)</sup>

結局共通の國民感情の背後に退いてしまつた民族的對立よりもずつと大なる危険は階級的對立であつた。戦争が勃發した時に、ドイツは國家と労働者階級との和解に至る發展の段階に在つた。全くゆつくりと橋渡しが始まつて居つた富めるものと貧しきものとの間隙は、戦争となるや饑餓の

困窮に依り再び大きく開いた。階級的嫌惡、殊に都市と農村との間の敵意には門戸が開放された。こゝに敵の宣傳は有難い仕事場を見出した。煽動と誹謗によつて彼等は次第に多く彼等の毒の種をまきちらした。ドイツに於て認められた有産階級に對する憤激の凡ての聲は慎重に集められ而して戦線及國內に擴げられた。將校は兵士に對しては戦争を決して長くは繼續し得ない。戦争利得者として描かれた。

(1) 原文は英帝國戦争博物館、ロンドン。

屢々社會主義的な且、ドイツに於て違法に分配された急進社會主義黨のピラが印刷された。則ちリープ・カネヒト・グルツベのみならず又時々は獨立社會民主黨の檄文が印刷された。ロシヤに於て過激派が政權を握つた時に際して政治的盟休闘争を爲すべしとの USPD 中央委員會の要求は更に種々の文書の中に擴げられた。ロシヤ過激派の聲明書の複製及そのドイツ戦線に亘つての撒布に對して佛蘭西人は一向驚かなかつた。勿論社會主義的新聞も利用し盡された。ドイツ新聞よりも度數多く、「ウイーンの勞働新聞」はヴィクトル・アドラーの指導の下にドイツの現状に對して特に辛辣な批評を行つた言葉を載せた。中立國で發行されたドイツ語の新聞の中でアムステルダム新聞「闘ひ」と竝んで急進的な「ベルン・ターグウアハト」則ちロバート・グリムとカール・ラデツクの新聞がそのドイツ政府に對する鋭い闘争によつて第一位に在つた。

更に帝國議會に於ける反對黨の指導者の演説が價值ある材料を提供した。その演説の重點は屢々印刷され又時々全演説がビラとして整理された。英國人はドイツ政府の併合計畫についての一九一七年十一月二十九日のフーコー・ハーゼの演説を撤布し、フランス人はオスカー・コーンとフーコー・ハーゼとに依り一九一八年二月二十二日及二十七日になされた、ロシヤとの平和締結に對する非難演説を載せた「ライプツィヒ國民新聞」の模造せる二つの號を撤布した。演説の原文は實際ライプツィヒ國民新聞からとつたので、模造は形式に限られて居つたのである。

(1) 航空郵便、四號、獨逸國文庫。

(2) 戦争新聞事務所の文書、ビラ發書及ミュンヘンの戦争文書。

正にハーゼ、コーン、ベルンシュタイン、アイスマーの如き USPD の指導者達が好んで敵の宣傳に引用された事は、彼等の戦争問題に對する立場に基づかねばならぬ。多數黨たる社會主義者はドイツは正當なる防禦戦争に在るとの立場をとり又例へばリーフ・クネヒト黨、ローザ・ルクセンブルグの如き急進派は戦争を資本主義國家の帝國主義擴張の衝動の必然的結果の現象であると思つたが、USPD の指導者はドイツは戦争を惹起し戦争を永引かせた事に對する重大なる責任を負ふと云ふ見解を取つて居た。彼等はドイツ帝國主義及軍國主義の特別なる悪性を確信して居た。クルト・アイスマーはバイエルン宰相として一九一八年十一月三十日に於ける公の演説に於て聯合國を戦争に對する同罪から無罪放免する程迄極端に走つて居た。この仲間の間には敵の下に於ては善をのみ

見、祖國に於ては然し惡をのみ見る傾向があつた。ドイツ軍國主義に對する恐怖は敵の勝利に對する恐怖に打勝つた。ドイツ住民の主要な敵は國內に在つて國外にはない」と、オスカー・コーンは一九一八年十月二十五日に帝國議會に於て述べてゐる。USPD のこの現實に疎く行動に對する説明は、一部は黨中に於て國際的の考を有するユダヤ系の文士が基準的役割を演じ、彼等は本來理論や杓子定木を好んだ點にある。彼等の眼は彼等の平和主義的夢の將來の國に硬直して居たので、彼等は完全に現實と現在を看過した。同様に彼等にはドイツ國民の本性と意志の爲の本能がなかつた。國民の中から生じた多數の社會主義者達の指導者は彼等よりは此の點に於てははるかに優越して居る。

(1) クルト・アイスマー、新時代、ミュンヘン、一九一九年、八八頁。

フランスの宣傳は一九一七年以來主としてドイツの資料をとつた。英國の宣傳はフランスより恵まれざる状態にあつた。彼等は同一範圍だけドイツの救済力を自己の爲に得る事は出来なかつた。英國の自由主義はドイツの反對派に對してフランス文明よりも引力を多く持たなかつたと云ふ事は注意すべき事である。リヒノウスキーの覺書は特殊の場合である。かくして英國は主として自身自身の力に頼つた。英國の宣傳ビラの大部分は英國人に依り編纂された。それは利益でもあり同時に又不利益でもあつた。急進派のドイツ人がドイツに對する彼等の闘争の際に受けねばならなかつた障礙は消滅した。英國人の心理學に對する才能、現實の爲の鋭い觀察は彼等に役立つた。大層多くの興奮

をもち、その中に於て情熱の上昇が多くの繊細な感情に依り貫かれてゐた爲に我々は思はず著者の名を問はざるを得ない程文章の優れて居るビラがある。勿論屢々語法と文法上の誤りはある。危険にして効果が大きいのはフランスのビラか英國のビラかの問題は輕々しく答へられない。しかし結局我々は自分自身の國民の口に依つて話すフランスの方法が優れりとするであらう。

英國のビラは大部分何號々々といふ叢書として表れた。範圍の最大の叢書、檄文頭文字 A.P. 「航空郵便」又は「氣球による」と印刷されてあつたは英國飛行士がビラの撒布の責任を負ふ様に於てこの危険を防がんとされた。然るに煽動ビラ撒布に對して軍法會議の刑罰を以て罰すると云ふドイツ政府の壓迫は英國人を全く正常に政治的攻撃に誘ふ様に見える。蓋し「航空郵便」叢書の檄文は危険な革命的宣傳に満ちて居るからである。夫等のビラは陸軍省に於て編纂され、最後の三乃至四號が「クリュー・ハUSS」に於て準備された。<sup>(1)</sup>「航空郵便」叢書は一九一八年の春に始まり八月に終つた。それは全部で九五號迄続いた。それは「クリュー・ハUSS」に依つて發行された三十八號に續いた。同時に「クリュー・ハUSS」は三十一號の第二の叢書を發行した。それは差し當つて軍事上の結果を知らせるのに役立つた。それは時々「軍隊情報新聞」に印刷された。戦争の終末頃には、號數が千號を數へるに至つたこの叢書の中で最も良心なき煽動新聞が表れた。

(1) 例へば航空郵便、第一三號、西部に進軍する兵士に告ぐ、獨逸國文庫、附録參照。

(2) ロンドン英帝國戦争博物館の告示。

捕虜となつたドイツ兵士の手紙の複寫も叢書公刊の性格をもつた。ゾムメの戦以來英國陸軍省は捕虜收容所に於けるよい待遇を描いた手紙の寫本をドイツ前線に撒布し始めた。寫本は立派であつた。インクの色さへ再現されて居た。手紙を拾得した者は多分原文と思つたのであらう。その手紙を屢々ドイツの名宛人に送つた。名宛人は彼が既に何百部も彼の息子の手紙を受け取つたと訴へた。<sup>(1)</sup>ドイツ官廳は始めは捕虜の手紙を模造だと思つたが、詳細に探究して見ると内容が眞實である事が分つた。<sup>(2)</sup>それが模造であつたとする見解は今日尙然し屢々ドイツの文獻に依り主張せられて居る。手紙は多量に數部撒布された。第六軍の秘密野戰警察の職員は暫くの間約三百の種々の手紙と郵便葉書を集めた。監督總監はこの手紙を煽動文と同視する處分をなすべしと考へた。撒布は同様に裁判にて罰せられるべきである。<sup>(3)</sup>

(1) O.H.L.の文書、第三軍團野外新開所。

(2) マルリン陸軍省の文書、軍隊部。

(3) カール・ヘルマン、秘密戦争、西部戰線警察部長の文書及調査、ハムブルク及ベルリン、一九三〇年、一八八頁

(4) 總監督の文書

捕虜收容所の中に於ける良い生活の叙述はドイツ人をして戦線に於ける缺乏を嫌はせる爲であつた。物質的本能に對する訴、就中露骨な生存欲の訴は、英國のビラに於て特に強く現れて來た。死ん

だり不具になつて生きながらへるよりは、安全によい待遇を受ける方が良い。」「死體となるよりも捕虜となるべきだ」と。これらの警告は無数の變様となつてくりかへされてゐる。「我々の指導者はドイツの軍人は祖國の爲に死なねばならぬといふが、どんな利益をドイツ國はそれから得るか。何故祖國の爲に生きて居てはいけないのか。戦争が終つた時にドイツ國は生きたドイツ人を必要とする。」「死の恐怖は非常な恐ろしい姿をして黄泉から呼出される。」「航空郵便」第十號はドイツの安全地帯に重い榴弾が落下する時の影響についての多數の寫眞をもたらし居る。氣壓に依り中は裸にされた身體、死人のゆがめる硬直せる顔、着物と武裝と人の四肢との野蠻な混合は、恐ろしい言葉を語つてゐる。他のビラ則ち「航空郵便」第七六號「U潜水艦の重量を軽くするため」に於ては沈み行く潜水艦の中に於ける乗組員の窒息の苦惱が微細に畫かれてゐる。

(1) 軍事情報新聞、一〇一五號「獨逸の最も暗黒な時代」獨逸國文庫。

英國の特性は宣傳の爲に宗教的概念を利用する事であつた。一九一八年十月のビラの一つは「お前の罪はお前に酬いる事を確信せよ」といふ表題をつけてゐる。又或るビラは「諸君！復讐は私のものだ。私は報いられる。」とかかれてゐる。聖書の言葉は支配者の罪は今ドイツ國民に對せられると説明されて居る。「神は我々を見捨て賜ふた。神は我々の支配者を怒つて居る。支配者が存在する限り神は怒りの餘り我々から顔をそむけるであらう。」と。

(1) 軍事情報新聞一〇一九及一〇三〇號、獨逸國文庫。

英國の主要なる戦争の目的は經濟的競争者としてのドイツを除去する事であつた。彼の最も恐るべき武器は封鎖であつた。經濟關係は夫故に宣傳に在つて重要な役割を演じた。戦争の後に於ても原料を遮斷し、ドイツの商業と工業とを破壊する事は英國のビラの好んで用ひた脅迫手段であつた。宣傳ビラ「徐々の餓死」の中に於て餓死に瀕する結果則ち大人や子供の病氣の増大が極めて殘酷に畫かれた。(1) 苦しめる者の怒を人々は巧に政府、資本家及び主農論者へ導く事が出来た。「英國と佛國とに於ては諸君程に國民を餓させては居らぬ。」と「労働者へ告ぐ」と云ふビラの中に書いてある。「亦英國及佛國の労働者は其の様な待遇を提せしめないであらう。唯お前達だけが愚どんの馬鹿者だ」と。宣傳ビラ「敵の兄弟」の中に於て労働者は百姓に對して煽動されてゐる。曰く「戦時工場に働いてゐない労働者——(中略)——及彼等と共に都市の小市民、中産階級は百姓の掠奪の犠牲である。」と。しかし「ドイツ國民は彼の苦しみを與へた奴を知つて居る。そして彼の心の中では——彼に餓餓を與へた人々に對する恐るべき憎惡が重なる。——外國との戦争は終結しうる。國民を餓餓に苦しめる百姓と餓えさせられた國民との間の戦争はそう直ちに終らぬ。」と。

(1) 航空郵便、第九號、獨逸國文庫。

労働者達には國家の運命は労働者達に取つて全く無關心の事であると説かれた。否更に尙ドイツ



の滅亡は彼等にとつて和解の平和より有利であるであらう。蓋し聯合國が勝利を得れば「ドイツの各企業は單に所有者をかへるにすぎぬであらう。敵には此の所有に依り彼等の戦費が賠償されるであらう。そしてドイツの資本家はドイツの戦時公債買入によつてドイツの戦費を支拂つたことにならう。故に國民一般に課税する必要がないであらう。」之に反して戦争の終結が決定的でない場合に於ては「兩方が戦費を自ら補充しなければならぬ場合には——戦費を巨大な課税に依り支辨されねばならぬ——この課税の主たる負擔者は廣い大衆則ち勞働者階級である。——夫故に決定的ドイツの敗北及平和は何物にも代へ難い!!」と。<sup>(1)</sup>

<sup>(1)</sup> パンフレット「獨逸勞働者に告ぐ!! 何物にも代へ難き平和」一九一七年、オランダから擴めらる。獨逸國文庫。

英國政府に對して潜水艦に依つて引き起された大きな心配は、ドイツ國民に潜水艦戦争を嫌はせんとした多くのビラの中に反映して居る。全世界の憎悪と絶交の脅迫は潜水艦戦争の失敗についての説明と潜水艦乗組員に對する死の危険の描寫に交代した。一五〇の失はれたドイツの潜水艦の艦長達の姓名表が一九一八年若干の出版物とされて投下された。ドイツの植民地に關しても亦ビラは喜んで論じた。「誰が戦争を始めたか」と云ふ投下ビラ中の二三の論文がそのことをいかなる意味に於ても最も良く示して居る。その投下ビラは「自由と進歩の爲の終結」と云ふ下書を有して居る。曰く「我々の植民地に關しては我々にとつてそれは常に金のかかる重荷であつた。そして誰もドイ

ツ國民の爲にそこから少しの利益をも得られぬであらう。或る者は現在保存費用を支辨する事を得るかもしれないが、しかし我々にとつては植民地は何の役にも立たぬ。我々が必要とするものは平和である。」云々と。<sup>(1)</sup>

<sup>(1)</sup> ロンドン、帝國戦争博物館の原本。

「戦争が勃發した時に眞理が第一の犠牲者である。」といふ英國の格言があるが世界大戦中の宣傳史はこの命題の光榮ある實證である。この命題は單に西歐諸國の宣傳に妥當するのみならず凡ての國家に妥當するのである。勿論同盟國の宣傳は全世界を征服し迷はしたと云ふ區別はある。英國人リチャード・W・ロワンは戦争の宣傳について鋭いしし適當なる批判を下して居る。曰く「戦争の煙が消えてしまつた後も尙長い間宣傳による人を盲目にする霧が全ヨーロッパを蔽うて居た。霧はその犠牲者を迷はしたのみならず霧を作つた者に對してすら眞理を蔽ひかくした。——一九一五年から一九二十年に至る五年間に於て宣傳は單に選舉彌次或は賤民に對して爲された凡ての虚言に打勝つた。それはゆがめられた事實や、統計の最高の出生數を指摘しえた。詐欺の止め火の如く宣傳は五大洲を匂ひ廻つた。最も大きな砲彈の口徑の残りは現在尙地中深くかくれて居る。」と。<sup>(1)</sup>戦争中の眞實がゆがめられたる事については種々の立場をとる事が出来る。或は人はそれを戦争の手段であり權謀術數の意味に於ける戦争の必要物として是認する。佛國の宣傳はさうであつた。又或ひは

人は真理の原則を固持する。その場合にはそれに違反すれば偽善の非難を覺悟しなければならぬ。

(1) リチャード・W・ロビンソン、スバイと反スバイ、ロンドン、年不明、二一六頁以下。

對獨宣傳中央部に活動して居たフランス學者モリス・ブルヂョアはドイツ國民は宣傳文書に依つて欺かれた。然し彼は詐欺に對する是認を戦争の必然性と勝利に發見することを承認してゐる。(1)戦争の最初に於てはまだフランスの政治に關する眞實の一部がドイツ兵の爲の宣傳ビラの中に入つてきた。投下新聞「戰場郵便」は一九一五年十月に次の如く書いて居る。曰く「聯合國はその勝利が完全且終局的のものとして表はされる時に始めて停戦すべきであると強固に且一致して決心してゐる」と。そして十月十日には次の如く云つた。曰く「今や戦争はドイツの財政的、商業的破壊に導かれねばならず。又導かれるであらう。」と。かくの如き不適當な卒直さはハンシーが事務所に入つて以來最早現れて來なかつた。フランスの宣傳はドイツ國民を軍國主義から開放する標語を作り而して戦争の終りまでその標語に忠實であつた。一九一六年七月二十日から二十一日に亘る夜に航空中尉マーシャルは「我々の戦争の目的は自由なるドイツ國民である。」と云ふ表題のビラをベルリンに投下した。其の中に於て人々は次の事を讀んだ。則ち「我々はこの様な虐殺が決して繰返され得ない様に、凡ての國民の自由の爲に戦ふ。ドイツに於て國民が戦争か平和かについて意見を定める権利を持つ時に、この目的は達せられるであらう。」と。(2)

(1) モリス・ブルヂョア、二九八頁。  
(2) G・テマーシャル、一七九頁以下。

後になつてドイツ人がフランス人からフランスを精神的政治的進歩の爲の安全な場所として、否、ドイツの自由の爲の闘士として描寫する使命を引受けたジークフリッド・バルダーは「自由なるドイツ語」に於て次の事を保證した。曰く「フランスは革命の偉大な日に於ける如く、民主主義の旗手として最高の人類の理想の爲に戦ふ。そして將來の人類は、フランスに對して感謝を知るであらう。ドイツ國に於ける我が哀れな兄弟たちでもある!!」(1)と。カール・ルードヴィッヒ・クラウゼも彼に組した。曰く「我々迷へるドイツ國民と戦ふのは我が西洋の兄弟ではなくして我々を奴隸化し壓迫する人々である。——彼等は我々から君主政の血まみれた幽霊を永遠に追放すべく我々を救はんと欲してゐる。そして我々に友人として手を差伸べんと欲してゐる。」(2)と。フランスの宣傳はこの警告文を内々で何十萬部も撒布させた。フランスの宣傳はフランス政治の非常に現實的な戦争の目的を厚いベールで蔽うた。故に佛蘭西の宣傳はドイツ軍と國民とを迷はした事に對する責任を負はねばならぬ。

(1) 「自由なる獨逸語」第二三號、獨逸文庫。  
(2) 同誌、第一五號、カール・ルードヴィッヒ・クラウゼの「何の爲に獨逸國民は死するか」の複製、獨逸文庫。

ハンシーはフランス政府を意識的詐欺の非難から開放する様に試み、彼自身及彼の協力者はビラ

の内容に對してのみ責任を負ふべきであると主張した。彼等は決して政府の名前に於て約束を與へなかつた<sup>(1)</sup>。この道口上は根據あるものではない。ハンシー及トンネラーは私人として行動したのではなく、參謀本部に從屬して居つた所の "Service de la propagande aéroplane" の官吏として行動した。その外バンフレットは許可前に尙公の檢閲委員會の監督に服して居た。ハンシーの免責の試みはかくして正しく非難にと變化するのである。

(1) *Harvest of Tomorraw* 一五八頁以下

對獨英國宣傳委員會の一員たるヘンリー・ツイカム・スチードは彼の覺書に於て「クルー・ハUSS」に於ける宣傳は完全なる真理の原則に忠實であつた、而して之と同じ主張が委員會議長キヤムプベル・スチュアート卿の許に見え出されると保證してゐる。しかしこの斷言は決して聯合國側からすらも決して眞面目に考へられなかつた。その反對の事が眞實である事は餘りにも正確に知られてゐた。英國の宣傳はそのビラに於て民族の和解公平なる正義の平和主義的綱領を主張した。この綱領は政府によつて明瞭に承認された。この綱領は無数のビラの中に書かれて戦争に飽きたドイツ國民の手中に入つた。そこには次の如く書いてあつた。曰く「如何なる併合も損害賠償も存在せぬ。」或ひは曰く「聯合國軍は民主主義の爲に、凡ての國民及人民の同權の爲に、平和と人類の爲に、自由なる國民からなる國際聯盟の爲に、正義と權利の爲に戦ふ。ドイツ人は世界帝國の爲に、血と鐵の

上に建てられた支配の爲に、貴族政治的階級の優先權の繼續の爲に、暴虐なる官僚政治の爲に、暴利を追求する百萬長者の爲に戦ふのである」と。又他の場所に曰く「バルファア卿の目的及他の聯合國の政治家の目的は、精確にドイツ政府の中世期の組織は今後存在して行けぬ事を知つて居る凡ての進歩せるドイツ人の目的と全く同一である。」<sup>(2)</sup>

(1) *Harvest of Tomorraw* 第二卷二二六頁、キヤムプベル・スチュアート一二六頁

(2) モリス・ブルゲヨフ、三五五頁以下、*Le Monde*、ボウエル三五五頁以下

(3) 「航空郵便」第二九號ビラ第一〇〇四、一〇一六獨逸文庫

ロイド・デヨードは二萬五千部も撒布された一九一八年一月五日の戦争目的についての彼の演説の中に於て莊重に次の如く聲明した。曰く、「ドイツ國側からの眞に民主主義的な態度を承認する事は包括的民主主義的平和締結を非常に容易にするであらう。」と。彼は打ちのめされたドイツ國を最早これ以上恐怖する必要がなくなるや、彼は與へられた約束を野蠻な方法で拒絶した。對獨宣傳隊委員すら、彼等の抗議に對して「現在ドイツ人は倒れて居り、我々が欲することを何んでも我々は今なす事が出来る」と彼が答へた時に大變怒つた。ロイド・デヨードはたとへそれが英國側から起つたにせよ、第一にドイツ國民に對して詐欺の責任を負ふべきである。「クリッシー・ハUSS」に於けるドイツのビラの編輯者は、然しこの詐欺に對する關與について無罪宣告を受けえない。蓋し檄文はドイツの状態が希望がなくなつた後に突然調子を變へたからである。

(1) H、フーフエ、或る樂天家の撰述「二五頁以下、H W・スチード二四四頁以下

ドイツは彼の征服計畫を放棄すれば何時でも平和をもつ事が出来ると從來言はれてゐた。聯合國はドイツ國民を敵とするのではない。國民と政府との間には最も嚴密な區別が爲された。ドイツの休戦の申出の後には言ひ分は變化した。曰く「國民はその政府の罪と過失の爲に苦しまねばならぬ」と。長い間聯合國の戦争目的の一つとして示されて居たドイツの民主政體への變化は、何等印象を與へなかつた。寧ろ自ら獨逸國民の心中に與へた幻想を破壊するのに移つて行つた。「クリュー・ハUSS」の最後のピラの一枚に次の事が讀まれる。曰く「和解の平和は聯合國の人々に有利ではないであらう。聯合國國民がかくの如き平和に同意する事を期待する事を如何にして期待出来るか。」と。ドイツ新聞の聲が賛成として次の如く引用されて居る。曰く「ドイツ國民は世界平和の祭壇に最も重要な犠牲を捧げねばならぬ事を明らかに知るべきだ。」と。凡ての嘘言に満ちた約束の背後に殘酷な眞實が露骨に現はれた。

(1) ピラ第一〇三四號、獨逸文庫。

アメリカの宣傳の爲にウイilsonは自ら眞實と卒直の標語を與へた。アメリカ人はアメリカに於ける巨大な戦備と戦争熱に關する眞實なる報告だけで、すでに高價なる宣傳物を所有してゐた。限りに於て幸福であつた。然しウイilson自身は大抵の場合ドイツ國民の誘惑に寄與はして居た。

彼が彼の演説に於てドイツ國民に對して爲した保證は澤山ドイツ戦線に撒布された。その中に次の様にかいてあつた。曰く「我々はドイツを傷つけ様とは欲せぬ。又彼の正しい影響と彼の權勢の中にあるドイツに近づき度いとも欲しない。——我々は唯ドイツ國民が、我々が現に住めるこの更生せる世界に於て、他の國民と同一權利を以て或る場合を占めることを欲し、優越と支配の位置を占めることを欲しな<sup>(1)</sup>。」と。

(1) ピラ 一九一八年二月八日、「アメリカ議會に向けられたウイilson大統領の平和的使命」、獨逸文庫。

「ドイツ民主主義者聯盟」は一層進んだ約束をした。該聯盟は一九一八年夏「アメリカと世界戦争」とスバンフレットを出版し、それはフランスの戦線に擴められた。ドイツ國民は非常に強い誓言の下にアメリカの友情の信頼を要求された。曰く「全アメリカ國民の名譽は諸君が反對に武器を皇帝に向け、自分自身に自由な民主主義的憲法を與へるならば、諸君の國民と土地は如何なる損害も受けぬばかりでなく、自由な國民の一般的協約の下に新らしき繁榮と新らしき經濟的勢力に到達することを保證する」と。情報委員長クリールは、彼自らの言葉に従へば、アメリカの理想主義とドイツの殺人責任の確信を全世界に擴げる事を彼の主なる使命と考へた<sup>(1)</sup>。故に委員會のバンフレットが屢々あらゆる客觀性を失つてゐるのは不思議ではない。

(1) G・クリール、四一七頁以下

公に發行された文書類集の歴史たる「ドイツ過激派の陰謀」が特に注意すべきものがある。委員會はこの場合には最も良心なき偽造者の犠牲になつた。而して圖太い嘘言と誹謗とを全世界に廣めた。この偽造の傳達者はアメリカの新聞記者エドガー・G・シンソンであつた。彼は情報委員會の外國部長であつた。彼はロシアに於けるウイルソンの特別全權委任者として宣傳を指導し、就中大統領の報告をロシア語やドイツ語で擴める使命を持つて居た。一九一七年から十八年に亘る冬の間ペテルスブルグに於ける彼の滞在中、シンソンは反革命的要素の文書を高い代價を拂つて買ひ取つた。その内容はソヴェット権力者特にレーニン及トロツキーは彼等の政府をドイツ士官からの訓令に従つて指導するドイツの買収されたる代表者なりといつた。

(1) ソヴェット政府の聲明。「戦ひ」一九一八年十月十二日第二四號に復寫さる。  
エドガー・シンソン、百日の赤き日。ニュー・ヘヴン一九三一年、三七五、三七七頁

ロシア政府、ドイツ參謀本部、所謂眞實は決して存在せぬペテロスブルグのドイツ情報事務所、ドイツ帝國銀行、等々の文書として發行された文書は非常に粗野な模造品であつた。凡ての専門家に取つてはそれが寫真で再現されてゐた限りに於ては外面的形式によつて一見すれば確かに模造品と云ふ事が知られねばならなかつた。示された獨逸文書の用紙は眞實のものと全く似て居らなかつた。ドイツ士官の名前の大部分は勝手に捏造されて居た。ドイツ語に編纂された文書には滑稽な文法上の誤りがあつた。そして内容も又ひどい矛盾があり、眞實の状況を全然知らない場合に於ての

み眞面目に取られえなすぎなかつた。彼はドイツ語の文書の中のひどい文法上の誤りの存在を、ドイツの官廳が故意にそれを後になつて文書を拒絶する爲に書入れたと云ふ推定に依つて説明せんとしたが、それはシンソンの客觀性に對する決して良い證據ではない。

(1) 獨逸及過激主義の陰謀。公立情報委員會出版。戦争情報叢書第二〇號、一九一八年十月 七頁

シンソンはこの文書を直ちに電信でアメリカ合衆國の政府に傳へた。その原本は彼が一九一八年春アメリカへの歸國の際にもつて歸つた。出版許可が政府最高機關に依り與へられた後、該文書は一九一八年九月始印刷に附された。その公刊は非常な注目をひいた。政府はその原本の文書を所有して居ると主張した爲にその曝露文書は一般に信頼して受け取られた。然し始めからその眞實性を疑ふ批評の聲も亦存在して居た。それはアメリカに於ては「ニューヨーク・イヴニング・ポスト」英國に於ては「マンチエスター・ガーデアン」クリスチアニアに於ては「ソウシャル・デモクラシー」であつた。「マンチエスター・ガーデアン」は九月十九日「その全叢書は悪い冗談を印象づける」と書いた。又何故にその文書の眞實性を認めないかの多くの明らかなる理由があると。英國外務省もその印刷物に何等の信頼を與へなかつた。ソヴェット政府は一つの聲明書を擴げた。その中で印刷物を卑劣なる模造物と稱し、シンソン及びアメリカ政府の良心を疑つたのである。

(1) 陸軍中佐、レヒンゲン、「一九一四—一九一八年最初の世界大戦」ロンドン、一九二〇年第二卷四六八頁  
(2) 「闘ひ」一九一八年十月十二日第二四號

この警告にも不拘情報委員はこの文書集をパンフレットとし、複寫の附録をつけて出版させる決議をした。シッソンの文書を集めた際ベテロズブルグに於てアメリカ赤十字の長官であり、而して始めからその文書は偽造なりと信じて居たロビン大佐の發言權は禁止された。<sup>(1)</sup>攻撃に對して背面を掩護する爲に、委員會は「史料編纂國民委員會」の分科委員會に文書の檢閲を乞ふた。檢閲を委任されたる二人の教授は二つのドイツ語の複寫の中に再現された文書は形式上眞實であり得ないと云ふ結論に到達したが、ロシア語で編纂されたる文書の大部分は眞實を疑ふ何等の理由を發見しなかつた。<sup>(2)</sup>其の後その叢書は「獨逸及過激社會主義の陰謀」と云ふ名の下に「戦争情報叢書」の第二十號として發行された。この二人の教授の鑑定は附録として加へられた。合衆國だけで十三萬冊以上が賣られた。叢書の拔萃がシベリヤで十萬冊を一版として出版された。クリールがマザリツク大統領の助けで宣傳を中部歐洲に組織する爲、休戦後ブラーグに移住した際、「ドイツ及過激社會主義の陰謀」は第一に擴められた五つの最も重大なるパンフレットに屬した。

(1) E・シッソン、三六七、三七四頁

(2) 獨逸及過激社會の陰謀 二九頁

それはチツコ語、ポーランド語、ハンガリー語、クロアチヤ語、ウクライナ語に翻譯された。<sup>(1)</sup>

ドイツ譯は既に一月下旬ベルンの「フライエン、フェルラゲ」で情報委員會に依つて發行された。「自由新聞」の仲間就中フーゴ・バルはその文書の眞實についての辯明者になる事を申込んだ。

ドイツでは「ベルリン新聞」と「日曜の世界」がパンフレットを眞面目にとつた。攻撃されたドイツ官廳、銀行、外務省情報部、參謀本部、帝國銀行、ドイツ銀行の熱心な抗議が一九一九年四月二日の「ドイツ一般新聞」に表れた。その文書は斷乎たる形式に於て卑劣な模造物なりとして烙印を押された。同様にその文書中に於て或る役割を演じた時の總理大臣シャイデマンは、同時に自ら同様な聲明をした。それを以て風聞は終つたと考へるべきであつたらうか。然し残念にもさうはならなかつた。戦争の後に於ても以前のアメリカ政府に取つて追従的でない事柄を明白にせんとはしなかつた。一九二八年に於てすらその文書はアメリカの法廷に於てドイツ政府に對する訴訟に於ける證據手段として役立つたといふ。ドイツ政府は色々の一流人の宣誓證言に依り問題になつてゐる文書の内容の不眞實を證明するの必要ありとした。一九三一年に表れた書物「百日の赤き日」の中でシッソンは該文書の眞實性を再び主張し而して再び一九一八年に該文書を檢閲せるI・フランクリン・デ・エイムソン、サムエル・N・ハーバー兩教授の權威を引き合ひに出した。兩教授は疑ひもなく良心に従つて判斷したのであるが當時ワシントンからではその細工物の不眞實を認める事は非常に困難であつた。蓋し彼等に取つてロシア及ドイツの比較的資料が缺けて居たからである。それだけ彼等が情勢によつて眞實を認識する可能性がもはや妨げられない今日に於て彼等の當時の判斷を公に訂正することは益々必要なりと考へられる。彼等はもはや彼等の名聲が憐れむべき模造品を若返らせ而して

アメリカ國民を更に迷はする爲に濫用せしむべきではあるまい。

(註) G・クリール、四二二頁

## 六 效 力

宣傳の意義を疑ふ人も居る。普及せる書「大衆の狂氣。その效力。その支配」に於てクルト・パシユヰイツはこの意見を代表した。彼は人類を「宣傳の魅力を信する印刷物」から開放するかも知れぬ。彼の確信は勝利が大衆の意見を決定するといふにあつた。それには確かに多くの真理がある。然し彼が戦争中に於ける敵の宣傳の影響に異論を述べ而して「ノースクリフ及彼の如き者が「宣傳」を營み大衆の狂氣は荒れ狂つた。それはあたかも天氣の魔法使が、どしや降りの雨の中で、駆け廻り、全く多くの雨をそぐ爲に雲を呼び寄せる如く偶然である。」と書くに至つては決定的にかくの如き誇張に抗議をしなければならぬのである。

パシユヰイツの見解に従へば凡ての勝利が問題である。彼は然し何處から勝利が生ずるかを問ふ事を閑却して居る。勝利に到達する國民や軍隊の意志の緊張は例へば善き事柄の信仰、指導者への信頼の如き精神的條件に依り規定される。前提が動搖する場合には又行動も勝利も問題になる。そこで宣傳は重大な役割を演ずることになる。蓋し宣傳が時代に適應せる觀念を利用する場合には、大衆の確信に影響を及ぼし而して強い勢力となるからである。若し勝利をその精神的前提から分け得ると信するならば、それは可成り皮相な唯物論である。確かに勝利は後から輿論に強い影響を及ぼす。し

かしその反対も亦たしかに眞實である。則ち信念が勝利を制限するといふことである。そこには深く事象に入り込む場合に非常に良く認められる相互作用が存在する。ナポレオンは國民の理念の要素を顧慮しなかつた事を大變後悔しなければならなかつた。所謂「實際政治家」は屢々理念の力を輕視する傾向がある。併し眞の實際政治は理念の影響を又顧慮する事を知つて居るのである。

敵の宣傳の效力を輕視する事は容易な仕事ではない。それは戦争の終りに於けるドイツの滅亡の原因の問題と重大なる關係がある。何人も内面的に關與する事なしには、かくの如き探究をなし得ないのである。故に文獻に於て明らかに生じて居る如き意見の相異が必然的に生じて來なければならぬ。ドイツに於て意見が分れてゐるばかりではない。ドイツの以前の敵國の陣營に於ても、全く一致せる意見は見えない。英國人は宣傳の結果を最も高く評價した。キャムベル・スチュアード卿は前宣傳部長として、「クリュー・ハッス」の彼の歴史の中に於て、而して更に一層明らかに「タイムス」に依り出版された世界大戰史の内明らかに彼に依つて編纂された章の中に於て、ノースクリップの宣傳技術に殆んど戦争を決定する様な影響を歸着せしめた。他の證據をあげて彼は一九一八年十月三十一日の「タイムス」通信員の判断を引用してゐる。曰く「良き宣傳は聯合國に恐らく戦争の一年を節約せしめた。その一年は何十億の少くとも一百万の人間の生命の節約を意味する」と。フランスの専門家は幾分控へ目に意見をのべた。彼等はドイツ軍の軍事的敗北が滅亡の本質的原因

であつたと云ふ事を一致して強調する。宣傳はその過程を促進しえたにすぎぬ。かかる場合好んでフランス宣傳の特に有效な活動に論及した。

(1) タイムス、戦争史、三五八頁

(2) Hansi et Touquet 一八七頁以下及 M・ナルツヨフ二九九頁

ドイツに於てルーゼンドルフ將軍が破壊的宣傳の戦争に決定的な影響を最も力強く主張した。宣傳は彼には敵の最も危険な武器と思はれる。回想録の中で彼は次の如く書いて居る。曰く「封鎖及宣傳は次第に我々の精神的戰鬥力を動搖させ始めた。——敵の宣傳及過激社會主義が説いた革命思想は——陸海軍の中に地盤を獲得した。謬説は間もなく、より廣い大衆の中に人氣を獲得した。祖國にあり又敵に對するドイツ國民は致命的殺傷を受けた——我々は精神的に戰鬥力がある限り——世界に對して戦つた。そうしてゐる間は我々は勝利に希望を有し、而して敵の破壊意志に届する必要はなかつた。我々精神的戰鬥力の消滅と共に凡ては完全に變化した」と。

(1) E・ルーゼンドルフ「予の戦争の思ひ出」一九一四—一八年に於けるベルリン、一九一九年、二八五、二九一頁  
革命宣傳の效力の問題はドイツ帝國議會調査委員會によつて詳細なる取扱を経験した。各政黨の人々はそこで詳細に自己の意見を定めた。宣傳が戦争に決定的な影響ありとする説の支持者も反對者も存在して居た。その中には急進社會主義側の影響も包含されて居た。一九二四年二月十二日第四回調査委員會の會議に於て對立的見解が明白に作られた。ドイツ國粹黨代議士フイリッポ博士は



敵の革命的宣傳は軍隊に非常に強い破壊的作用を及ぼしたと云ふ確信を陳述した。更に彼は云つた「人々が戦線の毒殺及破壊の爲の全現象を總括するならば、該現象が戦争の結果に對して宿命的となつたと云ふ事が既に證明せられたも同じである。」<sup>(1)</sup>之に對して左翼の専門家カツンシュタインは、獨逸の崩壊は大部分は外部的権力關係に、他の部分は軍隊内、祖國內に於て支配する困難に、而して最も少なき部分が意識的革命的加工に歸せらるべきであると評論した。<sup>(1)</sup>

(1) 一九一八年に於ける獨逸の崩壊の原因、第四卷一三、一四頁

(2) 同誌、二三頁

議會調査委員會の仕事が根本的に露骨に對立せる意見をお互に近づける爲に大に寄與したことは疑ない。しかし委員會の調査は主としてドイツ内の革命的宣傳に限られ、敵の宣傳の效力については何等の詳細な調査もなかつた。而してしかも軍隊の行動特に世界戦争の最後の日の行動はその事についての報告を豊富に與へるのである。

兵士の思想にとつて最も直接の證據は勿論戰場から來る戦の手紙である。歴史的資料としては夫等は然し現今では少くとも第二位に始めて問題になるにすぎぬ。獨逸國文庫にある廣大な戦争の手紙の集成は大部分敵の影響に對して多かれ少なかれに國粹的意識を有する人々の手紙を包含してゐる。更に革命的意識ある人々も彼等の本當の感情を手紙の中に表現する事を恐れて居たと云ふ事に注意しなければならぬ。戰場からの手紙は屢々特別郵便檢閲所で檢閲されると云ふ事が一般に知ら

れて居たのである。軍事上の事について許可なくして報告をなしたものに對する刑罰は常にすべての軍隊所屬者に告知されてゐた。戰場郵便の檢閲の際政治的感情を害する手紙も差押へられた。一九一八年秋に兵士達の間に普及された成句があつた。曰く「戦争が濟んでから我々は云ふであらう。今は然し我々は何も云ふ事を許されない。」<sup>(1)</sup>

(1) O. H. F. の文書、第三部第二課

あらゆる恐るべき方法を講じたにも不拘兵士達は彼等の手紙の中で往々敵のビラの内容について書いたと云ふ事を我々が知つたのは郵便監督所の報告のおかげである。軍隊の氣分に關するこの報告は一般に最も重要な資料に屬する。蓋し該報告は争ひ難き事實資料に基き且屢々兵士の陳述を原文のまゝ引用してゐるからである。同様の且高く評價さるべき報告は、歸休兵の氣分を彼等の話に従つて監督しなければならなかつた鐵道監督旅行者の報告に含まれてゐる。之に反して祖國教育機關たる啓蒙將校の多くの報告からはうる所が少ない。該報告は大部分餘りに一般的に取り扱はれて居た。該報告は慎重にのみ利用され得ると云ふ事は、戦争中に於て既に知られて居た。それを一番良く知つて居るにちがひない戦争新聞事務所教育部長自からは次の如き判断を下した。曰く「氣分の報告は色彩づけられてゐる。蓋し如何なる司令官も彼の軍隊の許に悪い氣分が支配して居る事を是認する事を望まぬからである。」<sup>(1)</sup>幸にもこの判断は凡ての場合に妥當しない遠慮なき真理の刻印を

額にもつ報告も、又充分多數に得られる。ともかく報告に於ける是認すべからざる樂天主義はルーデンドルフ自身の證據に依り認められる。彼は彼の回想録に於て、軍隊の多くの方面にて現れた個々の分解作用の全體的意義は彼に知られなかつたと書いてゐる。最高軍指導部及陸軍省に依り敵の宣傳を防禦する爲に發せられた處分は同様にこの認識の一つの重要な資料である。軍隊に對する敵の宣傳の一層強い影響は、輿論の衰弱が發展した後に始めて可能であつた。その事については敵も味方も一致して居る。

(1) 戦争新聞事務所の文書。

戦争開始後既に間もなく祖國に對する敵の宣傳の絶えざる影響が始まり、而して饑餓、封鎖と戦争の憂ひと共に宣傳的なものが信頼を次第に低下させた事を勿論忘れてはならぬ。市民の輿論に對する影響は中立國を通る道によつて全く目立たない様に達成された。戦線へのビラは暫くの間は餘り危険はなかつた。蓋し敵國からの由來は紛ふ方もなかつたからである。一九一八年二月に於てすらノースクリフはドイツに對する大々的戦線宣傳の時代を未だ到來せりとは考へなかつた。

軍隊に對する敵の宣傳の影響を正しく評價しうる爲には氣持の發展を概觀的に表現する必要がある。陣地戦の始め即ち一九一四年末に戦線へ來た人々は最初熱狂が既に失はれた事を思ひ出すであらう。多くの單純の兵士達にはクリスマス之夜を平和に再び家ですごしたい希望にみちて居た。一

九一五年三月或る中立國の觀察者は彼のドイツの印象を次の様に總括した。曰く、「我々は勝つであらう」と云ふ標語は現在是最早なくなつて「我々は勝たねばならぬ」と云ふ標語が存する。(1)と云ふ國民は戦運の天秤が平均的狀態になつたと本能的に感じた。

(1) C. O. H. L. の文書、政治部。

悪感情は故郷に於ける食料の缺乏から始まつた。一九一五年十月外務省新聞局長ハマンは、彼に提出された報告によれば經濟的困窮についての意氣消沈は戦場にある軍隊にも既に廣く廣がつたと發表した。就中それは妻の戦争の手紙の中に含まれたる悲歎による。(2)封鎖による益々増大する經濟的壓迫は階級的對立をみるみる尖鋭化した。一九一六年の夏或フランス士官はツエルゲン攻撃の最初の三ヶ月に於てドイツの戦死者及捕虜から奪つた千通の手紙の拔萃を公にした。彼はその内容を「不満の鳴りひびく音樂會」と名付け、主として(3)でも故郷からの嘆きの手紙が問題であつた。然し兵士の手紙の中にも亦「ヴェルダンの地獄」の神經を消耗させる様な影響が有効に現れた。その中では後に廣く普及した「詐欺」といふ言葉が戦争を表示する爲に既に屢繰返された。手紙の要旨ともいふべきものは平和であつた。この形式の中にある戦争は恐怖と嫌惡とを引き起した。ゾムメ河の最初の大物資戦の影響は尙一層悪かつた。該戦争は精神的に「敗北及敵の戦闘手段の過剰に對する殆んど無防禦性の感情」を生じた。(3)一般的不快と、過度の精神的緊張の結果、軍隊内に

批判精神が擴がつた。戦争が必然的に伴ふ不忍耐性は不常性として痛く感ぜられた。士官と兵士との間には間隙が生じた。一九一六年九月十日に陸軍大臣は宰相に對して「戦争は單に資本主義の利益の爲——及我々の軍隊指揮者の名譽欲から繼續される」と云ふ、危険且下層國民階級に擴がつて居る見解について報告した。同様の氣持は同じ頃戦線にも非常に多く生じてゐる。

(1) O. H. L. の文書、第三部第二課

(ca) *Leikv, P. A. N. Ulysses. La bataille de Verdun et l'opinion allemande, 1916*

(cb) *Leikv, P. A. N. Ulysses. La bataille de Verdun et l'opinion allemande, 1916*

この報告を読む場合、軍隊に於ける不満が艦隊の陰謀の摘發に依り公然と生じた以前に、尙一年が経過した事を、怪しむであらう。一九一六年の十一月社會政策を司る官廳の報告は、社會主義的雜誌「鐘」からの引用文を加へた説明を與へてゐる。則ち「國民の態度は直ちに明白に認められる。國民は不快感をいだき憤激はして居るが、然し革命思想はもつて居ない。」と。一九一六年から一七一年に渡る油菜採取の冬に於て最高點に達した食料品の缺乏の増加は祖國に於ける意氣沮喪を増大した。

一九一七年の夏以來戦争の目的の問題に就いての論争が最も尖鋭化した。廣大なる併合に對する愛國黨の努力は戦争の防禦的性格を抹殺するに適して居た。その爲め遂行意思が傷つけられた。戦時工業の高い利潤と戦線に服役する義務はあるが歸郷された労働者の豊富な賃金は、戦線の戦闘者に

とつては極端なる不正と思はれた。フランデンに於ける第三のそして最も恐るべき三ヶ月以上續いた戦争による精神弛緩の爲め未曾有の神經の負擔に軍隊の一部は最早耐へられなくなつた。始まりつある内面的分解の重大なる徴候として、防禦戦に於ける捕虜の喪失の増加、特に亦投降者の數の増加が評價された。最高軍指導部はこの状態を憂慮をもつて觀察した。之に反してフランス人は九月に無線電報で勝ち誇りながらフランデンに在る或るドイツ軍の一部に於ける意氣沮喪について報告した。當時英國大本營情報部長であつたチャーテリス大佐は満足して同様の現象を確認した。<sup>(1)</sup>部分的にはその年の終り以來西部戦線から東部にかけてしかれた軍隊が疑はしき收獲であつた。輸送の際には未曾有の不規律が生じた。技術の限界は明らかに表れ始めた。

(1) 旅團長ジョン・チャーテリス、「大本營に於て」、ロンドン一九三一年一五九、一六三、一七一頁

それにも不拘軍隊は、戦争は終るであらうといふ考へで、春の大攻撃計畫を歓迎した。軍隊はもう一度全力を傾倒する準備が出来てゐた。凡て現在の結果が問題であつた。戦線の様子からルーデンドルフ將軍は、軍隊は攻撃の失敗後は益々増大する優勢に對する無限の防禦の見通しに最早耐へられないであらうと云ふ事に氣がついた。<sup>(1)</sup>又事實さうなつた。六月に於て既に反動的氣分が明らかに認められて來た。七月中に精神的轉廻が完全な事實となつた。七月九日に參謀總長は陸軍大臣に、「西部戦線に於ける許されざる退去。臆病的犯罪。敵前に於ける服従の拒絶の數の増加は——

軍隊の戦備——に對して重大なる危険である。」と書かねばならなかつた。<sup>(2)</sup>ベルギーに在るベツェルローの大兵營には歩兵の補充が居り、戦線の爲の兵站があつたのであるが、そこには既に信じ難き状態が支配して居た。國民軍の一人は七月一日の彼の戦争日記の中で次の如く報告して居る。曰く「規律は完全に破れた。『たたけ』『燈火を消せ』『ナイフを出せ』と云ふ叫びは凡ての機會に叫ばれてゐる。——毎日多分約五の運送が戦線へ或ひは新兵の貯藏所へ行く。——凡てのものが停車場から出發するや否や鋭く撃つ。將校集會所のそばを通る場合も同様であつた。この滅多打ちはベツェルローの傳統となつた。」<sup>(3)</sup>

(1) 一九一八年の獨逸の崩壊の原因、第二卷、一、一五三頁

(2) O. H. の文書。作戦部

(3) ゲルハルト・ツェルプルケ、ルーマニヤの兵站部、一九三〇年、三一六頁

八月には軍隊の氣分として一般に一切の將來の事柄に對する無感覺、失望、無關心が告げられた。「戦争はかくして凡てのものとはならないから、我々は戦争を凡てのものとしなければならぬ。」と云ふ成句が廣く擴がつた。今や過度緊張の重荷の下に内部及外部から備へられた革命の種が芽を出す時がやつて來た。戦争の意義に對する感情は失はれてしまつた。既に自身自身の敗北は凡ゆる方面から歡迎されてゐる。かくの如くならなければならぬ。さすれば又平和も到來する。」とか或ひは「我々が故郷に歸るため戦争に負けるならばである。我々とはドイツ人であらうとフランス人であらうと或ひはイギリス人であらうとかまはぬのである。」と九月にはいはれてゐる。同様の標語と章句が種々の場所に現れてゐる。敗北はドイツ國民を軍部の支配から開放する爲に必要だと云ふ信仰が廣く擴められてゐる。これらの思想は氣味悪い傳染病の如く擴がるのである。唯犠牲を厭はぬ少數の人々だけが大眾の暗示から逃れ得た。戦争の重荷は次第に少數者、沈黙者及義務履行者の肩の上に掛つて行つた。<sup>(1)</sup>

(1) ツェルネル・ホイメルブルク、「獨逸を廻る遮断の火」オルテンブルク、一九二九年、四六四頁

最後の數ヶ月に於ける戦争の義務から逃れた人々の數は専門家に依つて七五萬乃至百萬と評價された。<sup>(1)</sup>しかしてそれは彼等の考から表面上の結論を引き出す事を敢てした人々である。

(1) 一九一八年の獨逸崩壊の原因、第二卷、二、六六頁

一種の消極的反抗は遂に擴まつてゐた。即それは敵の攻撃の際戦はず退却し、時々陣地につく事を明らかに拒絶したりすらした點に表れた。戦を欲する人々は「戦争を長引かせる者」「盟体違反者」として輕蔑された。それは明らかに軍隊は大多數最早欲しないと云ふ事を示した。而して軍隊は戦争を欲せざる事を意識するやうになつた。

受取人たる或るオーベリンゲン人に依り啓蒙の爲陸軍大臣に送られた、九月十五日附の或る若い兵士の戦争の手紙の中には次の如くかいてある。曰く「併し今や我々は全戦線に亘つて退却した。

然しそれは我々がそうする様に強制された爲ではない。何故ならそうするにはドイツ人は餘りにも善良な兵士であるからだ。——然し我々の軍隊が最早これ以上辛棒しようと欲せぬからだ。何の爲に獨軍は身を犠牲にするのか。それは何の爲だ。恐らく祖國と祖國の神聖なる財産の爲であらうか。それは違ふ。獨軍は愛國心をとつての昔に墓に埋めてしまった。獨軍は如何なる侵略戦もやろうとは欲しない。この見解は戦場にある全軍隊の九五パーセントがもつてゐる。<sup>(1)</sup>。陸軍大臣はこの評論に驚かなかつたやうである。蓋し彼はその縁に「氣分は恐らく之と類似して居るであらう。」と書いたからである。<sup>(1)</sup>

(1) ヘルリン陸軍省の文書、軍除部

同様の悲しき確認はドレスデンの獸醫學校長エレンベルグ教授によつて士官捕虜收容所長オスナブリュックに宛てた十月十八日の手紙の中に於てなされた。手紙は最高軍指導部に渡され次いで各部隊に廻覧された。彼は曰く「私は多くの人々と語つた。就中兵士、下士官等尙又將校及軍醫とも語つた。私が聞いた凡てから推論すると我が軍の無規律と墮落が明らかになる。その事に付ては疑はない。我が軍の退却及連日の敗北は敵の優勢及フォッフオの天才の結果ではない。否々。それは軍隊の墮落の結果である。多くの人々は私に飛行機やタンクの優勢は悪いが彼等はそれを耐へる事が出来るし、之はそんなに恐るべきことではないが、軍隊は欲すれば前進する事が出来るのに

欲しなかつた爲彼等は捕はれたり、退却したり或ひは投降するのであると語つた。<sup>(1)</sup>。高級士官はかゝる見解を抱いた。第二軍司令官カーロヴィツ將軍は十月十二日にルブレヒト皇太子に向つて曰く「かりに軍隊の精神がもつと良くなるとすれば、英國の凡ての攻撃は簡単に拒けられうるであらう<sup>(1)</sup>」と。

(1) 戦争新聞事務所の文書

(2) バイエレンの皇太子ルブレヒト「戦争日記」ミュンヘン 一九二九年、第二卷 四五九頁

十月三十一日から十一月三日迄の間最高軍指導部の委任に基づき氣分の向上について講演をした參謀本部附ローゼ大尉は、十一月五日ガルツイツ及アルブレヒト軍に付て第三章りに於て「軍隊の氣分は大體に於て多數の陳述に従へば、我々が速刻平和を得るのでなければ兵士は最早戦ひを續けない程度に至つてゐる。」と報告した。

この状態は、三十九人の戦線から召喚された各師團、旅團——聯隊長の意見を聴取せる後へイエ大佐が十一月九日皇帝に報告せねばならなかつた報告の中に於て實證された。該報告に曰く「軍隊は一致して速刻の休戦を望んでゐる。——内部に對しても外部へ對しても軍隊は戦争を望んでゐない<sup>(1)</sup>」と。軍隊の中で軍人らしい感情をもつ一部は最後迄英雄的に戦ひ、敵をして尊敬させなければ、然も軍の運命は定まつて居た。ガルツイツ將軍は我々は未だ戦ひ續け得るかとの政府の質問に

對して、十月二十八日に次の如く答へた。曰く「かりに一種の兵學的手段が講せられ、氣分が上昇したならば、軍隊は尙戦ひ續け得るであらう」と。<sup>(2)</sup>然しこれは現在の狀況から推して不可能として證明された。問題は如何なる程度に於て敵の宣傳がドイツ軍隊の内部的精神の弛緩に關係したかといふ事である。

(1) アルフレッド・ニーマン、「上からの革命—下からの革命」ベルリン 一九二七年、三三八頁  
(2) 一九一八年の停戦前史の公の資料 外務省、内務省出版、ベルリン 一九二〇年、二二二頁

軍隊に對する敵の宣傳の影響については一九一七年以前には殆んど何物も認められもしなかつた。ルーデンドルフは彼が一九一七年に始めてこの方面から脅かす危険を意識したと報告してゐる。五月の終りに情報士官は軍隊に對する宣傳ビラの影響を輕視しない様にと警告した。彼の警告は正しい。我々は今日、聯合國がその年の後半以來宣傳の影響を明らかに證明した事を知つてゐる。ハンシイは、フランス人は殆んど毎日捕虜の許で彼等が命令に抵抗して保存して居つた宣傳ビラを發見したと語つてゐる。英國人も亦同様の經驗をした。ドイツ側に於ては危険の大きさが後になつて始めて認められたのは全く當然である。多くの兵士がビラを身につけて居た事は偶然明らかになつた。一九一八年の始めに敵の機文が野戰郵便で故郷に送られる場合が増加した。その際惡意は證明されなかつたし又大抵の場合は確かに存在して居なかつた。歸休兵はそのビラをドイツに持

つて行き、時々汽車中でそれを朗讀した。投下の洪水は六月に始まつたのである。

今やドイツの側に於ても影響の跡が明らかに認められるに至つた。ケーニツヒスベルグに於て或る兵士がバルダーの書いた「ウイールヘルム二世則ちドイツ皇帝よ、我々はお前を非難する」を届出た、それは西部戦線の一歸休兵が彼に電氣鐵道で手渡し、その際その文書は散兵壕の中に分配されて居たと云つたのであつた。<sup>(1)</sup>一九一八年六月二十六日及二十七日に亘つてハルレツイレで行はれた愛國教育の指導者達との商議で、ニコライ中佐は敵のビラの影響に關する問題を提出した。その際出る質問も、皆愛國教育の代表者が軍隊に於ける影響を一般に低く評價する結果となつた。唯第四軍の教育士官のみは、各司令官は敵の宣傳による不利な影響を恐れてゐると報告し、軍隊司令部もこの立場を主張した。

(1) ヘルリン陸軍省の文書。軍隊部

喜ばしからざる影響の跡は他の軍隊の許にも現れた。第一七軍レワルド郵便檢閲所はその六月二十一日の週報の中で、一兵士が手紙の中でビラに關して「我々は多くの點で英國人が正當だと思ふ」と云ふ事を書いたと報じた。七月五日にバシー橋でフランスに投降し、マルヌ河を渡河する第七軍の準備を密告せる、第一六一步砲兵、歩兵大隊の隊者は、フランスの訊問に對し彼がノヨンに於て發見したフランスのビラを寫し、それを彼の同僚の間に分配したと云つた。その寫しの數部は尙彼の

手許に残つて居た。<sup>(1)</sup>影響はどちも信頼し難き要素に對してのみ制限されて居た事を認めらる。蓋し當時我々は第十七軍の郵便檢閲所の報告から、軍隊は煽動文書に依る影響をはるかに拒絶したと云ふ多くの證據を持つからである。

(1) 第十七軍司令部附情報士官の文書

七月十八日ニコライ中佐は西部戦線の情報士官に對する廻狀訓令の中で次の事を告知した。郵便檢閲所の收獲及愛國教育指導者の報告は、敵は最近に於ける大規模のビラ宣傳を以て今日に至る迄何等成功しなかつた事實を一般に確實だと思はせる」と。然るに士氣の絶へざる低下は次第に認められて来た。上述の發令と同日に發行された第十四豫備師團の士氣に關し週報に於て「英國人に依り投下された宣傳ビラは屢々軍隊の士氣に影響を與へる様に思はれる」と既に書いてあつた。<sup>(1)</sup>共和政治」と云ふ合言葉で捕虜にされたドイツ兵を特に顧慮して取り扱ふと云ふ有名なフランスの約束の影響に就いては、或る戦場からデベリッツの機關銃隊に派遣された下士官が報告した。

彼はフランスの飛行家は七月二十四日より檄文をシャトーナリに於て凡ての歩兵隊の攻撃前、多數、第二四豫備師團の戦線に亘つて投下したといつた。又曰く「多數の人々はビラを何等信じなかつた。若い人々が我々が放棄せねばならなかつた最前線に於て、戦争に當つて何等かく別抵抗する事なしに捕虜になるべきであつた。七月二十九日の反撃の際——フランスの捕虜は彼等は事實「共和

政治」と云ふ言葉を教へ込まれて居たと陳述した」と。<sup>(2)</sup>

(1) 第十七軍司令部の文書

(2) マルリン陸軍省の文書 軍隊部

七月三十日ジュネーブに開かれた第四軍教育士官の商議に於て敵宣傳の防禦の問題が重要な役割を演じた。その陳述は一致してゐた。曰く「近時、敵によつて撒かれたビラは多くの場所で軍隊に對して不利な影響を及ぼしてゐる。特に二つの最近投下されたビラ「誰が戦争を惹起したか。之に對する二つの聲がある」及「リヒノウスキー王子はドイツは戦争を迫つたと主張する」とは疑なく深く印象づけた。——一方第七騎兵狙撃兵。師團の教育士官からこのビラの影響は人を震撼させるものとして示されてゐる。——フランデルン軍教育士官は次の事を報告してゐる。則ち彼はウイチエーテ軍學校長として「リヒノウスキーの供述及之に關聯して戦争に對する責任の問題は軍隊の非常な注意をひいたと云ふ經驗を同様にした。絶へず士官と軍隊は個々の講演に關聯せる討論の際にむしろ彼等は全事態について聞きたいとのべたつた」と。<sup>(1)</sup>一九一八年七月に出版された他のビラについてハンシイはドイツ兵に對する確實なる影響の結果、それは屢々複製されねばならなかつたと報告してゐる。

(1) 第四軍司令部の文書

該ピラは「西部戦線にある百萬以上のアメリカ兵」と云ふ表題をもち、そしてアメリカ陸軍大臣のウイルソンに宛てた「今や百萬以上のアメリカ兵がフランスに向つて出發した」といふ報告を含んでゐた。戦線に於けるフランスの司令部はそれを充分得られなかつた。ドイツ側にはピラがドイツ兵に依り更に與へられた徴候が増大した。七月及八月の野戦警察部長ヴェストの活動報告の中には次の如くある。曰く「第五軍の秘密野戦警察は七月に軍隊内で一萬二千の宣傳ピラが届出された」と報告して居り、どれだけ軍隊所屬者に依つて見付けられず、或ひは届出されなかつたかは凡て判断しえない。然し宣傳ピラが兵に依り保存され、のみならず擴げられた事は證明されてゐる」と。

第二一四歩兵師團の教育士官は七月三十日に第一七軍の教育士官に特に危険なる「航空郵便」新聞について「そのピラは只まれにしか上官に届出されず、反つて一般に手から手へと渡され、次に記念として故郷へ送られ、そこでそれは更に不幸を惹起する」と報告した。かくの如き事件を八月十日第一二五工兵大隊の軍法會議判士が扱つた。嘗て、田舎を車で來た二人の兵士がホーニートの近くで一人の工兵に依り敵の宣傳ピラを密かに握らされ、それを上官に届出たのであつた。分配者はそのピラを澤山もち、凡ての通行人に一握づつ持たせてやつた。その人物は最早確められなかつた。陸軍首脳部の心配は増大した。八月十日軍事新聞指導者はメチエレスに召集され、第三部第二課のクレーゲル少佐はその開會の辭に於て軍隊の士氣は低下してゐる事を注意した。その原因として

(204)

て彼は次第に強まる敵の宣傳を第一に擧げた。

(註) 第十四軍司令部への文書

郵便檢閲所の報告は八月には七月に於けるよりも著しく悲しむべき姿を示した。バイエルンの第一豫備軍の本部の救援所は八月四日から十日に至る週に亘つて第一七軍に次の事を報告した。則ち「敵に依り投下された多くのピラは特別の影響を及ぼす様に思はれる。蓋し一般にこのピラの内容が手紙の中に語られて居るからである。従つて人々は大部分そのピラの上にかいてある陳述を信用して居る」と。次の週報に於ては次の如く書いてあつた「慎重に屢々ピラの中にある意見が述べられる。比較的多くのピラが故郷へも到達した事は手紙の中の記述から明白である」と。「ドイツからも今や同様な非難が起つて居る。八月十二日に歸休兵はロストツクへの車中でフランスのピラ「汝あはれなるドイツ國民よ」の數部を分配した。そして彼はそのピラを一束、戦線から、擴める爲に持つて來たと云つた。かかるピラは通例多くの歸休兵に依り故郷にもたらされたといふ。戦線からのピラの擴大についての報告が増加したので、陸軍省はこの新しい場合を警告的廻狀訓令に利用した。

(205)

(一) ヘルリン陸軍省の文書、軍隊部。

八月二十三日ウエストフアーレンのヴァンネは商人が彼が偶然汽車の中でその目撃者となつた一



場面についての報告を提出した。則ち一人の歸休兵が車中で英國の「航空郵便」ビラをひき出し、それを同乗の兵士及市民に讀み聞かせた。車中の多くの人々がそれを讀んだ後に、この捏造物が著しく普及した。而して私は如何なる有害なる影響をこの哀れむべきビラは既に示したかを明らかに認めることが出来た。尙注意書もあつた。誰の爲に私は銃殺されるべきなのか。それをよんだ者は最早前進しない!! 彼等は最早私とは戦はぬ。凡ての師團は歸る、と。しかもつと悪い革命的意見もあつた」と。通信員は既に以前に歸休兵がビラを持ち歸りそれを密に仲間に讀み聞かせた事實を知つた。ゲルゼンキルヘンの警察部長はこの報告に對してかくの如き事は多くの方面から報告されたとのべた。<sup>(1)</sup>

(1) 臨時第七軍團司令部の文書。

ドイツの町の至る所で、公の取引所、停車場、カフェー等で敵のビラが通行人に依つて見出されたと云ふ報告に遭遇しても不思議ではない。

兵士の言葉とビラの内容との一致は八月以來一般に現れて來た。シュールハッゼンの郵便檢閱所は敵のビラと兵士の手紙との間の言語上の關係についての報告を自から編纂し、その報告はベルリンに在る陸軍省及監督總監へ送られた。報告は表の形式で宣傳ビラ及兵士の手紙から同じ言葉或ひは同じ意味の言葉を並べた。<sup>(1)</sup> 該報告は僅かのビラを利用したに過ぎなかつた。

(1) O. H. L. の文書、第三部第二課

一層多くのビラを引用したならば一層容易に言葉の一致を認める事が出来たであらう。ともかく郵便檢閱所は一致の理由は絶對的には、革命的色彩ある話法及合言葉がビラから兵士によつて受け取られたといふ點に求めらるべきではないといふ事について熟知してゐた。反對も同様に眞實であり、敵の合言葉の影響は全くその適合に基づくと云ふ事を郵便檢閱所が指摘したのは全く正當である。ビラの内容は兵士の語彙や思想生活から微妙にぬすみ聽かれてゐる。兵士の言葉に用ひられてゐる表現は極めて賢明に利用される。兵士に歓迎される話法は常に兵士自身の話法である。

報告は最南部戦線から生じてゐる。北部では事態に變化はなかつた。八月二十一日から三十一日に至る間の第六軍の郵便檢閱所の報告の中で次の如くかいてある。「その位置に何等變化のない人は——常にくり返し宣傳ビラを讀み「貴公子」「資本家」「主農論者」「全獨逸主義者」等の如き名前の繰返されるのを見る。この言葉はこれを讀んだ者の手紙の中でかくの如き模寫と嫌惡すべき英國の原文の意義に於て利用される。かくして屢々不満、輕蔑、投降欲が直接に宣傳ビラに依り生ずる如く觀察された。——個々の人々は多くの英國のビラの内容の中に何か眞實なものがあるにちがひないと信ずる様に思はる。蓋しビラに對しては口頭でも文書の上でも反對のものが示されないからである。かくして彼等に屢々ビラの中に印刷された文句、例へば「全ドイツ主義の戦争延引者」「自由の盗人」「國民壓迫者としてのプロシヤ軍國主義」「血に渴えた獨逸皇帝」等が殆ど彼等の肉

と血の中に流れ入る』と。<sup>(1)</sup>

(註) 第五軍團司令部 S. B. の文書

かくして八月中には殆んど凡ての軍隊司令部に敵宣傳の有害なる影響についての確信が行き亘つた。九月二日に參謀總長アルブレヒト公とヘイエ大佐は第三部第二課長に「敵は今日ベンを以て、武器に依るよりずつと有効に戦つて居る。」と書き送つた。勿論未だ敵の宣傳ビラの影響を争ふ個々の師團の教育士官の報告もある。然し彼等を正當に信頼する事は出来ない。

九月五日の英國外務省に宛てた報告には次の如くあつた。曰く「聯合國の飛行家に依り投下されたビラは今や一層大なる影響を與へてゐる。嘗て屢々起つた如く投げ捨てられたり、輕蔑されずに今やそのビラは熱心に求められ讀まれて居り、これによりドイツ國民及軍隊の精神を非常に震撼させた事は疑ない。」<sup>(1)</sup>と。ビラの内容と一致せる表現は今や一層屢々見受けられ、九月二十一日に或る砲兵がデーデンホーヘンの農場で或る國民兵にフランスの煽動ビラを讀み聞かせた。彼はその際戦線に於ては彼等は皆ビラにかゝれてある通りの事を考へて居る。そしてビラは手から手へと渡つて居るとのべた。<sup>(2)</sup>クヴェールフルトの騎士領の或る勞働者に九月の「航空郵便」ビラ「ドイツ兵よ!! お前は再び斷首臺へ曳かれ行く」が西部戦線から送られた。郡長はそのビラを押收した。彼は臨時軍隊司令部へ彼の領域の住民はたへすこの檄文の内容に興味をもち、内容は全く正しいと云ふ見解をのべた

(208)

と報告しなければならなかつた。<sup>(3)</sup>

(1) タイムス戦争史、第二卷三四頁

(2) アルブレヒト公軍の文書

(3) マルリン陸軍省の文書、軍隊部

第十七軍の聯絡士官が十月九日最高軍指導部に報告した如く、士官が公に兵士とビラの内容につき話した現在に於てすら、ビラはたとへ誇張されてゐても何か眞實のものを含んで居るといふ見解を兵士は<sup>(1)</sup>だしてゐた。

(註) O. H. L. の文書、作戰部

敵宣傳の煙幕攻撃はもはや大衆の許に於て大した抵抗に遭遇しなかつた。敵がビラの中で兵士に感銘づけた命題は手紙や會話の中で絶へずくり返された。曰く「我々が敗けたらどんな害が我々にふりかゝるか。敵は我々から何も奪う事は出来ぬ。」——「敵は偉大な者に對してのみ戦ふ」——「敗北のみがドイツ國民を軍部の勢力から解放する」と。戦争利得者及戦争延引者に對する憎惡を説明する爲には敵の宣傳は必要でない。平和に對する憧憬だけで充分である。然し敵の勝利は決して悪くない、否、敵の勝利は元來ドイツ國民の利益であると云ふ考へは敵の宣傳の生産物乃至結果として諒解する事を得る。

十月四日のドイツ國民的行動救助同盟の最高軍指導部に宛てた覺書の内で愛國的感情を抱ける下

(209)

士官の手紙が引用されてあつた。曰く「敵國大臣の演説は兵士の許で完全なる精神的混亂を引きおこした。殆んど打ち勝たれ得ぬ意見が支配して居る。——この無政府主義的反獨的氣分は決して労働者にのみ限られて居ない。教養ある商人、教師、若い學生と筆をとつた大學生、彼等凡てが愛國的思想から遠ざかつて居る。——最大の不愉快に身をさらす事なしに敢て國民的聲を發しえぬ迄に既に事態は立至つた」と。

(註) 戦争新聞事務所の文書

この序述及凡ての他の詳細な序述によれば、一般的神經錯亂といふ精神病の印象をうける。弓は張られた。戦争の破壊的壓迫に對する恐怖によつて凡ての價値あるもの、激しい崩壊が起つた。祖國及義務に對する考へは妨害となる虞があつた爲めに投げてられた。尙もちこたへる様に警告した人は大衆に取つては敵となつた。敵のビラの約束とは全く反對な關係にあつた。約束を信じ度いと欲したが故に信じた。全ドイツ主義者の併合戦争の目的、戦争利得者の富、多くの戦争の不正は受動的革命的抵抗を自からは認る爲の歡迎的遁辭を提供した。唯自分自信の中にしつかりと基つた人々、或ひは勢ある指導者の人格の直接的影響の下にあつた人々がこの暗示から逃れ得た。

最早戦ふ事を欲しなかつたものは軍隊の多數であつたので、人々は宣傳ビラの適當に擴大せる効果を推論し得る。軍司令部附「〇」は十月末、參謀總長に送つた陳情書の中で敵の煽動の「巨大な

る影響」について語つた。曰く「民主主義的共和主義的色彩の標語の政治的に墮落化する影響は非常に明らかに認められうるので、特に確認する必要は全くない。のみならず同盟國及同盟者を互に争はせる、明らかに誤れる前提から發したる宣傳方法は、例へばバーデンの州民は多數、フランス人或ひはイギリス人を敵とみずしてプロシヤ人を最も悪い敵と見たと云ふ如き全く豫期せざる影響を與へた」と。盟休及戦争の終結を強要する要求は今や何千倍もの反響を見出した。十一月五日グレーネル將軍は局長會議で「大元帥及予の全見解は軍隊が防禦せねばならなかつた最悪の敵は脅威的過激社會主義である」と云つたが、彼はその場合この反逆的精神をいつたのであつた。かりに中休みをするとすれば混亂せる氣分は改良され得たであらうが、しかしその中休みは休戦開始前には齎されえなかつた。

(1) O. H. L. の文書 外國部

(2) 一九一八年の停戦前史の公の文書 二四八頁

かくして休戦の日に至る迄續いた敵の宣傳の破壊的影響についての報告は増大する。

全軍團及軍隊に宛てた十一月六日の最高軍指導部の回狀訓令の中では精神的低下は總括的に敵の影響の罪とされて居る。訓令の始には「敵は我々の故郷及軍隊に於ける氣分の低下に計劃的宣傳に依つて成功した」とある。

敵側の報告はドイツの文書から得られた観念を實證して居る。キヤムプベル・スチユアート卿は最後の四ヶ月に多數のドイツの捕虜は投下された宣傳ピラを携帶して居た事を傳へてゐる。後に訊問された捕虜及占領地域の住民は一致して、兵士は宣傳ピラを信じて居たと陳述した。<sup>(1)</sup>

從來ドイツに於ては敵の宣傳よりも急進社會主義の宣傳をより多く注意した。それは當然である。蓋し社會主義的煽動はその支持者の口頭の宣傳事業に基礎をおきえた爲に非常に危険であつたからである。祖國に於ては益々増大して革命的ピラが擴められた。軍隊と祖國は不可分の一體をなした爲に分解的影響は軍隊にも傳へられた。しかし戦線に於ける社會主義的宣傳ピラの配布は戦争中は控目な限界内に留まつて居た。監視は餘りにもきびしかつた。戦線から逆に敵の宣傳ピラが祖國に入つて來た。かくして交互作用が生じ、二つの本源的には別れて居た潮流は、共同して有害なる流を生ずる爲に合流した。東方の占領地からの部分的に過激社會主義に傳染せられたる軍隊をもつてドイツ西部軍を充たす事は、敵の精神を破壊する爲の他の前提條件であつた。然し急進社會主義的煽動の結果を如何に高く評價しようとも、戦線に於て決定的の數ヶ月に於ては西部諸國の宣傳が完全に優勢であつた。

(註) キヤムプベル・スチユアート 一一九、一二〇頁及 O. H. パッセル 三五五頁

アメリカの參戦後は戦争を迅速なる攻撃に依つて終結せしめえないとしても、何時かは獨逸の敗北となることを豫想することができた。然るにドイツの戦闘力の破壊が極めて速やかに、且極めて悲しき附隨現象の下に敵自身に依つて期待されたよりも早く生じた事は、ドイツの戦争意識の減退の發展によるのである。この意識の不具化は大部分高度の過重努力と失望の感情に依り制約されてゐた。意思の不具化は強まり完成し、而して敵宣傳の決定的協力の下に叛亂及自己の肉を掻き裂く性格を帯びた。

## 七、防 禦

敵宣傳の熱心なる防禦の必要は、軍事官廳に依つて明らかに認められた。檢閲及郵便監視は危険文書の獨逸への輸入を妨げる爲に、相提携して活動した。兩者は戦争の經過と共にその方策を次第に鋭くし遂には目の細かな有效な防禦網を作つた。それにも不拘首腦官廳は既に一九一七年の末にこの方法では完全な成功が望まれぬと云ふ事を明らかに知つた。然し氣球及飛行機で撒布された宣傳ビラの擴大を防ぐ任務は遂に困難であつた。野戦隊及守備隊の軍隊と共に就中境界領土の居住者が投下ビラの影響にさらされた。

防禦の爲に軍事官廳は先づ刑罰で恐喝する手段に訴へた。一九一五年十一月二十二日反獨的ビラの擴大についてのゲーデ及フアルケンハウゼン軍の同様の内容をもつた命令が發布され、十一月二十九日には亦臨時第十五軍團司令部の訓令も發布された。それらのビラを發見せる者は凡て遅延なく該ビラを最寄り軍隊服務所或ひは憲兵派出所に届出づべき旨を要求された。之に違反した場合には一年以内の禁錮が課せらるゝとおどかしてあつた。他の軍司令部及臨時軍團司令部もこの例に従つた。かくして第七軍司令部も一九一六年三月十八日の二國語でかゝれた告示を發布した。届出ざる場合は三ヶ月の自由刑が、之を印刷し、配付した場合は五年の自由刑が豫定された。刑罰は國境及占

(214)

領地域の市民に關して定められた。蓋し自己の軍隊からは敵の企劃の意識的進歩は期待され得なかつたからである。然し届出の義務は明らかに軍隊從屬者にも關係して居た。

兵士の間には敵のビラを思ひ出の記念として集め、故郷に送ると云ふ傾向があり、アルサスに於て軍人が居住者にビラに高價な金額を提供したと云ふ事件が起つた。臨時軍團司令部は之に干渉しなければならなかつた。一九一八年に於ける敵の宣傳の増加と共に故郷に送られたるビラの數も亦増加した。一九一八年七月十八日第三軍團部隊は全軍司令部にビラの届出に關する嚴格なる命令を發布する事を激勵した。ビラが戦場から家族や新聞編輯部へ送られた場合が大變多いと云ふ事が、祖國から知られた。違反者、反逆者が發見され得た限りに於ては嚴格な刑罰が課せられたのであつたが、屢々繰返された禁止は單に制限された結果をえたにすぎなかつた。郵便檢閲はこの命令に對する新しい違反を屢々曝露した。上官に取つては、敵のビラが兵士の手から手へと渡されるのを妨げる事は一層困難であつた。實行者を白状させえたのは例外の場合にすぎなかつた。

(1) O. H. I. の文書 第三部第二課 該文書は全章の基礎となつてゐる。

刑罰による脅迫よりも報酬の手段が一層大なる成功を期待された。ビラの交付に對し報酬を支拂ふといふ提議は或る軍團司令部によつて提案された。即ち發見者に正直且遅延なき届出を獎勵する爲、最初各部は三マルク、その他の部は二十五ペニツヒを支拂ふべしと提議せられた。該軍部隊

(215)

の情報士官は一九一七年三月に第三部第二課に宛て、二マルク乃至十五ペエニツヒが彼には充分なる報酬である様に思はると云ふ事をつけ加へて提議を更に與へた。その提議は充分効果があつた。既に四月二日に該部隊に依つて推薦された報酬を支拂ふ事を一般に第三部第二課から期待せしめた所の訓令が發布せられた。二マルクの額は凡ての最初の軍隊の内部に於て未だ知られざる部に對して支拂はれるべきであつた。手で書かれた宣傳ビラは一般に算入されて居なかつた。然るに提示されたる報酬にも不拘宣傳ビラの大部分は届出られぬ事が分つた。<sup>(1)</sup>第三軍第十六軍團の或る師團はその原因を報酬の不充分なる額の中に見出すと信じて居た。第十六軍團司令部は一九一七年七月六日の軍隊に宛てた陳情書の中に於てその師團の言葉に賛成した。曰く「フランス人がこのビラに與へ而して、反對の意味に於て我々の爲に持つ意味は大であるから、提示された報酬を高める事が妥當である様に思はる。」と。

(1) 第三軍司令部附秘書戰場警察の文書。

交付につき統計を作つた第三軍の秘密野戰警察は段階ある報酬の組織を完成した。ビラは多くの場合には個々に、唯まれに包となつて見出されたと云ふ觀察に基づいて、秘密野戰警察は個々のビラに以前の様な十五ペエニツヒの代りに五十ペエニツヒを拂ふ様に提議した。十五ペエニツヒは届出に對する充分な刺激ではない。二枚乃至百枚の届出には一枚につき三十ペエニツヒが支拂はれ

た。多くなればなる程少ない割増金を支拂つた。そして五百枚以上の發見者には一部につき僅か五ペエニツヒが支拂はれた。この提議を實行する際に個々の發見者が多數發見した際高すぎる金額を受け取ると云ふ災害を避けたのであらう。全軍の情報士官は第三部第二課に依り意見を定めるべく要求された。該部隊は計算を簡單にする爲に單位額を推薦した第三部第二課の情報士官の凡ての第一のビラに三マルク、その他のビラに三十ペエニツヒとする意見に賛成した。この士官が第三軍の提議に對して多數を發見した場合、發見者は五ペエニツヒしか報酬をえられぬと個々の宣傳ビラを隠匿せんとするであらうといふ抗議を主張したのは正當であつた。發見者の報酬を高める事についての新しい命令は一九一七年七月三十日に效力を生じた。次の月からの第三軍秘密野戰警察の報告に従へば該命令はよき結果をもつた。非常に増加せる届出は新しく示されたる報酬に基いた。

一九一八年夏投下が非常に増加せる際兵士側からする届出が少いとする非難が再びおこつた。七月九日の第七軍の教導士官會議では敵のビラの宣傳が第一點として議事日程に上つたのであるが、該會議に於て講演者は届出前ビラは既に多くの人々の手を通つて來た事、及ビラ發見の場所では至る所で一定數のビラが尙兵士の許に流布せられて居た事を確定事實として論じ、報酬を尙一層高くする事が要求せられた。野戰警察部長ツェストは、一九一八年七月及八月の彼の活動報告の中で、

ピラは兵士に依り保存せられ更に擴められたと報告した。八月六日に最高軍指導部に依り宣傳書に對する報酬が五マルクに上げられた。九月八日に占領地の住民に對して向けられたフランス語のピラの届出にもドイツ語のピラに對すると同じ額の報酬を支拂ふべしと命令された。非常に多數のピラが一時に發見される事が今や屢々起つた。個々の發見者に支拂はれねばならなかつた額は恐ろしく上昇し、第三部第二課は一九一八年七月に總額の協定に移つた。<sup>(2)</sup>三三〇枚乃至四〇〇枚の發見に對しては纏めて一〇〇マルク、六百枚乃至千枚の發見に對して尙一五〇マルクが支拂はれねばならなかつた。順位は四千枚迄の發見を豫定して居たが、軍部隊の獨立の處置は最高軍指導部に依り承認されなかつた。<sup>(3)</sup>それは敵のピラに依る脅迫が如何に強く感せられたかに對して特徴的である。

(1) 第七軍司令部の文書

(2) O. H. L. の文書、第三部第二課

(3) 愛國教育の偽の報告、戦争新聞事務所編纂第三六號及第三七號

報酬の支拂は際精確に處理せられ、フランスの宣傳が金の約束は單に紙上に止ると考へてよいと信じた如くではなかつた。<sup>(1)</sup>彼等に依り支拂はれた額についての情報士官の統計に従へば一九一八年九月の西部戦線の十個の軍の許で八十三萬三千七百六十枚届出られた宣傳ピラに對して、報酬として二十七萬七千三百五十六マルクが支拂はれた。三五・ペンニツヒの平均的報酬が各部に割當でられる。報告のある範圍では、一箇月に於ける最高額を、一九一八年九月の第六軍の報告士官が支拂つ

た。則ち七百八十六萬九千五百五十マルクである。ハンシーは交付に對する報酬は生産費の約四十四倍乃至五十倍に登つたと計算した。既に一九一七年秋季に報酬は個々の兵士に二百乃至三百マルクが支拂はれた。文書の中で確定される最高報酬は第六軍の第十七電話部隊の或る上等兵が一度に支拂をうけた。則ち千九百九十八枚のピラに對して五萬九千九百四十マルクであつた。

(註) Hanzl et Tomelat 一四二頁

屢々戦争日誌から、兵士はピラ探して狂氣の如くであると云ふ事を聴いても最早不思議ではない。第六十一後備隊師團の教導士官の第三部第一課に宛てた報告は、それから生じた弊害の劇烈なる序述を與へて居る。ピラは兵士に取つて商品となつた。それに對して五マルクの報酬が支拂はれるピラが最も渴望的のものとなつた。かゝる書物の發見者は届出前高い讀書料をとつて貸本をし、次に興味を持つ者が内容を知つた後夫を五マルクの發見料を請求する爲に彼の軍隊に届出た。かくの如き宣傳ピラを發見した人夫はそれを半分の軍用パンと引かへに兵士に賣つた。正に高額の發見料の提示に依つてピラの内容は軍律と全國家組織を動搖させ得、而して之に依り特に戦争の繼續に特別の利益を有する人々が危ふくされると云ふ確信が單純なる人々の心の内にも生じて來る。<sup>(1)</sup>

(註) O. H. L. の文書、第三部第二課

報告の編者は直ちに敵のピラの影響は高い報酬に依り増大されたと云ふ結論に達した。そしてピラに發見者の報酬を全く徹底的に低下せしめんとする提議を提出した。軍部隊はその範圍の他の部に於て賃金を提出した。至る所に同じ經驗がなされる事が生じた。かくして該軍部隊は十月三十日軍部隊司令部に於て發見料撤廢を提議した。軍B部隊はそこまでは欲せず報酬の低下を以て満足した。戦争の終了はこの改正の努力より先に到来した。高い發見料については色々議論はありうるが發見料は大體に於て届出の獎勵に効果を與へ、その限りに於てその目的を成就したと云ふ事は確かである。ともかく發見料は刑罰よりもより有效なる手段として證明された。情報士官の統計はそれに對する充分なる證據である。既に一九一九年に於てはベルリンの文庫に於て、敵のピラ及バンフレットの巨大なる堆積に直面して、敵宣傳の廣大なる範圍を確信する事が出来た。その後ピラ及バンフレットは一部の見本を除いて破壊されてしまつた。

敵の宣傳が軍隊に入るのを妨げる事は不可能であつたので、有害なる影響に教育によつて抵抗せんとする要求が益々痛切に提出された。軍隊自身の許ではこの任務は以前から知られて居た。第七軍の情報士官は既に一九一六年二月戦争新聞事務所にピラ宣傳に依る軍隊に對する繼續的工作に對する對抗物として、軍隊戦争新聞の爲の資料の提供を求めた。一九一六年九月ピラを批判する適當な場所として軍隊新聞を、第三部第二課長は全報告士官に示した。同時に彼は第二課所屬課員に宣

傳ピラの内容と目的についての教示を獎勵した。しかしこの對抗手段はピラを良く熟知してゐたこの軍隊に限られて居つた。批判に依つてはちめて兵士の注意が敵の宣傳に向けられない様に用心しようとした。かゝる觀點は次の數年に於ても亦常に特別の價值がおかれた。

大體に於て第三の戦争の冬が始まつて以來、啓蒙事業は一層熱心に營まれた。最高軍指導部にはその爲にベルリンにある戦争新聞事務所及大本營にある野戦新聞事務所が奉仕した。後者は野戦新聞に情報資料を提供する使命をもつて居た。第六回軍事公債應募期間の經過後一九一七年四月最高軍指導部は既存の募兵及啓蒙事業組織の持續及改良を決議した。四月の始以來ジークフリッド・バルダーのバンフレットが西部戦線に出現し、第三部第二課の許で特別部隊が反君主政敵宣傳を観察する爲に設立された。十一月には臨時參謀本部に於て第三部第二課は防禦の全指揮を委任された。<sup>(註)</sup>

(註) ベルリン陸軍省の文書、軍隊部

然し就中最高軍指導部は大規模の軍隊啓蒙事業に着手した。七月十七日最高軍指導部は野戦軍内啓蒙事業組織に關する命令を發布した。各軍司令部に「軍隊啓蒙事業指導官」の位置が作られた。資料提供及啓蒙指導の爲の中央部は戦争新聞事務所の第四部であつた。七月二十九日最高軍指導部は「軍隊啓蒙事業の指導原則」を發行し、種々の方面から表はされた。師團にも亦啓蒙士官の定員の地位



を作らんとする希望は、暫くの間拒否された。留守軍及祖國住民は臨時軍團司令部に包括された。軍司令部、總督、臨時軍團司令部に必要な手段を實行する責任が課せられ、最高軍指導部は全事業に對する標準のみを留保した。啓蒙手段として野戰新聞と並んで就中教示的演説が豫見された。九月に「啓蒙事業」と云ふ名は内政的事業の外觀を避ける爲に「祖國教育」と云ふ名に代へられた。教育士官の主要任務は愛國的教育の爲に士官及部隊長を養成するにあつた。努力の目的とする士官の均一なる完成と關與は到達困難であつた。實際は事態はしかく好都合に運ばなかつた。

祖國教育は全く一般に氣分の確定を目的としたが同時に敵宣傳の防止が次第に前面に現れて來た。敵の宣傳の内容を出来るだけ公に知らせないと云ふ原則が固持された。従つて國內の新聞に依る宣傳ビラの反駁は最高軍指導部に於ても望ましからぬものとされた。最高軍指導部の獎勵に基づいて一九一八年七月九日上級檢閲所の命令が發布せられた。その中に次の如くあつた。曰く「最近特に熱心に活動する煽動宣傳及ビラ宣傳の防止の爲に、敵の叙述に詳細に論及する事はドイツ新聞にとつて望ましからぬ事である。蓋しそれは敵の仕事を助長することになるからである。夫故に敵の叙述を詳細に再現する反對宣傳の公開は許可せぬ事が望ましい」と。<sup>(1)</sup>祖國教育の爲にする戰爭新聞事務所に於ける敵宣傳ビラの編輯は同じ理由から中止した。敵國宣傳ビラに對する防禦特に新聞の協力には反擊の限狭い限界が置かれた。然し祖國教育の遂行は次第に眞面目さを發揮した。

(1) 戰爭新聞事務所の文書。上級檢閲所。

一九一八年八月七日大本營の第三部第二課に於て祖國教育及野戰新聞の爲にする特別の團體が設立された。又十月の半頃に各師團司令部に於ても教育士官の位置が作られた。<sup>(1)</sup>元來陣地戰の始めに於て軍隊の士氣維持に役立たしめられた戰場新聞は敵宣傳の攻撃を主要使命なりと考へ始めた。八月始め毎週約四十萬枚が現れた。然し最高軍指導部は該新聞の影響はその官廳的性格に依つて單に制限的なものでしかありえぬ事を明らかに知つてゐた。敵のビラの投下は次第に増加した爲、ビラの内容を出来るだけ黙殺しようとする原則は其の正當性を失つた。臨時第十八軍團司令部は多數の敵ビラを寫真に取らしめ、それに附録文を添へて教育士官に交付した。一九一八年の十月始めの祖國教育の爲の報告書の中には、敵ビラの集收本を教育目的の爲に出版した軍司令部の處置が模範的とされて居た。

(註) O. H. T. の文書 第三部第二課

軍隊の許には、統一的指導下にある敵宣傳を妨禦するには自分自身の力では充分でないと云ふ感情が次第に生じて來た。祖國教育實行の手段方法は全く各軍の隨意に委された爲め、其の結果に對する責任は軍の重い負擔となり始めた。最高軍指導部の一層強い中心的活動に對する提議は、一九一八年の八月以來沈黙してはゐなかつた。該提議は戰線の軍隊の下に於ける、ビラに依る大規模の

ドイツ反對宣傳の要求と結びついた。ピラにより兵士の氣持に影響を與へんとする方法は始めは殆んど一般に拒絶された。その方法は戦争新聞事務所によつて推薦された軍隊内に於ける腹心人物の利用と同様に軍隊的に非すと感ぜられた。或る軍團司令部は一九一七年春陸軍省に對して此の方法ではロシア勞働者及兵士委員會の方法に近づく<sup>(1)</sup>と云ふ憂慮を述べた。亦第三部第二課すらピラの分配を嫌つて居た。敵が一九一八年の夏投下戰術で明白なる成功を收めた特に始めて、かゝる躊躇は徹底的に捨て去られた。

(1) ヘルリン陸軍省の文書 軍隊部

リヒノウスキーの英國側の宣傳ピラの軍隊に對する効果を認めた第四軍は、七月に切に反對出版物及ドイツ側のピラを要求した。八月二十七日皇太子軍の情報士官は特に危険な敵のピラと同時に、それと共に熱情なしの、明瞭なる反駁文を印刷し、この印刷物の約五十部を凡ての中隊及砲兵中隊へ分配する事を提議した。<sup>(1)</sup>

(1) 戦争新聞事務所の文書

最高軍指導部はこの考を注意すべきものと考へたが、差當り祖國教育の爲の報告書の中に附録の範例を公刊するに止つた。九月二日アルブレヒト公軍の參謀長ヘイエ大佐は第三部第二課長に尙不充分であつた反對宣傳の一層緊張せる組織に對する注意を喚起した。又彼は戰線に反對ピラを配付する事を要求した。

結局大本營の戰場新聞事務所に依つて遂に多數の反對ピラが發行され、軍隊に交付されたが、九月末には勿論、戰場新聞事務所は望みの分量の出版を用立てる事は出来なかつた。九月三十日にニコライ中佐は廻狀訓令の中で反對ピラと中央で作成すると云ふ希望を拒絶した。軍隊の欲求は統一的工作には餘りにも種々様々であつた。之に反して彼は全軍に適合せるピラを中央で製作させる約束をしたが實行された場合は少數であつた。ピラ、廣告として又新聞「戰場新聞」によつて最も廣く擴められたものは九月二日の敵宣傳防止の爲にするヒンデンブルグの檄文であつた。同月軍隊も反對ピラの作製を始めた。第四部はピラ「リヒノウスキー侯と真相」を出版した。第五部は教育士官に對し十月九日「將來一週に二度自己の軍隊の爲の戰場新聞及多數のピラを交付されるであらう」と傳へた。特に活動したのは皇太子軍であつた。その範圍内ではシャルレツイレメチエレスの戰場新聞も活動した。

從來主として用ひられた兵士に對する講演の方法は無効となつた。事實が至る所で知られた。該方法は戰線にある師團が交代不充分的の結果殆んど全く祖國教育を受け得なかつたため益々不満足なものとなつた。一般にいつて上から命ぜられた防禦方法が屢々不充分に軍隊に實施されてゐる。十月二十六日第十八軍第一バイエルン軍團司令部は「我々の側から殆んど何等反對宣傳をせぬ」爲に

敵のパンフレットの毒は全兵士に作用すると訴へ、而して多數の反對パンフレットを要求した。第十八軍は第三部課に陳狀書を更に送り、第十八軍はそれに加へて要求せられたる大規模の反對宣傳は永い以前から軍隊の許に於ける考査の對象であり、第十八軍の情報新聞はこの目的に役立つてゐると云ふ事をのべた。しかるにこれに従事する人々及技術的手段は有效なる防禦には到達しなかつた。

第十八軍は再び中央の救助を請ひ、一版五萬枚づきの多數のビラを送る事を願つた。<sup>(1)</sup>同様な結果は第十七軍にも生じた。宣傳防止事業が活氣を呈した時は既に過ぎた。十一月五日に始めて軍司令部は軍隊に有能なる印刷所を設ける事と、關係して居る著しい困難を克服した後、將來、軍隊情報新聞の外多數のビラを用ひることが出来る旨を傳へる事が出来た。<sup>(2)</sup>

(1) O. H. I. の文書 第三部第二課

(2) 第十七軍司令部の文書

最高軍指導部はこゝに痛切なる缺乏を生じた、と云ふ見解に耳を蔽うてゐることが出来なかつた。戦争新聞事務所に宛てた十一月一日の文書の中で最高軍指導部は、戦争新聞事務所の野戦軍への交付は迅速なる戦局發展と、同じ歩調を保ち得なかつた事を指摘し、あらゆる手段を用ひて出来るだけ早く遅れをとりかへす事を強要した。パンフレットの代りに戦争新聞事務所は出来るだけ多くビ

ラと廣告を送るべきである<sup>(1)</sup>と然しそれは餘りにも遅かつた。

(1) 戦争新聞事務所の文書

しかし目的に適應した資料の不充分なる供給が祖國教育の持つ、その點に對して戦線で次第に益々批判が向けられた唯一の弱點ではなかつた。

祖國教育は始めから軍事的事業部門として行はれ、平時に行はれた軍隊教育が模範とされた。演説に關する議論は許されなかつた。この軍事的教育の合目的性に對して最初から疑念が起つた。第一軍の代表者はこの疑念を一九一七年十一月の教育士官會議の際に提出し、そして束縛せられざる手段則ち會話による士官の個人的影響を薦した。然し彼は彼の提議を押し通さなかつた。元來兵士は初めから公の説明を疑つて居た。この嫌惡は一九一八年夏以來次第に鋭くなつた。戦線にある將校の手紙から我々は、嚴正に特別教育の事實によつて始めて不信用を呼び起したといふことを知るのである。「我々を再び維持させる様に刺戟するのは大變ばかばかしいことだ。」と云ふ考が生じて來た。<sup>(1)</sup>祖國教育は軍隊士官の下でも喜ばれなかつた。一九一八年六月の西部戦線教育士官達との相談の際に第三軍の代表者は大部分の士官は始め極端に懷疑的且拒絶的態度を取つたとのべた。若干の軍司令部に依つて、當時はまだ高級士官特に師團長は祖國教育を積極的には支持せず、せいせいそれを耐へ忍ぶ程度であつた事實が實證された。

敵の宣傳の増加と共に、勿論凡ての人は強力な防止策が切に必要であると云ふ事を理解しなければならなかつた。然し啓蒙士官の講話の活動に依つては如何なる一般的效果も得られぬと云ふことが漸く認めらるゝに到つた。最高軍指導部は自ら中隊指揮官を祖國の教育の本來の支持者にしやうと欲した。然るに軍隊指導者は演説に依る愛國的啓蒙の考へを拒否した。士官の大喪失に依つて更に若い士官が中隊の指揮を委任せられ、彼等は若さと無經驗の爲敵の政治的宣傳に充分なる確信力を以て對抗し得ぬ事が屢々非難された。軍及師團は最高軍指導部に依つて力強く要求せられた教育を實行せんと欲した爲、軍及師團は演説と云ふ士官に取つて慣れない仕事を引き受ける所の特別の教育士官を聯隊及獨立組織の許におくと云ふ事を唯一の頼りにしなければならなかつた。而して正にこの發展は全防止事業の結果にとつて宿命的であつた。その事は戦線に於ても亦明らかに認められた。

砲兵司令官は一九一八年八月三十一日第十七軍に次の事を報告した。曰く「未知の教育士官は不信任の目を向けらるゝ危険がある——その氣分に對抗して戦ふ事の出来るものは唯兵士が彼を知り且信頼する士官則ち兵士と共に危険と缺乏を分つ砲臺長のみである。聯隊及部隊の教育士官の配置は誤まつて居た様に思はれる。見知らぬ砲兵中隊に於ては成功を以て教育士官は影響を與へる事は

出来ぬ。彼等の存在はせいせい軍隊の精神に對する責任の一部が砲臺長から奪はれたと云ふ想像に誤り導くにすぎぬ。寧ろただ砲臺長だけに祖國教育の擔當者としての責任を負はず理由がある」と。

(註) 第十七軍司令部の文書

第六軍の司令官ツヴァスト將軍が九月六日の文書の中に於て彼に従屬せる司令官の將軍に與へた指示は同様の内容をもつて居た。曰く「屢々人々は命令に依り啓蒙されると感ずる。この啓蒙を彼は義務として受け取り、これに對し何等特別の興味もなく屢々邪推と不信をもつた。それは害あつて益なきことである。啓蒙の爲には唯一の道があるだけである。則ち小隊長は個人との會話に於てはこつそりと押しを強くせず出来るだけ對立する黨派的事件を論じないで、談話しなければならぬ。しかしてその場合義務意識、ドイツ祖國への關心、兵役義務的精神を呼び起す様に試みなければならぬ。この種の啓蒙の爲には士官が彼の部下の信頼を得る事が必要である。凡ての中隊長がこの啓蒙事業を効果的になし得るとは限らぬ。故に教育士官及特に部隊長は補充的干渉をなさねばならぬ。然し之は彼等が直接に部下に影響を與へんと試みる事に依つてではなく、彼等が中隊長に、彼等が部下の兵士と交際する手段、方法を忠告的に示す事に依つてなさねばならぬ」。

(註) 同上の文書 第三部第二課

良い教育士官の不足について屢々非難された。ニコライ中佐はそれを成功の少ない主要原因だと

思つた。彼は一九一八年九月に次の如く書いた。曰く「祖國教育は一つの補充でしかありえない。その理由は既に我々が祖國教育の意味で行動し得る充分有能なる人々を使ひ得ないからである。故に焦眉の問題の解決を祖國教育に歸せんと欲する事は誤りであらう。祖國教育には自分が解決し得ない任務があるのである」と。<sup>(1)</sup>戦争新聞事務所啓蒙部長は十月の末頃次の如き意見を持つ様になつた。則ち「軍隊に於ける教育士官は多くその使命に耐へ得ない、又餘りに屢々交代する。而して他の使命を持つ」と。教育士官の選任が如何に屢々行はれるかは第三部第二課に於て十月に作られた、士氣振作の提議が示して居る。その中で次の如き文章がある。曰く「軍略目的の爲に傳令將校として最も不適任な士官は、教育士官として擇ばれてはならぬ」と、十月二十八日にヒンデンブルグは自らそれについて訓令を發した。その訓令の中には次の如く書いてあつた。曰く「教育士官の人格が決定的意義を持つ。——この活動に於て今日迄使用された士官の一部は充分に努力したにも不拘この重要な命には耐へなかつた。かくの如き場合には直ちに交代が惹起さるべきである。この要求に基づいて私は軍隊司令部の下で愛國教育の指導者の位置を充たす爲に適當なる士官であれば參謀本部の士官でも用立てるであらう——兼職にある教育士官を使用する事は凡て禁止されて居る。」と。

(1) 戦争新聞事務所の文書

祖國教育の範圍内ではその状態のまゝ悪い氣分の變化は惹起されなかつた。祖國教育は完全に失

敗に終つた。然しその事はその理念の不正に對する證據ではない。軍隊及國民の氣分を上昇せると云ふ目的を意識した仕事の必要な事は凡ての戦交國に明らかに認められて居た。孤立せるドイツ國民は他の國民よりも一層鼓舞を必要とした。祖國教育の失敗の理由は一部は一種の組織過多に在つた。適當なる人の缺乏も亦重大な妨害となつた。然しこの二つの弊害も、祖國教育に確信的内容を與へる事に指導部が成功したならば、かくも宿命な結果をもたらさなかつたであらう。

祖國教育はルーデンドルフ將軍の意志の強い性格によつて全く勝利の考の上に打ち建てられた。

一九一七年六月七日の大本營に於ける第三部第二課長、彼の協力者、戦争新聞事務所員の商議の結果として、啓蒙の任務として次の事が確定された。則ち「軍事上はドイツの勝利は必然的であり又可能である。勝利に依つてのみ、もたらされた犠牲に適應する平和に到達し得る。——獨逸の勝利に對する疑念は除かれねばならぬ。——政治上は、宣傳は、斷念の平和又は和解の平和はドイツ國民の欲望に適しない事、唯勝利の平和とそこから平和締結の際導かれる結果がドイツ國民並びに凡ての階級に對して幸福な状態を齎し得ると云ふ事を證明する使命を有する」と。従つて軍隊に於ける啓蒙活動の爲の指導原則の印刷物の中に次の如く書かれた。則ち「我々の從來の成果はすべて窮極の勝利に對する信頼を確保するものである。勝利の意識、義務に對する忠實、男の誇りは益々重要を加ふるに至つた、最後の斷案は既に我々に都合よい様になされた。」と。

祖國教育を鼓舞した勝利に對する確信の精神は、ドイツ帝國議會の多數が七月十九日に決議せる和解の平和のプログラムとは明かに矛盾した。反對は然し永くかくされては居なかつた。社會民主主義者は十月の始め議會で、軍事的啓蒙を激しく攻撃した。彼等はその尖端は直接議會の多數黨に向けられたと主張した。然し豫算委員會に於けるレーデボウルの啓蒙事業の即時的撤廢の提議は拒絶せられた。而して一般に指導原則は承認せられた。個々の點に亘る戦争目的の討論は行はれてはならぬと云ふ點に一致した。

そこから兵士は最も重大なる問題に對して如何なる明らかな教示も得る事が出来なかつたと云ふ汚辱的且憂慮すべき状態が生じた。第三部第二課に於て教育士官の報告によれば一九一七年の末頃戦争の目的についての屢々の質問に對して否定的答がなされた。則ち、「敵はその征服計畫を放棄しなければならぬ」と。第九軍の許で同様の非常に屢々なされた質問に對して單に一つの標語が與へられた。則ち「國民はヒンデンブルグに信頼して居る。彼が如何なる平和を正しいものと爲すも、それで各人は満足せねばならぬ」と。最高軍指導部は尙、直接の質問に對して自分の個人的確信に従つて答へることを各教育士官に任した。

内面的間隙は單に悪く被はれて居たにすぎなかつた。その爲有效なる啓蒙は不可能となつた。帝國政府が意識的に内部的宣傳の爲の一般的啓蒙官廳を作る事を諦めたのは、最高軍指導部の組織、

戦争新聞事務所、祖國教育が政府指示に適應する事を信じなかつたからである。軍隊の啓蒙事業と並んで私の組織に對する影響に依り彼の意味に於ける啓蒙を行はんとする副宰相ベイエルの試みは失敗した。一九一八年三月彼の指導の下に建設された、祖國啓蒙の爲の中央官廳は重大な影響を及ぼすのに成功しなかつた。戦争新聞事務所は特にプロシヤに於ける非軍事的官廳との協力に依り既に市民に對する決定的な影響を確保した。實際的和解に到達しなかつたのは運命であつた。最高軍指導部は敵の破壊欲及和解の平和の見込みなきことを議會に於ける多數黨よりも明らかに認識してゐた。然し多數黨の指導者に依り明らかに見られた國民及軍隊に於ける平和の欲求の大きさを輕蔑した。十月九日の議會で代議士グヅイドは軍部と兵士との間の全關係の覆滅が恐るべきであつた。その問題について勃發する恐れがあつた。士官と兵士との間の全關係の覆滅が恐るべきであつた。兵士の九〇パーセントは平和的決意の上に立つて居る。彼等は獨り敵のみが戦争繼續の責任ありと確信する場合のみ戦ひを續けるであらう、和解の平和の基礎の上にのみドイツ國民の統一は保存せられ得る。この警告は最も真面目な注意に價するであらう。グヅイドの豫言は一九一八年秋完全に實現せられた。

從來最高軍指導部の勝利の確信は尙理解されたので、攻撃の中絶は、軍隊の平和に對する憧憬が

満足せしめられねばならぬ瞬間が到来した。ハーグ公使館附武官シュツアイニツ少佐はルーデン  
ドルフに宛てた覺書の中で六月十四日に次の如くかいた。曰く「我が國民の物質的、精神的力には  
限度がある。獨逸國民に對する超人的な事の要求が逼迫するならば、獨逸國民は、國民から免かれ  
しむる爲に凡てを爲した所の政府や軍指導部に對してのみ、喜んで耐へ忍ぶであらう。」と。祖國教  
育はこの意味に於て改革されねばならなかつたのであらう。第一の要求は兵士に依り本能的に全く  
正しく理解された所の境遇の絶望的眞面目さを表現する事である。次には軍隊には、最高軍指導部  
は耐へ得る平和に到達する爲に凡てを爲すといふ確信が與へられねばならなかつたが、兩方とも缺  
けてゐたが言葉だけでは最早充分ではなかつたであらう。行爲も必要であつた。此處に祖國教育の  
失敗の最後の原因が在る。

(註) O. H. I. の文書 政治部

ニコライ中佐は一九一八年六月二十七日及二十八日の教育士官との會議で祖國教育に「戦争が今  
後如何に永引くかと云ふ間が兵士から提出されぬ」様にする目的を建てたが、それは不可能な事  
要求だと云はれた。戦争新聞事務所の仕事に對する基準として九月十日の會議に於て「勝利者は我々  
である。そして我々が今後依然として勝利者であるかは、唯々國民の行動に依存する。」と云ふ命題  
が提出された。九月十八日第四軍祖國教育指導者が我々の一般的、政治的、軍治的狀態の過度に有利

的な批判について、戦争新聞事務所文書の中で非難し、軍隊のかくの如き教示の不利な結果を注意  
したとすれば、それは何等不思議ではなかつた。<sup>(1)</sup>一層の眞面目さと率直さが必要である。第十五軍  
團臨時軍團司令部は一九一八年十月一日に更に祖國教育に對する指導原則を發行した。その中で教  
示の最も重要な對象の中で「決定は我々に有利になされた。それを窮極的に保證する事が必要で  
ある。」と云ふ命題が再び表れた。かくして勝利の虚構は苦い終局迄維持された。

(1) 第四軍司令部の文書

(2) O. H. I. の文書 第三部第二課

強い收獲多い平和と云ふ考へから愛國教育は最後迄開放されなかつた。第三部第三課から發行せ  
られた祖國教育の爲の報告書の中には、十月十四日我が軍事狀態は凡ての信頼を許すと書かれ、四  
ヶ年の戦争による成果を確保する事に成功するであらうといふ希望が陳述された。「亦ブリーの鑛  
石盆地の意義も我々のすべての軍隊所屬者に充分に知らねばならぬ。我々は戦線背後の鑛脈なし  
には戦争をなしえぬこと、夫故に我々は我々の職務の歩調を合せねばならぬと云ふ事を知らねばな  
らぬ。」當時の兵士の絶望的氣分を思ひ浮かべるならばかゝる教示の影響を推測し得るのであつて、  
將軍及戦争利得者を本來の戦争延引者とする事に努めた敵ピラが活動し始めた。

(1) 戦争新聞事務所の文書

九月二十五日第六軍の指揮者は第五十五軍團司令官たる將軍に郵便監督報告を送つた。その中には或る中尉の手紙が氣分の批判に對する特別の意義をもつてゐるので再現されてあつた。その中に次の如く書いてあつた。曰く「單純な人々は、彼等に戦争繼續の必要を暗示しうるならば、戦争繼續の必要に對する完全なる理解を徹底的にもつのである。あたかも我々がベルギー、半分のフランス、四分の三のロシアの併合等の爲に戦争を行ふかの如きこの不幸なる觀念(全獨逸主義者の共通觀念)を彼等から取り去りうるとすればどうであらうか。人々が、軍首脳部がかくも頑強でなければすべし、我々はとつとつに平和を得ることが出来たらうと言ふ言葉は、盗み聞きすらなしえなかつた。」と。

(1) 五十五軍團司令部の文書

軍隊の政治的啓蒙の缺乏は大きな損害となつた。戦線の士官によつて敵方の政治的要求が強く感せられた。ここに於て、この最も重大なる點で、祖國教育が役立たなかつたのは、國內政治に對する啓蒙を躊躇した爲であつた。尙十月十五日ニコライ中佐は會議の際、軍隊の祖國教育は以前と同様に今後も政治から遠ざからねばならぬ事を確定した。敵の宣傳が絶えずドイツの政治状態に向けた重大なる攻撃は防禦されずにあつた。停戦の申出後混亂は完成した。最後の一人迄抵抗を要求した軍部の意思は、平和を直ちに且如何なる犠牲に代へても要求した訓練されない大衆の意志に遭遇した。政治的指導部と最高軍指導部とは如何なる統一的態度もとらなかつた。祖國教育にはそれ

は不可能な状態であつた。政治的基準の指示要求は戦線から次第に痛切に叫ばれた。

(註) O. H. L. の文書 第三部第二課

十月の始め以來政治的重點は帝國政府に移つた。その月の終り頃全啓蒙事業の指導はエルツベルグ局長に委任された。従つて政府は、從來最高指導部が手中にしつかり維持して居た所の祖國教育に對して影響を與へ、政治を軍隊から遠ざけると云ふ原則は放棄された。エルツベルグは祖國內の職務に對する中央部の指導者として十月二十二日以來亦政治的基準を發表した。之は然し第一に一般人民の爲に定められたものであつた。最高軍指導部は彼に如何なる信頼も與へず、むしろ彼の基準が將校團の感情を損ふ事を恐れた。この基準は戦線の軍隊内では單に抜萃的に告知された。一方最高軍指導部は政府と衝突しない爲に自らの政治的規準を發表することを躊躇した。かくして明らかかな精神的指導に對する軍隊の要求は、かくの如き特に批評的な時代に於て何等満足が與へられなかつた。

(註) O. H. L. の文書 第三部第二課

戦争の最後の數ヶ月に於ては、軍隊の戦闘力を精神的手段で高める凡ての試みは過度の努力と初めからの絶望状態のため望みがなかつたと云ふ事が出来よう。教育士官の仲間の範圍でも同じ觀察が主張された。第四軍教育士官は近衛豫備軍の氣分を調査せる後十月十七日に次の如く報告した。



曰く「氣分は主として、勝利或ひは敗北、暗物及休息、世話、休暇、上官の取扱、心配、正義、友情、啓蒙に依存して居る。一般に人々の肉體力と神經が餘りにも強く消耗した結果彼等の抵抗力と戦闘力は我慢が出来なかつた。そして彼等は大戰に最早耐へる事が出来なかつた。祖國教育の指導者と彼の手先が處理した小さな手段で現在は殆んど何も爲されなかつた。強い薬が必要である。數ヶ月以來設置された師團を後退させそれを根本的に回復させ新らしく建設する事は絶對的に必要である。」と。<sup>(1)</sup>然し不幸にもこの強い薬の適用は軍隊の事情に依り不可能とされた。軍指導部は軍隊の負擔を軽減させ得なかつたので、彼等にとつては極端なる困窮に耐へる爲に彼等の意思に作用するより外、手段がなかつた。

人々はこの問題が根本的に解かれなかつたと云ふ事は許されない。それは軍隊指導隊長に依りその決定的な意味に於て認められ又陳述された。成功に對する要件、則ち明白な統一的、精神的指導は存在しなかつた。拒絶に對する最後の理由は、ドイツ國民を分裂させそしてドイツ國民を一致して献身的の努力をなさしむる事を不可能にした所の軋轢であつた。

(1) 第四軍團司令部の支書

## 八、イデオロギー

世界大戰の終り頃、獨逸軍隊及び國民に巻き起つた混亂は、戦ひの精神的方面に於ける獨逸國敗北の兆をなしてゐる。當時非常に廣く行き渡つてゐた敗北感は大分、肉體的並びに精神的困難に基いてゐた。然し其れのみではない。宣傳も亦本質的に獨逸敗北感を引き起すに力あつた。敵國の小冊子に多く載せられてあつた虚言誹謗及び見透しの付いた欺瞞法に直面しては、獨逸國民は敵國の宣傳の全部を喜んで輕々しく取扱ふ事が出来たであらう。敵國の宣傳が非常に危険ならしめたものは然し他にあつた。敵國の宣傳は、巧妙なる設備及び技術のみならず、世界が信を置いてゐた根本的イデオロギーの力に、より多く其の效果を負ふたのであつた。宣傳戰に於て、獨逸國は全く孤立の狀態であつた。宣傳といふ語は、戰爭中或る不快なる感覺を與へた。即ち殆んど虚言と同意義に用ひられた。亞米利加合衆國が一九一七年に其の強力なる宣傳機關を設置した時、此の宣傳なる不吉の語は、心配そうに避けられた。獨逸國に於ては、此の宣傳と關聯を持つたものは、總べて特別の不信を抱かれた。獨逸國民は戰爭中、宣傳の領域に於ては、我々は敵に従ふ事も出来ざれば又其れを欲するものでも無いと言つて喜んだ事もあつた。然し斯かる考へ方は依然表面的に留まるに過ぎなかつた。それと言ふのも熱狂及び信仰も效果ある宣傳の一つであるからである。其れどころか

宣傳の效果は戦場に齎らされる熱狂と信仰の程度と密接なる關係に立つと主張してもよい。そして此の精神的確信こそ聯合國が大戦の後期に於て獨逸に、はるかに優つてゐた所である。諸國は總べて、十字軍的の氣分に置かれた。敵の宣傳を勝利に導くに役立つものは理想であつた。聯合國は始めから自由と平和の理想を要求した。中立國民は其の言葉に信を置き、同情を以て支持した。一九一八年の秋にヘルマン・ケイザーリング伯は「スイス」に於て發行された一論文に於て、此の聯合國の理想は人類の五分の四を熱狂せしめたが、然し其れにも拘らず、聯合國自身は當分尙ほ中央諸列強より、其の理想の實現を躊躇する事、多大ならんと確言した。十月十三日に最高軍事監督の對外部は敵の宣傳を總括して次の事を承認せざるを得なかつた。即ち、此の宣傳の深刻な影響は大戦の最も歴史的經驗の一つであつた事、四年後の今日でも尙ほ、世界の輿論に勝ち得たのみならず、我等の味方に疑ひと謀叛を齎らした此の政治的並びに道徳的攻撃に對しては指導的階級の人達は途方に暮れてゐる事である。

戦争がイデオロギー及び原理の戦ひなる事は既は一九一四年八月六日に英國宰相「アスキイス」に依り、下院に於ける最初の戦争演説に於て宣言された所であつた。凡ゆる公開演説に於て戦争が主眼點として持ち出された。ロイド・ジョージは之の「聖戰」を歐羅巴解放のためのものと説き始めた。一九一六年八月四日此の宰相は或る公開演説に於て彼のテーマを繰返して次の如く説いた。

「列強間の戦ひではなく、一致し難きイデオロギーの戦ひなり。即ち一方に於ては自由……及び人類の進歩のために戦ふ勢力あり、他方には早晩世界を向上せしめ、改革し得る總べてのものを壓迫せんとする勢力がある」と。之の歐洲の合言葉はウィルソンに依り擴げられて世界の合言葉となり、世界大戦に於て世界の合言葉も亦必要であつた。獨逸に於ては自分に對して思想的根據より、生存權を否定した聯合軍側の一般的攻撃と同様に、一般的に支持された反對攻撃に依り、聯合軍の攻撃に代へやうとはしなかつた。此の如き躊躇はひどく報いられた。國民の大部分は自己特有のイデオロギーも持たず、敵國のイデオロギーに移り變つた。聯合國側は無論始めから獨逸よりも都合な状態にあつた。中立國の氣分が其れに迎合した。獨逸は戦争前既に自由に反對の旗を掲げたる勢力の叫びの前に立つた。西部のデモクラシー諸國は政治的自由の保護地と思はれた。獨逸の内政状態と同様外交關係も獨逸の宣傳には決して都合良きものではなかつた。新興獨逸國には確固たる政治的傳統が缺けてゐた。獨逸は大陸國の強國として現はれたが未だ廣い世界の諸事情に對して十分明瞭なる認識をなすには立ち至つてはゐなかつた。國民の意思には達せんと思へば達し得たであらう様な確固たる目標が缺けてゐた。國民には戦争の目標も無ければ又戦はんとする意思もなかつた。然し長年蓄積されたる國力は國民全般の擴張慾を刺戟し、獨逸の領土は此れ迄に存在せる人民を育て、勢力を養ふには餘りに狭少であつた。獨逸の帝國主義が頭を擡げた。然しそれは精神的にも成

熟するには餘りに新しかった。それ故に此の帝國主義は未だ如何なる形態も取つて現はる事は出来なかつた。英國及び佛國のイデオロギイの内容で十分満される帝國主義と獨逸のそれとは對等に並ぶ事は出来なかつた。大戰が勃發した時、獨逸では最初の勝利の後獨逸を廣い世界から封鎖したところの狭い環を打破り、活潑に生き／＼と感ぜられた方に相當せる世界支配への立場を獲得しやうといふ意思が擡頭して來た。獨逸内部の権利は其の國力に基礎を置いてゐた。此の世界支配關與の要求に對しては、今迄世界を相互の間に分割してゐた諸列強が反對して立つた。彼等は戦ひを「權力に對する正義」といふ効果ある言葉を以て言ひ表はした。此の點再び獨逸は不利であつた。自然に發達せんとする意思は外部的には一つの利己的欲求として表はれ、其して容易に残酷なる征服意思に曲解される事も出來た。遂に大戰勃發前數ヶ月に於ける政治訓練の熟練せざる獨裁は獨逸の敵に尙ほ、最後の瞬間に於て其の攻撃に對する最も強き證明を提供した。政治的事柄の影響が如何に重大なりとも、イデオロギイの歴史的發展を思ひ起さずしては精神的孤立は徹底的には諒解され得るものではない。外國は獨逸に對する幾百年間かの觀察を總括して「詩人と思想家の國」なりとの表現を以て表はしてゐる。此れは獨逸人の才能は實際的には有益なる行動を爲さずして、世界及び其の事象を内面的意味で把握する事に存すると言ふ意味である。斯かる外國の獨逸に對する判斷は歴史に依り確證される。中世の神秘主義及び宗教改革は獨逸の地に於て發生した。宗教改革のルー

ター主義に於ける特に獨逸的發展は特別な特徴を持つたものであり、其のルーター主義たるや實に、此の俗世間から悲觀論的に回避をなし、又良き仕事、凡ゆる人間の能力を信じないものであり、只神の無限の恩恵のみを信するものである。ルーター主義の中には全然非政策的精神が生きて居り、良心の内面的自由に重點が置かれてゐる。第二番目の而も最も大規模なる獨逸の精神運動も此れと全く似た性質のものであつた。其の運動とは即ち哲學的理想主義に外ならぬ。其の名は哲學的理想主義なるにも拘らず結局、此の俗世間は理想の到達に適當せる土地ではないとの結論に到達してゐる。此の理想主義も亦宗教改革と同様に古典ローマ主義的人道主義及び合理主義即ち、自分の仕事をもつてゐる人間を世界の中心に置かうとする世界觀に對する強力なる抗議を意味するものである。それは此の俗世間を「絶對」なる立場から出發して理解し説明する試みであるが、然し特に世界は惡なりと理解させ説明する試みである。即ち其の試みたるや、問題が本質上解く可からざるものであるが故に失敗せざるを得なかつたが然し西部諸國の考へと異り、無限に獨逸的思想の特徴長をなすものである。最も廣い理想主義體系を打ち立てたヘーゲルは、ルーター主義と同様、世界は本質的に惡なるものとして表はれてゐる。然し其の惡たるや永遠の決斷に依り、より高尚なる目的に無意識的に協力する様に強制され又斯く豫定されてゐるものである。「世界の歴史」は幸福が育まれて來た土地ではないとヘーゲルは言つてゐる。個々の人間並びに國家は何等遠慮する所無く他

の犠牲に供されてゐる。我々の見る所に依れば彼等に向けられたる悲觀主義的世界觀は幾百年を通じて同一のものである。即ち世間を意識して目的に従つて形成する人間の能力を同様に輕視する事、物質的幸福を同様に輕視する事は今も昔も異なる所ではない。確かに既に始めから獨逸人の素質となつてゐた此の悲劇的争に充ちたる精神の傾向は、其れは其れで確かに又其の責任がなかつたのではないが獨逸歴史の經驗に依り異常に強められた。三十年戦争の悲しむべき經驗、何百年間續いた政治的無力状態及び分裂は政治的生活即ち活動的行動からの轉向に與つて力ある事多大であつた。他方之等はヘーゲルに於て既に表はれてゐた。力の意味に對する特別なる理解を呼び起した。ヘーゲルは熱狂といふ内的なものゝために、力に存する真理を看過し、それ故に正義といふ自己満足に過ぎない人間の所産及び自由と真理のより高き正義に對して考へ出されたる幻想を信する人間を非難してゐる。そこで力の要素としての、又天が其の永遠の目的を遂行するための直接の道としての國家が崇敬の對象物となつた。此の愛國心たるや尙ほ他の特に獨逸的イデオロギー即ち個人に依りつよめられた。浪漫主義とは斯かる觀察方法を最も效果的に凡ゆる方向に發展せしめたものであつた。此れが本來浪漫主義の愛好する思想であつた。國家と雖も、やがて個人主義の一種として理解される様になつた。それは國民と國家と同視する事が多ければ多い程益々正當さを増して來た。此の個人主義を價值あるものとして見る見解及び歴史に於ては本能的力が支配してゐるとの見

方が獨逸的歴史觀を徹底的に西方諸列強のそれから區別してゐる。獨逸的精神の傾向及び傳統の中で進歩をなしてゐる西方諸國のそれとの間に存する深き溝が理想主義及び浪漫主義に依りて現はれ始めた。十九世紀の初頭以來獨逸の孤立は目立つに至つたが、此の獨逸的歴史觀は十九世紀の晩年には哲學的に高度の發展はしなかつた。その歴史觀自身の中に危險がひそんでゐて、時代の經過に伴ふ危機は逃がれる事は出来なかつた。

形而上學的、道德的觀察方法が發展して容易に原則たる地位を勝ち得た。それといふのも、形而上學的思案は常に意思不自由なる思想へ向つて努力したからである。價値の重點を彼岸に置いたといふ事は宿命論即ち人間の責任よりの逃避への傾向を意味する。斯かる思潮は既にルッター主義に於て、可成り認められてゐた。此の様な方向に、惡は世の進歩のためには必要缺く可からざるものであるとのヘーゲルの認識が作用してゐた。歴史的事件の影響の下に此の傾向は發展して著しき弱點の動機となつた。第十九世紀は獨逸國民の統一戦で終止した。政争の騒音は學說を粗雜のものとした。國家は益々單なる權力國家に過ぎないものと解され、國家も個人主義的なりとの觀念から、國家も亦一層重き責任を自覺すべきであるとの結論が引き出されなかつたであらう。然し事實は此の結論は引き出されなかつた。反對に國家には、其の利益に役立つものはすべて許さるべきであつて、此の場合の利益とは度々單に物質的なものと解された。戦争が都合よく進行したとの印象の下に權力の過重視は非精神的色彩を帯びて來た。

此處に獨逸の精神的な方面の備の弱點が現はれた。そしてその弱點は以前既に聯合國の側から明らかに認められてゐたものであつて、此の弱點は非常に明確に指摘されたが故に愈々輕視し得ざるものとなつた。即ち獨逸に於ては最も早く、最も痛切に、ニーチエに依り一八七〇—七一年戦争直後に於て既に指摘されて居り、敵國の宣傳が目的とすべき點は既に與へられてゐた。即ち我々は敵の宣傳がチャンスをも最も力強く利用し盡した事を認めねばならぬ。獨逸の哲學が俗世間の永遠不變の意味を捕へんと努力した時、他方西部諸國の精神的勞作は他の目標に向けられてゐた。即ち世界改善と文化進歩を目標としてゐた。偉大なる精神、歴史の傳統はより多く彼等の味方であつた。既に中世のカトリック教に於て國家及び社會にキリスト教の教義を實現する可能性ありと信じた強き傾向があつた。人道主義は古典的ローマ的思想の上に基礎を置き、人間を萬物の靈長として中心點に置き、世界を自分の理性を以て、自分の意思通りに形成しそして自分の幸福となす能力が人間にあると信じ、此の人道主義の發展はやがて十八世紀に於て啓蒙思想を作り上げた。此の思想は衰亡せんとする獨逸及び北アメリカを加へて全歐羅巴を其の支配下に置いた。第十九世紀には佛國及び英國に於て凡ゆる形而上學の原則的反對者たる實證主義が首位を占め、他方獨逸に於ては第十九世紀初頭の大體系からショーペンハウエルに至る迄理想主義が壓倒的地位を保持してゐた。然し實證主義には發展力がなく、熱狂主義は啓蒙を缺いてゐる。無論それは人類の幸福を目標として宣言

(246)

はしてゐるけれども。

此の思想の本來の發生地たる佛國に於て、青年は獨逸の理想主義的思想の發展の影響の下に、戦前既に此の實證主義から轉向した。此れは丁度自然的懷疑が佛國人をしてユートピアに對して感受性を弱めたと同様である。世界進歩の思想を復興せしめる運動は戦時に於ては佛國より起つたのではなく、アングロサクソン諸國より萌芽を發したのであつた。英國特に又米國に於て此の思想は、就中戦勝に導いた宗教的熱情を未だ失ひはしなかつた。啓蒙思想は此處では始めから宗教的思想と融合して不可分的一體となつた。アングロサクソン人は其の素質上元來、獨逸系民族と非常によく近似點をもつてゐた。似た様な内面的緊張即ち同様な無限に對する慾求が此のアングロサクソン人にも亦存してゐた。然し英國國民は獨逸國民より生活條件の點が餘程勝れてゐた。好都合の又他に例の無い程の成功に満ちた歴史の進行につれて、此の無限を愛する衝動は、世界征服及び其の實踐的道德的融合に完全に満足したるが故に内面より飛び出し外部に働きかけて來た。此の結果が樂觀的世界觀及び實行力ある行動を重視するに好都合となつた。英國、就中、其の精神的に最も活潑なる部分であるスコットランドに於て、此の思想が發展したに付いては、カルビン主義が非常に重大なる意義を有してゐる。カルビンの教義は最高意思としての神なる概念より出發してゐる。宇宙を神の自由なる意思に隨つて形成するといふ事がカルビン主義の最高任務である。其の結果、勞作、道德、

(247)

成功を特別に強調する事となり、ルター主義と鋭く對立した。カルビン主義と雖も必ずしも常に其の純粹な高度に身を持し得た分けではなかつた。外面的幸福が神に選ばれたといふ事の目に見える證據物であつた。物質的進歩と道徳的進歩とを混同する試みは非常に行はれ易かつた。巧利主義的思想過程が世を風靡した。啓蒙思想の希望としてゐたもの、即ち世界の合理化はカルビン主義に於ては宗教的立場から人間の任務だと見られた。それ故に、啓蒙思想は主としてアングロサクソン諸國から其の萌芽を發したのだと言ふ事は全く當然の事である。啓蒙思想の傳統は英國及び米國に於ては破壊されずに残つてゐた。

英國こそ其の植民事業が世界中に張り廻らされてゐた故に世界統一化思想を發展すべき運命を持つてゐた。實際的に行はれた世界改良思想は反面であり、英國の帝國主義の道徳的辯明に役立つた。島國たるの英國自身の保護が、自由主義的平和主義的理論の完成を可能ならしめ、自由貿易の利益が其れを促進し又其の條件となつた。此れに依つても明らかなる如く、最も重きをなしてゐる英國の哲學者は、樂觀主義者道徳主義者及び巧利主義者として身を立てた。幸福は合理的社會的及び政治的發展の中に求められる。

イェルミー・ベンザムは「最多數の最大幸福」を最高の實踐的理想として掲げた。世界大戰中の英國自由主義の要求たる、繼續的國際平和、共通の仲裁裁判所政策の公開、軍備縮少等は既に十八世

紀に英國自由主義に依り表はされてゐる。此れと同意義に於て又人類の絶へざる進歩を同じく信ずる事に於て、働きをなしたる一九世紀の最大なる英國思想家はハアバート・スペンサーであつた。ダーウインの生物學的進化論は彼より、政治的・道徳的範圍に移行された。彼にとつてはベンザムと同様に自國民即ち英國國民の利己的利益よりも世界の組織化の方がより重大であつた。英國の思想家の眼は獨逸に於て深さに向けられたのと異り、廣さに向けられた。即ち彼岸、個人の特異性及び其の價値に向けられたのではなく、個人を、宇宙全體の組織の中に壓縮する事を目標とした。アングロサクソンのイデオロギイは北米に於て更に獨特的發展を遂げた。新世界即ち北米の最初の移住者達は故國で其の思想のために壓迫を受けてゐたところの清教徒的カルビン主義者であつた。然し政治的デモクラシイと宗教的自由の兩思想の融合に徹底的意義を獲得したものは就中、ロッドアイランド及びペンシルバニアに於ける宗教家、再洗禮論者及びクエーカー主義者の建國であつた。此の地に於て始めて寛大なデモクラシイの原理が完全に實行された。<sup>(1)</sup>此の時は英國に於ては、名門及び財産を有する者の貴族政治から支配権を獲得するなど誰も考へてゐなかつた時であつた。其處で北米は、余り國の狀勢が進歩しなかつたため又プロレタリアが無かつたため、完全に實行に移されデモクラシイ理想の發生地であつた。此の時から米國にとつては、デモクラシイが一つの原則となり、其れに米國は殆んど宗教的熱狂さを以て歸依し、そして躊躇無く凡ゆる物に應用して行くのが常で

あつた。第十九世紀中葉に歐羅巴からの移住が大舉して行はれ、特に重大なる事は、一八四八年の自由運動の不成功が齎した失望の結果政治的に不満を抱ける人々が獨逸から流れ込んだ事である。この事實に依り、獨裁及び不自由を邪推する王國に對する本能的不信の念はこれに依り益々強められた。米國は此の移住民に十分、土地と運動の自由を提供した。無限の能力がデモクラシー組織の優越性に對し同様に無限の信仰を創造した。

(1) ゲルハルト・フオン・S・ガエフェルニツ「アングロ・アメリカ的世界主權の精神的歴史的原理」科學的政策的社會學第五六、五八、六一卷

米國が始めから其の味方であつた西方諸列強の世界觀は戦争の初期に於て獨逸的世界觀から徹底的に區別された。聯合國は此の兩者の區別をやがて自分等に效果ある光に照して見る事を躊躇しなかつた。其の際凡ゆる暗黒面は獨逸に、凡ゆる光彩面は自分等の側に引き入れた。此のイデオロギの争に於て佛國は比較的關與する所小であつた。佛國は世界大戰を英國より、遙かに高度に、身命を賭した力の戦ひと感じた。其の外、ライン左岸を獨逸から分離せしめ共して獨逸帝國を破滅に導く事を目當とした佛國の戦争目的は英國程イデオロギを以て蔽はれなかつた。加之、今や時は繼續的國際的平和が既に訪れんとする時だといふ事を信する妨げをなしたものは佛國人の現實に對する獨特な感覺であつた。彼等佛國人には、戦ひに於て進歩の世界觀に必要缺く可からざる素

朴な樂觀主義が缺けてゐた。彼等は、獨逸が戦争の責任を負ひ、故に罰せらるべきであるとの獨斷主義を抱き、ロンドンに開催された最初の聯合宣傳會議に於て、佛國大使モイセツトは、アングロサクソンに依り偏愛的に用ひられた方法を警告して、責任ある政治家に其の理想に付き意見を述べしめなかつた。米國の大統領ウードロウ・ウィルソン教授と帝國宰相フオン・ハートリング伯教授間の國際法の問題に關する論争に於ては、勝利は完全には聯合國の代表者に豫定され得ない」といふのが彼の警告であつた。八月の第二回宣傳會議の席上、佛國宣傳長官クロブコウスキの警告が非常な熱を以て今一度繰返された。差し當り英國人に指導役が廻つて來た事になつた。アングロサクソンの歴史哲學の主流は戦争中は自由主義者に依り代表された。世界幸福理論を戦争の特別の場合に應用するためには、重大な精神的努力は必要ではなかつた。我々が從來比較的長い歴史的發展の後に来るものと思つた世界の平和は、或る近い時代即ち、聯合國が平和を其の意思通りに宣言する事を得る瞬間にのみ、約束された。國際的平和、實際的自由の理想は平和攪亂者及び法破壊者として獨逸に攻撃的態度を向けた。獨逸の歴史觀が提供した攻撃點は巧みに利用し盡された。國家崇拜は論難的の採光の下に偶像崇拜として現はれ、個人の過重視は地方的のものとして、即ち「素朴な種族的立脚點」として、惡の必要を説く學説は凡ゆる道徳を勇敢にも否定するもの即ち惡魔として現はれた。夫々特有の歴史哲學は改造されて宣傳された。英國の自由主義は始めは、決して戦争に贊

成しなかつた。其の一般に平和主義的態度が自由主義をして戦争に賛成する事を妨げた。然し戦が一度勃發するや其の後は此の英國自由主義も巻き添へに合つた。一部は内的確信から、一部は彼自身の良心を静めるため及び戦ひを自己に對し辯明するために、彼は戦争を軍國主義の邪惡なる原理に反抗する戦ひなり、即ち歐羅巴の野蠻の最後の住み場所たるプロシアに對する戦ひなりと言つた。斯くして聯合國の宣傳目錄が作られた。中立國の輿論も英國に於けると同様の精神的前提から出發した。英國では自由黨が政治を行つたが故に、自由黨に依り作り出されたる標語は大臣の公開演説に依り、忽ち公のものとなつた。悲觀論的世界觀の理論的缺陷即ち人間及び世界の何處にも存する惡に對する盲目性は強力なる宣傳的強みとして作用した。我々は此の俗界を全體として樂觀主義的に觀察すればする程、益々個々の人間及びプロシアの公達及び獨逸の國王は今や凡ゆる惡の責任を負はせられた。獨逸人は既に彼等の現實的な歴史觀のために宣傳に於て英國人と同様な補助手段を用ひずして不利益の結果を來たすのである。英國の保守黨の人々は成る程現實的な考へ方はするが然し、自由主義の實際耳に響く標語に喜んで賛辭を表した。それといふのも此の標語たるや民衆に必要な熱狂を引き起すに適してゐたからである。斯くして自由主義者の戦争の叫びが一般的に用ひられる事になつた。英國の本來の支配者たるロイド・ジョージは假令彼は成功の利用を理想に依り自制する種の人ではなかつたとはいへ、生來民主主義者として又平和主義者として同様な標語

を使用してゐた。ノースクリフ及びロイド・ジョージは、獨逸の皇帝及び公達の支配に動搖を來すのであらうが英國宣傳が獨逸國民に光榮ある平和を約束した事を配慮した。彼等は理想を信じてゐる人を宣傳の指揮者として探すだけの骨を十分備へてゐた。彼等は必要なる限り世界幸福の合言葉を利用した。自由主義的先覺者の斷言の背後にあつては訓練された耳を持つ者のみが英國の獅子のひそめた不平聲を聞き得るのであつた。世界大戦に於ける、アングロサクソンの精神的傳統の闘士エイチ・ジー・ウェルズ自身が上述の如く、暫の間、獨逸國に對する宣傳の指導者として働いてゐた。彼の誠實さは、彼が大戦中も尚ほ自國に於て帝國主義に對する戦ひの挑戦に應戦した事に依りても證明される。彼は凡ゆる戦争の終りとなるべき戦争の標語を一九一四年八月に既に打ち立てた人であつた。彼が人類の幸福を英國の利益以上に重視したといふ點にも亦彼がベンザム及びスペンサーの後繼者たる事が諒解される。ウェルズ、或ひは「デイリー・ニュース」の編輯人エイ・ジー・ガーデナーの如き人に依る熱狂こそ、英國民が自由のための戦争である事を信じ、又英國の宣傳の成功の前提となつた。自由主義者は彼等の理想がロイド・ジョージに依り裏切られた事を知つたも既に餘りに遅かつた。彼等はそれに氣付いた時すら、其の希望を捨てず新人ウイルソンに信頼を置くに至つた。中央勢力は別として米國の戦争参加に依り、全世界に巻き起された精神的影響は殆んど過重視され得ぬ。聯合國はウイルソンの決斷を彼の口に依り獨逸に責任ありと言つた世界の良心



の判断なりとして一致して歓迎したのであつた。露西亞革命はウイルソンをして聯合國の戦ひをデモクラシーの獨裁政治に對する戦ひなりと宣言する事を可能ならしめた。聯合國は一般に此の合言葉を取り入れた。其處でアメリカは戦ひの精神的方面に於て支配權を獲得した。デモクラシーを戦争の主目的として引き出す事は典型的にアメリカ的である。英國自身は、實にロイド・ジョージが回顧して認めた如く大戦の終り頃迄は尚ほ決してデモクラシーではなかつた。一九一八年十二月始めて用ひられた選挙の改革こそ始めて英國をデモクラシーならしめた。之に反し米國では既にデモクラシーの状態が存在してゐた。ウイルソン及び米國輿論に對してはデモクラシーは全世界の救済の魔力的な言葉であつた。そして米國のみが其の發言權を有してゐるのだと思はれた。ウイルソンは彼の獅子吼及び演説に於てアメリカを「世界の光」「唯一の理想主義國民」と言つた。<sup>(1)</sup>アメリカの宣傳の指揮者は彼が彼の持場の活動に關する報告に表題を與へ「米國主義の福音が世界の隅々迄擴げられた委員會報告」と書いて居る。ウイルソンは彼の祖先たるスコットランドの清教徒より、カルビン主義の氣の短い偏狭な精神を受け繼いで居た。即ち敵を呪ふ唯我獨尊的傾向を有してゐた。彼の熱狂的信仰、鬪争的氣象及び人を感動せしめる辯才が彼をして世界大戦中最も偉大なる宣傳者となしたのである。然し世界で最大の、最強の文化國民の大統領たる彼の地位が彼の言葉より唯一の反響を失はしめた。米國の政治的諸機關は其の儘では人口過剰の獨逸に移す事は出来ぬとの考へにウイ

ルソンは決して到達しなかつた。デモクラシーを形式的に實行する事が伴ふ危険は彼には分らなかつた。それは其の危険が北米の歴史の新段階には未だ現はれてゐなかつたからである。彼は尚ほ多數の民衆、路傍の人を政治的理性の代表者と信じた。斯かる思想は幸福なアメリカ的事情の土地に於てのみ何等争はれる所なく信じられた。然し他方ウイルソンの最も價値あるイデオロギー即ち、民族自決主義及び國際間の仲裁的和解も亦米國のデモクラシーの土地で完成せしめられた。アメリカの合言葉の長所は諸國民及び從來不遇に取り扱はれ、又權利を認められる事少かりし國民の階級を引き付ける力を有したる點にあつた。事情は正に一九一七年グレンナー陸軍大將が言つた如く世界中デモクラシーの波が行き渡つてゐた。此の波に反抗する者は打ち投げられる危険を冒かした。此れに反抗した所では其の波は威嚇的な波を立てた。ウイルソン及び聯合國は此の波に支へられるといふ幸運を持つてゐた。ウイルソンは平和主義に廣い有力なる仲間を見出した。大戦前既に平和主義は著しき勢力を有し、少くともアングロサクソン諸國に於て然りであつた。大戦中は全世界に於て全く壓倒的勢力を獲ち得た。戦争が長びけば長びくだけ益々苦々しく感じられた。それは最大の物質的負擔を負ふてゐる民衆に依つてのみならず、全世界の最良の思想家に依つても、而も戦線で直接の行動を以て轉向をしない時に於て斯く感じられた。ヘーゲルは戦争に其の任務として人間に凡ゆる俗界の財物は空虚なる事を明らかに證明する事、又人間に「其の主即ち死を感せしめる

事」を擧げてゐる。戦は人間を形而上學的現實即ち一面に立ちこめたる霧が突然追ひのけられたる奈落の前に立たしめる。然し繼續的狀態としては戦争は耐へられぬものとなる。戦ひは物質的目的をめぐつてなされる限り、永く繼續すればする程憎むべきものとなる。斯くして後戦ひは完全に無意味なりしとの感情が身に迫り、國民的イデオロギイも終には馬鹿らしきものになる。何となれば襲ひかかる一般的破壊の前には全生命が伸よく防禦のために一致するのを感じるからである。戦争に依る疲勞困憊に依り、そして怖ろしき現在から逃れるために、人間は特別に理想郷、幸福な黄金時代の想像を好むのである。平和主義は北米で既に長い間故國を見出した。國際聯盟の思想も亦此の北米で最上の養育地を見出した。汎アメリカ聯合の計畫は戦前合衆國の政綱の一部であつた。テオドル・ルーズベルトの如き人間も亦一九一四年に既に凡ゆる最列強の一般的世界平和聯合に對して公に意見を發表してゐた。<sup>(2)</sup>

(1) 戦争と平和 R. S. ベーカー及 W. P. ドッド 一九二七年第二卷一七、五〇四頁  
(2) 同第二卷二八三頁

英國に於ては強力な自由黨が平和主義を代表して表はれた。平和主義は獨逸に於て最も貧弱な地位を與へられた。即ち、政治的事情並びにイデオロギイの歴史的發展は平和主義に對して好都合ではなかつた。大戦中平和主義は無論不成功が増すのみではあつたが、獨逸政府に依り攻撃された。

佛國政府も亦平和主義運動を壓迫した。然し佛國政府の立場は獨逸より一層容易であつた。といふのは、佛國に於ても亦發言された自由のための戦ひの合言葉は平和主義者に對し同情的であつたからである。米國及び英國に於て平和主義は其れ自身好戰的となり戦争に熱狂的となつた。戦争宣傳をなさなかつた極少數のものが戦争中デモクラシーの米國で最も無遠慮に迫害を受けた。此れが完成されたデモクラシーの耐へ切れぬ事及び非自由なる事の好例である。平和主義支持者は始めから敵對はしなかつたけれども、獨逸政府に信用はなかつた。平和主義の本來の立役者はウイルソンとなつた。ウイルソン政綱に於て平和主義は自分自身の原則を再び明白な定義で掲げられた。其れ故に米國の戦争参加は國際的平和主義に轉向點を與へた事を意味した。ウイルソンは從來尙ほ、申立的に身を保持してゐたが、今や徹底的の反獨逸に轉向した。獨逸及埃太利の平和主義論者達も此の發展を逃がれる事は出来なかつた。此の轉向の特徴ある例としては、精神的に特に高き矜持を持ってゐた急進的著述家グスタフ・ラングツェルがある。始め彼は大戰を凡ゆる國家戦争の中で最も高貴なるものと言つた。其して、聯合國の宣言に對して徹頭徹尾批判的態度をとつてゐた。彼は一九一一年に『社會主義者』に屬する我々は國家の戦場に立つものではない』と書き、尙又戦争の責任は平等である事が強調されてゐる。従つて彼にとつては此れに比しては時間的責任の相違は極少であつた。彼が共に準備せんとする新時代の人間は此の戦争に参加すべきではない。

ツイルソンの政治的進出と共に彼の態度は移り變つて行く。<sup>(1)</sup>ラングウェルは何等躊躇する所なくツイルソンに賛意を表した。

<sup>(1)</sup> カスタフ・ラングウェル「實生活」M.アーベルへの書簡「フランクフルト、一九二九年第二卷二〇、二八、七九、八〇頁

一九一七年二月九日にラングウェルは次の方法で自己の意見を發表してゐる。「大戦はそれが勃發した時何等意味は無かつた。又獨逸人が自惚れた如く一九一四年の經過以前に勝利を獲たならば相變らず何等意味を持たなかつたらう。今や然し大戦は一つの意味を持つた。其して其れがツイルソンの如き合理的な自由な崇高な自由愛好者の困迫したる二重の地位を説明する事になる。即ち此れは戦争に反對するための戦争である。そして其れは最後の戦争であり又然かあるべきものである。獨逸帝國が歴史に依り、戦争の代表者たる役割を示されたと言ふ事は我々すべての、例外なく我等總べての責任であり、恥辱であり罪惡である」と。彼は聯合國の以前にはつきり認められた利己的な意思の力を今や最早や考慮に入れてはゐない。一九一七年三月二十四日彼は次の如く意見を述べてゐる。「我が國內情勢の改革に依り、外部的に諸民族の將來の結合に關する偉大なる高貴なる言葉に依りて、我々は、直ちに平和を獲得する事が出来るであらう」と。其れ故に結局彼は、一九一八年九月の終りに中央勢力の敗北に對し凱歌をあげてゐる。「事情は正に我等が豫想せる通りに進んでゐる。世界の邪惡なる原理は今回結局征服されねばならぬし、又將來征服されるであらう。」<sup>(1)</sup>此のラ

ングウェルの態度は代表的のものである。平和主義運動が獨逸からスイスに轉じた事に關しては、第一バイエルン軍團の代理軍團司令官が一九一七年八月三十一日ミュンヘンの陸軍大臣に對し次の報告を適切になしてゐる。「露西亞革命及びアメリカの參戰以來スイスの平和主義は以前には少くとも看板としてゐた中立を、大戦の責任は少くとも兩側で負ふべきであるとの思想と同様に放棄してしまつた。此のスイスに於て今日の獨逸に對する對立から一つの世界觀が作られ、世界大戦は全デモクラシー諸國が一致して軍國獨逸に對し一致して與へた判斷の遂行と思はれる。それ故に中立といふ事は有り得ぬ。獨逸的スイスにとつて重大な事は、獨逸の現在の軍國主義的權力者に依り陥らしめられた麻痺状態より獨逸國民を覺醒せしめる事である。」<sup>(2)</sup>此の報告は更に、之等の見解が獨逸に對して意味する大なる危険性に對し眞面目に注意を喚氣してゐる。自由主義的市民は獨逸の社會民主的民衆の大部分と同様に既に平和主義的合言葉の勢力下にあると言つてゐる。約一ヶ月後に第三部第二課長も亦平和主義運動が驚く可く増加した事、特に一部は革命的意味に於て増加した事を認めざるを得なかつた。<sup>(3)</sup>

<sup>(1)</sup> C. ラングウェル前掲書一七五、一七七、二六五頁  
<sup>(2)</sup> マルリン陸軍省の文書、軍降部  
<sup>(3)</sup> 同書

戦争が長びけば長びくだけ、平和主義的思潮の力は益々反抗し得ぬものとなり、國民の平和渴望

の結果、共產主義者は一九一七年の終り頃露西亞に於て支配權を獲得した。其の後一年經て中央勢力は崩壊した。此の度も亦平和主義が重大な影響を及ぼした。平和主義は獨逸に對する敵のイデオロギイの侵入を準備した。大衆は法及び平和の理想の具體化を要望し、ウィルソンに其れを見出す事が出来ると信じた。彼等は戰爭をウィルソンの目で見る事に慣れて來た。獨逸國民の大部分は自己自身の正當なる物を信する心は自分にはないと思つた。反抗力は内部から掘り擴められた。ニユヨークの「國家新聞」は戰爭始まつて四年目の日に確報に基き次の事を書くを得た。即ち「獨逸の民衆は敢て口に出しては言はなかつたが、獨逸の獨裁的政府の崩壊は自分等にとつて幸福であり、又我等の子孫にとつても幸福であるだらうと言ふ事を公言し得ると確信してゐる。」<sup>(1)</sup>王子マックス・ラオン・バーデンが一九一七年に既に豫言した如き事が現はれた。即ち、「我々は敵の物質的優勢に對し尙ほ、道徳的に劣等なりとの感情を以て對立するその程度に依つて嘗て我々が敵を負かした如くに我々は敗北しなければならぬ」<sup>(2)</sup>

(1) 「自由新聞」一九一八年八月二〇日附第二卷第六四號

(2) プリンズ・M・バーデン「回想錄」スチュートガート、一九二七年 八六頁

獨逸の宣傳にとつて、平和渴望の非常に強力なる感情的衝動を利用する事が出来なかつたといふ事が不幸であつた。然し獨逸の宣傳は特に困難な事情の下に又活動しなければならなかつた。世界

大戰といふ事實其のものが古い世界秩序を呪詛する様に思へた。命令的に新世界秩序を欲した時代に現存の現實を神に依り欲せられたと見る事が常となつてゐた獨逸哲學は始めからアングロサクソン哲學に對して不利であつた。樂觀主義は既に元來平和主義より、より大きな増加力を有してゐる。獨逸は國際聯盟及び永遠の平和といふ誓約されたる神の祝福を懷疑を以て見つめた。然し世界の輿論の思潮に抗する事能はずして、反抗しながら一步一步先驅者に依り共に引きづられて行く人間の不幸な状態に獨逸國も陥つたのである。獨逸の本來の戰爭目標即ち自分の力相應の世界支配關與は殆んど中立國の同情を期待する事は出来なかつた。其の目標は純粹に利己的と思はれ、隣國に不安を引き起すものである。それ故に此の戰爭目標は宣傳には適してゐなかつた。加之此の戰爭目標は決して確信を以て述べられなかつた。國民の意思には傳統、統一、及び自信が缺けてゐた。やがて獨逸國民の中に、自分自身の使命に對する疑惑さへ生じ、不安が彼等を襲つた。困苦の壓迫と徹對的世界輿論の影響の下に、無價値の感情が彼等を捕へた。凡ゆる獨逸人は成る程彼等の信條を確く保持した。然し之の事すら彼等に好結果を齎らさなかつた。何となれば凡ゆる獨逸人の精神的指導の下に本來の戰爭目標は粗雑にされ、誇張されたからである。獨逸の世界觀を固持するが然し同時に、世界改革計畫よりの必要な要求をも實現せんとの中庸の道は踏まれなかつた。ウィルソンの價値ある思想の中で諸國民の自決權が其の首位を占めてゐる。此のイデオロギイは本來實に個性

の概念に最高の價値を置いた獨逸の歴史哲學と關聯を有する。此の自決の思想は其の外、其の本來の形、即ち宗教的寛容といふ點に於ては、實に獨逸から發生したのである。宗教改革の時代には、獨逸に於ては此の思想は、或る宗派に屬する人及び再洗禮論者に依り先づ辯護された。迂路を通じて和蘭及び英國を越へてクエーカー主義者及び再洗禮論者と共に米國に達し其處では此の思想は政治的に解釋された。<sup>(1)</sup>我々は、其の由來及び精神の上で獨逸的な此の自決のイデオロギーがウィルソンに依り反獨逸的なものとして取り扱はれ得た事に耐へる事は出来ぬであらう。

(1) G. F. フォン・シガフェルニッツ前掲書第五八卷六五頁

其他獨逸の精神的地位も亦、其れ自身の特別の強みを得て、我々はそれを非常に利用し得た事であらう。デモクラシーの無批判的理想主義化、公衆の平和及び理想を素朴に信ずる事、人間の幸福に仕へるといふ世界の使命を信ずる事に對しては多くの異議が差しはさまれた。此の獨逸の歴史哲學には、デモクラシーの世界觀に、歴史と政治を幸福といふ立脚點から見ずして *Sub specie aeternitatis* に見る貴族政治的世界觀を對立せしめる事が適當してゐた。價値の重點は、經濟的社會的進歩に置かれずして、義務に即した行動に與へられ量に置かれずして質に置かれた。即ち群衆の理性に對する信仰に代つて責任を意識した指導に對する信仰となつた。斯かる英雄的に悲觀論的世界觀はフリードリヒ大王以來プロシアの傳統の中に次の如く書かれてゐた故に愈々持ち易きものとなつた。

(262)

つた。「此の世界觀は、精神的に指導する階級の自己に對する同情を凡ゆる國に於て引く望みを持つたであらう。さなきだに既に存在せる、貴族政治的及び保守的傾向を有する中立國に於ける階級的感情はイデオロギーの戦ひに獨逸の側から意識的に應ずる事に依り、確かに強みを感じた。無論此の場合同情とは少數者の同情に過ぎぬ。」と。此の様な方法で公衆の賛辭は獲ち得られなかつた。物質主義的大衆本能に迎合する事はデモクラシー的進歩的な合言葉がなした通りには出来なかつた。聯合國と獨逸との衝突は貴族政治的世界觀と民主政治的世界觀の對立であるといふ事はトーマスマンに依り、其の「非政治的觀察」の中に最も明白に説明し盡されてゐる。此の書物は一九一八年始めて發刊された。トーマスマンの西方諸國の修辭學的樂觀主義に對する、適切なる皮肉の形式でなされた攻撃は彼が親しく近き接觸に依り、デモクラチックな文學者の弱點を自身、よく知つてゐたため、益々確信を呼び起さざるを得なかつた、獨逸の宣傳が基礎を置かなければならなかつた。眞實の點は茲に雄辯に發表された。これは無論最後であつた。蓋し敵の宣傳は既に獨逸國民の精神的足場を搖がせ始めたからである。

(263)

外國の宣傳はそれが外國の政策と提携した時に於てのみ成功を得る事が出来た。英國に於て然りであつた。宣傳の標準は先づ政府に依り提供され、又其れに依り同意された。他方國家緊急の場合に於ける政治的指導は宣傳に依り、決定的刺戟を受けた。英國政治の實際は成る程、度々自分が其れを

代表してゐると主張した人間の原則に違反した事があつた、然しこれは英國に於ては可能である。蓋し英國人は非組織的國民であるが故である。之と反對に、最後迄結論を引き出す事に慣らされた獨逸に於ては、理論と實踐とを分離する事は不可能であつたので、不幸にして獨逸の文武兩當局の政策は、大戦中に於ては、效果ある宣傳の妨害をなす種のものであつた。獨逸政府が其の戦争目標を一度も公開しなかつたといふ事實だけで既に聯合國に對して彼等を非常な不利益な地位に置き、宣傳の立脚點より見て最大缺點であつた。第二の缺點はベルギーに關する時機を得た十分な辨明を怠つた事であつた。我々は、世界の輿論が決定的に賛意を表した此の場合に、民族自決權を承認しなかつた限り、道徳的成功を得る事は不可能であつた。イデオロギーの重要性は勢力ある地位にあつた獨逸人に依り、呪はしくも輕視された。ルーデンドフ將軍は成程帝國政府に繰返して宣傳省の創設を迫つた。然し組織は内容なくしては無駄である。ルーデンドフ將軍は職務上ベルギーの解放に關する説明を妨げる事を助けた事に依り、獨逸の宣傳の見込をひどく傷つけた事に關しては理解してゐなかつた。政府は強力な對外宣傳の自信を有してはゐなかつた。其處で有力なる外交は斷念してしまつた。蓋し戦争中は宣傳は政治に代る事が多いからである。政府は活動力の缺乏のため遂に自國民の信頼を失つてしまつた。「權力擴充」「實際保證」「頑張」等の合言葉で十分だとの意見は誤れるものなる事が證明された。萬事道徳に歸着される如き戦ひに於ては、國民は精

神的イデオロギー即ち、自分等は正義に立つてゐるといふ確信を必要とする。他方面より愈々聲を大にして、國際平和の理想が叫ばれたが然し獨逸政府は沈黙を守つてゐた。其れ故に、敵の宣傳が幾千回となく繰返し豫言した如く、國民の大部分は戦争繼續の責任は自國政府にありとしたのは決して奇とするに足らぬ。適當なる平和目標を掲げさへしたならば聯合國の標語を打ち破り、其の秘密の利己的意圖を暴露したであらう。

然し獨逸國民は、目標を掲げる事を妨げ、其れに依り重き責任を自分自身で負擔した。敵の宣傳は正に全獨逸人に公開する事に依り存続した。コンラード・ハッスマンに依り戦後公開された一九一七年二月の佛國宣傳の秘密報告は、之れについての驚くべき情況を示してゐる。其の中に次の如き句が含まれてあつた。即ち「全獨逸人に、有りの儘に報告する事は我々佛國人にとつては現金同様の効果がある。其の報告たるや、戦前では、獨逸人を全人類から憎ましめ、諸國民の獨逸に反對の道徳的結合を引き起した所のものである」と。此の報告の他の場所には皇帝及び宰相が全獨逸人の愚かさ對して、彼の皇帝の政策を保護し、其の政策に自由主義的色彩を與へる事に如何に熱心に努力したかについて書かれてゐる。「此の皇帝の計畫の成功は獨逸の救済より價値の少きものを意味するものではない。」即ち、彼に大國としての地位を許した平和、新勃興をなし、近隣諸國民を滅亡せしめる凡ゆる可能性の存する商工業を意味するものである。之等總べて及び其れ以外の事が聯合國

の十字軍の獨逸精神に對する無力、即ち、結合歐羅巴の無益なる血と金の犠牲なる事を意味する。我等を襲つた現實の、そして唯一の危険は、プロシヤの巨大なものが禮讓的な言はば穩健分子に變化する事であつた。<sup>(1)</sup>

(1) 一九一七年二月秘密文書第七號C・ハウスマン「獨逸國の内外政策と佛國の對外政策」一九二一年ベルリン三九、四〇、四五頁

獨逸國內に於ては、戦争の目標を廻つて苦しい闘争が巻き起つた。國內の分裂が獨逸國民をして大戦中最後迄其の全力を完全に盡さしめる事を妨げた。全獨逸人は廣範圍に亘つて、有産階級及び有識階級の支持及び暗黙の同意を得た。獨逸全國民の政治的洞察は不十分なものとして證明された。其の限りに於て、政府及び最高軍事監督者に獨逸の宣傳拒絶の責任の一部以上を歸せしめる事は正常では無からう。

獨逸崩壊の印象の下に、トレエルの如き、「大戦中、獨逸人には、有效なる政治的イデオロギイが缺けてゐる。」と言つた。<sup>(1)</sup>此れは誇張である。正常な事は只、獨逸人は政府に於ても、又輿論に於ても頑張り通す事が出来なかつたといふ事のみである。米國に於ては政策と宣傳とが一致した。政治機關は、政府の自由になつた。之と反對に獨逸に於ては宣傳は政府に全然缺けてゐた。戦争の初期には、成る程外務省に「對外事務のための中央局」が創設された。然し此れは、敵國の印刷物の

監視の外に、中立國の小冊子、繪畫の配布に限られてゐたため、何等重要性は認められなかつた。其の活動は一九一七年春、主として外務省の情報部に移行した。一九一六年七月最高軍事監督に依り、創設された外務省の軍事部は外國に於ける軍事状態に關する獨逸の見解を主張する目的を有するものである。其の任務たるや原則として擴張されず、其の範圍は、外國の特別補助地を加へて擴がり、「最高軍事監督の對外部局」として獨立した時でさへも、擴げられなかつた。

(1) E・トレエル「日探者の手記」一九一八—一九二二年の獨逸革命と世界政策の論文、一九二四年 九四頁

一九一六年の終り頃、最高軍事監督に於て、宣傳の中心部は非常な權威を持つて立てられねばならぬといふ事が確信された。種々の方面例へばラテナウに依りて此の思想は刺戟された。<sup>(1)</sup>然し政府は最高軍事監督の繰返された警告に對し拒絶的な態度をとつた。政府は對外宣傳は、外務省の事務なりとの立場を固持した。然し自身は此の問題に對してはイニシアテীবを取る事はしなかつた。最高軍事監督と外務省との間の紛争のため實際此の問題の十分なる解決は不可能であつた。最高軍事監督は新設される宣傳省に重大な影響を及ぼせうと圖つた。外務省は此の影響に耐へる氣持はなかつた。其處で政府は、むしろ其の活動が凡ゆる場合、外務省の任務の領域内を侵す如き官廳の創設を斷念した。宣傳省は、内部的抗爭のために獨逸國民の指導といふ事に對し失敗した。何が宣傳さるべきかに關して我々は意見が一致しなかつた。

宣傳の中樞機關は、獨逸の敗北が既に明白になつた時始めて創設された。一九一八年八月二十九日に、内閣の新聞班長にドイテルモーゼルが、最高軍事監督の對外部長官には陸軍大佐フオン・ヘフテンとなり、國內國外の募集及び説明事務を委任された。ドイテルモーゼルは政治的のもの、フオン・ヘフテンは、軍事的なものを取り扱つた。然し時は既に遅すぎた。聯合國は完全なる軍事的勝利を既に確信してゐた。而してウイルソンの思想は今や凱歌の真中に入らんとした。精神の戦ひは既に獨逸國の不利であつた。加之、宣傳中樞部も亦尙ほ、十分なる權威を備へるに至らなかつた。それは宰相直屬のものでなく、外務省の局長に屬してゐた。兎も角、宣傳中樞部には其の活動のための十分なる時間が與へられなかつた。蓋し一箇月後になつて、休戦の提議の出されると共に、コースが全然變つて來たからである。十月十一日に、帝國政府は國內、國外に於ける全宣傳を帝國宰相に任ずる事を決議した。既に戦争勃發後數年間に多忙の宣傳を自分の事務所から發してゐたエハルツベルグ局長に其の指導を任せた。エハルツベルグは完全にウイルソンの合言葉に賛成した。此れが獨立のイデオロギイの主張を終局的に放棄した事を意味した。大戦中、獨逸に對し獨特の政綱を立てんと努めた人々の間に、政治記者バウロルバツハが最も光つてゐる。大戦前既に彼は「世界に於ける獨逸思想」なる本に依つて其の名聲を博した。

彼は此の書物の中で獨逸の世界支配への關與の熱狂的豫言者として現はれたが然し、獨逸の世界的价值は、道德的征服に基くべき事を要求した。彼自身帝國主義者であるけれども、大戦中は全獨逸人と愈々對立する様になつた。外部に對する何物にも妨げられざる力の計畫及び内部に於ける自由の改革の拒否は彼にとつては獨逸の世界的國民への進歩に對する本質的妨害と思へた。一九一六年春以來ロールバツハは繰返し／＼して覺書を提出して、全獨逸の征服計畫を公に報告せん事を政府に迫つた。然し何等效果はなかつた。彼が「對外事務の中樞機關」の新聞部の部長としての彼の職を去つた後、彼は其のイデオロギイを言論界に主張する事に専念した。「獨逸政治」の共同出版者として此の讀者の多き週刊雜誌が彼に自由に手に入つた。獨逸勢力の東方への擴大を彼はより高度の文化を與へる事及び義務の思想を以て説明した。彼は獨逸が、ロシアに依り壓迫され、暴力を以てロシア化された西方の邊境國家を開放し、彼の保護の下に置く事を希望した。獨逸は歐羅巴のロシアの非文明の氾濫の危険に對する國境壘壁となる任務を引き受けるべきであつた。然し其の代り西方に於ては挑戰的戦争目的を斷念すべきであつた。ルーデンドルフ將軍を一九一六年夏此の計畫のために引き入れんとする試は然し完全に失敗した。<sup>(1)</sup>

ロールバツハは完全に意識しながら彼の「倫理的帝國主義」としての計畫を全獨逸の非精神的帝



國主義に對立せしめた。ウイルソンが一九一七年の春、聯合國の宣傳用の合言葉に其の終局の型を與へた時、ロールバッハも亦道德的・政治的・反對攻撃に對する叫びを一層はげしくした。彼は、自決權のイデオロギイを獨逸のために要求し、アイルランド及び埃及に於ては之に違反した英國に其の餘先を向ける必要を指摘した。此の前提は、獨逸の政治がベルギー或ひは波蘭の一部を併合するといふ思想を放棄し、そして道德的攻撃は十分早く始められたといふ事であつた。其の戰爭目標を示せといふ戰爭當事者に對するウイルソンの要求は一九一六年十二月に好都合の機會を與へた。無論政府は、當時斷念といふ事は殆んど是認しなかつたであらう。獨逸國民自身より、より大なる節度を守らねばならなかつた。アメリカ參戰以後は適當な機會は通り過ぎた。これはロールバッハに知られずにある分けには行かなかつた。一九一七年九月に彼は内閣の屬官に次の書面を送つた。「我々の戰爭目標の定義は、我等の敵と同様に獨逸が其のために戰ふ理想的目標を建てねばならぬ。我々が此の軍略的なるのみならず、戰爭中に於ては、精神的にも兵を正當な方面で繰り出さなかつた事が此の大戦に於ける我々の政策の最大のそして最も悪い結果を引き起した怠慢の一つであつた。此の點に於て、敵はより悪い物を代表してはゐたが一般の判斷に依れば完全な、そして極度に危険な敗北を招來したのであつた。」ロールバッハは、其の不成功にも拘はらず、警告家及び忠告者としての努力を斷念しはしなかつた。一九一八年獨逸の大攻撃の始まる前の壓迫的靜寂は、今一度道德的攻撃

に對する機會を提供する様に見えた。然し實際は、既に過ぎた。ロールバッハのイデオロギイは少數の政治家に依り支持された。外務省の軍事部では、ロールバッハのイデオロギイは、特に熱心に「對外事務のための中樞部」に於ける英國評論部の前部長クルト・ハーンに依り代表された。ハーンは政治的攻撃に關する覺書に依り、獨逸の軍事的攻撃を支持する事に協力した。この政治的攻撃とはフォン・ヘンテン陸軍大佐が一九一八年一月二十九日にルーデンドルフに承認せしめんとして提議したものであつた。其の中に含まれてゐるベルギー開放に關する政府の宣言の辯明は彼が帝國宰相に覺書を與へる前にルーデンドルフに依り抹殺された。<sup>(1)</sup>

(1) プリンスマ・フォン・バーデン前掲書二〇一頁

ロール・バッハの思想の後継者はマックス・フォン・バーデ王子であつた。「倫理的帝國主義」と言ふ表題の覺書——一九一八年三月彼が皇帝及び宰相に與へたもの——に於て、彼はベルギー開放の要求に賛成した。彼が一九一八年十月一日に帝國宰相の候補者としてベルリンに來た時、彼はロールバッハを新聞班長として自分の味方に入れ様と企圖した。其して尙ほ彼の計畫を實行し得る期待を抱いてゐた。無論之は幻想に過ぎなかつた。絶えず進行して行く獨逸の崩壊はロールバッハを追ひ越したので、エルツベルグが宣傳の指揮者となつた。今や丁度彼の指導下にあつた「祖國教育の報告」の中に、從來長い間議論された後、十一月六日にウイルソンは只正義の平和のためにの

み戦つたのだといふ事が書かれてあつた。即ち「我々は、ウィルソンの見解及び要求に残りなく賛成した。正義の平和が達せられず、恐ろしき流血が此の儘進行しなければならぬとすれば其れは最早や我々の責任ではない」と。獨逸の軍事の方面では、イデオロギーに依る宣傳の必要がウィルヘルム・フォン・シュワイニッツ陸軍少佐に依つて特に明白にされた。シュワイニッツは一九一七年九月以來ハーグに於ける獨逸大使館の大使館付武官であつた。ハーグに於て最も良く、英國政治の洞察がなされた。彼はやがて、積極的な獨逸の宣傳計畫は時間の使者であるとの確信を得た。一九一七年十月より一九一八年の夏に至る迄彼は少しも疲れずに、宣傳の大規模の出征の動議を提出した。一九一八年二月七日に於て彼は其の軍事報告に次の如く書いた。其の報告は大使より、宰相へ、皇帝へ、更に最高軍事監督へ行つた。『カタロニアの野で現實の戦の爲めに精神の戦闘が行はれた。世界大戦の結末形態も此の二重性格を取つた。我々が上述の如く又次に述べる如く勝利を得る事は徹底的な成功の一つである。敵の道德に對する我が攻撃は軍事的攻撃に對して補助的働きをなすに過ぎぬ。其れに對して我等は時代精神を利用しなければならぬ。敵が自己及び我々の多數の者に、聯合國及び米國が時代精神を獨占してゐたといふ事を眞實と思はせる事は我々にとつて無關係であつてはならぬ。時代精神と争つて勝利を得ないものは老朽である。勿論其の際讓歩が無ければ、事は運ばぬ。然るに適當な時に持ち出されれば、讓歩も常に耐え得られた。プロシア獨逸的イ

デオロギーこそ實に、幾百年かを通じて、變化する能力と適應能力とを立派に證明した。我が王政は敵國のデモクラシーと同様に時代に順應したものであり、春秋に富んだものである。然し其れに缺けてゐるものは豫言者である。我々の政治的宗教に缺けてゐるものは傳道者である。「プロシア的獨逸的イデオロギー」はシュワイニッツにとつては嚴格なる貴族政治的克己を意味するものである。一九一七年十月十一日に彼は、外務省の軍事部に對し、彼が考へた通りの獨逸の宣傳の内容に關する文書を送つた。其の中には「デモクラシー的理想」なる標題の下に、次の事が記入されてあつた。即ち「我々が世界中で最も遅れた政府を持つと言ふ事は西方諸列強の信條である。勿論我々は革命を遂行してはならぬ。何故か、革命の準備が缺けてゐる故である。ルイ十四世は、*Louis XIV*、*le Grand*と言ひ、フリードリッヒ大王は自分を國家の最初の下僕なりと言つた。此の兩者の言葉はブルボン家及びホーヘンツォレルン家との間の相違を特徴付けてゐる。確かに我々は總べて協力はする。然し自由意思をもつてゐる。「私は仕へる」といふ事が各獨逸人のモットーである。然し獨逸人は人間に仕へるのではない。皇帝が其の最初の下僕である者に仕へるのである。彼は代理人として行動する。我々の所謂獨裁政治は直ちに自主制である。世界大戦に於ける國民の功績は、其の全體に於て直ちに王冠の協力者としての使命を有する事を要求する。自由主義的意味に於ての我等の制度の發展は、然し其の内在的の法則に隨つて行はれる。我々は外國より、立派な教義も取り入れる

必要もなければ實例も必要としなす』と<sup>(1)</sup>。シュワイニツは、社會的王国を理想として掲げてゐる。外部に向つては、適當なる戦争目標就中、ベルギー解放の宣言を欲した。軍備制限及び仲裁裁判所の平和主義的計畫に我々は協力しなければならぬ。

(1) W. フォン・シュワイニツ前掲書三三二頁

シュワイニツに依り繰返された警告は然し皇帝は、彼の報告に同情的傍註を與へて之を見、ルーデンドルフも亦彼に好意を感じてゐたけれども、政府に於ても最高軍事監督に於ても成功を得る事は出来なかつた。即ちシュワイニツが怒つて名付けた所に依れば「眞空」は其の消極性から脱出する事を敢てしなかつた。最高軍事監督は其の勝利の目録を固持した。力強き改革の意思が缺けてゐたため又競争能力の信頼も獨逸的國家イデオロギーには缺けてゐた。外部の強力な手段を信じて、イデオロギーの力を信じない事が呪ふべき缺陷の原因であると、シュワイニツは見えてゐる。ルーデンドルフに關する論文に於て（一九一八年六月）將軍をしてナポレオンの運命を想起せしめる程進行してゐた。其の論文に曰く、「我等の最高軍事監督は自分自身を手綱をとつて引きとめるといふナポレオンに依り解かれざる問題を目前に控へてゐる」と<sup>(1)</sup>。ウイヘルム二世は成る程、世界戦争は二つの世界觀の争なりとの思想はとつた。そして其の思想を彼の三十年記念祝典の日に大本營の公開演説で發表した。然し此の思想の運動も亦比較的深い根據を必要としたが、止んでしま

つた。思想から政治的實踐への橋は踏まれなかつた。ナウマン、マイネツケ及びシュルツ・ガエフエルニツツの如き人々の、アングロサクソンの思想を特にカントの自主思想に依り深められた獨逸的自由思想に對立せしめんとする努力は其れ故に實際的意義は依然持たなかつた。之等の人々は凡て國民の道德的勃興は強力なる内政的改革なくしては不可能なる事を認めてゐた。

(1) O. H. LG 文書 政治部

シュルツ・ガエフエルニツツは一九一六年十月彼の黨首を通じて、帝國宰相に、覺書を送り、其の中には、新しく方向を定める事が戦を良き結果に終らしめる最善の法であると要求されてゐる。<sup>(1)</sup> フリードリヒ・ナウマンの一九一七年八月十六日の覺書も同精神を以てなされてゐる。ナウマンは其の覺書に於て、「フランス、英國、米國の自由思想から政治的世界宗教の一種が作られ、中央歐羅人及び特に獨逸人は、それから排除さるべきであると説いた。此れに對して、獨逸人は、自由思想の獨特の寶庫を想ひ起さねばならぬ、そして自身の創造力に不信を抱かぬ様にせねばならぬ。我々は自分獨特の型を持つてゐる故に、外國の型を採用する必要はない。我々は獨逸哲學に基礎を置いてゐる獨特の獨逸的國家思想自由思想を有してゐる。此の思想には、西方諸國民には、其の性質及び深度は分り得ぬ一種の社會的民衆精神が本質的に包含されてゐる。弱者の自由は能動的受動的的政治的權利に存するのみならず、其の弱き存在が國家的に保護を受ける事にも存する。此の領域では獨逸

人が斷然支配權を得る。成る程、西方諸國民の支配階級には此の事は決して諒解出来ぬだらうが然し、今や下層階級の間には、若し社會主義が擴がれば、本質的に獨逸的文化が擡頭するといふ豫想が存するであらう」とナウマンは説いてゐる。

(1) G・フォン・S、ガフェルニツ「助力」一九一九年第四卷

ナウマンの覺書は、プロシアの平等選舉權の約束に隨つて獨逸では皇帝と國民が存するし、徹底的に自由主義的思想が取られたといふ前提に基礎を置いてゐる。此の覺書が帝國宰相に依りて、如何に筆者の考へ通りに解されなかつたかは、やがて分つた。八月二十五日の帝國經濟委員會の席上でフォン・ミカヘルの覺書が、獨逸の内政的改革は餘計のものなる事の證明であるとして引用されてゐる。ナウマンは此の説明に直ちに異議を述べ様といふ衝動にかられた。社會正義の思想は正に軍事當局に於て特に興味を感じられた。ルーデン・ドルフ將軍は植民制度、住居制度の領域に於て徹底的改革を、戦争の賠償配慮と同様に熱心に説いた。最高軍事監督は全部義務遂行の精神で蔽はれた。其の限り、獨逸のイデオロギイ計畫に對する特別な諒解が存在した。然し時代の政治的要求を見る眼が缺けてゐた。ルーデン・ドルフは自由主義的改革に於ては只危険のみを見る事が出来たに過ぎぬ。一九一七年八月八日、彼は彼の内政に關する意見を内務大臣ドレウス博士に對する書簡に於て次の如く總括した。私は戦争は恐らく、デモクラシー化及び議會政治の根據を與へるもので

は無いといふ卑見を有する。寧ろ私は讓歩の政策を「時代精神」より非常に危険と思ふ。此の讓歩の政策は其の結論に於て、滅亡に導かざるを得ぬ」と。同様に彼は極く最近、外務省の局長に宛てた書面に於て、國際法の改革案に對する獨逸の協力を拒絶した。「キリスト教的國際同盟」の獨逸團體の或る國際法の問題を、通俗的方法で研究せんとする意圖を非常に危険と考へた。此のキリスト教的國際同盟は斷乎として無賠償併合の媾和及びローマ法王の覺書の立脚點に立つた。當同盟が今や獨逸國民に提出せんと企てた問題は、諸國民の黎明が現はれた時に始めて考へらるべきである。從來之等の問題は破壊的に作用した。それ故に私は戦争を行ふとの原因から此の同盟の確かに好意ある企圖に反對せざるを得ない」と彼は述べた。イデオロギイの缺陷ではなく、當局の無理解が獨逸宣傳を不能ならしめた。我々は世界大戰に於ける獨逸の政治的敗北の主なる原因を政治的指導者の弱き事、それ故に四人の宰相に求めた。確かにそれは正當であつた。然し丁度獨逸に於て、此の最高爲政者に強い人格者の無かつた事に付いては、我々は戦前二三十年に於ける獨逸の全政治組織が其の責任ありとしなければならぬであらう。獨逸の宣傳の失敗の原因は戦争中既に外國に於て獨逸より一層明確に研究されてゐた。オーストリー、ハンガリアの戦時出版所は、獨逸に及ぶ事は禁せられてゐたが自國及び外國の宣傳活動に關する月報を作つた。我々は、一國の全生命に、其れに必要な前提條件が缺けてゐる場合、宣傳は金錢を以て購ふ事は出来ぬといふ事を諒解し始め

た。國家の指導、管理は權威ある指導に慣れなかつたため失敗に歸した。大戰の終局は、アングロサクソンイデオロギーの完全なる勝利を意味する様に見えた。平和主義及び樂觀主義は、同盟を絶交せる相手が敗北した後に、凱歌を擧げて立つた。然し其の喜びは決して永續はしなかつた。聯合國の政府は、其の宣傳が全世界を蔽つてゐた理想主義的文句の覆面を拭きとつた。彼等は覆面を最早や必要としなくなつた。ベルサイユで白日の下にされた眞實は極度に迄其の利益を追求する勝者の他に遠慮する所なき力の政治であつた。平和條約に新しい殘酷なる戦争への萌芽がおし入れられてゐた。聖なる戦とか、國際平和主義とかいふ表題を掲げた旗は今や不用のものとして捨てられた。多くの人々が聯合國の誠實なる事を保證されてゐた眞面目なる平和主義者の側の失望は實に大きなものであつた。英國の自由主義は其の希望の廢墟の前に立たせられた。自由黨は其の名聲を失つた。國權黨の新聞は、國家が平和主義的に依り清淨せしめられたといつて歡呼した。「ザ・ネイション」の自由主義的週刊雑誌は平和條約締結に對し次の如く歎じた。「平和はドーニング・ストリートに持ち來らされた。我々が聽き得る唯一のデモクラシーの聲は戰敗國の聲であらう」と。獨逸に對する英國の宣傳長官ハミルトン・フーフエはベルサイユ平和條約を其の締結後直ちに、世界歴史の中で最も恥すべきエピソードと言つた。エイチ・ジー・ウエルスの樂觀主義でさへも、大打撃を受けた。彼は世間の常識に信頼するといふ誤を犯したといふ事を公に認め、そして新しき大戰を

豫言し、世界歴史は益々教育と大慘害との競走となるといふ事を指摘した。米國に於ても大反動が襲來した。上院下院共にウイルソンに服従を拒んだ爲め次の大統領選舉には、共和黨が王座を占めた。ウイルソンの熱狂的支持者の一人であり、アメリカ十字軍の闘士たる、アメリカ教授ジョージ・デイー・ヘルロンはベルサイユ條約締結後次の如く書いた。「此の條約は新興の信頼を得るに値ひする人類の存する事に對し、人間には只自己の無力、及び無希望に對する自嘲的笑ひのみが其の唇に残つてゐるといふ程度に覆してしまつた」と。ノーベル平和賞所有者アルフレッド・エイチ・フリードは、一九一九年の四月十一日に彼の戦争日記に「我々平和主義者はウイルソンの破産に耐ふべきであらうか、我々は誠實であらう。此の一事にすべてを賭けた」といふ問題を挿入した。何物にも妨げられざる進歩の思想は、苦しくも敗北した。新世界を創造せんとする聲を大にして作り出された機會は何等利用されずして逃げ去つた。平和主義者は無論學ぶ所あつた、然し自己の意思に反してであり、又自分の失敗に依つてであつた。ヘーゲルは幸福に對する實證主義的思想に立派に反對の態度を持してゐた。然し獨逸の歴史哲學と雖も又一學説をなしてゐた。全々何物にも妨害されざる國家理性の意味に於ての國家の自治の思想は、獨逸に於ては邪道のものとして認められた。西方のイデオロギー世界との協調の必要は、大戰中、獨逸の精神的獨立のために戦つた人達に依つても強調された所であつた。人間はバビロンの塔の基石の如く、それ自身決して理性的偉大なものでは

ない、故に世界は合理的には作られるものではない事に就いて西方諸國人が確信したならば非合理主義の擁護者達も、不合理なる世界に於ても又人間並びに國家は永遠の法則に隨はねばならぬ義務がある事を認めねばならなかつた。我々は、此の兩者に於て、物質主義的變質の危険を自己の温床の中に認め始める事に依り、從來の相互の無理解が克服された。道徳的政治的思想を一層深め、更に擴張する事が大戰の主なる精神的効果であつた。兩交戰國は其の事について相互に忠實を守つた。世界觀なるものは偶然的のものではない。人格の中核から發するものである。世界觀は諸國民に於ては、其の種族的天賦に基礎を置くものであり、又幾百年を通じての歴史的發展に基く。獨逸人は、其の種族的天賦及び歴史的發展に依り、形而上學的世界觀に、アングロサクソン人は道徳的世界觀を持つべき運命を持つてゐる。兩者共、本來同權である。ザインもゾルンも人間に於ける解き得ざる矛盾としての本質を有する。斯く見れば精神的戦には結局勝利も敗北もない。聯合國宣傳の合言葉に絶望の中に、無批判的に敗北した其の獨逸は眞の獨逸ではなかつた。獨逸の眞の合言葉は成る程政府に依り宣傳はされなかつた。然し、成功の希望なくしても、最後迄其の義務を果した其の全獨逸人の胸中に存してゐたのであつた。

## 附 録

### 覺 書

一、ヒンデンブルグ元帥のフォン・シュタイン陸軍大臣に宛てた書面

M. F. Nr. III. b. 211V. 親展

Gr. H. Qu, den 12, 4, 1927

敵國が獨逸及び其の同盟國は對する戦に、あたかも、自由に統治された民族の所謂老朽せる王政の政體の下に苦しめられた中歐諸國の民族に對する戦ひであるかの如き世界歴史の説明を與へんと努力した事は疑ふべからざる事實である。ロシア革命及び、米國の宣戰布告の説明は此の敵に培はれた傾向に新要素と募兵力を提供した。敵國は此の傾向を中立國及び自國民に於て利用する傍、獨逸の中央諸國民にも反王政の意味で勢力を及ぼさんと試みた。其の際恐らく、彼等が其の歴史的發展及び其の國家的建設の基礎を見出し、又現在及び平和な復興時代に其の反抗力を動搖せしめ得る事を知つてゐるであらう。余は、自分の參謀本部の特種の係に此の事情を追及せしめる。數日前より東部戦線に於て、我軍に反王政的な意味で影響を及ぼさんとの試みが各所に於て確められたり、

又中立の外國より、其の本國の國民に對する誘惑の手が擴がつてゐる事の兆候も存するが、他方四月始めの數日に、西部戦線に於ても又、我が兵の對抗力を試めず敵の計畫の第一報が齎らされた。事情によく側した詩集「警鐘」が敵國の飛行機に依つてムント、クエンチン停車場に落された。獨逸國民の忠實に對する疑は、根底なき所なれど、確かに我々が敵の企に對し目を閉じてゐる事は出來ぬ程の大きな範圍を敵の計畫は獲得した。其の際不安な内政問題が重大でなく、只我が國民の我が皇帝に對する人的關係の維持のみが重要である。敵に依り組織的に行はれた國民精神の中毒を妨げ、或ひは攻撃する手段をとるべきである。此れに達する道は、十二分の考慮を必要とする。然し決斷は躊躇なくなさるべきである。其の際、余は、故國に於ける處置と戦場のそれと一致せしめる事が目的に合してゐると思ふ。閣下、願はくば、如何なる中央官廳が、決定された處置の實行に對し問題となるか、此の問題を取り上げて考慮されん事を乞ふ。帝國宰相又は、内務大臣の様な地位は其の政治的負擔の重き結果適當とは思はれぬ。彼等は會議に於ては恐らく他の者に引きづられるに相違ない。然し、實行は卑見に依れば閣下の手か或ひは文部大臣の手に於てなされる方がよき結果となると信ずる。事件の續行に當りては國軍に關しては最高軍事監督を參與せしめん事を欲する。

(署名及び宛名は省略す。)

## 二、第三部第二課長、ニコライ少佐の祖國啓蒙の内容に關する講評

一九一七年六月八日午前の講評の結果。

### 宣傳の任務

#### (一) 宣傳さるべき事項

##### a、軍事上に於ける場合

獨逸の勝利は必然にして可能である。平和は只獨逸の勝利に依りてのみ達成されるのである。其の平和は齎らされたる犠牲に相當する。此の事實及び種々の戦場に於ける個々の經過に對する理解が促進されねばならず、獨逸の勝利に對する確信の缺乏が除去されねばならぬ。現在の軍事的状態に對する見解は、ヘンテン中佐に依りたてられた標準に側して、内國に於ても外國に於ても統一的に立てられねばならぬ。

##### b、經濟上に於ける場合

我々は經濟的にも又絶對に耐へ得るといふ自信も確められねばならぬ。故國に於ける人民並びに戦線にゐる軍隊の凡ゆる要求が絶對に満足され得るといふ事が證明されねばならぬ。頑張りを実現するために政府に依り發布されたる經濟的の處置は、根據付けられねばならぬ、而して、各人の困

苦の責任は、當局の處置に非らずして、先づ第一に敵國の封鎖及び其れに基く獨逸の世界市場からの閉鎖に存する。根本條件は事實あるが儘を言ふ事である。一部に於て尙ほ非常に困難な事情が存在してゐる敵國に於ける事情も指摘されねばならぬ。獨逸は其の同盟國の苦難に依りて以て従前の平和に歸る様に強ひられるものでない事が證明されねばならぬ。制限が必要ならば適當なる時期に其れを用意すべきであり、特別な好都合の要素が必要ならば、氣分の高調に利用すべきである。

。政治上の場合

軍事的宣傳は如何なる事情の下に於ても内政問題の會議に依りて一黨派的意思で活動する事は許されぬ。獨逸帝國及び獨逸の權力の基礎に及び、獨逸帝國の要求に對し啓蒙的に作用するといふ事が宣傳の使命である一方、宣傳は、假令影響を及ぼさんと試みる政府から出て來るとしても其の記事が無條件に拒絶するを得ぬ。獨逸の防禦戰の性質が繼續的に強調されるといふ事が外政的に絶對的に必要である。宣傳は凡てを放棄する平和或ひは、無賠償、無併合の平和は獨逸國民の要求に應ずるものではなく、獨逸の勝利及び其れから平和條約締結の際に引き出さるべき結果が獨逸國民及び、各個人の立場にとつて好ましき状態を齎らす事が出來るといふ事を確認する任務を持つ。

(二) 軍事新聞に於ける戰爭目標如何の問題の取扱ひに關しては、特別の政府よりの指令が必要である。

(三) 國民全體の啓蒙に對する着眼點は、20/21/4/17の戰時新聞局の會議の記録中に詳細に説明されてゐる。最近半年に關する戰時新聞局の活動に關する報告に於ても同様に國民全體の啓蒙に對する着眼點が詳述されてゐる。

### 三、ミュンヘンに於ける陸軍省の第一バイエルン軍團司令官代理の報告

スイスから獨逸國民の感情に影響せしめんとした聯合國の努力に際しては、問題は明らかに英國或は佛國の側から提供された宣傳に關してゐた。ローゼマイエル、K・ラエルナウ、K・L・クラウゼの其れの如き文書、勝利者の小冊子等は此處でなされた經驗に依れば、重要な効果はない儘である。何となれば、之等は只主として單に聯合國の衆知の標語のみを繰返してゐるに過ぎず、獨逸民衆に既に獨逸新聞に於て公開されたる敵國政治家及び政府の説明からよく知られたる事以外の何物にも言及してゐないからである。國內に頒布される標本は、獨逸の印刷業の周倒なる準備の賜として獨逸國民には、例へば、英國或は佛國大臣の註釋付で公開されたる演説の如く、他國語で出版される事はない。言はば、耐へ得る軍事的、經濟的狀態に於ては、危険なる影響は恐るるに足らぬとの煽動的宣傳に對立するものは、一種の文學であり、其の重要性たるや、漸次に認められ、戰爭の繼續と共に今や一大體系を作り、それが獨逸攻撃の理想的根據を提供するものである。斯かる傾向に



於ける最初の努力は「平和の期待」といふ如き又「平和運動」の如き平和主義的新聞から發してゐる。ロシア革命及び米國の干渉以來スイスの平和運動は、其れが以前にも、少くとも飾りのために掲げてゐた中立を、丁度世界戦争の責任は、少くとも兩側で分擔すべきだといふ見解と同様に斷然放棄した。然し平和主義の一般的影響は、今日に於ても尙ほあまり多くない此の偏狭平和主義の支持者に限られてゐる一方、「知識と生活」の書の態度は更に危険なる思潮の特色を有してゐる様に見える。其の際世に知られた獨逸の敵たる、スチルゲバウエルの如きジャーナリストの、或ひは「ジャキューズ」の著者の時々文章が問題とされずして、ポフェットの「組織の崩壊」O・ニホルドの「獨逸國民の覺醒及びスイスの役割」の如き論文が問題となつた。此處に於て、今日の獨逸に對する反感から一世界觀が作られ、世界戦争は全デモクラシー世界が軍國主義的獨逸に對し、一致してなした判斷の實行として思へる。中立といふ事はそれ故世には存しない。獨逸的スイスには獨逸國民を彼の現在の軍國主義的權力者に依り齎らされた魔醉的狀態より覺醒せしめた事のみが重大である。此の思想は比較的冷靜に論せられる。非常に異つた態度も同様な原則に歸着する。ニホルドは國際的觀點より、ポフェットは文化的、倫理的、ラガツは宗教的、キリスト教的、Mygale de Mathiesはカトリックの立場より出發してゐる。スイスに於ける獨逸の著述家に對する彼等の影響は特にフェルスター教授に於て見られる。彼の態度はスイス滞在に依り始めて決した。中央黨の、D・Schäfer

大尉も同様な方法で明らかな、反獨逸の見地を取るに到つた。スイスに於ける多數の獨逸文學者、アシネット・コルプ、クラブンド及び「時代の反響」の共作者其の他の如き態度は獨逸的スイスの知識階級に依りて、時代の兆、及び要求と思はれる物を暗示してゐる。彼等は其の際自己を新自由的獨逸の前哨と考へ、獨逸スイス新聞特に新チュリヒ新聞に於て又もつとも多く、西方スイスの佛國新聞に彼等の見解の好意ある支持者を持つてをり、獨逸との彼等の廣い人格的關係及び接觸に依り廣い範圍の氣分及び情操に注目すべき影響を與へてゐる。此の運動は、其の本來の印象を全くブルジョアの性格のため、それから遠ざかつてゐる急進國際社會主義支持に及ぼさずして自由主義的市民及び社會民主主義大衆の大部分に及ぼした。此處に於ては、内政的要求との密接な關聯の故に、又多數の標語の一致の故に、此の運動の都合よき場所が與へられてゐる。ローマ法皇の「平和ノート」に於ける平和運動の主なる原則が法王のその如き權威を認められた後に、廣いカトリック派の人も又影響を受けるべきである。此の事情の下に於ては、獨逸的スイスから「獨逸國民覺醒」といふ其の計畫を斷然實行する名聲ある人々の一團は、獨逸國民の氣分に對する危険特に之の氣分の最も重要な基礎、獨逸の正義の一般的確信に對する危険を意味するものである。

タンによる。

四、ハーグの獨逸大使館付武官フオン、シュワイニッツ少佐の外務省軍事部に宛てた書面。

ハーグ一九一八年三月六日發ベルリン、外務省軍事本部宛

D・H・Iは度々内外の輿論を作る中樞機關を設置せんとする提案を以て政府に迫つた。切迫せる國家情勢の故に、此の提案を改革せん事を小官は命令されたものと思ふ。不出來の帝國情報局は大戦中殆んど報告を述べなかつた。其の外、情報局は、最高軍事監督の命令的報告機關、外務省のそれと相互に衝突するだらう。後者は自己の價値を證明し、そして當分は必要無く可からざるものである。其の情報機關が存在する事が不出來の情報局を命令的に、大臣同時に局長に依り本部で代用する事を可能ならしめる。情報大臣の主たる任務は獨逸の輿論を統一する事であらう。彼の挺に對するアルキメデスの理論から言へば我が輿論が基く政治に依りてのみ作られる。變つた事情の下に更に生き續けて行かうと思ふ者は其の事情に適合しなければならぬ。國家は總べて、時代精神と繼續的に争はねばならぬ。プロシア、獨逸のイデオロギイは、幾百年を通じて其の時代適應能力を證明して來た。其れ故に、其のイデオロギイ發展の永續性は革命に依り中斷されはしなかつたが其の轉換しつゝあるイデオロギイは國民に「時代の叫」として無理に強ふる事は出来なかつた。其れと反對に、我々の西方的色彩を持つた人間は彼等が獨特の物を失つた故に、我々と共に行く發展の繼續を斷念する様に我々を誘惑し様とする人であつた。正常なるものは革命ではなくして發展である。

(288)

即ち、自分自身の本來の法則に隨つた發展である。獨逸は其の型に隨つて現代化しなければならず、又其れに隨つて現代化し得る。

單に支配するのみならず實際政治をとる君主が我々には必要である。それは既に獨逸の地理學的地位からも然りである。Fadern sed Ahter、我が王冠の基礎は愈々擴がつた。其の基礎たるや、目的到達のため國民全部を包括せねばならぬ、我々の未來は、社會民衆黨の大衆を、君主制の勞働黨に代へる事が出来るか否かに掛つてゐる。今や大衆に反抗しては歴史は作られず、只大衆に依つてのみ作られ得る。二者中、選ぶべきは、大衆が成る程近代的ではあるが、然し非獨逸的である所のものを政府を通じてなす事である。故に吾人は社會主義的王國を志す必要がある。

我々の王は社會立法を作り出した。王は次の言葉を言つた。「自分は黨派を知らず、知るは只獨逸人のみ」と。我々の王はプロシアの選舉改革を約束した。今や過渡期經濟の準備は、經濟的、社會的改革的發動を採る機會を與へた。王が其の機會を擱んだ時のみ、我々の正當の特性を保護しながらも避くべからざる新立場は國民的結束となつた。今や我々に西方諸國の議會政治をつぎ込む事はプロシア獨逸的エンテルキイを壓倒する事であり、政治的化石の如く呪はしきものである。今日の要求は、皇帝及び公平に國民全體の利益を代表する大臣の指導の下に、我々の政治的、經濟的、社會的生活の改革に全黨派が協力する事である。

(289)

對内政策の領域に於ける程對外政策に於ては組織の變更は必要ではない。此の對外政策の領域に於ても又皇帝が唯一の可能なる進軍方向を示した。即ち皇帝は、我々に他の世界列強を越えてではなく、其れと並んで、良き場所を保證するといふ制限的目的を持つたる大陸政策より世界政策への道を示した。隣國が此の政策の必要を理解し様としなかつた故にこそ、我々を世界大戰に巻き込めたのであつた。随つて我々は領土的保全及び經濟的擴張能力を得んとして防禦戦をなすのである。只此れ以上の戰爭目的に對しては賛成を得られぬだらう。對内外政策は今日では最早や分離さるべきではない。戰爭は他の手段を持つた政策の續行ではなく、自分自身の手段の一を以てする政策の續行である。成功した手術も、病人が其のために死ねば何等價值を持たない。我々の政策の任務は随つて戰爭に依つて平和を獲ち得る事である。我々の政策が此れをなし得る唯一の線は、現に我々が存する状態である。此れが我々の歴史的發展を延長するものである。他の線はすべて勝利を看過する。此の唯一の線こそ我々の輿論が統一せしめられる唯一のものである。イデオロギー及び利益は其れに對し連帶責任を負ふものである。我々が内政的外政的に大きな線を有し、それを保持してゐる事に就いては遺憾乍ら我々の輿論の表面には何物も認められぬ。此の事を矯正する試は總べて從來失敗に歸した。一時の間に合せの情報機關の失敗は、凡ゆる人に認めしめるに十分なだけの廣さを有してゐなかつた。然しこれをなし得る唯一のものである政府は、我々の政治的直線を輿論の目

の前に太く引く必要を誤解してゐた。我々が其の協力に頼らねばならぬ國民はそれ故に自分の責任を知らぬ。我々は近代的な獨逸の強力政治を行ふものである事を國民に實證するならば、我々は國民が其のために盡す事を期待し得る。一旦引かれた線を見訂正する事は決して適當な事ではない。斯くすれば既に餘り多くなかつた信頼の念を覆す事になる。情報大臣は確かに我々の輿論の使節と信せられるだらう。彼は政治を行ふ事はしない。彼の任務は、現在の物事に對する輿論の國家的指導をなし、如何にすれば最もよくそれがなされるかといふ事を報告する事である。其れに該當する刺戟を考慮に入れて、我々の政治的技術は徹底的に近代化しなければならぬ。茲に、國家的指導に關し、情報大臣の輿論に對する影響の旋回が與へられた事になる。此の輿論に對する間接の影響の外に、彼は、輿論の支持者、議會政治論者ジャーナリスト、其の他政治生活をなしてゐる人々に直接の人格的影響を及ぼす権限を有してゐる。彼は、其の階級の高いため、又宰相及び大臣と密接に接近してゐたため、間に合せの情報機關の長官よりも一層、容易に自分の意思を彼等に對し貫徹するであらう。彼は多くのの人々と交際し家を解放しなければならなかつた。住居費及び交際費は其のために用ひられた。彼の階級其の他より重大なる事は情報大臣の職が自己及び我々を信じ、而も其の信念は段々他に及ぶ様に作用する偉大なる人に依り占められる事である。彼が假の情報機關の事業を統一する際に目當とした成功の程度も又主として彼の人格的影響に基くものであら

う。彼等情報機關は彼に従屬しないであらう。彼の事務室は交換所のような性格を有してゐた。新事物の出現に依りて、其處では、當局に照會して、直ちに合言葉を発表し、關係者に凡ゆる技術的獲得物を利用して報告する。情報大臣の本部には、一人の代表者及び二三人の個人的協力者が居り、其れと並んで、新聞専門家、戦時新聞社の組合員、外務省軍事部の人々、外務省の情報部員、帝國經濟局の局員等並びに Wolfrum の事務員が屬しなければならぬ。貨物自動車及び、第一級の電話電信の設備が配慮さるべきである。如何に私が敵國に於ける輿論に對する影響を考へたかについては軍事報告第十四號の一一、一七、二六頁に詳述した。情報大臣のそれ以上の任務は帝國情報局の平和組織の完成である。小官が想像せる如く、情報大臣は我々の官吏階級に於て一階級をなすものである。彼は事務に自ら没頭してはならぬ、むしろ事務に超然たるものでなければならぬ。事務室の仕事に對しては彼には少しの時間も與へられてはゐない。公然たる頭腦及び善良なすぐれた神經を持つ近代人のみが此の情報大臣の地位に適してゐる。然し彼は國內及び外國の心理に對し了解を有するのみならず、其の外にも、プロシア、獨逸的傳統の確かなる支持者でなくてはならぬ。斯かる特長を持つてのみ我々は戦勝を得るのである。

フォン・シュワイニッツ

著者の註、此の提案は外務省軍事部の部長ヘッテン陸軍中佐に依り、最高軍事監督の適切なる辨明と共に提出された。

##### 五、マイエルの祖國教育狀態に關する覺書

##### 第二步兵師團の教官、豫備軍の騎兵大尉、一九一八年八月六日

最近に於て、再びパンフレットが敵の飛行機に依り度々散布された。其のパンフレットの内容は我々の兵士の裏切りを呼び起さんと誘惑する爲めには彼等の指揮官に對する信頼を覆へし、又彼等に戦争の疲勞及び無希望の感を引き起さねばならぬといふ同じ目的を記述して居るパンフレットは非常に巧妙に作られ、捏造せる事實に満ちてゐた。之等はスイス、ニューヨーク其他に於ける獨逸國民、及び兵士の民主主義的なものに依り署名されてゐて、特に「デモクラシー」といふ言葉が強調して繰返された。斯かるパンフレットの多くは、國民の間に交付される。其の際確かに認められる事は、交付は報酬を約束されずともなされ得るといふ事である。然し、之等は明らかに前以つて讀まれる。然し如何程見出され而も交付されるかは不明である。この師團の區域内に於て極く最近司令部の黑板に斯かるパンフレットが掲げられてあつたといふ事實は、我軍に於ても、敵國の宣傳の學問的又は非學問的援助者がゐる事を物語るものである。平時に於て既に、内政の争に關與し、組織立つた勢務に於て大部分政治的には非常によく、訓育された一部の兵は「デモクラシー」の語が我が獨逸に於ても又獨逸の大黨派の熱望せる目標を含んでゐる事を知つてゐる。他方、地方出身にして政治には無關係の一部の兵は、然し此の「デモクラシー」の語の響にも又傾聽する。彼等の中にも又非常に多くの人が、一體「デモクラシー」とは何かとの問題を提示する。其の答は「國

民が自分自身を支配すべきである。とか或ひは「單に貴族のみならず、將校も支配すべきである。」とかである。其れ故にパンフレットの印象が上述の署名に依り、高められる事少くとも多くの軍人の中には獨逸の政治家及び新聞がなした説明に依りて、尙ほ促進せしめられ現在の憲法を改變せんとする思想及び疑ひが引き起される事は誤認されてはならぬ。茲に於て如何程、國民的或ひは反國民的目標が追及さるゝかを區別する事は單純なる軍人には不可能である。これに對して、啓蒙は我々の側では不十分である。實際力強い音を立てて、我々に繰返し／＼よき國家制度を提供せんとする敵の常套語の假面を覆る我々の新聞は非常に貧弱である。この新聞は軍人の廣い層を啓蒙する事は出来ぬ。特に、それが殆んど獨り、正常なる場所から生れた故に然りである。然し、公的方面からは、公開の演説に於て、或ひは一般的啓蒙に於ては稀に、而して高い見地から最も多く、普通人は其の新聞に依りては取り扱はれぬと言はれる。祖國の教育は此の領域に於ても又、啓蒙的影響を與へねばならぬ使命を有する。從來此の問題に關して教育の自由になつてゐた書物は、成る程大抵は非常に要領を得て居り、教訓的に書かれてはゐるが、然し二三の教養ある人のみによりて讀まれるに過ぎぬ。斯かる書物に依る大範圍の影響は現はれぬ。既にそれをより一般的に公開するためには餘りに標本が自由に手に入らぬが故を以て然りである。戦線にゐる將校―教官も又―にとつては、祖國教育に於て此の問題を正しく取り扱ふ事は非常に困難である。蓋し、今戦ひつゝある軍隊

に所屬してゐる兵を其の各々の根本段階に於て妨げてゐる一般的大困難を無視しても、祖國教育の本來の擔當者であるべき我々の中隊長が大部分非常に若く、而して政治的に全く無經驗である事が氣遣はれる。それ故に彼等は斯かる物を取扱ふ事を差し控へる方がよりよいのである。自分の實行が兵の政治的影響と見られ得る事を知り現實に素材を支配し得る將校のみが之をなし得るのである。然し一般的なものは其の場合に於ても二度と擱めぬ。廣汎な範圍に於て敵の宣傳に對する反作用が然し祖國の教育に於て試みられねばならぬ。其のためには巧妙に、敵の宣傳の本質、其の發表、其の黒幕、其の資力、其の「デモクラシー的仲間」等々を明らかにする事實を集める簡單な、きつちり引きくるめられた覺書が、師團の教官に自由に手に入らねばならぬだらう。戦史が十分其の實例を示してゐる。個々のものを擧げると次の通りである。

(一)「自由の國」なる合衆國に於て、凡ゆる權力を、ホイエンツォレルン家の束縛から獨逸國民を解放し様としたツイルソン大統領に統一し、而して彼を露國皇帝の崩壞後世界最大の獨裁者たらしめんとする手段。(二)デモクラシーの模範國たる佛國に於て、最初の社會主義支配者が宣戰布告の日に射殺され今日迄尙ほ如何なる佛國政府も、此の虐殺に對する裁判の判決を敢て與へなかつた事實。(三)ルーマニアに於て、模範デモクラシー國たる佛國にならつて作られたる議會政治憲法が二三の大抵は買収された人々によつて、全國民の意に反して、何等理由なく不幸なる戦争に引き入れ

る事を可能ならしめたとの事實。動搖せるブランタニユ・プロセスは此の目的に對する十分なる材料を提供するだらう。(四)英國及び其の追隨者が獨逸の宣傳に對してなした處置就中其れには英國の財産家に依り、ツイルソンの奸商及び獨逸攻撃者の自由に處分し得る資金。(五)スイスに居りバシフレットの署名をなした我々獨逸兵のデモクラシー的友人が聯合國に依りて買収された、最も下等道徳の所有者であるとの事實。(六)種々なる國民性の所屬者が非常に残酷なる手段に依り北亞米利加合衆國、即ち世界の自由のために戦はんと主張したる國の軍隊に入る事を強制されるといふ事實。其の證明は、ブルガリア、ポーランド其の他の國民性が亞米利加化された人の發言が之を提供する。

斯かる覺書は其の内容に於て最近の出來事を追及し、繰返し敵に損害を與へ、而して敵の誹謗に反抗する他の事實を確證する必要がある。其れは通例、恐らく一週間に一、二回發刊されねばならぬ。中隊に於てそれは、掲示板に戦争の出來事を報告する傍ら戦場の兵士は、讀書室に於て、軍人の自宅等に於て其れを讀まねばならぬ。凡ゆる揭示は、軍人の好奇心を經驗上引き付けねばならぬ。斯くして、此の覺書は其れが簡單にして明瞭に而も力強く理解される場合には、其の目的を外さぬであらう。斯かる形式に於て、覺書は又若い戦線の將校を刺戟して、彼等の部下の前で斯かる問題を語らしめたものである。斯かる必要なる一般的影响に對する前提は、然し斯かる覺書が戦

線に十分送られねばならぬ事、例へば歩兵師團には平均少くとも一〇〇の見本が送られねばならぬ事である。此れにより引き起される紙の消費は恐らくは大部分、軍人には何物も提供しない非常に不都合にまとめられた日日の新聞報告を短縮する事に依りて收支相償ふ事が出来るだらう。

マイエル 豫備騎兵大尉

註、覺書は第二步兵師團司令官フォン・ドメス陸軍少將に依り個人的にニコライ陸軍中佐に送られた。

#### 六、第六軍團の郵便監督所の報告抜萃

郵便監督所の一九一八年八月二十一日より、八月三十一日迄の軍事郵便の試験報告抜萃。

受驗郵便 五三七八一、異議を述べられたもの、數一八八六。

次の諸點は數を以て理解されるがバーセントで再び表はされてゐる。第一、それが疑はあるが然し、異議の申立をなせば出來ない事はない、政治的に反國家的、不利益、不満足の發言なりと疑ひ得らるゝもの一・五バーセント(前報告は一バーセント)。第二、頑張りの意味に於ける善良なる精神一・五バーセント(前報告は一バーセント)。第三、給養に關する眞面目な不平、一バーセント(前報告も同様)。第四、將校と兵卒の間の惡關係に關する言葉、待遇に關する訴へ〇・一バーセント(前報告同じ)。第五、上記の諸點以外は特別の態度に出ない、檢閲上取り上げられず運ばれたもの

殘部九五・九パーセントである。

一般的な事としては、下に述べる比較的よく接觸する事情及び關係は、手紙發送者の精神及び信賴に分析的影響を與へる。(一)敵の砲兵及び航空技術の優越せりとの自稱。(二)前線の軍隊は逃げ場なく、大抵は命令に随つた場所にのみある。(三)駐屯軍の部分的には、多くの發表に依れば十分でない給養に對する配慮。即ち(α)食事は何料か離れて背後に存する野戦炊事場より運ばねばならぬ。其の爲度々給養の一部は低下する。(β)野戦炊事場から持つて來る食事は度々ジャガイモが附いてをらず、又肉が少い。(γ)暑い時に飲料水の所謂不十分なる供給。(四)軍隊に依り耐へ得ぬと感ぜられたる状態に於ける長い駐屯。(五)低下された給養に拘はらず、休養時に於ける激しい勞働奉仕。(六)部分的には不十分な配慮。(七)賜暇、給養に關し戦時に於て餘りにひどいと感ぜられたる將校の優遇。(八)軍隊に於ける苦しみ場合に於て將校の所謂個々の不忍耐。將校の直接間接に表はされたる悲觀主義。將校が野戦炊事場で食事する僅かの時間に此れが十分認められる。斯かる軍隊に於ては、食事に關しては如何なる不平苦情も手紙には書かれぬ。(九)例へば「我々は最早や組には入らぬ」とか「我々は賜暇を貰ふが郷里に歸らぬ」とかの如き手紙に關聯して、巨大なる戦利品及び戦時暴利が一般に分る。(十)敵の繼續的に見た所共產主義的意味に於て暗示的な作用を及ぼすパンフレット宣傳。

附録。臆病が本國より尙ほ著しく強められる。臆病人には洞察力が缺けてゐる。彼等は自分を人に退けられ輕視されてゐると思ふ。而して、給養を出來るだけよくなすものは軍事監督であるといふ事を信じない。戦争の繼續に依り斯かる男は自分及び其の個人的幸福のみを愈々考へる。此の戦争に於ては祖國の死活が問題なのだといふ理解が殆んど全く缺けてゐる。恐らく斯かる人間には、將校及び准士官に依り、時として思はれた如く、自己の隊長に依り又は特に自己の隊の勇敢なる同僚に依る正しき啓蒙が缺けてゐる。

(五)に對する附録。賞讃すべき方法で、第一八七歩兵師團の書記が戦線の背後に在つての勤務につき次の如く意見を發表してゐる。軍隊の士氣向上をすべき事はすべてなされる。五日毎に勤務を休ませる。戦線將校の斯かる状態が他の多くの意見と一致してゐると判断される事は次の手紙の抜萃を見れば分る。我々が成功の瞬間に暫時の間一九一四年の熱狂に我々を驅り立てた我々の軍事的業績の最高點を踏んだ後、事態は今日我々にとつて以前より一層悪化して來た。即ち軍隊に於て既に内部的分裂が正當に語られた一九一六年のゾンメの戦の時より、遙かに悪化して來た。當時に於ては士氣は新方法に依りて再び高潮せしめられ得たのである。然し今日に於ては、最も苦しい緊張の二年間が経過した後及び力と物資が次第に盡きねばならぬ今日に於ては、軍隊の精神は徹底的な啓蒙に依りてのみ再び向上せしめねばならぬ。これは、より良き事であり出來るだけ目立たぬ啓

蒙により既に始まつたと今日人々は假定するがこれは非常に怠慢であり、人々は再び我々を頑張る様に刺戟せんと欲してゐる。人々が其れに命せられる教育は啓蒙には殆んど貢獻しない。人が實際の目的を認めぬ程巧妙な素質を有する宣傳のみが好結果を齎らすのである。我々が今日では少しも持つてゐない道徳的優越性を再び手に入れるならば其の時のみ我々は頑張る得るのである。今や、人々は捕虜の身になる事を喜ぶといふ事が軍隊内に行はれてゐる。一度々脱走兵と言ふ事が我々の側でよく話される。——これは永續し得るものではない。我々の仲間を再び正當な路に導き入れるためには何か起らねばならぬ。英國のパンフレット宣傳が始めは嘲笑されてゐたけれども、時の經つにつれて多くの人に不都合の影響を興へたが少くとも、煽動的な共產主義的思想で満された書物に關し熟考する様に刺戟したといふ事は宣傳の最後の目的に合するものであつた。以前には豊富な魅力ある讀書に依りても、其の態度を變へなかつた人がパンフレットを繰返して讀み、「騎士」「資本家」「農夫」「全獨逸」等の名稱が繰返されるのを見るのである。之等の言葉は彼にとつては、其れ等が彼の手紙に同じ様に用ひられ、英國の宣傳の憎むべき意味に於て用ひられてゐると云ふ風に時の經過と共に信せらるゝに到つた。斯くして度々、不満、罵聲、脱出の渴望が直接にパンフレットに依り呼び起された事が觀察される。パンフレットのより大きい影響の根據は、このパンフレットの作者が最近從來より巧妙に行動した事及び獨逸の事情及び單純な人間の對象に、其の從

來の不遠慮な態度よりもつと主きを置く様になつた事にも求めねばならぬ。其の外二三の人は多くの英國のパンフレットの内容には何か眞實なものが存するに相違ない、蓋し、言葉によりても又筆によつても反駁されぬが故であると信する様に見える。それ故に、斯かる人にとつては、パンフレットに書かれた句、例へば「全獨逸の戦争喝望者」「自由掠奪者」「國民の奴隸としてのプロシヤ軍國主義」「血に餓えたるカイザー」等々は殆んど血となり肉となつて彼等の頭に侵入する。

戦争の疲れ及び壓迫は一般的である。

手紙を書く人は彼等に有りの儘の事實「吾々は勝つ事は出来ぬといふ——に満足を見出し、其れに一部には、獨逸は負けねばならぬといふ見解を結びつける。或る少數の人達は恐らく頑張る事を警告し、而して多くの書物は不機嫌及び不満足の中の聲と竝んで、凡ゆる犠牲に價ひする祖國に對する國王の忠實及び不變の愛を證明してゐる。祖國のために、公然と死を願ふ手紙を書く人の數は然し少數ではない。彼等は言ふ「獨逸の萬一の此れ以上の成功は戦争を長引かせるに過ぎぬ、敗北に依りて我々は熱望せる平和を來たす事が出来る」と。我々は戦後佛國の支配の下にあらうと、英國の下にあらうと、獨逸の支配の下にあらうと功績は同じである」と。斯かる言葉が英國或は、米國宣傳に依りて増されたか否かは必ずしも認められぬが、其の士氣の衰へに就いては、既に色々と報告された——の郵便に於て、最後の假定に對する疑問が存してゐる。特に某々に向けられた手紙



に於ては其處の領域出身の影響を推論せしめる暗示及び注意深き發言が度々見出される。

戦争及び其の原因に關し如何なる見解が表はれるかは驚くべきである。例へば次の如く手紙に書く。勞働者階級を、又他方中間階級をも根絶するために戦争が行はれてゐる。故に又一旦納まつたとても再び引き起される。大學出身者、高級官吏等の教養ある階級は現在では戦争作業に於て勞働者程價值がないといふ事が此の題目を取り扱ふ單純な人に依り、熟考されぬ。中間階級の考慮ある人の間では他方、今日の不自然なる高い賃銀特に若い勞働者のそれより生ずる後の經濟的結果に對する心配が大きくなつた。祖國愛の感情は手紙には殆んど表はされぬ。郵便檢閲の場合が示した如く、祖國愛思想を言葉で蔽ふ殆んど一種の羞恥心が存する様に思へる。多くの手紙には次の見解が根據となつてゐる。良き祖國的情操を示した人は戦争に祖國愛を持ち、又戦争に依りて利得、利益を有する。他方不快も又大きい。自己に都合よき物に妥協せんとする氣持は手紙に書かれてゐる如く、無用の虐殺より逃れんために人々は例へば右の腕を失ふ事を、及び其の類似の負傷を願ふといふ特徴を有する。各個人の戦争に關する關心は、後方に退いた男子は、私は戦事に依り壓迫を感ずるとの立場に殆んど終始してゐる。度々英國のパンフレットの中に書かれてあつた「誰のために君達は自分の身體を傷つけに行くのか」との問題は、多くの場合獨逸兵を長ければ長いだけ考へます。これに對する解答は、度々次の英國のパンフレットから出た言葉が基礎となつて居る。其の言

葉はハンブルグの捕虜者又は脱走者に依り作られたものである。即ち「我々は決して祖國のため又は我々の名譽のために戦ふものではない。我々は天財閣に對する無理解よりのみ戦ふ」と。

軍事的報告。我が戦線の後退といふ事が度々書かれる。そして、然らば位置が改善さるだらうといふ事が十分認められる。他方軍隊に於ては此の退却に就て愈々後退する事に意見不一致を述べてゐる軍隊(某師團)の解體、又歩兵大隊の四個中隊の解體といふ事が多く書かれてゐる。此の報告に關聯して度々次の言が語られる。「汝等見よ、我々は今すぐなくなつてしまふ。其の補充は最早やなし」と。パンフレットは相變ず郷里へ送られたが軍事報告は從來の域を脱してゐない。英國人の戰略的長所に關しては、人々は次の如く言ふ。「英國人は我々に我々が露西亞人に對する如く、主として砲兵及空軍に於て優つてゐる。我が砲兵が現はれればすぐ敵のそれに簡單に射撃さる。給養。愈々不平が高まる事は一前報告で既に述べられた如く、一般的不満に歸著する。極端な不規則は長い以前より確定しなかつた。ジャガイモが食事にない事、肉が缺けてゐると言ふ事は非常に不快に感じられた。遙か後部の部隊には占領した土地から得られた果物が民間の人に依り高價で賣られる事が非常に歎かれた。我々はむしろそれを徵發して軍のためにすべきであると至る所で呼ばれた。交付されたパンは容易に徵が生へ、其れが爲め大部分は捨てられるといふ不平は度々ある。既に他の報告で述べた如く、人々は、特別の場合には新鮮なるパンの代りに二度焼いたパンを交付さ

れ、又野戦炊事場より食事の代りに携帯口糧が代へられる事を、よりよいと考へる。將校と兵の關係は、郵便の全印象から見ればよい様に見える。給養に關聯して、勿論、將校が批判的意見の對象を作つてゐる。他方將校の意見も又、兵卒の給養改善に關する不満は此の點將校と同様となす事に依りてのみ、特別の將校食事をなくする事に依り防ぐ事が出来るといふ方向に進んで行つた。給養の不満足のみならず他の不満も其れに依りて完全に消滅するだらう。又一般の不平苦情も、もつと少く現はれるであらう。將校の氣分は兵士に依り多くの場合非常に不愉快なものとして現はれる。例へば次の如く書かれる。「我々は如何なる快樂も持つてゐないがそれを公然と發表しない。然し此處其處に一語を落して行く。」と。

新聞。所謂軍人新聞（「ベルギーの飛脚」、リルの戰時新聞、ケルンの國民新聞）に關して極度に輕蔑的判斷が下される。

參謀本部附イットナー

#### 七、ライプツヒヒ軍事局より戰時新聞局宛た書面

ライプツヒヒ、一九一八年十月二十一日附親展

十月十九日土曜日、ライプツヒヒで祖國教育の教育士官と代理軍團司令部に於て、民間啓蒙の關係者との秘密會議が行はれ、席上、祖國教育士官に依り、ベルリンで行はれた教育に基いて、軍事的

政治的狀態に關する報告がなされ、同時に將來に對する祖國教育及び國民啓蒙に於ける此れ以上の活動が論議された。長時間に亘る會議に於て、民間啓蒙の關係者達に依りて軍事局が次の如き報告をなした着眼點が特に強調された。之等の點は、此の會合が、全部熱烈なる祖國愛及び我々國民の前途に對する心配からのみ其の意見を發表した男女より成り立つ故に其の限り大なる尊敬を受けるに價ひするものである。(一)啓蒙運動の主班者達は從來の理想及び見解を一部には必要に依り改變する場合には、新政府が將來の啓蒙活動に對し一定の標準を與へない限りは、新政府の背後に於て結束しても不可能である。(二)國民の氣分が淺薄さを増して來、國民の大部分は口先のみの平和に對し、冷嘆の度が増し、中立國及び敵國が獨逸國民の情操に及ぼした影響が高まる場合、政府の側から、大衆が熱狂せしめられる様な或る合言葉即ち或る目標を示す事が絶対に必要である。若し政府が此れ以上、これを躊躇するならば啓蒙指導者達は、國民が後に民族的に勃興する際其の能力を失ふ程に、平和思想に如何なる對價を拂つても入つてしまふ事を恐れるのである。(三)我が敵は始めから適當なる標語及び一定の目的に依り其の國民大衆を動かさんとした一方、(佛國はアルサス・ローレンの解放。伊國は、救はれざる領域即ちアドリア海の解放。英國は獨逸軍國主義の潰滅、獨逸の世界市場に於ける厄介なる競争の排除等を合言葉とす)獨逸に於ては、特に全啓蒙運動に於ては、常に斯かる標語及び主要イデオロギイが缺けてゐた。將來の啓蒙は單に教訓的のみなら

ず、又政策的に行はれねばならぬ。全啓蒙活動を高い見地に立つて目標を意識して經營し、そして指導し物質の刺戟及び分配に制限されざる中樞機關が必要である。(四)啓蒙指導の主班者達の見解は、最高軍事監督の側から、軍事的状態に關して、それに命せられた指導者に依る報告に於ては色眼鏡を以てされ、報告は飾られてなされるといふ事に向けられる。故に指導者は信頼されるべき人と思はれ信頼を送られる事が必要である。(五)國民の心の中では前政府及び前政治組織が強く卑下され又前政府は少し前、國民には秘密にされた聯合國の平和提案を一旦拒絶したといふ噂に依り嫌疑を受けた。従つて徹底的に國民を啓蒙する必要がある。(六)國民の不滿の主なる原因は生活資料供給の範圍に於ける不公平に存してゐる即ち戦利品其の他の範圍である、我々が全國民より聞き得る公平を求める叫びは同時に強力なる政府、即ち何等他に遠慮なく干渉し、救済をなす政府を求むる叫びでもある。(七)戦線で活躍せる兵の、悲しむべきであるが、否定し得ざる不一致の其の深き根據は、長期の戦争の困苦が愈々強くなる事即ち退却戦に非らずして、將校と兵卒の不和が愈々激烈となつて行く事に存する。(兵卒待遇理解の缺乏、戦線に於ける將校の、良き豊富な食料、無拘束の生活、青年將校の態度、歸休兵等に依る過度の生活資料の輸送)。宣傳活動の主班者は特に「彼等は、我等の防禦力の維持、我が將校の名譽保持のためには、現在に於ても將來に於ても徹底的處置がなされねばならぬ事を絶対に必要と思ふといふ事を特に強調してゐる。彼等は自分自身

は殆んど全部が親族のものを現役將校として又は豫備將校として、戦線に送つて居り、以上の事實を口に出さしめるものは、苦情辯や不遇ではなくして、我が祖國の將來に對する心配である。と言ふ事を強調する事に價値を置いてゐる。(八)歸休兵の物語に實際反對する事は不可能である。殆んど凡べての歸休兵が前述の事柄を同様な形式で擴げるものだから、故國の國民には彼等歸休兵の物語は事實に基くものであるといふ信念が喚起され、其の信念たるや、歸休兵の報告が一部、眞なりと證明された故に愈々確きものとなつた。(九)新聞を保持する事は更に注目に値ひするに相違ない。政府は、實に又敵國が統一ある政府直轄の新聞をもつてゐたと同様に新聞に勢力を及ぼさん事を試みた。獨立社會黨員が敢へて其の新聞に付けた表題は(其の尖端に「ライプチヒ國民新聞」正に破壊的なものである(此れに對しライプチヒ軍事局は、「ライプチヒ國民新聞」は無論最近、正に社會主義的共和政治を要求し、強力なる破壊、革命を煽動する表題を掲げた事を確認してゐる)。「ライプチヒ國民新聞」の豫約者の數は最近十日間に一〇〇〇より一二〇〇に増加したそうであるがこれは注目すべき事柄である。ライプチヒより労働者が通ふ地方に於て、工場に於て、中産階級に於てすらも、之の國民新聞を讀む熱望が存する事が見て取られる。此の國民新聞は豫約者自身に依り取られたものなるのみならず、彼に依り、手から手へ移された。(十)宣傳活動の主班者は政府のメンバー、及び帝國議會多數黨のメンバーが一定の標準を備へた啓蒙事業のために斡旋される事は望

ましき事と思つてゐた。

J・A・キッター

#### 八、アルブレヒト侯軍團に宛た大本營陸軍部の文書

最近の活動の報告に於て、第六十一國境要塞旅團の教官に依り、次の通信あり。敵のパンフレットの發見に約束された高い發見謝禮は、當旅團の屬する軍隊だけでも月に五〇〇〇マルクの額に達するが、正に其のパンフレットは商品化した。十五頁以上よりなる夫々のパンフレットは五マルクの値が支拂はれる故に、此のパンフレットは特に喝望され、愈々其の範圍を擴大して行く連續的取引を引き起した。斯かるパンフレットの發見者は、それを他人に交付する前に高い料金を得て貸す、そして、全部の關係者が其の内容を知り、彼等が其の多額の料金を拂つてしまつた後、此のパンフレットを五マルクの約定發見謝禮を受けて、其の軍人仲間に交付した。斯かるパンフレットを發見せる民間労働者は、此れを半分の軍用パンと交換で軍人に賣る。軍人は更に、此れを、前記の勤務地に普通の迂路を通つて交付する。又後の土地で燃料用の薪を集めるために徘徊し、其の際一包のパンフレットを發見した軍人が五〇〇マルク迄支拂を得るといふ事もあつた。其の結果たるや、幸運にもパンフレットを發見した者は其の同僚より憎まれ、容易に得られた金でなされる浪費は

軍人の不和を引き起すといふ結果となつた。他方、高價なる發見者の謝禮は、人々を誘惑して、其の地位を捨て、利益を齎らすパンフレットを探し求めて歩く機會を利用する様に導く。高價な發見者の謝禮を約束するからこそ、單純な人間に於ても又パンフレットの内容は、訓育及び國家制度を動搖せしめ、それに依りて、戦争の續行に特別の利益を持つ人々を危険ならしめるといふ確信が生れて来る。高價なる發見者謝禮の支拂はれる事に依りて、人々は始めて、敵のパンフレットの重要性に對し、注意を喚起された。故に之に對する彼等の利益が呼び起されパンフレットを讀まんとする彼等の努力は、彼等を幸運なる發見者に對し、其の發見に對し幾等か支拂ひ、或ひは發見者よりパンフレットを買はぬばならぬ場合でも特に異常なものであつた。蓋し、其れに支拂はれた金は再び彼等の手に歸つて来るからである。軍事教官のパンフレットを公然と讀んだ人々との會談に於て、パンフレットの價値を引き下げ、其の中に含まれてゐる不正な事實を解明し、敵に企圖されたパンフレットの目的を詳細に説明するといふ努力は、パンフレットの流布に非常に好都合の取引に依り困難ならしめる。然しパンフレットの發見者謝禮金が非常に下げられるや否や、一般民衆も、軍事監督も此の敵の宣言活動に最早や價値を置かず、そしてパンフレットの中に散布された毒は恐るゝに足らずと確信するであらう。高價な發見者謝禮の支拂に依り高められた、然し豫想されなかつた敵のパンフレットの影響は、其れ故に、發見者謝禮を全く、少額ならしめる事に依り最もよく

認める事が出来る。新聞の最近愈々自由になつた發言に依り、敵の宣傳活動に依る戦線の軍の中毒の危険は又愈々少くなつた。發見者謝禮の下落に依り、從來より多くのパンフレットが、斯かる文書を家に送るか又は戦争記念として取り得るために、多くの軍人が二、三マルクを支拂つて故國に送られるといふ事は、恐るゝに足らぬ。それ故に、出来るだけ早く、發見者謝禮の著しき下落を當局に於て提議する案がある。』と。軍隊の他の方面にも同様な経験がなされたか否か及び、拾得者謝禮の廢止及び其の下落が提案さるべきか否に付いての教官の司令部に對する前述の照會に依れば、前の報告に於てなされた點が全く適切のものと思はれ、其れ故に、敵のパンフレットの處置に對する從來の態度の變更が命せられた様に思へる。軍司令部はそれ故に以上の理由により敵のパンフレットの交付に對し、約束されたる拾得者謝禮の廢止を提言してゐる。

#### 九、ローゼの報告 ガルウィツ及びアルブレヒト軍團の隊内士氣に關する報告

一九一八年一月五日

士氣高潮に關する余の講演を全部で恐らく、二二〇〇の將校—高級將校は聯隊長、參謀本部の將校、教官—の前で一九一八年の十月三十一日から十一月三日迄に十二回繰返した。余は前線との斯かる接觸は直ちに其の他の戦線に於ても—其れが事情を何れにか形成する限り—行はれる事を必要

と考へる。余は講演により次の印象を受けた。 (一) 士氣。マースウェスト及びアルゴンネン軍團の軍團長、長官達、並びに陸軍部第三課長等は部隊の空氣に和する事は殆んど出来ない旨を聲明してゐる。此の地に於ては、空氣は非常に險惡である。部隊は最早や戦闘意識を失つて居り、斯かる空氣の險惡化は肉體的な破滅に依るものとされてゐるがメツツでは、然し未だ過勞してゐないが既に叛亂を起してゐた。カイゼル、ヒンデンブルグ、ルーデンドルフ等の肖像は最早や上映してはならぬ始末で、人々は口笛を吹いて輕蔑する。ヒンデンブルグの肖像が映ると、彌次が次の如く飛ばされた。「引き裂け—ナイフを出せ—血を受ける鍋を持つて來い、一つでは足らぬ。等々!」 "Deutschland, Deutschland über alles" を奏してゐる樂隊に向つてはブリキラツツ野郎を打ち倒せ! 等と怒鳴りつける有様であつた。故に斯かる急轉は精神的破滅にも歸せられるわけであらう。アルブレヒト部隊の領域では、空氣は部分的には險惡であつたが全體としては不安定である。兎に角此處でも殆んど到る所急激な空氣の弛緩が見られる。兵卒からは如何なる犠牲を拂つても平和が望まれてゐる。空氣は大體に於て兩部隊に於ては諸々の表はれから察するに、兵士達は我軍が直ちに平和を得ないとするならば最早や此れ以上戦を續けないだらうと思はれる状態である。然りとせば吾々は數週間を出でずして革命の勃發を見るであらう。(二) 斯かる突然の破滅は理解が困難である。高級幕僚等に於てさへ夫々の方針を缺いてゐる。此れは指揮の重大な缺陷を感せられる。我々は今や直ち

に方針を軍事、経済、政治的—與へねばならぬ。幹部の指令に對する信用はいたく動搖してゐる。我々にして直ちに方針を與へざるに於ては我々は二度と幹部の指令に對する信用を取り戻す事は望めないであらう。方向は眞なるを要す。其れば次の方向でなくてはならぬ。「我等は直ちに、平和條約を結ばねばならぬ」と。我々は如何程些少な辯解でも如何なる辯解よりも「それが如何に些少なるものに過ぎなくとも—此の眞實を忍ばねばならぬ。戦線部隊は政府から皇帝問題に對する政府の立場を確定して、政府の目標の明確な表明を要求してゐる。(三)軍隊は情勢の突然の變革の理由を求め彼等は其の責任を最高軍事監督の統率にのみ歸せんとしてゐる。吾々は斯かる變革を我々の同盟國に對する拒絶に第一に歸せしめねばならぬといふ事を強調し、公明に論議する事が非常に欲求されてゐる。外交上の躊躇は此の際役に立たぬ。(四)指揮者間には一般に我々は絶對に即刻、アントワープとマースの線迄退却しなければならぬとの見解が行はれてゐる。此れが既になされてゐないといふ事は了解し得ざる所である。前線の部隊には斯かる技術的困難は眼中にはない。斯かる見解は小心で後をふり返る等しい人達の間ですら行はれてゐる。我々は強い軍隊は祖國のために來るべき時代に使用されるのだと言ふ必然性は度々認められてゐる。之の故にも又アントワープ、マース線への退却は成るべく早く要望されてゐる。(五)大抵の將校達は政治的轉變の渦中へと頭を突き込んで行つた。或ひは祖國の危険がそれを要求してゐるといふ感情から發して、或ひは

又これは私の考へであるが民主主義的政府が多くの將校の感情に従へば古臭い思想の持主を排除したといふ理由に出でてゐる。人々は民主政體を不幸とは思はぬ。今の政府は自分の手によりて手網が從來よりも一層手厳しくとられないならば掃き去られてしまふといふ明瞭な恐怖が存してゐる。軍隊は政府に人物を要求してゐるのである。高級指揮官の間には更に又比較的年の行つた參謀本部の士官達の間にも時としては時勢に無關心な將校も存在してゐる。彼等は消極的態度を持してゐるが政治に無關心に働いてゐる。従つて彼等は利用されないと余は信じてゐる。(七)多くの將校達は軍隊に共產主義に依つて恐威を與へつゝある危険を認識し始めてゐる。之の危険は更に彼等により、はつきり認識されねばならぬ。此れが多くの證明資料を引かう。難事たる事を暗示してゐる拘にはらず、多數の傾聴者に依り著しく共產的新聞の禁止の必要が強調された。強力なる政府なら其れを禁するだらうといふのである。舉國一致内閣なら其れが可能である。然し斯かる内閣が一度存する限り、斯かる新聞の購買の兵士に依る禁止の合目的の見解はまじくになる。彼のミュールハウゼルの輿論こそは、第二課内に於ては、非常な有害作用をなすべきものである。教官達は屢々次の事を強調する。「我々國民が或は一層よく訓育された新聞を手にしなないならば、自分等の仕事は一切徒勞なのである」と。(七)東部戦線部隊を西部戦線への補充輸送を中止した事は非常に共產主義的の毒物の標本として示される。此の兵士達だけでも既に、何とか出来るなら、前線部隊の背

後で骨の折れる仕事に服せしめる事に對する同意が懇望されてゐる。殆んど尙一層有害な毒物たるべきは、第一分團にあつて活動してゐる邊境の建築監督の高級勤務員である。彼等は非常な高給を得て、兵士達と密接に接觸するといふが如き下等なる者達である。(八)祖國教育は一般の見解に依れば事態は正に次の如くである。若し我々が尙ほ一九一四年に於けるが如き將校、下士團を持つてゐるとしたなら、我々は祖國の教育を必要としない。氣分醸成は人格の問題である。此の人格は愈々缺乏して來る。人格の存する所には、祖國の教育は大きな意義を有するものではない。然し此處でも又物資調達のためには教官も必要不可欠である。人格の缺乏した所では、祖國教育は絶対に必要である。然し大抵の場所には人格は缺乏を來してゐる。斯かる場所では、教官は人格者増加の作用をしなければならず長官を特に支持して人格者を招く様にならねばならぬ。豫備的條件は勿論、教官自身強い人格を有しなければならぬ事である。教官の中に斯かる要件を缺いてゐるもの少からずと認められてゐる、然し最高軍事監督の方では、其の矯正を命じた。祖國教育からは附帶政府は生じてはならぬ。それ故に教官は出來るだけ、下級將校及び兵士を教育する事少きを要す。彼は長官の活動を補充する意味で、青年將校を教育し、彼等をして又其の下級將校及び兵卒の教育を自ら營む能力を與へるべきである。聯隊内に教官の代理人を設置する事は、例へば戰價の場合の如くに其處では常に惡として感じられる。即ち聯隊長が聯隊を自由に掌中に支配してゐるから。それ

故代理人に注意すべきである。祖國教育の特別の職務はなくならねばならぬ。現に指導者たる教官は此處に不正の附帶政府が存すると見る。此れに依りても又、只筆記が増すのみである。(九)書面の檢閲に關しては、其の必要が其れ自身認められる所に於ても尙憤激が存する。手紙の檢閲に依り全く法外なる郵便の遲滞が存する。他方それは又餘りに微細に亘りて行はれる事がある。例へば其の中に西部戦線では、キューに於ける三ヶ月前程、美しくないと書かれた手紙、又更にアルブレヒト軍團兵のストラスブルグ……と發送者が書いた手紙が拒絶された。(十)休暇附與の可能性は殆んどないといふ事が認められるにも拘はらず、休暇を數日間與へられん事の痛切な望が存する。然し休暇に於ても、警報を傳へる事の用意、歩き廻る事、陣地築造の繼續等に依り休まる譯けではない。長期の戦闘をなす軍隊に於ては、虱の苦痛が非常に大きなものである。それよりもつと不安なる戦線に於ては、脱營が必然的に行はれる。(十一)戦時新聞局の材料及び其の供給が度々敷かれてゐる。新聞局の小冊子は軍事教官の使用にのみ強制され、むしろ廣告といつてよく、而も此の廣告たるや、價値なきものと言はれる。それは獨逸人特有の感傷主義を餘り考慮に入れてはゐない。戦時新聞局の材料は古びてゐるか、或ひは目的に合しないものと思はるが故に故意に與へられぬ。現在の状態の繼續的動搖が戦時印刷局の事務を困難ならしめる事は認められるが、其れにも拘らず、余には、より新鮮なもの及び、戦線の實際的要求の認識を深める事が此處に於ては必要である様に

思へる。上述の余の確言した所は、特に鋭く又殆んど何處に於ても一致して發言された點を包含してゐる。之等が鋭く理解されたならば、其の限り、其の鋭さは、當該の點が議論の進行中發言された力及び熱心によく適するのである。

參謀本部ローゼ大尉

#### 十、一九一八年春輕氣球に依つて投下の英國ピラ

西部戦線に進軍する將士に告ぐ

汝は尙ほ生存してゐる。それは正に奇蹟である。現在生存してゐるものはすべて奇蹟である。緑の草もそして鳥すらも！ 死人、岩石及び土地、それ自身だけでは彼等は無である。蓋し彼等には生命がないからである。然し生命を持つ我々は、巨大なる富を有してゐる。岩石、死人及び土地は何物も有せず、又無である。汝の道は汝を何れの方向に導くか。將士よ、汝は西部戦線に進軍するの、或は又バリーに向つて行進するか、將士よ、汝は西部戦線に何が存するかを知るや。諸君聽け、我は汝にそれを打明けよう。汝も知る如く、汝の前にゐるものは英人であり、佛人、米人總べて彼等の背後に立つてゐる。彼等が汝の仲間に繰返し射撃を加へる様を汝も又知るのである。恐らくは、斯くして彼等は一旦退却し、汝等の新部隊の行進が行はれ、而る後彼等は再び射撃する。斯

くして聯合國は再び一旦引きさがる。然し、射撃は終らない。續々と毎日聯合國は後方より兵を繰り出す。全世界が汝等を敵とす。汝等が西部に向つて進軍する限り、射撃は續行する。汝等の前線の背後に不落の要塞が構築され日夜汝等に砲火を浴せる。汝等はそれを現に應いてゐる。西部戦線は大要塞で満ちてゐる。然し更に西部戦線には別の或る物が存する。此の或物とは何であるか汝に示そう。如何なる人も、其の場所を告げる事を得ぬ、然しそれは確かに西部戦線にある。汝の墓である。汝が西部戦線に進軍するならば幸か不幸か汝の墓を見出さねばならぬ。恐らくはそれは汝より遙か彼方にあり、山の背後にあり、或ひは汝の手近い所にある。汝は恐らくそれを見出すであらう。今日か、明日か誰もそれを豫言する事は出来ぬ。然し、其處に存する事は確かである。日没の如く確かに存する。將士よそれでも西部に向つて進軍するの、然らば我々は汝に告別の辭を告げよう。生命を持つものはすべて汝に「さよなら」を言ふ。此の地球には二種の動物のみ存する。生者と死者である。此の兩者の間に存する區別は、友と敵、人間と動物の間の相違より大きい。それは此の世に於ける一大相違である。汝は死人を信賴する事は出来ぬ。死人と友情を結ぶ事は出来ぬ。生ある者と談話する事も出来ねば又接觸する事も出来ぬ。汝が西部戦線に向つて進軍するならば我々は汝に「さよなら」を言ふ。此の際我々とは生命を持つものを言ふ。總ての生ある者例へば男、女、犬、鳥、昆蟲等之等は、昨日戦没した汝の仲間を今日尊敬する程に最早や汝を尊敬はしな



いだらう。然し何の理由ありて汝は西部戦線に向つて進軍するのか、それは汝のカイザーの意思であるが故である。然し將士よ！何故にそれが彼の意思であるのか、それは汝等の母親は、カイザーに生活資料を求めてゐるからであるが、然し彼は何等なすべき事を知らなかつた。生活資料を與へはしなかつた。餓えたる人々は勝利を以て欺れてゐた。然し之の勝利は何處に存するか、其れは、草木の生えない、果實のない荒涼たる土地、何哩となく荒らされたる使用に適しない、汝等が現在立てると同様の土地の進軍に存する。將士よ、汝の母が必要とするものは勝利であるのか。否、其の目のパンを求めてゐる。それにも拘らず、汝は、汝を待つてゐる墓に達する迄西部戦線に向つて尙ほ進軍せんとするのか。汝のカイザーは汝の背後にゐる。生存者の一人である。彼はヒンデンブルグに彼の鐵の十字勳章を與へた。ルーデンドルフは、又同一勳章の大十字架勳章を得た。彼等は勝利あつた故に幸運である。然し、汝は、汝の墓場を求めて西部戦線に進軍するのである。其處には、墓場があり、汝は今やそれを見るであらう。汝の戦友も其れより逃れんと欲す、然し墓は西方に確かに存してゐる。將士よ「さよなら」 今日では汝は、我等の仲間の一人であり男、女及び現に生きてゐる凡ゆる物と共に。然し汝は木石及び凡ゆる死物の主である。

將士よ、いざさらば

(318)

汝は我々の聲を聴かぬか、

Say hello

(一九一八年四月九日以來發見、五萬枚)

十一、一九一八年秋の佛蘭西の投下セラ

ウイルヘルム、二十四時間後に戦場に立つ。

ウイルヘルム二世は、攻撃後、二十四時間後に戦場に立つてゐた。斯く、少くとも新聞は報じてゐた。汝等、獨逸の戦友は、此の報告に包含されてゐる嘲笑及び残酷なる皮肉を理解するや、而して汝等獨逸の婦人達は、此の報告を深く銘記すべきである。攻撃後二十四時間にして戦場に立つ。汝等戦友の各々は、其の劍帯に「神と共に、國王及び祖國のために」との格言を付けてゐるが我々は神の名前を除外したい。蓋し眞に愛すべき神は、此の悲惨な大衆の戦争には何等關係しないからである。實際此の格言は「國王及び祖國のために」或ひは一層よく言へば「カイザー及び其の大妄想の世界帝國のために」と言ふ。さて此の格言の中に在つてカイザーは第一に置かれ、祖國は第二位に置かる。而して私は汝等、獨逸の國民に一つの問題を提出する。即ち、何故我がウイルヘルムは少くとも其の四十八時間前に、戦場に達しなかつたか。蓋し國民は彼及び其の大妄想のために戦つてゐる。彼は、其の部下と共に軍の先頭に指揮者として立つて居るのに、然し其處の戦線に於ては

(319)

空氣は密度が高く、鐵分を含んでゐる。それで物は焦げ臭くなり、それで彼はむしろ戦闘後二十四時間後にして戦場に表はれた。蓋し此の暴君は残酷であるのみならず、又臆病であつたからである。然し彼は、彼のために火中から栗を拾ひ出してくれる人材を十分有してゐる。名聲は實に彼にあつた。そして彼は、其の源泉に位置してゐる故に、彼は自分自身及び其の全親族を飾り、聖靈降臨祭に牧場に連れて行く牛の如く見えた程であつた。然し汝等には、獨逸の戦友よ、よりよき物が保留されて居る。汝等は祖國のために戦死するのである。又他の者は、もつと容易に四肢を失ひ、其れに對する膏藥として鐵十字勳章あり他の勳章もある。四肢を失つた者には、非常に立派であるべき人工の四肢がある。我々は人工の然し目で見える事は出来ぬけれども木の感覺で歩き廻る。これ等總べてはカイザーのため犠牲にされたのである。蓋し、愛すべき獨逸の戦友よ、我々の言葉は祖國について語つてゐるけれども、然しそれは汝等よく知つてゐる如く愚鈍である。いや、祖國は從來高貴なもの感謝すべきものなる事を證明した。然して、廢兵に、生活資料を與へて廢兵の世話を見てゐる。更に獨逸國民は非常に音樂的であり、筒琴は廢兵に依り優秀な道具とされる。而して其れは獨逸大衆に、廢兵が此の琴に依り美しい歌「我は何なるぞ、そして何を有するぞ、我は感謝す、祖國よ」と、又「獨逸、世界中で一番すぐれた獨逸よ」の歌を奏する時非常な共鳴を得るのである。然し獨逸の戦友よ、今や最後によい忠告を與へやう。物を廻轉せしめ而して此の残酷な皇帝

( 320 )

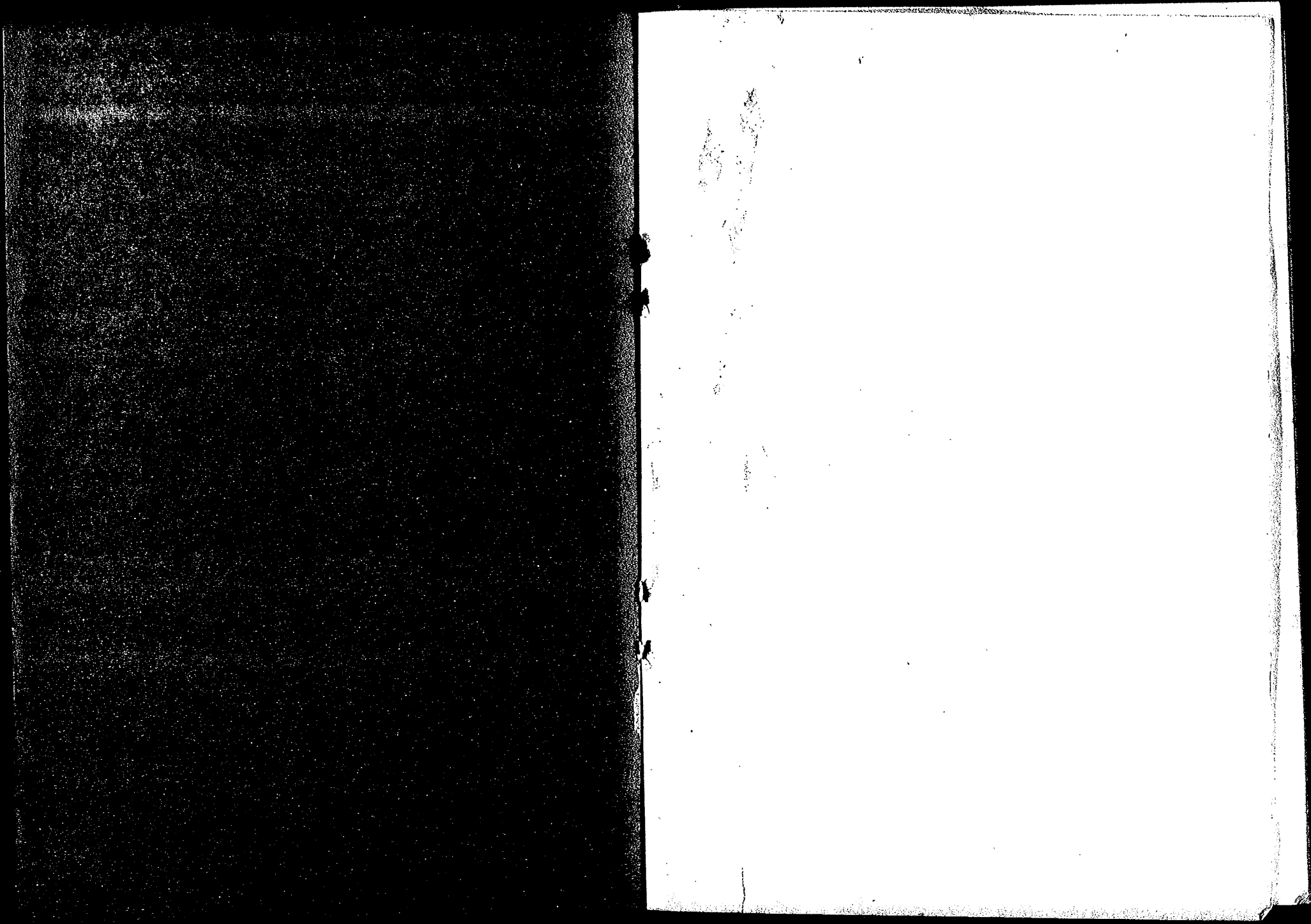
を其の一族と共に二十四時間以前に戦場に引つ張り出せ、而して汝等は、戦友よ、戦闘後二十四時間後に戦場に來い。

( 321 )

昭和十三年四月二十五日印刷  
昭和十三年四月二十八日發行

(非賣品)





本書は  
国定規格A6判